



[資料提供](#) (按韩文字母顺序)

国立加耶文化財研究所
国立慶州文化財研究所
国立慶州博物館
国立大邱博物館
国立中央博物館
国立清州博物館
仏教中央博物館
嶺南文化財研究院
海印寺聖宝博物館
NAVER
日本・正倉院
權惠永
李泳鎬

凡例

- 1. 本書は、新羅の胎動期から高麗に服属した時代までを対象としている。
- 2. 研究叢書の内容に基づき、歴史篇と文化篇に分けて述べている。
- 3. 高度の専門性を備えた教養書のレベルに纏めた。
- 4. 執筆者は『新羅、その千年の歴史と文化』の執筆者の中から選んだ。
- 5. 韓国語の原稿は実務関係者の校閲と監修を経ている。
- 6. 外国語の翻訳は、韓国語の原稿から翻訳しており、外国人専門家からの監修を受けている。
- 7. 写真資料は研究叢書及び資料集に基づき、収録した。
- 8. 外国語の表記は、学界で通常使われている用語にまとめ、固有名詞の英語表記法はローマ字表記法に従っている。



発刊の辞

千年王国・新羅(シンラ)は、韓国民族としてはじめて全国を統一するという偉業を達成し、華やかな文明を築きました。闊達で進取的な精神の持ち主だった新羅の人々は、シルクロードを通じて文物を交流した、国際性に富む国民でもありました。しかし、このような新羅について纏め、体系的に集大成した歴史書に乏しく、それを残念に思っていました。それが、新羅の誕生した慶尚北道(キョンサンプクト)が編纂事業に取り組んだ理由でもあります。今、この時代、我々の手で民族のルーツを探る事業を行うという、歴史に対する責任感もちろんあります。

『新羅、その千年の歴史と文化』は、今までで最大の新羅史編纂事業と言えるでしょう。新羅の母体となった斯盧国(サログク)が出現して古代国家へと発展し、韓国民族を一つにした三国統一を達成し、そして高麗へと続いた新羅全体の歴史を、時代順に沿って纏めています。さらに、新羅の政治・経済・社会・文化など、誰でも容易に接することができるよう構成することで、一般人の理解を高めるよう努めています。

千年にも及ぶ新羅の歴史を、始まりから終わりまで纏めた研究叢書を執筆・発刊するということは、我々にとって大きな挑戦でした。しかし新羅の作り出した歴史と文化は、皆が生涯をかけて掘り下げる十分な価値のある民族の宝であり、我々の文化の源流です。『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂は、2011年、「新羅史、どのように書くべきか」という学術大会の開催を始まりとして完成まで5年が掛かった大事業でした。韓国の新羅史の専門家136人の力を結集した力作で、計30巻、1万2千ページに至る膨大な量です。これは編纂委員、編集委員、執筆者たちの智慧と情熱の賜物です。

『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂は、単に過去の出来事を纏めたものではありません。それを通じて、偉大なる民族の歴史の一部を知ること、民族の矜持を取り戻し、アイデンティティーを定立する旅でもあります。編纂の成果は若い世代にとって重要な歴史教育の資料となり、世界と交流を深めた新羅の歴史と文化を海外に紹介する道

が開けます。千年の歴史を織りなす様々な物語、神話・伝説、文化遺産は、我々の文化コンテンツの基礎となり、文化・観光産業にとって永遠の泉となるでしょう。

日々、世界は変化し続けています。ルネッサンスが中世の暗黒時代を終わらせ、産業革命が近代社会を導いたのと同じく、21世紀の今は、文化革命が時代を切り拓いています。また、「スマート」という名の付く物質文明の発展が刻々と世界を変えています。この最先端テクノロジーの時代、「我々」と呼ぶことを可能にするアイデンティティーこそ、未来を描く唯一の精神的価値だと信じています。

歴史を見る観点は時代や状況によって変わってきましたが、変わらぬ歴史の価値は過去と現在を結ぶ架け橋となり、未来の我々を形作るでしょう。それが我々が歴史を通じて学ぶ智慧といえるのではないのでしょうか。新羅は遠い昔、歴史の表舞台から消えましたが、我々はその歴史と文化を踏まえて現在と未来を生きていけるのです。歴史と文化を探ることは、我々の精神と魂を探し求めることにつながります。

さらに、慶尚北道は道庁を安東(アンドン)・醴泉(イエチョン)に移転し、新しい慶尚北道の時代の力強い出発を世に示しました。このような出発の時期に『新羅、その千年の歴史と文化』が完成されたということは、我々により大きな意味を与えます。新しい千年を切り開く慶尚北道の旅において、精神的・文化的基礎となるでしょう。『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂が、新しい未来の序幕になることを祈り、国民の歴史観を育てるのに役立つ大衆的な歴史書になることを期待しています。最後になりますが、民族史に残る史書を書くという使命感をもって渾身の力を降り注いで下さった執筆者の皆様、関係者の皆様に深甚な感謝の意を表します。

2016年12月

慶尚北道知事

編纂の辞

新羅千年の歴史の中で最初の700年間以上は、三韓列国の一つ、斯盧国として出発しましたが、一転して王国へと飛翔し、先進国の高句麗(コグリョ)・百済(ベクチェ)とともに鼎立の情勢を形作った期間と言えます。したがって、三国統一以前の長い年月の韓国古代史は、一国を中心に再構成することは不可能であり、三韓及び三国という全体の有機的な枠組みの中で捉えてこそ、真に理解できるといえます。今まで半世紀の間、韓国古代史の様々な部分で輝かしい研究上の進展が見られたので、その豊かな成果を便宜上、国別に纏めて集大成するという努力が試みられてきました。

韓国史の研究において、政治的目的を以て取り組んだ北朝鮮が、古くから高句麗を三国の正統な国だと主張し、百済と新羅をその附庸国(ふようこく)と見下す立場で高句麗史の研究に力を注いできたということは、周知の事実です。今まで我々も伽耶(カヤ)史と百済史の研究成果をまとめるという挑戦があるにはありました。1990年代末、当時の教育人的資源部が伽耶史政策研究委員会を臨時で設け、伽耶文化圏の開発と整備のための学術的根拠を設けるという趣旨のもと、2000年代初めまでの数年間、金海(キムヘ)地域の伽耶史蹟整備とともに、伽耶史と伽耶考古学の研究成果を総合・整理する事業が釜山大学・韓国民族文化研究所を中心に進められました。また、10年前は忠清南道の予算による支援で、忠南歴史文化研究院の主管により3年にわたって研究叢書15巻をはじめとし、各種文献や考古学資料を収録した『百済文化史大系』25巻を刊行し、学界に裨益するところが大きかったといえます。

このような動きから見て、慶尚北道が2011年12月、慶北文化財研究院を中心に、この『新羅、その千年の歴史と文化』編纂事業に取り掛かったのは、狭義では慶尚北道の伝統文化のルーツを探ることになりますが、広義では韓国の民族史における根幹となる新羅の歴史と文化の研究成果を、現段階で総まとめすることで、その輝かしい伝統を定立し直すという意味深い試みと言わざるを得ません。実際、今まで新羅史に関する研究は、韓国古代史研究の牽引車の役割を果たしてきました。それは、古代研

究資料の紛れもない双壁である『三国史記』と『三国遺事』がほとんど新羅を中心に記述しており、その補助資料である碑文などの金石文資料も、新羅が圧倒的に豊富であり、また新羅社会の様子を生き生きと今に伝える木簡も、百済に引けを取らず多く発見されています。要するに、現在、我々は三国の中で新羅について最も多くのことを知っていると云えるのです。新羅はその成長過程で政治・文化などほぼ全分野にわたって高句麗と百済から影響を受けました。逆に言うと、新羅の文物、社会制度を以て、資料の少ない百済や百済の様子を類推できるという意味にもなるのです。韓国古代史学界では、新羅に関する知識に基づき、高句麗・百済・伽耶、この三国の歴史を理解する上で礎石を築いていっているといえます。

本編纂委員会は新羅の歴史と文化をまとめた研究叢書22巻と資料集8巻、その他概要書2巻の韓国語版、そしてそれに関する3種の外国語版を編纂しています。これは、一地域の歴史と文化に対する一般の人々の関心を促し、愛郷心を高めるというレベルで満足してはなりません。何より韓国古代史を復元するという信念と使命感を以て編纂に臨みました。但し、140人もの専門家の協力を得て270の論文を編むという大事業だっただけに、予想だにできなかった様々な困難に遭い、そのため、慶北道庁移転事業とともに発刊する予定だった本叢書の刊行が予定より2年も遅れてしまいました。それにもかかわらず、最後まで待つてくださった慶尚北道当局の広い理解に感謝します。特に歴代慶尚北道行政部知事で、編纂委員会共同委員長の任に当たった李周錫, 朱洛栄, 金玄基, 金章周 氏に感謝の意を表します。また、編纂委員会から全面的に委任され、5年近く編纂の実務を全般的に行って力を発揮してくれた編集委員会の盧重国, 朱甫墩, 李熙浚教授と慶北文化財研究院の李東喆先生の献身的な努力に、編纂委員会を代表して心よりお礼を申し上げます。

2016年12月

『新羅、その千年の歴史と文化』編纂委員会委員長 李 基 東

はじめに	010
------	-----

第Ⅰ篇	第1章 斯盧国の形成	022
新羅の形成と展開	第1節 形成前史	023
	第2節 斯盧国の成立と構造	030
	第3節 辰韓と斯盧国の行方	037
	第2章 新羅の成立と発展	044
	第1節 新羅の成立	045
	第2節 部体制とその運営	060
	第3節 地方支配の始まりと方式の変化	070
	第4節 支配集団の葛藤と新たな秩序	083
	第3章 中央集権体制への転換と運営	092
	第1節 律令体制の成立と運営	093
	第2節 領域の拡張と支配秩序の確立	110
	第3節 官僚制的な体制の定立	133
	第4節 新しい支配秩序の志向	150

第Ⅱ篇	第1章 三国統一と中代の支配体制	166
新羅の 三国統一と展開	第1節 金春秋の執権と中代における王権の成立	167
	第2節 百濟・高句麗の滅亡と三国統一	182
	第3節 中代の支配体制と運営原理	195
	第4節 仏教教学の発達と文化の成熟	210
	第5節 国際関係の変化と中代における王権の没落	227
	第2章 下代の開幕と展開	248
	第1節 下代の幕開け	249
	第2節 真骨貴族の分裂と角逐	258
	第3節 真骨貴族の連立	266
	第4節 思想界の新しい動向	276
	第3章 新羅の滅亡	286
	第1節 跛行的な王位継承	287
	第2節 農民蜂起と豪族の抬頭	294
	第3節 後三国の鼎立と新羅の滅亡	305
	第4節 新羅から高麗へ	314

はじめに

時期区分

新羅は、慶州盆地の斯盧国を拠点に成立した古代国家である。斯盧国が成長する中で同じ思想を持ついくつかの政治勢力が集まり、徐々にその規模が大きくなると具体的に姿を現したのが新羅であった。このような観点から、斯盧が慶州盆地だけを指すとしたら、新羅は慶州を中心として広い領域を包括する国名といえる。新羅が出現して次第に支配体制を整えると、元々の斯盧の境界地域は都として定着した。斯盧と新羅という用語が紛らわしい時もあるが、意味合いの面では明確に異なる。新羅が大きな範疇を意味するのに対し、斯盧はその内のごく一部である。したがって、新羅の歴史とは、空間的には斯盧が領域を拡張していく過程であり、時間的にはその起源といえる斯盧が形成された時点から滅亡するまでを対象としている。

文献によると、新羅の建国は紀元前57年と記録されているが、これは斯盧国の時代を含む。記録が必ずしも正しいわけではないため、この年度をそのまま鵜呑みにすることはできない。だが、便宜上この時期を基準にすると、新羅が滅亡したのは935年であるため、新羅の歴史は少なくとも一千年に至ることになる。こうしたことから、新羅は一千年の歴史を有すると言われている。

斯盧国から始まった新羅は、数々の出来事を乗り越えて発展を重ねた。これを、ただ時間の枠の中で理解しようとすると、歴史の展開の様相を体系的に捉えることができなくなる。むしろ、大きな変化があった特定の画期を基準にし、その前後の時期を細かく分けて理解する必要がある。

新羅の歴史上最も大きな画期は新羅によって三国が統一された時期である。三国統一は、既に当時から大きな注目を浴びており、当代の人々がその頃を主な変動期と捉えていたことがわかる。したがって、この時期を指して『三国史記』では上代(紀元前57―654年)から中代(654―780年)への転換期、『三国遺事』では中古(514―654年)から下古(654―935年)への転換期としている。一方、近代の歴史学でも三国統一以降を指して「統一新羅」という用語を使用し、それ以前の三国時代の新羅とは明らかに区分している。すなわち、新羅の歴史の中で、三国統一が有する意味と重要性は否定できないのである。したがって、ひとまず新羅の歴史は、統一期の始まりとなる654年を基準とし、その前後を二つの時期に分けて理解するのが適切であろう。

ただし、韓国の歴史を全体的に見たとき、新羅による統一が意味するものとそ

の意義に対する見解は必ずしも一致しておらず、論旨によって立場は多様である。しかし、二つの時期はまた複数の時期に分けて理解する必要がある。『三国史記』によると、統一新羅はさらに前半の中代と後半の下代(780—935年)に分けられる。それぞれにおいて、政治と社会が大きく変貌したという認識のためである。一方、それ以前の新羅を『三国遺事』では上古(紀元前57—514年)と中古の二期に区分している。これもまた、二つの時期は大きく異なると見るからである。上古に区分される期間そのものが極めて長く、内容から考えても、分けて考えなければならぬほど大きな変化があったことが確認できる。したがって、上古は17代の奈勿(ネムル)王(356—402年)が即位した356年を境に、前期と後期に分けられる。この時期は、すなわち斯盧国の段階を越えて新羅が出現する時期でもあった。

以上のように、新羅千年の歴史はひとまず大きくは二つの時期、さらに区分すると五つの細かい時期に分けることができる。ここでは、まず文献の記録にしたがって紀元前57年を斯盧国の始まりとしたが、これに先立って基盤を整えていくまでの一定の期間まで考慮してもうひとつの期間を追加するなら、全体を六つの細かい時期に設定することができる。それぞれの時期には個々の政治的・社会文化的な出来事があるため、新羅の発展過程を体系的に説明できるだろう。したがって、本論においては時期を区分し、これを基準に編と章に分けて考察していく。

復元資料と接近法

新羅の歴史を復元する上で、『三国史記』と『三国遺事』が基本的な史書として活用されている。しかし、一般的に歴史の実態を示す文献の記録に、多くの問題があるように、新羅の歴史も草創期の様子は不明瞭である。ほとんどが神話や説話の形式になっているだけでなく、それさえも後代になってから記録されたものであり、また、後から付け加えられた内容も散見される。したがって、現在継承されている記録を、そのまま歴史的事実として受け入れることはできないだろう。

新羅初期の歴史と言えば、一般的には先に設定した上古の内、特に前期を指す。厳密には、新羅ではなく斯盧国の歴史である。一般に『三国史記』の新羅本紀のうち、その時期の記録だけを「初期記録」と言い特別に扱っている。その理由は、記録

の妥当性という面において深刻な問題があるからである。これに対しては、論者によって肯定論、否定論、修正論と大きく見解が異なる。一般的には修正論の立場が広く受け入れられているが、具体的な内容を見ると一律性がないことが分かる。ほとんどの場合、初期の記録は紀年、王名、記事をそれぞれ分離して理解する。修正論者は、王名や記事の内容について、全般的に捏造とは捉えていない。記事については、後日の出来事を遡及して整合的に挿入したとみている。記事に記録された紀年をそのまま受け入れることはせず、実際の時期については意見が大きく分かれている。

『三国史記』の初期の記録がそのまま受け入れられない背景には、次のいくつかの理由が挙げられる。まず、時期的に、当代からそれほど離れていない3世紀末にまとめられた『三国志』魏書東夷伝の三韓条にある内容と大きな差がみられるからである。両書を比べてみると、同じ時期を対象としているにもかかわらず、全く違う内容になっているのがわかる。例えば、前者は新羅を既にひとつの王朝国家として描いている反面、後者はその母体の斯盧国を辰韓の連盟体の一員としてのみ設定している。これは、どちらかの記録が正しくないことを意味する。次に、これまでの発掘作業を通じて確認できる考古資料を基に初期の記録を点検してみると、顕著な差があることに気付く。すなわち、初期の資料にあるように、紀元前1世紀から慶州盆地が永らく新羅という広い領域を有する政治体の中心であったと断定できるような考古資料はない。三つ目に、金石文のような資料を初期の記録と比べると、6世紀以降の出来事が数百年ほど遡及して記録されていることが何点も確認できる。四つ目は、初期の記録には常識的にとつてい納得できない非合理的な事実が少なくない。例えば、親子や兄弟、または祖父母と孫などの血縁関係において年齢の差が激しく、合理的に理解しがたい事柄が散見される。

以上のような数々の理由から、新羅の歴史を復元する上で初期の記録を参考にする場合は、格別な注意が求められる。史料を徹底して批判する過程を経なければ、深刻な歴史の歪曲にもなりかねないため、慎重を期す必要がある。そのため、考古資料や金石文のような資料に重点をおいて接近し、初期の記録は限定的に取り扱うのが望ましいだろう。

初期の記録の主な対象となる上古前期は、厳密には新羅の歴史というより斯盧国の歴史と理解するのが適切である。新羅の歴史という観点から斯盧国を取り上げる際には、前期論と前史論という異なる二つの立場がある。前史論は、斯盧

国の歴史が新羅の一部ではあるが、事実上はその母体であると捉える立場である。したがって、新羅の本史と対等ではない。これに反して、前期論は斯盧国の段階を新羅の歴史の中に正式に組み込ませると言う立場である。

しかし、前期論は、勝者または中央中心の結果論的な理解という問題がある。斯盧国が新羅の母体であるのは確かだが、それ自体が新羅だったわけではないからである。斯盧国はあくまでも辰韓の12の連盟体を構成した勢力の内ひとつに過ぎない。前期論の観点では、数々の要素がとすると抽象的になりかねないため、初期の歴史が極めて貧弱になる恐れがある。したがって、できるだけ前史論的な観点から初期の歴史を捉える必要がある。新羅は、斯盧国だけでなく、多様な政治勢力と文化が入り混じっているからだ。

地理的環境

自然は、人間の暮らしに最も大きく影響を及ぼす要素である。人間は、決して自然から切り離せない存在だ。そのため、常に順応しながらも、また適度に向き合って活用することで限界を克服し、ついに文明を進化させる。そのような過程を経て能力を高めてきた人間は、時には自らを改造することもあった。

自然を構成する様々な要素の内、人間の暮らしに最も大きく直接的な影響を及ぼすものには、やはり地理と地形が挙げられる。人間は地理的な環境を適切に利用して住居地を決め定着し、農耕生活をしながら集落を作って生産力を向上させてきた。これを基にした階級の分化と政治勢力の出現に伴い、ついに国を立てることに成功した。このような意味で、ひとつの政治体が形成され発展する過程を正しく理解するためには、地理的な要素を考慮しなければならない。ただし、同じ環境でもこれをいかに利用するのかによって全く異なる結果にもなり得る。したがって、地理と地形は人間の生活に作用する絶対的かつ決定的な要素ではなく、どのような人間とどのように結合するかによって結果が異なる相対的な要素といえる。新羅が地理的に韓半島の南東部に位置する不利な要素を克服し、ついに三国統合に成功した事実がこれを立証している。

韓半島の特徴は山岳が圧倒的に多い地形にある。東部が高く西部が低い、いわゆる、「東高西低形」の地勢である。そのため、ほとんどの川は東部から発して西部に流れる。北



図1 韓半島の地形図

部の蓋馬(ケマ)高原から始まった高い山脈は、東海沿岸の方に傾いて、これに沿って南部に下り、いくつかの地点で西部に根を張る支脈を作り出した。それが江原道の南に到達すると、その主脈は南西部に方向を大きく変えて半月型の弧を描きながら南海岸にたどり着く。韓半島の中心といえる背骨を白頭大幹(ペクトウテガン)という。白頭大幹の支脈は、江原道の南部で次第に低くなり、そのまま釜山方面に向かって南海岸に至る。

立地的に新羅の主な領域といえる嶺南(ヨンナム)地方は、半月型の内側に位置している。東と南は海で、北と西は白頭大幹がふさいでいる。嶺南は、外の世界とは断絶され、まるで別途の空間のようにかけ離れて見える。韓半島を全体的に見ると、このことが地理的に重要な特徴のひとつに挙げられる。江原道の境界から発した洛東江(ナクトンガン)は嶺南の中央部を貫通し、あちこちの山地から生成されたいくつかの支流と合流して次第に規模が大きくなる。そして、ついに南東部の金海(キムヘ)地域で南海に流れ出る。

緩やかで流路が長い洛東江は、比較的流量が多く氾濫しやすかったため、所々に沖積平野を作って農作ができるようにした。洛東江の本流とその支流を中心に形成された近くの谷間には、付近の沖積平野を中心に比較的多くの人々が居住した。この支流の上流には、低い丘陵地帯を中心にそれぞれ独立性の強い70余りの盆地が形成された。それぞれの盆地は、人が暮らし始めてから今日に至るまで、変わらなく村として機能してきた。集落が形成された初期には、洛東江の本流とその支流が出会う地域の付近に最も多くの人々が居住した。これは、洛東江が人々を繋いで、交流や交渉をする主な手段として機能し、暮らしに大きく影響を及ぼしたことを示唆する。そのような意味で、洛東江が嶺南の糧の供給地と言っても過言ではないだろう。新羅が発展する過程で、洛東江が占める意味は大きい。

洛東江を中心に嶺南地域は大きく東西に分けられる。もともと大きな川は、その用途によって機能面で多大な差が生じるものだ。主に人間と物流が移動する交通路として活用される場合、川はどんなに大きくても相互コミュニケーションの手段になり得る。長らく洛東江は、そのような機能を担ってきた。ここで、特定の地域が色々な面で有利になることがある。例えば、洛東江の入り口にある金海を基盤にした政治勢力が、初期国家の形成期や弁韓の段階に至るまで力を有していたのもそのためである。だが、ここに問題が生じたりコミュニケーションが断絶してしまうと、互いを遮る境界線や国境線として機能する。広開土(クァンゲト)大王が400年に南征してから伽耶(カヤ)が滅びるまでがそうであった。このように嶺南地域においては洛東江が様々

な側面で大変重要な機能をした。初期国家が形成される過程でも同様であった。

斯盧国は慶州盆地という狭い立地から新羅に発展した。慶州盆地の環境は、斯盧国が他の政治勢力を制圧して新羅へと発展する上で極めて重要な要素として働いた。慶州盆地は、内陸方面から陸路を通じて海にたどり着くためには、必ず通らなければならない交通の要地だ。一方で、東海沿岸に近く、海から内陸に入るため通過しなければならない関門としても機能できる場所である。言い換えれば、慶州盆地は、内陸と海岸を共に活用できる地理的な利点がある地域だ。新羅は、慶州盆地を中心部とし、嶺南地域を主たる立地として発展した。嶺南の地理的な環境は、ここに大きな影響を及ぼしたのである。

新羅の歴史の特徴と韓国史における意味

新羅は、成長と発展の過程で地理的な特殊性を適切に活用した。韓国の歴史が展開される過程で、北方の情勢が南方にも大きく影響を及ぼしたという点は主な特徴として指摘される。他の地域から移住してきた人々が絶えず南に移動し、南部社会全般にかけて大きな影響を及ぼす要因となった。移住民の規模が小さいときは先に移住した住民や文化に溶け込みやすかったが、規模が大きくなると多大な影響を及ぼし変動をもたらすこともあった。彼らはほとんど北方の先進文化と政治を十分に経験していたからだ。このような住民移動の影響がある程度落ち着き始めたのは、313―4年に高句麗によって楽浪(ナクラン)郡と帯方(テバン)郡が消滅してからであった。

嶺南地域は、北西及び満州一帯で発生した移住民と文化が漢江や東海岸に沿って南部に移動し最終的に定着する、まるで巾着のような機能をする場所だ。したがって、多様な住民と文化が結合する場所であるのが特徴といえる。一般的に新羅を構成する住民は漢族といわれるが、その中身を見てみるとそうではなかった。もちろん、支配層の主流が漢族であることは確かな事実だが、それ以外にも朝鮮、濊、貊、靺鞨、漠、倭なども、それぞれ程度と時差はあるものの断続的に合流して新羅の住民と文化の形成に貢献した。彼らがそれぞれ保有した先進的な多様な文物も、新羅を形成する過程で融合されたのはもちろんである。

このように新羅の住民と文化は、大陸と海洋から入ってきた様々な系統のものが入



写真 1 慶州を中心とした交通路(『輿地図』慶州府)

り混じって形成されたという点を、特徴のひとつとして挙げられる。一般的に新羅の人と文化は、保守的なものと認識される。これは文化全般に対する理解からではなく、骨品制という特殊な身分制度の排他性と閉鎖性を根拠にして結論づけられたものである。

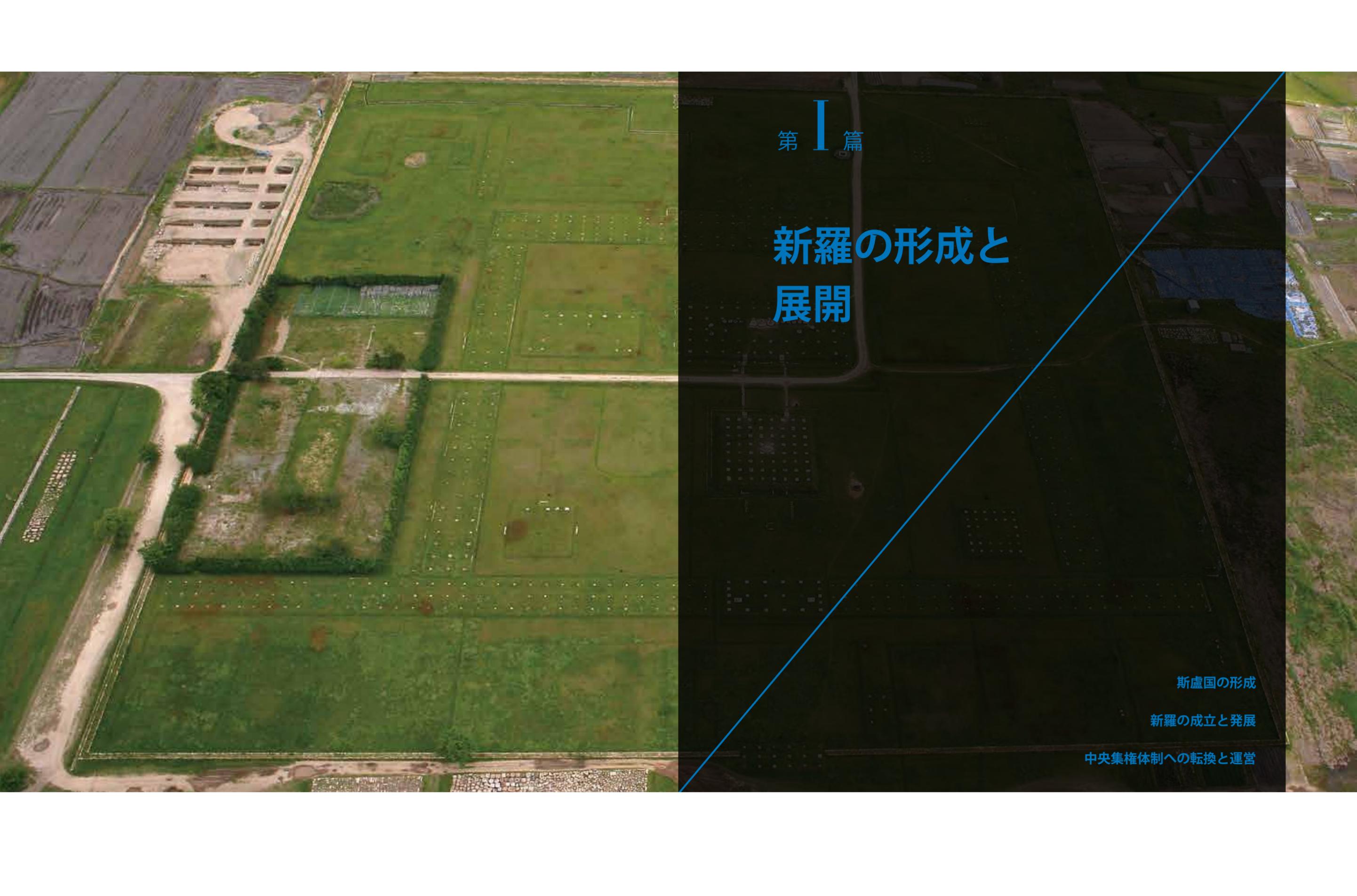
そのため、これは骨品制に内在する特定の要素を過剰に膨らませた感がある。骨品制は、インドのカースト制度の厳格性と照らし合わせて理解されることが多かった。このような認識を、新羅の文化全般にかけて強調することで、まるで新羅の文化の本質が終始一貫して保守的で閉鎖的なものであるかのように規定したのである。骨品制をそのように硬直した制度として理解をする姿勢も問題だが、これだけでなく新羅の文化の実質的な様相を具体的に検討せず強い先入観に沿って下した結論であるため、妥当なものではない。

もちろん、初期には新羅が地理的な短所により文化的に後れを取っていたた

め、そのように思われたかも知れないが、内部体制をある程度整えてから先進文化に追いつくためには開放性、進取性を強く掲げざるを得なかった。現実に安住する姿勢では、激しく展開される競争において生き残ることができないからだ。このような点は、4世紀から5世紀に建てられた積石木槨墳、多様な高句麗系の文物をはじめ、ローマングラスなど中央アジア地域の物品に至るまで、出土遺物から確認できる。また、仏教を受け入れた事例からも分かるように、公認されるまでの時期は遅れたものの、ひとまず公認されると急速に拡散して、近隣の先進国を圧倒している。そのような積極性と開放性が欠如していたなら、新羅が三国を統合する最終的な勝者になれなかっただろうし、統合した国を250年間も維持することは困難だったはずである。したがって、新羅の文化の性質を一方的に保守的なものと断定してはならない。むしろ、極めて進取的であったと評価すべきである。そのような点は、新羅の対外政策で最も著しく表れている。

実際、新羅が三国統一に成功した要因は色々あるが、優秀な人材、そして彼らが発揮した能力が挙げられる。特に、それぞれの時期の支配層は、卓越した外交能力を有していた。弱者が強者の間で生き残る道は、強い力を借りて利用することである。新羅は統一に至るまで、韓半島の三国の中で最も弱い立場にあった。自らの力だけでは、百済や高句麗の圧迫に対して長期的に防ぎきることができなかった。そのため、時には高句麗を、時には百済を適切に利用することで、目先の敵対勢力に対抗し、ついに両方を同時に敵に回してからは、中国の勢力をある程度活用することで、あらゆる危機を乗り越え最後の勝者に至った。これは、指導層が長い間積み重ねた経験と洞察力を基に、国際情勢の動きを正確に診断して決断を下すことで手に入れた結果であった。そのような意味で、新羅による三国統一は、単に戦争を通じてのみならず外交中心の諸々の政策が成功した結果だと解釈できる。これは、今日において新羅の歴史を振り返ってみる際に、深く考慮すべきことである。

新羅は数々の紆余曲折を経験して、ついに分立した状態を統一し、あらゆる政治勢力をひとつにまとめることに成功した。これで、ひとつの民族、ひとつの民族文化を成立させる土台が設けられた。その後、韓国の歴史が展開される過程で再び分裂と統合の過程を繰り返すこともあったが、結局は統合の必要性を表したのが、まさに三国の統一であった。そのような観点から、新羅による統一は新羅の歴史だけでなく韓国の歴史全体としても一大事件であったと評価しうる。



第 I 篇

新羅の形成と 展開

斯盧国の形成

新羅の成立と発展

中央集権体制への転換と運営

第1章

斯盧国の形成

形成前史
斯盧国の形成と構造
辰韓と斯盧国の行方

1

形成前史

神話の世界

どの国においても歴史が神話と説話の形で始まっていることには、ほぼ例外がない。新羅における創世神話は現在の記録には残っていないものの、建国と関連して三つの神話と説話が伝えられる。この神話や説話そのものは、無論歴史的な事実ではなく、また伝承の過程で後世の要素が付け加えられ、少なからず変質してしまっている。しかし、それ自体が完全に後世になってから創作されたものではない限り、その中には一定の歴史性と新羅の人々の思惟世界が込められているため看過することはできない。したがって、新羅の建国の様子を描くためには、そこから歴史像を抽出する作業が必要となる。

いくつかの史書によると、新羅は朴赫居世(パク・ヒョッコセ)を建国の始祖としていた。彼の出現に先立って、慶州盆地には自らを朝鮮系と標榜する、いわゆる六村集団が既に定着していた。この六村の村長がある日、閼川(アルチョン)の周辺に集まって話し合いをしていたとき、遠く南山の蘿井(ナジョン)という井戸の方から不思議な気配がしたので近づいてみた。白い馬が蘿井の傍でひざまずいてお辞儀をし、突然空に向かって飛んで行くと、大きな紫色の卵だけが残った。そ

の卵を割ってみると小さな子供が出てきたので、連れてきて育てたという。大人になって、ついに即位したが、その時が紀元前57年であった。

朴赫居世の登場に関する内容の内、どの部分が歴史的な真実をどれだけ盛り込んでいるのかを判別するのは簡単なことではない。それに、紀年も記録通りではないだろう。たが、その昔人々が共に生活していた慶州盆地において、外部のある世界から優秀な先進文物を取り入れた新しい集団が支配勢力として浮上した内容を、そのような形を借りて象徴的に描写したものと理解できる。赫居世の誕生は、あくまでも個人の出現というより、彼を代表として朴氏族の集団が慶州盆地に進出したことを表現したものであろう。朴氏という名字は後日付けられたが、その集団のアイデンティティーを表すものだ。

このように、文献の記録上は、朴赫居世の登場と共に新羅の歴史が始まるものとなっているが、その子孫が続けて王位を受け継ぐ設定ではない。昔脱解(ソクタルヘ)という人物が再び新しい支配者として登場するのだ。

昔脱解は赫居世とは違い、その出身が漠然と天から来たのではなく、極めて具体的であったという特徴がある。彼の出身が多婆那(タパナ)国、龍城(ヨンソン)国、琬夏(ワンハ)国などであったという、いくつかの異なる記録が伝わっている。もともと脱解の父はその国の国王であり、彼は大きな卵から生まれた。彼の父は、その出来事が縁起が悪いとして、卵を宝物と共に箱に入れ船に乗せて送り出した。彷徨っていた船は金海の金官(クムグァン)国に到着するが、人々が怪しんで拾わなかったので再び新羅の地に戻ったという。

昔脱解は、朴赫居世が在位してから39年目になった頃、東海岸の阿珍浦(アジンポ)に到着した船の箱の中から出てきた。海辺で働いていた老婆が船を発見し、その中の箱を開けてみたところ、各種宝物と赤ん坊がいたので連れてきて育てたという。彼は成長するにつれて学問と地理に通達した。そして慶州盆地に入ると、赫居世を補佐した倭出身の瓠公(ホゴン)が暮らす月城(ウォルソン)を計略で手に入れた。その後、赫居世の息子南解(ナムヘ)王の娘と結婚し、大輔(デボ)という官職に任命されてから3代儒理(ユリ)王の後を継いで即位したという。

昔脱解は、既に他の地域で様々な経験をしてから慶州盆地に入ったことになるが、自らを鍛冶職人と言っていたことは、鉄器の発達した文化を保有していたことと意味する。ただし、彼らは人数が少なかったため、慶州盆地に侵入してからもし

ばらく実力を積んでから有力者となって浮上したと描かれている。

昔脱解が即位して9年目、月城のすぐ近く始林(シリム)という森林で、早朝から鶏の鳴き声がした。大輔の瓠公(ホゴン)という人物に調べさせたところ、金色の小さい箱が木の枝にかけられていて、その下では白い鶏が鳴いていたという。箱を開けてみると、そこから子供が出てきた。脱解は、その子供の顔つきが美しかったので、天から子孫を授けてくれたのだと思い育てた。子供は成長するにつれて大変利口で知略に優れたため、閼智(アルチ)と名付けた。金色の箱から出てきたので、苗字は金とした。この時から始林を鶏林と呼び、国宝にしたそうだ。

閼智は後日新羅の王位を受け継いだ金氏族の始祖として設定された人物である。しかし、不思議なことに、閼智が金氏の始祖であったにも関わらず、大輔に任命されるに留まって王位にはつかなかった。それから6代が過ぎてから、味鄒(ミチュ)が金氏の中では初めて王位についた。

このように文献上では、新羅が国家の姿を整えていく過程で、三つの集団が出現し結合した事実を説話の形式で伝えている。これは彼らがそれぞれを前後にして慶州盆地に入り、その文化的基盤と系統が異なっていたことを示唆する。

4世紀になってから金氏は、朴氏と昔氏を取り除いて最終的に単独の世襲体制を整えた。それゆえ、新羅は事実上、金氏の王朝であると言われている。それにもかかわらず、閼智だけは王位にもつけないで、新羅の建国の始祖でもなかった。単に、金氏族の血統上での始祖としてのみ設定されている。金氏族の世襲体制が確立してから、ある時期に閼智を王にする機会があったはずだが、そのようにはしなかった。これは、後日新羅の歴史が編纂される中でも、その世系や王名を意図的に捏造したり潤色することはほとんどなかったことを意味する。王位が違う血縁集団に移ったにもかかわらず、国名を変えたり王朝の交代と見做さなかった。これは一般的な事例と比べると極めて独特なことだ。三つの氏族が最高支配者となった当時の国家の性質が、後日とは画然と異なっていたことを示し、当時は新羅ではなく斯盧国であったことを意味する。

邑落の形成

建国神話や説話には国家成立の発端となる内容が反映されているが、これが出現するまでの過程や実情を具体的に示すものではない。したがって、これを根拠にして新羅の初期国家が形成された姿を正しく描き出すのは困難である。そのため、多数の住民が慶州盆地に定着して階級文化を基に次第に政治を勢力化し、とうとう初期国家の斯盧国を建国するに至った実情は、考古資料に全面的に頼らざるを得ない。

慶州盆地に人が入って暮らし始めた時点を明確に予想するのは難しい。旧石器人が生活していたという具体的な痕跡は、まだ発見された事例がないからだ。嶺南地域では、最近まで数十ヶ所の旧石器の遺跡が確認された。特に、近くの東海沿岸や浦項(ポハン)、蔚山(ウルサン)、密陽(ミリャン)などでは発見された事例があることから、慶州盆地でも旧石器人が暮らしていた可能性は十分ある。だが、旧石器人は主に狩猟や採集などを生業の基盤として群れを作って移動する生活をしていたので、特定の場所に長い間定着することはなかった。したがって、彼らが慶州盆地で生活したとしても、斯盧国の形成とはあまり関係のないことになる。

群れをなして移動する生活を止め一定の地域に定住し始めたのは、一般的に新石器の段階になってからであると認識されている。一ヶ所に長く留まって定着する生活をするきっかけとなったのは農業であった。安定的に食糧を供給できる農耕生活を通じて、人々は群れになって移動する生活を止め一定の地域に根を下ろした。それにより、木や石だけでなく、土器のような土で練った割れやすい生活用品も作って使用できるようになった。定住する生活は、すなわち、集落を形成する基盤を整えたということだ。特定の地域を拠点にして、あらゆる生産と消費活動を共同で行い、いわゆる共同体を作った。これが血縁に基づいた原始共同体であったことはもちろんである。

韓半島における新石器時代は、概ね紀元前8千年頃から始まると推定されている。土器の形や文様、材質、制作方法などを基準に、新石器時代は数段階の発展過程を経てきたとされる。早期にはほとんど海辺や川辺など移動がしやすく、狩猟と漁獲が可能な地域に住居地が造成されたことからして、農業が主な生業であったとは思えない。当時は土器も持ち運びが容易な小さい規模で作られた



図1 慶州付近の支石墓分布の現況

が、これがその実情を反映している。ところが、その後のある時期に農耕が入ってくると、それから漸進的な過程を経て生業の中で農耕が次第に優位を占めたと思われる。農耕が盛んになったことは、特定の地域で本格的に定住する暮らしを営み始めたことを意味する。

韓半島において新石器段階の遺跡は、ほぼ全国にかけて確認されている。それ以前とは異なり、ほとんどの地域が人が暮らす場所が変わったことを示すものである。もちろん、人口の自然増加と拡散による面もあるが、絶えず外部から住民が流れ込んだ点も一定の影響を及ぼしたと推測される。

嶺南地域で発見された新石器の遺跡も少なくない。分布の様子を全般的に見ると、海辺や川辺だけでなく、水路に沿って徐々に内陸の深い場所まで拡散して居住する様相が確認される。もちろん、これは長い歳月をかけて行われたのであろう。清道(チョンド)梧津里(オジンリ)の パウイクヌル遺跡 (パウイクヌルは岩陰の意)では紀元前8千年と推定される新石器の遺跡が確認されているが、これは比較的早期に新石器人が内陸の深くまで進出したことを明確に示す事例だ。

慶州盆地一帯では、南川(ナムチョン)の校洞(キョドン)で新石器時代の小さい土器片が見つかり、すぐ近くでは住居地の痕跡も確認された。東海岸の陽北面(ヤンブクミョン)垠本里(テボンリ)でも新石器の住居地の遺跡が発見された。当時はまだ集落の規模は小さく、10戸を大きく超えない規模だったと推定される。慶州盆地一帯でも新石器人が居住していたことは明らかだが、現在までの出土の傾向からして住民の数は多くない上、個別集団の規模もそれほど大きくなかったと思われる。彼らと、後から入ってきた青銅器時代の住民との関係も明確でない。新石器人は断続的に慶州に移住してきたと思われるが、彼らが斯盧国の形成と直接関連があると判断できる証拠は見られない。

慶州盆地一帯で、それ以前とは異なり人口が著しく増加したのは、紀元前8―7世紀頃から始まる初期の青銅器の段階にきてからのことである。無文土器を主な特徴とする彼らの住居地の遺跡が黄城洞(ファンソンドン)、龍江洞(ヨンガンドン)、忠孝洞(チュンヒョドン)などで発見された。その分布の様相からして、規模は小さいものの集落を作っていたことは確かだ。先の新石器段階の遺跡は慶州盆地ではそれほど見られないが、初期の青銅器時代の住民の居住は大きな違いを見せている。彼らが新石器人と直接繋がる痕跡がないということは、慶州盆地に

遅れて侵入して定着し始めたことを意味するものだ。彼らが居住した立地は、川辺の若干低い地帯や緩やかな丘陵の斜面、険しい山麓地帯に至るまで非常に多様であった。まだ規模がそれほど大きくはなかったが、彼らの居住環境からして、慶州盆地内の河川の周辺と谷間で集落が形成され始めたと推定できる。この時期の墓の遺構には、石棺墓が一部発見されている。

初期青銅器時代の後半になると、その数が一層増え始め、村の遺跡を明らかに確認でき規模も拡大した。この段階で、農業の技術力が向上して生産力が増大し、人口が増えて階級が細分化されたことを反映している。新しい農耕地が開発され居住できる場所も徐々に広がった。各共同体が、特定の場所を中心に生活を営める一定の空間的範囲を設定した。共同体は近隣の共同体と互いに接触して交流し、その規模を益々拡大する基盤を整えた。このような具体的な姿は、この段階の個人の墓、支石墓の分布から推測できる。

慶州盆地には、支石墓が山間のあちこちに分布しているが、多くが密集しているわけではない。ほとんど2―3基ずつであり、約10基以上の場所も何ヶ所か確認できる。おそらく10基以上が密集した場所を中心に周辺と繋がり、ひとつの体制の下で運営される構造だった可能性が高い。特定の中心的な集落が、周辺のいくつかの集落と接触して繋がる構造を有しているなら、後日、本格的に形成された邑落の初期の姿だと推定できる。初期国家の基礎的な単位を成す邑落が初めて形成され、その姿を整え始めた時点は、支石墓の段階であると考えられる。

ただし、この頃の邑落は数が極めて少なかつただけでなく、内部の結集力もそれほど強くない、極めて初期的な姿であった。支石墓の副葬品が非常に貧弱であったことからして、農業の生産力が低く、まだ階級の分化の程度や文化的レベルも大変低かった。したがって、それだけでは初期国家の段階まで進んだとは考えがたい。前述した、斯盧国出現の基盤となる六村に象徴される集団の姿が、すなわち、支石墓の段階でちょうど現れ始めた初期の邑落と推定される。

2

ス盧国の 形成と構造

ス盧国の成立

紀元前2世紀頃から嶺南地域全域には、既存の支石墓を通じて確認されたものとは著しく違う文化様相が現れ始めた。支石墓とは全く異なる系統の木棺墓が造営され始めたのである。これを始まりとして、その後の文化において相次いで変動が起こった。

墓の材質だけでなく、副葬された遺物も質量が大きく変わった。支石墓の段階の青銅器はこの上なく貧弱で、依然として石器が主流だった。最初は多紐鏡や肩甲形の銅器など、儀礼用の異形銅器が埋納されたが、これは遠からず起きる大きな変動を予告するものである。青銅器の変化は、それを購入するほど内部の欲求が大きくなったことを意味する。支配勢力の政治力と経済力が向上し、その権威が一層高くなると、それにふさわしく外見を飾る必要性が高まった。この時の土器は粘土帯土器だが、それ以前とは系統が違い、木棺墓も明らかに群集現象を見せ始めた。

このような変化はまだ嶺南地域ではなく、大邱(テグ)を始め一部の地域に限って表れた。慶州では入室里(イブシルリ)でそのような様相が確認される。この

儀器用の青銅器は湖西(ホソ)・湖南(ホナム)地域で見られるものと類似しているため、そこから影響を受けたか、または住民の移動に伴うものと解釈できる。ただし、それが土着社会をある程度刺激したことだけは疑いの余地がない。

この時期に住民の移動で嶺南地域全域に一定の変動が起こったとみるのであれば、その変動は紀元前3世紀初めの古朝鮮の準(ジュン)王の没落と関連がある可能性が高い。準王は、統一王国の漢の諸侯国、燕の支配下にあったが政治・社会的な混乱を利用してそこから脱出し、亡命した朝鮮系の衛満(ウィマン)に急襲されて没落した。準王の没落によって発生した遺民は、少なからず南方に移住した。その主流は湖西の方に移動したが、嶺南の方にも一部入り一定の影響を及ぼしたようだ。

しかし、嶺南地域では紀元前2世紀後半から1世紀初めに、もうひとつの文化的な変動が起こった。この文化的変動とは、それ以前と比べて規模がはるかに大きく、その内容も一層多様なものである。すなわち細形銅剣、銅鉞、竿頭鈴など発達した青銅器と共に、鉄製の短剣、鉄矛などの鉄器が墓に副葬され始めた。これらは、最初人々の往来を通じて入ってきたはずだが、しばらくしてからは短期間で大量して流入するようになる。続いて独自で製作もするようになり、墓もまたそれ以前とは違う新しい形の木棺墓が造営されるようになった。

このような諸般の文化的な変動は、その後も断続的に続いた。慶州盆地では、皇城洞(ファンソンドン)、朝陽洞(チョヤンドン)、竹東里(チュクドンリ)、徳川里(トクチョンリ)などの遺跡が代表的な事例として挙げられる。大邱では、月城洞(ウォルソンドン)と八達洞(パルダルドン)などでそのような様相が確認される。この木棺墓は、青銅器時代よりは鉄器文化を主な基盤としていることが、それ以前とは明らかに異なる点である。このような変動は、特定の地域だけに限って起きたわけではない。嶺南全域にかけてほぼ同時に、または短期間内に起きたため、急速に波及したことが確認できる。ひとつの画期をなすほどの変動が短期間に起きたとすれば、これは既存の文化との断絶現象を含むものでもある。したがって、変動の背景は内部の漸進的な進化によるものと言うより、外から大量の住民が移動した結果と解釈するほうが適切だろう。

当時の木棺墓の造成については、所々で群を形成しているのが注目される。特定集団の共同墓地であるため、その付近では集落が形成されていたに違いな

い。同じ墓域にある木棺墓でも、有力なものとは規模や副葬品の質量が大きく異なる。ただし、有力な木棺墓の数はごく限られているため、同じ地域では継続して造成されなかったのが特徴である。これは有力な木棺墓を造成した強い勢力が、同じ集団の中にはいなかったことを意味する。内部的に階級文化が大きく進んだとしても、それは同じ血縁集団の内部のことであり、まだ継承性のある状態ではなかったことの証拠である。

慶州盆地の場合、多くの墓域において墓の大きさや副葬遺物の状態及び内容の構成などに若干の差はあるが、ほぼ類似した定型性を有しているのが特徴だ。物質的な文化だけでなく葬式やしきたりなどの文化をある程度共有していたことを表す。もちろん葬送儀礼の文化だけに限った現象ではなく、生活全般にわたっていたと考えられる。このように文化全般にかけての定型性は、その集団が普段全く別々に活動していたのではなく、継続して互いに接触し、交流することで一定の関係を維持していたことを表す。集団の中には持続性のあるひとつの大き



写真1 伝慶州竹東里出土青銅器(李養璿蒐集品)

な連携網が形成されていたのである。

発達した青銅器と鉄器文化を保有した住民が入ってくると、慶州盆地には飛躍的な変化が生まれた。同じような規模と性質の邑落が形成されたのである。既に支石墓の末期に階級文化を基に形成された初期の邑落が、今や一層具体的な姿になったり、それとは全く別の新しい邑落も作られるようになった。それらの中には、未だ圧倒的に有力かつ優勢な集団と断定できるほどの群れはなかったようだ。互いに似たような規模と文化を基盤にしている水準である。彼らの内部には「邑」といえる中心部もあり、「落」を意味する周辺部もあったのだろう。これらを合わせて邑落と呼んでいる。このような邑落が、慶州盆地で本格的に形成された。木棺墓の群集はこの表れである。

このような現象は慶州盆地の中央部を中心に、各方面に向かう交通路全般にみられる。文化を共有する現象がほぼ同じ時期に起こったのは、段階的に進んだのではなく急速に行われたことを意味する。しかし、これを主導し、中心的役割を果たしたと考える部分はまだ確認されないため、いくつかの場所で同時多発的に行われた現象と解釈すべきであろう。言い換えると、独自の進化ではなく、外部からのある圧力によるものではないかと考えられる。

紀元前2世紀末から1世紀の初めにかけて、慶州盆地をはじめとする嶺南地域一帯で起こった大々的な文化的変動は、紀元前108年に漢によって衛満朝鮮が滅亡した一大事件が要因だろうとみられる。衛満朝鮮は、崩壊する以前から内部分裂が起きて住民の離脱が始まり、崩壊すると、離脱は一層深刻化した。この人々が挙げて南部の漢江の方へ移動し、連鎖作用を起こした。当時、漢江流域の一帯には、様々な政治体が結束した辰国という連盟体が存在した。辰国の方へ人々が断続的に集まると、連盟体の基盤は根元から揺れ始め、ついに解体への道をたどった。彼らと共に衛満朝鮮から下ってきた人々の多くが南方に移住し、嶺南地域の既存の土着社会に大きな変動を巻き起こしたのである。そのような事態に対応して、各地域は各々異なる反応を示した。その様相は大きくいくつかの類型に分類できる。

第一に、既に成長の軌道に乗っていた地域の土着勢力が、移住してきた人々と彼らが保有した先進の文物を主導的に受容し、邑落の形を整備する場合である。外部から移住した人々の数が極めて少ない際には、土着社会が変化を主導

したと考えられる。この場合、土着社会が再編されることはあっても、根本的な変化が急激に起こることはなかった。第二に、移住民の数が比較的多く、また、彼らのはるかに有力かつ優勢な文化を保有し、土着勢力を容易に圧倒する場合である。先進文化を保有した人々が主導し、既存の土着社会を根元から急速に再編する形であったと思われる。第三に、移住民と土着勢力の力が拮抗し、適切なレベルで妥協をする場合である。双方が結束を図って力を増すと、既存の秩序は徐々に変化した可能性が高い。

どの地域がどのような形で進化したのか、その実態は具体的には明らかになっていない。ただし、嶺南地域の中でも外部の文化が本格的に入ってきた先進的な地域とそうでない地域とは画然と区分される。前者は主に移住民が主導したと思われるが、慶州盆地における文化的な変動がその実状をよく示している。考古資料上でもそうであるが、文献からも立証される事実だ。前述したように、朴赫居世の登場と斯盧国の建国はそれと密接な関連がある。

慶州盆地の各地では移住民の主導下で、新しい邑落が多数成立した。そこには程度の差はあるものの、既存の土着社会が大きく再編されてきた点は明確である。そのような状況の下、生き残るための方法として互いに団結して協力し、政治的・経済的に相互協力したとみられる。その結果、邑落相互間の協力関係を媒介にし、一定の範囲内で徐々に連結網が形成された。最初は彼らの連結網は緩やかな弱いものだったと思われるが、持続的に接触することで徐々に強くなった。その過程で初期の国家が成立したが、慶州盆地を拠点にしたのが、斯盧国であった。

斯盧国の構造

以上のように出現した初期の国家を、過去には部族国家、城邑国家と呼んだ。しかし、その共通した基盤が全て記録に登場する邑落であることを考慮し、邑落国家と呼ぶべきだという見解が提起された。邑落が初期国家の構造を説明する上で最も理解しやすいため、本書でも邑落国家という用語を使うことにする。

ひとつの邑落国家はいくつかの邑落から構成されていた。もちろん全ての邑

落の規模が同じであったわけではないため、各々の邑落国家の規模や範囲にもそれぞれ差がある。邑落はそれぞれ境域の範囲と人口の構成が異なっていた。総じて、地理的な位置と文化的な環境が、それを決定する主な要因として作用したものと推定される。

一方、邑落国家の構成も一律的ではなかった。ひとつの邑落で構成される邑落国家であったり、6―7つ以上の多数で構成される邑落国家もあった。多数の邑落で構成される邑落国家は、比較的人口も多く、広範囲に及ぶため、おのずと大きな経済力を持ちえたはずである。交通の要地または農耕に有利な広大な後背地のある地域には、大規模な邑落国家が存在したであろう。交通の要地、慶州盆地に姿を現した斯盧国は、様々な面からして最も大規模な邑落国家のひとつだった。

邑落の規模や内部の構成は地域によって当然差があり、時期によってももちろん異なっていた。鉄製の農器具を本格的に使用して生産力がより向上し、人口も急速に増え、邑落内部の階級分化が進展した。これに伴って、邑落はより一層政治性を増した。時間が流れるにつれて、邑落の内部も自然に進化した。これに合わせて邑落国家の構造や性質も変わった。

邑落国家が初めて出現したとき、それぞれの邑落は相当強い独自性を有していた。国家ごとに差は存在したであろうが、邑落間の政治力、経済力の差は基本的に大きいものではなかった。よって出現初期において同じ圏域ではほぼ類似した状態と水準であったとみられる。現在まで発掘された木棺墓の存在が、これを明らかに証明している。しかし、これは遠からず優位を掌握するために相互激しく競争することを予告するものでもある。

先進文化が絶えず流入して生産力が向上すると、邑落間の格差が大きく開いて有力かつ優勢な邑落が出現し、これが次第に定着し始めた。このような有力な邑落を中心に、邑落国家内部の結束力は一層強くなった。ここで、中心的な機能を担う邑落を、特に国邑と言った。ひとつの邑落国家は政治面で中心的な機能を担う国邑を中心に、いくつかの邑落が繋がる構造を持った組織であった。そのため、邑落間の優越関係は一層明らかになった。

しかし、国邑はいつも固定した不変のものではなかった。邑落同士の熾烈な競争の中で、頹落したり、または新たに浮上するなど、邑落国家内部の構成は数々の浮沈を経験した。これによって中心的な役割が他の邑落に移るなど、国邑の移動も

伴った。このような面は、斯盧国で使われた王号の中に適切に反映されている。

斯盧国では最高支配者の称号を、尼師今(イサグム)と呼んだ。その直前までは政治的支配者を、政治体の性格によって居西干(コソガン)、次次雄(チャチャウン)と呼んだが、最終的に尼師今になったのである。尼師今の「尼師」は齒を意味し、「今」は首長を意味する「干」と同じで、尼師今そのものは齒が多い年長者としての首長を意味する用語である。齒の数が多いということは、すなわち、長年の経験を通じて知恵が多い、すなわち尊長者のことだ。したがって、尼師今は政治的な絶対権力者というよりは、比較的有力な支配者を指す。これは、いくつかの邑落が結束して構成された斯盧国に相応しい王号であった。朴、昔、金氏が交互に王位を継承した新羅の初期の状態は、まさしくそのような家系から尼師今が輩出されたことを意味する。後日には様々な氏族の名で表現されたものの、彼らは実のところ邑落を基盤にした集団だったのである。

三姓の氏族は、斯盧国を構成する多くの邑落の中で比較的力量のある優勢な氏族だった。その邑落の首長が尼師今の地位になったことは、まさしく彼の所属する邑落が国邑として機能するようになったことを意味する。つまり、国邑の機能が、その氏族が所属する邑落に移ったのである。したがって、尼師今は政治的な首長ではあっても、簡単に交代できる性質のものだったといえる。これは、斯盧国の段階において、国家がどんな性質だったのかを如実に示している。まだ目立った邑落が中心となって強い政治力を発揮できる段階ではなかったのである。そのような意味で、邑落国家は、邑落の連盟であったとも解釈できる。

邑落国家は、それぞれ自らのアイデンティティーを表すために国名を使用した。国邑の勢力が変わると、国名を変更する場合もあったと予想される。例えば、廉斯国の事例がある。廉斯国は1世紀初めに確認される国名だが、3世紀半ば以前にはその姿を完全に隠した。『三国志』に登場する国名は3世紀中葉の実情を示すものだが、その国名や存在が必ずしも紀元前2世紀や1世紀にもそのままであったとは判断し難い。この点は、斯盧国も同様である。邑落国家は成立してから数多くの浮沈を経験したため、国名や構造において相当の変化を伴ったのだろう。辰韓という連盟体の出現からこのような事情を一部見出すことができる。

3

辰韓と斯盧国の
行方

辰韓の中の斯盧国

紀元前1世紀半ば頃、袋状壺(チュモニホ)と組合牛角形把手附壺などに代表される新しい土器が嶺南地域に現れた。その材質から、これらを瓦質土器という。瓦質土器は、以前の粘土帶土器より一層選別された細かい胎土であり、ある程度閉鎖された窯で焼く土器で、異なる系統のものと推定される。どの地域から発生したのかは明らかではないが、嶺南地域全域に徐々に広がったようだ。すなわち、それぞれの邑落国家間で一種の関係網が構築されていたと解釈される。瓦質土器の拡散は、一定の地域で全般的な文化を共有する現象が起きたことを示している。これは邑落国家を超え、一層広い範囲で連携網が存在したことを意味する。したがって、邑落国家間の連携網は、一種の連盟体の成立を表す。これが、まさしく辰韓と弁韓の成立である。

各々別個に存在した邑落は独自性をそれなりに保ちながら、邑落国家の構成員になった。一層大きな政治体の邑落国家として結束するのは、邑落自身の生存とも直結するからである。邑落国家は、周りの邑落を取り込んで大きくなり、一定の水準に達するとひとまず拡張を止めた。当時、内部で蓄積していたエ



写真2 慶州朝陽洞38号墳出土瓦質土器

ネルギーが、さらに進むには限界に達したからだろう。自然・地理的な状況や、その外部で形成された政治勢力が障害物となった。それぞれの邑落国家は、接近できる範囲内にある邑落国家と共に連携網を構築した。各地に分散していた邑落国家も、孤立した状態をひたすら維持するよりは、互いに協力して協調する方が色々な面で有利であったからだ。例えば、外部から加えられる政治的な圧力に対抗したり、内部の余剰生産物を貿易を通じて交換したり、時には遠距離交渉を共同で遂行する際に基本的な経費を低減してリスクを大きく減らせるというメリットもあったのだろう。そのため、緩やかではあっても連盟体を構成する方が大変有利であった。成立初期には邑落国家の結束関係は極めて緩やかだったが、その必要性が切実に求められるようになると、次第に結束力を強化していった。初期は主に経済的な結束だったが、徐々に政治的な面が強くなったとみられる。

辰韓という連盟体が形成された時点や過程は明確でない。ただし、1世紀初めより以前に辰韓が成立していたことは確かだ。これは『三国志』東夷伝の韓條にある廉斯鑑(ヨムサチ)の史話から確認できる。

廉斯鑑はもともと特定の人名ではなく、廉斯国の首長を指す用語だった。廉斯鑑は辰韓の右渠帥(ウゴス)という官職にもついていた。彼はある理由により、自分の邑落を脱出して楽浪郡に向かった。途中で戸來(ホレ)という人物と出会ったが、彼は漢人で1500人の同僚と一緒に伐木をしに来たところ辰韓に捕らえられて3年間奴隷として働いているという。その話を聞いた廉斯鑑は、このことを楽浪郡に知らせた。彼は先頭に立ち楽浪郡の人々を導いて辰韓に戻ると、既に死亡した漢人500人に対する代価として、辰韓人1万5千人と弁韓布1万5千疋で弁償させたという話だ。

この話は、前漢の後を継いで外戚の王莽によって建国された新の地皇の在位期間(20―22年)中に発生した出来事だ。ここに辰韓と共に弁韓に関する言及があるので、既に1世紀初めより前の時期に三韓が成立していたことは確かである。右渠帥の存在から左渠帥を推定できるだけでなく、辰韓が一定した組織を成していたことが分かる。辰韓を構成する勢力のひとつ廉斯国がそこから離脱したということは、当時の連盟体の結束がそれほど強いものではなく、所属するか否かも強制ではなかったことを反映している。それだけ出入りが自由で、選択は個別の邑落国家が自主的にしていたのであろう。辰韓の連盟体に属する邑落国家が、もともと6から12に増えたという記録はこれを裏付けている。

このように辰韓の連盟体は1世紀初めまで存在したので、遅くとも紀元前1世紀には成立していたと考えられる。それを構成する邑落国家が成立した時と近い時期か、またはそこからそれほど遠くない時期に連盟体が結成された可能性が高い。辰韓という連盟体の名称にある「辰」が辰国の政治体と関連があるなら、これを主導した集団も既に連盟体を結成した経験があり、住民の移動によって邑落国家が成立した時期とほぼ同時に連盟体を成したと見ても良いだろう。

辰韓の連盟体は、初期には出入りが自由なほど大変緩やかな体制で運営されたが、それでも連盟体を率いる役割を担う盟主は存在していた。当時、辰韓を構成する勢力の実態は確認できないが、やはり経済的に最も力のある邑落国家が盟主であったと思われる。辰韓初期の盟主が具体的にどのような勢力であったの

かも確かでない。地理的に見て、比較的に有利な位置の斯盧国であった可能性は高いが、当時の国名が後日の斯盧国そのままであったかは断定できない。時折内部を主導する勢力の交替があっただけに、3世紀の時点での国名が紀元前1世紀でも同じとする確実な保障はないからである。

辰韓の変動と斯盧国

辰韓の連盟体は、紀元前1世紀に成立した多くの邑落国家から構成され、正式に発足した。しかし、その結束力は強固なものではなかった。外部から断続的に諸々の圧迫を受け、発足当時の状態を維持するのは難しく、激しい離合集散の過程を繰り返していた。廉斯鑑の事例のように、既存の邑落国家も新興勢力の浮上による内部勢力の交替などで、数々の浮沈を繰り返していた。さらに、外部から新たに住民が移動してくると、先進の文物が及ぼす影響力も軽視できないものだった。3世紀に至るまでに数々の変動を経験した。そこでは邑落と邑落国家における内部の変動はもちろん、盟主権の移動も当然伴うものであった。したがって、辰韓の社会を最初から最後まで同じ視角で把握するのは難しい。

このうち特に注目すべき事実は、2世紀に入ってから大きな変動が起こったことである。当時、後漢の王朝は没落の一途をたどり、おのずと楽浪郡への統制力まで失いつつあった。本国が混乱に陥ると、楽浪郡でも緊張が弛み、多くの住民が本拠地を離脱した。彼らは南部の三韓の社会に移住したが、その中にはもちろん辰韓も含まれていた。

漢郡県(ハンゲンヒョン)の衰退は、逆に漢族社会が徐々に強くなっていたことを意味する。実際、『三国志』の東夷伝韓条では、この頃に韓濊(ハンイェ)が楽浪郡県を脅かしたことを伝えている。楽浪郡県の脅威になるほど三韓社会が急成長した一次的な背景としては、鉄器文化の発達に伴う生産力の増大が挙げられる。当時既存の木棺墓の代わりに木槨墓が主流の墓として浮上した現象は、この状況を首肯させる一例である。

木槨墓は、木棺墓とは異なり、副葬可能な空間が非常に大きくなり、外見もまた巨大になった。さらに、これまでとは違い数多くの鉄製の農器具や武器が副葬さ

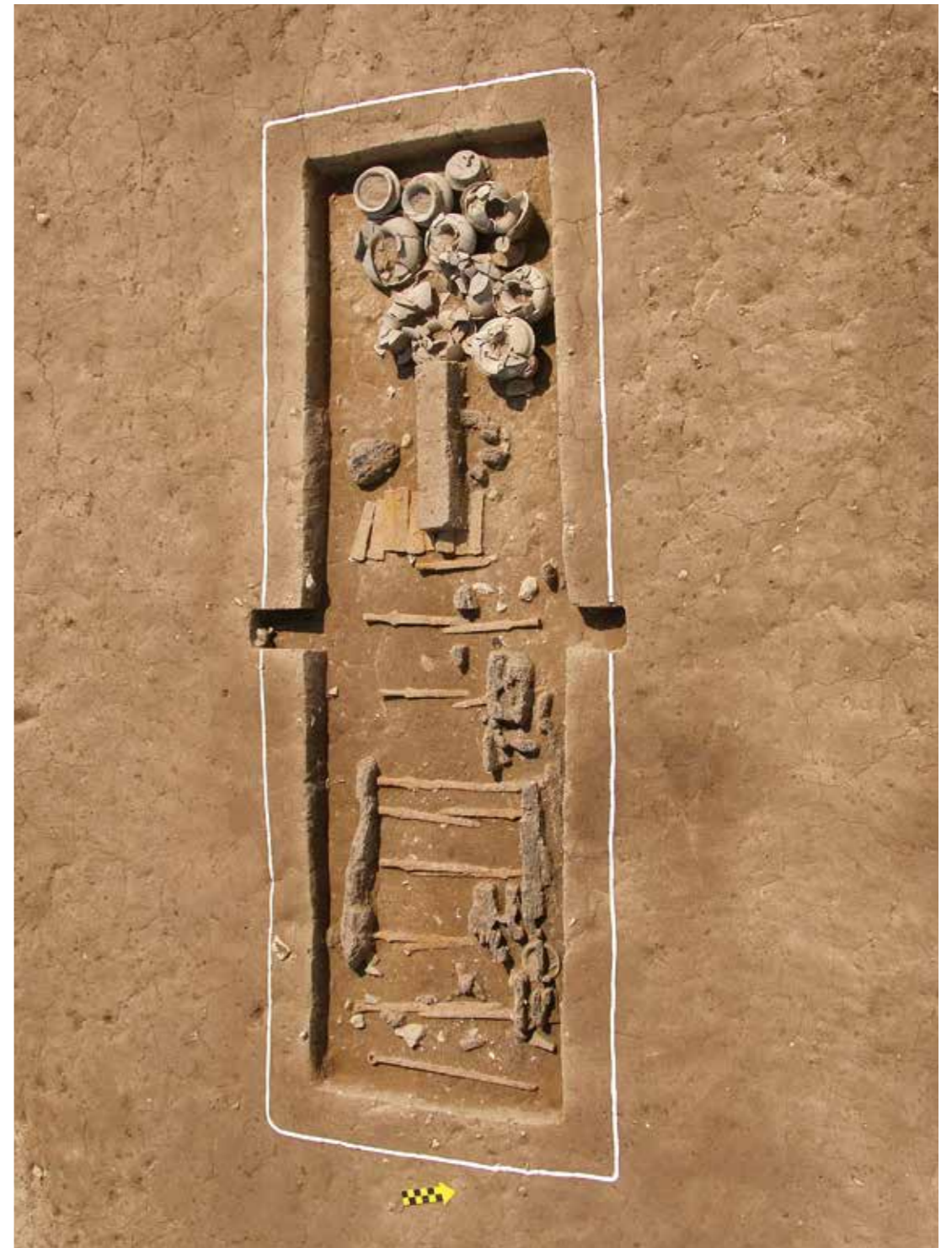


写真3 慶州徳泉里19号木槨墓

れた。進化した形の板状鉄斧のような規格の鉄素材も多量に埋納された。鉄製品の質量は、それ以前とは比較できないほどである。そして、水晶・玉製品を始め各種個人の威信を示す装身具も大きく変化した。有力な木槨墓も既存の墓域から分離され、特定の場所に共に造営される権力集中の現象が見られるようになった。

このような現象は生産力が全般的に向上しただけでなく、財物が特定の個人に集中していたことを反映している。さらに、政治力・経済力が特定の集団の中である程度継承されていたことを示している。こうした様相が、全ての邑落国家で同様に進んだわけではない。地域によって差があったが、有力な邑落の場合はより集中する傾向があった。邑落内の特定の個人に、また邑落の中でも特定の邑落に偏る現象が目立った。中でも、斯盧国内部で起こった変化が最も著しい事例として挙げられる。斯盧国の朝陽洞、徳川里などで大規模の木槨墓が造成されたことが確認されたからである。

木槨墓が出現すると、辰韓を構成する勢力だけでなく、所属の邑落国家内部でも多大な変動が起こった。斯盧国では、この頃に朴氏族から昔氏族への勢力交代が行われた。昔氏族は発達した鉄器文化を保有した状態で斯盧国に進入した。それを背景に次第に主導勢力へと浮上し、ついに尼師今まで輩出するに至ったのだ。これは、朴氏から昔氏族へと国邑が移ったことを意味することでもある。昔氏族が木槨墓の文化を保有して慶州盆地に進入したとは断定し難いが、彼らによって斯盧国の鉄器文化が急速に発達し、それが木槨墓の文化として表出した点は確かである。鉄器文化の発展は昔氏族が主導した。この頃の斯盧国は、辰韓連盟体の盟主としての地位をより強固にしていた。

後漢が衰退すると遼東方面の公孫氏が独自の勢力を構築した。公孫氏は楽浪郡県で支配権を手に入れてから、それまで続いていた住民の離脱を防止するために、3世紀初めに黄海道一帯に帯方郡を設置して対応した。しかし、すぐに後漢を継いだ曹魏が東方政策を推進して遼東を掌握すると、楽浪郡と帯方郡も押さえて統制力を強化し始めた。曹魏は三韓を統制する手段として、三韓の支配勢力に邑君、邑長の称号と共にこれを保証する印綬衣幘を支給して再編しようとした。その過程で帯方郡が管掌していた辰韓12ヶ国の内8ヶ国を別途切り離して、楽浪郡の管轄下に置こうとした。これは、辰韓社会の分裂と弱体化を狙ったものであったが、すぐに反発を呼んだ。漢族の土着社会では、246年に郡県を先攻し

て挑発した。戦争を起こした主体やその結末を巡っては多くの議論があるが、三韓社会が郡県と直接匹敵して戦えるほど発展したことが分かる。

三韓社会ではそのような発展の勢いに乗って、今度は中国本土と直接通交しようとした。270年代から290年代に至るまでの約20年間、馬韓と辰韓は数十回中国本土と通交した。馬韓と辰韓の名が代表的だが、実際は、所属のいくつかの邑落国家が主導したものである。参加した邑落国家の数は一定せず、少ない時は3から5ヶ国に過ぎない時もあったが、多い時は30ヶ国あまりに達することもあった。これは馬韓と辰韓が一糸乱れずに動く組織ではなく、必要に応じて自ら参加を決定する緩やかな形の組織体であったことを示す。とはいえ、盟主中心の有力な邑落国家が主導していたはずである。これは結局、危険を伴ったからであろうが、積極的に参加して成功した際にもたらされる効果は少なくなかった。これは三韓社会の内部で、ある変動が生じつつあったことを象徴する。

しかし、291年に西晋内部で発生した八王の乱により、もはや交渉ができなくなると、辰韓を始め三韓社会は新たな局面に直面した。新たな局面への転換は、辰韓を率いた有力勢力の斯盧国には、むしろ絶好の機会であった。

第2章

新羅の成立と発展

新羅の成立
部体制とその運営
地方支配の始まりと方式の変化
支配集団の葛藤と新たな秩序



新羅の成立

斯盧から新羅への転換

3世紀末辰韓が中国の本土と試みた通交は、20年近くの間幾度か行われたが、理由もなく突然中断された。この時期に中国本土へ向け競うように交渉をしていた馬韓も同様である。すなわち交渉中断の理由を国内の事情に見出しがたいため、辰韓内部の問題ではないということになる。実際、交渉相手である晋内部で起こった政治的問題によるものであった。続いて4世紀初めには、鮮卑と匈奴をはじめとする遊牧民、いわゆる五胡が北部の草原地帯から中原の農業地帯に南下して定着すると、中原一帯は混乱の渦に巻き込まれた。そのため辰韓はこれ以上中国本土と通交することができなくなった。

当時、満州一帯で発展の最中にあった高句麗も、突然南部の大同江(テドンガン)流域に進出し、長らく中国の韓半島方面の前哨基地として機能してきた楽浪郡(313年)と帯方郡(314年)を相次いで滅亡させた。高句麗が楽浪と帯方一帯を手に入れた事件は、南方の三韓社会にまで大きな衝撃を与えた。政治的な緊張が急速に高まった辰韓には、北方から下ってきた遺民が大挙流入して政治・社会的に再編が起こった。このように緊迫した状況に適切に対応するため、内部で

は統合運動が起こった。辰韓で起こった邑落国家間の結束と統合の運動は、当時の盟主であった斯盧国が柱となったが、斯盧国と競争できるほどの有力な勢力も入り混じって激しく競争した。その結果、斯盧国が最終的な勝者となった。

その後、辰韓は全く違う姿に変わった。斯盧国はもともと辰韓連盟体の盟主ではあったが、あくまでも連盟体を構成する勢力の一員に過ぎなかった。彼らの関係は、垂直ではなく水平の関係だった。したがって、対外交渉を推進する際にも、斯盧ではなく唯一辰韓という連盟体の名称を公式的に使用した。辰韓に所属する多くの政治勢力は、それぞれ自らのアイデンティティーを示す国名を保有する独立国だが、単独で対外交渉を推進する権限はなかった。各勢力は規模の大小や強弱の差はあるものの、基本的には同等な関係であった。

しかし、斯盧国を中心とした統合運動が終わると、それ以前とは画期的にと変化した。辰韓に所属する政治勢力のほとんどは、斯盧国を頂点とした支配秩序の下で再編された。斯盧は単に辰韓を構成する勢力の一員ではなく、支配集団となったのである。既存の政治勢力は全て独自性を失い、別途の国名を使えなくなった。したがって、辰韓の名は歴史の中に永遠に埋もれ、新羅という新しい王朝が誕生してそれに代わった。

斯盧国を中心に行われた辰韓の統合運動が終わった時期は、奈勿王(356-402年)代といわれている。新羅という国号が最初に使われ始めた時点が奈勿王代であったことがこれを示している。奈勿王代は実際、新羅の始期にあたる。このような事実は、新羅という国号だけでなく最高支配者の呼称が変わった事実をはじめ、いくつかの際立った現象を通じて説明できる。

統合の動きが収束した頃、辰韓を構成する勢力の中には新羅への編入を拒否して離脱する場合もあった。例えば、辰韓12ヶ国を構成する国のひとつ昌寧(チャンニョン)に位置する不斯国は、4世紀半ばに比自佗という国名で、新羅ではなく伽耶勢力の一員として姿を現している。一方、釜山の東萊(トンレ)にあった瀆盧国の場合は、もともと辰韓と激しく競争していた隣り合う弁韓の所属だった。しかし、弁韓が伽耶に転換する頃、瀆盧国はそこから脱して新羅に編入する道を選択した。これは辰韓から新羅への転換が順調に行われず、数々の離合集散の過程があったことを意味する。これによって、斯盧から発展した新羅内部の構造や組織も大きく変わった。このことを明らかに表す事例として、まず最高支配者の称号

を麻立干(マリプカン)と呼び始めたことが挙げられる。

斯盧国の最高支配者はもともと尼師今と呼ばれた。尼師今は齒を指す用語で、「王」という単語の語源である。歳をとるにつれて経験と経綸を積み賢くなるとされ、歳をとった者を年長者として優遇した。齒を意味する尼師今は、まさに年長者という意味である。そのため尼師今は最高支配者の称号ではあっても、強い政治力を有する権力者ではなかった。しかし、麻立干はそうではなかった。

麻立干は、麻立と干の二つの単語が結合した合成語である。干は、高句麗や扶余(ブヨ)の加(カ)のように、族長や首長を指す呼称である。麻立は、「最高」や「首」という意味を指す宗(チョン)、または頭(トゥ)と解釈される。したがって、麻立干は、「最高の首長」、「首の族長」として、「干の中の干」、「王の中の王」という意味である。その下に多数の干がいたため、このように呼ばれた。この時の干には、王京だけでなく地方の有力者までも含まれた。したがって、麻立干はもはや王京と地方を包括する新羅に相応しい称号であった。新羅の成立と同時に首長の称号がこのように変化した事実がこれを示している。

麻立干という王号以外にも、当時の変化を具体的に示すいくつかの明らかな事例がある。その内、特に墓の外形と内部が大きく変わった点が注目される。4世紀半ば頃から慶州盆地一帯には、それ以前とは全く異なる新しい墓が現れ始めた。これらは内部の構造から、積石木槨墳と呼ばれる。

積石木槨墳は、それ以前と同様に木槨を造るが、墓穴と木槨の間、そして上に人の頭の大きさの石を一定の厚みで載せ、再びその上を土で盛り上げて墓を造営する独特な構造である。積石木槨墳の起源を巡っては、北方起源説、独自発生説や利原(イウォン)系と結合したという説などに分かれ、様々な議論があり、まだ定説はない。墓の外見が大きく見えるように土を盛り上げ、出来る限り高く積み上げている。この巨大な外形の墓を、高塚古墳という。高塚古墳は、嶺南地域では概ね4世紀半ば頃に出現するが、地域によって内部の構造に差がみられる。慶州盆地を除外した他の地域では、ほとんどが竪穴式石槨(室)と呼ばれる構造だ。積石木槨墳は一部の例外を除いて、大体が新羅の王京一帯でのみ限定的に作られた。したがって、新羅建国の中核的な支配集団が、自らのアイデンティティーを表すための手段として造営したと解釈されている。他の地域の高塚古墳と比べて、その規模がはるかに大きく密集しているのが特徴だ。これは中央に政治力と経済



写真1 慶州浅泉地区41号積石木槨墳 内部チョコクセム(瓢箪で作った杓子でくみ上げることのできる浅い泉の意味)

力が集中する現象を反映している。そこから王京と地方で政治的上下関係が存在したことを如実に立証する事例ともいえる。

麻立干時代の発足そのものは、現実の政治力にふさわしい経済力を背景にしたものである。麻立干は、自らの威信を誇示するため、墓はもちろん宮殿や神殿などまで雄壮に建築している。自らの服装もまた、現実的な地位に相応しい装飾を施している。日常生活の様相も大きく変化した。支配者の死後に営造された墓の外形だけでなく、そこから出土した副葬品もそのような事情を推測できる糸口である。当時の人々は生と死が全く断絶されたものでなく、継続すると考えていたため、生前の生活をそのまま維持するために多くの物品と一緒に埋葬した。華やかな副葬品は麻立干をはじめとする支配者の現実の暮らしが派手であったことを示している。

新羅の発展と前秦との通交

以上で紹介したいいくつかの事項は、新羅の国号を使用した時期とほぼ同時に起こった現象である。これに関連してもうひとつ注目し値する点は、新羅という国名が初めて国際的舞台に登場した事件である。過去に使われた辰韓という名称は内部的にはもちろん対外との交渉でも使用されなかった。これは辰韓の座を新羅が代替したことを如実に示す事実である。新羅は、4世紀後半に二度も華北の強者として急浮上した前秦と交渉した。

前秦との最初の通交は、377年のことである。この時、奈勿王が前秦に使節を派遣したが、これは高句麗を経由して行われた。よって独自の力で行われたものではない。だが、新羅という名が東アジアの国際舞台で初めて知られたという点で意義深いものである。東アジアにおける新羅の登場は、外交の時代が近づいていることを予告するものであった。新羅は地理的に不利な環境であり、前秦に行くためにはやむを得ず高句麗を通過するようになっていた。よって新羅と前秦との交渉は、新羅が高句麗と交流して緊密な友好関係を結んでいた点が前提とならなければならない。

新羅が二度目に前秦に使節を派遣したのは、それから5年後の382年のことで

ある。この時もやはり、高句麗の助けを得て派遣された。当時、新羅の使者の名は衛頭(ウィドゥ)と呼ばれ、前奏王、符堅と交わした内容が記録に残されている。極めて断片的ではあるが、当時の新羅内部の動向や情勢を理解できる重要な情報が盛り込まれているため、注目に値する。便宜上、会話の内容の一部を簡潔に紹介すると下記の通りである。

符堅：「そちらの話では、海東(ヘドン)は以前とは違うということだが、

これはどういうことであろうか。」

衛頭：「中国でも時代の変革が起こると名号を修正いたします。(海東も)

今と昔で同様なわけではありません。」

以上の二人の会話のやり取りには、新羅がすぐ直前に、ある大きな変動を経験したことを暗示する内容が含まれている。特に、「名号を修正」といった表現は注目される。この実態は明確ではないが、内容からして支配者の新しい称号、麻立干を指しているようである。382年の遣使に先立って377年に前秦と通交したことを考慮するなら、その間変わった新しい名号とは、国号よりは麻立干を意味すると捉える方が適切であろう。この時、新羅の国王の名前を樓寒(ルハン)と呼んだといわれるが、これは麻立干を短くしてそのように表記したものと解釈される。すると、麻立干を初めて使用した時点は、377年から382年の間だと推定できる。衛頭の話から推測すれば、新羅は時代の変革を概ね終えてから、最終的に整備する段階で麻立干という新しい王号を使ったことになる。

麻立干は、尼師今を使用した時期と比べて一層強い政治的支配者の出現を意味する。その後の王位継承はいくつかの限られた血縁集団が順番に受け継ぐのではなく、特定の集団が世襲していた。実のところ、特定の集団とは、後日、姓氏が出現した後、金氏族と名付けられた金氏のことである。

新羅の成立を主導した勢力は金氏族であった。金氏は斯盧国を構成するあらゆる勢力の内、最も遅れて慶州盆地に進入した集団である。そのため、最初は弱小勢力に過ぎなかったが、徐々に基盤を固めついに政治的覇者となった。彼らが最終的な勝者になれた背景には、金氏としては初めて王位についた味鄒(ミチュ)王やその父親の仇道(クド)のような人物の卓越した個人の力量や軍事的成功

があった。一方、彼らが軍事的に活躍して確保した地域から、金銀など新しい財物を産出したこともまた政治的覇者になる際に重要な役割を果たした。以前は、鉄が重要な財物として機能しており、そのため品質の良い鉄鋼や製鉄、製錬技術を保有した集団が、これを経済的基盤にして政治的覇権まで掌握することができた。最初は朴氏が、それに続いて昔氏族が尼師今の地位を確保する上でも、鉄が重要な背景として働いていた。

しかし、鉄を取り扱う高度な技術水準が一定の段階で一般化されると、特別扱いの対象ではなくなった。やがてそれよりも優れた財物が必要になったが、それが金銀であった。金氏族は希少性のある金銀の山地を独自に確保して採掘し、細工する技術を保有したと見られる。これは、金氏が後日、金という文字を姓氏にしたこと、積石木槨墳の副葬品に金製品の量が膨大なこと、その後長らく新羅は金の多い国として広く知られたことなどから簡単に推測できる。金氏族が金銀を取り扱う能力と技術を習得した時期や過程、そして金銀の産地もまだ明らかになっていない。ただ、楽浪と帯方の没落後、そこから離脱した住民の中にいた技術者集団を彼らが掌握したと推定される。また、洛東江の中上流一帯の金泉(クムチョン)と義城(ウィソン)などは元々の地名が金と関連している上、新羅の有力な金の山地として注目された。これらの地域は全て奈勿王の父祖仇道が軍事的活動を通じて掌握した場所である。したがって、これらの地域はその後、金氏族の重要な経済的背景になったと推定される。

金氏族はこのように金銀を経済的な基盤にして、軍事面では先進技術を手に入れ、ついに政治的覇者となった。彼らの先進技術は、ほとんどが高句麗から手に入れたものだった。当時、新羅の周辺地域の中では最も先進的かつ強力であった高句麗と積極的に交渉・交流しようとした集団が、金氏族だったのである。これは、金氏族の成長と発展を推し測る上で、高句麗の影響を切り離せない理由でもある。

国際関係の変化と高句麗への隷属

新羅が出現した頃の東アジアは、激動期だったと言える。中国では北方の遊牧民族、五胡の勢力が中原地域に進出し、統一王朝の晋が崩壊した。その中心勢力は南部に移り、東晋という新しい名の国家を建てた。北方では五胡が交替で新しい王朝を創建しては短命で滅亡し、絶えず乱脈を極めていた。そのため、この時代を五胡十六国時代と言う。

一方、この時期は、韓半島にとっても激動期だった。高句麗が南部を圧迫して楽浪と帯方を消滅させると、漢江の流域とその南方までその影響が及んだ。結果的に馬韓では政治的な統合運動が繰り広げられ百済が出現し、369年には馬韓全体を完全に掌握するに至った。一方、辰韓と競争していた弁韓も統合を推進したが、結局目的を達成するまでには至らず、伽耶という名で分立した状態が続いた。

このように4世紀に入ると、韓半島における支配秩序が新たに展開され、各国は自国に有利となるよう外交戦を活発に繰り広げ、次第に外交が重視されるようになった。新羅は当時比較的弱小国であったため、当分は諸国の動向をうかがう状況にあった。この時期百済が先に洛東江流域まで進出し、伽耶勢力に影響を及ぼした。百済は海を挟んだ倭までを同盟勢力にし、新羅を包囲し圧迫した。さらに、できるだけ新羅とも友好関係を結ぼうと試みた。百済は伽耶・新羅の力を背景に高句麗と優劣を競うという思惑があった。

しかし、新羅は百済の期待通りにはいかず、段々と高句麗の方に傾いた。新羅としては百済よりは高句麗を選択する方が自らに有利だと判断したからである。新羅は高句麗と本格的に交渉し、高句麗を熟知していた。高句麗としても、勢力を伸張する百済を徹底して牽制するために、新羅と手を組もうとした。高句麗は新羅の有力な勢力の中でも、格別に新興の金氏族と緊密な関係を結んだ。高句麗は彼らに現実的に必要な武器、武具、馬具などの先進の文物はもちろん、戦略・戦術などに至るまでを支援した。その見返りとして金銀をはじめとする財物を受け取った。二つの勢力間の利害関係が一致したのである。このような状況が、高句麗を経由した新羅と前秦との交流を可能にしたのである。一方、百済は南中国の東晋と着実に通交し、そこから先進の文物を積極的に受け入れて高句麗に対抗した。

さらに新羅は高句麗と一層緊密な関係を形成しようとした。391年に広開土王

が即位すると、奈勿王は実聖(シルソン)を高句麗に人質として送り、友好関係を固めようとしたのである。奈勿王にとって実聖は相婿であり、最も強力な競争相手でもあった。実聖を人質として派遣したのは、国内で彼の勢力を弱体化させるという二重の効果を狙う意図があった。高句麗は、奈勿王が直接訪問し、自ら臣属関係を表明することを望んでいた。しかし、奈勿王はひとまずその要求を婉曲に断った。おそらく国内の政治的な状況を考慮し、最小限の自尊と自主性を固守したものと見られる。

奈勿王は内外の目的を達成するために、北方の強者高句麗を最大限利用した。これにより、その後の長期にわたり、高句麗の文化が大挙新羅に流入した。これは、4-5世紀の新羅の文化を全般的に検証すれば明確である。400年に広開土王が、伽耶と倭の攻撃を受け危機に瀕した新羅を援助することに成功した点は、高句麗の圧倒的な戦力と新羅への影響を示すものである。

当時、広開土王は、百済に復讐する機会を狙っていた。彼の祖父、故国原(コグクウォン)王(331-371年)が百済の急襲で殺害されたからである。「広開土王碑」から分かるように、百済をいつも百残(ペクチャン)と蔑称し、攻撃の時期を窺っていた。そして、広開土王は復讐のために南進政策を推進し、本格的に平壤(ピョンヤン)へ進軍し、ついに396年、漢江を渡って百済の王城に圧力をかけた。百済の阿莘(アシン)王(392-405年)は、圧力に耐えられなくなるとついに降伏を宣言した。広開土王はその証として、阿莘王を永遠に奴客になると誓わせ、男女の生口1000人と細布1000疋を奉獻させ、さらに、彼の弟をはじめ大臣10人を人質にして戻った。高句麗は百済に対して回復不可能な水準の負担を負わせたのである。

恥辱を受けた百済としては、全ての責任を新羅に転嫁し、伽耶と倭が新羅を攻撃するよう教唆した。元来新羅が高句麗と密着することに不満であった百済は、新羅攻撃の適切な時期を窺っていた。当時百済が直接新羅を攻撃し難かった理由は、396年に被った致命傷から完全に回復できなかった上に、広開土王が平壤まで南下して、高句麗が百済の動向を注視していたからである。399年、百済に教唆された倭と伽耶の連合兵力は、新羅の王城の金城(クムソン)を攻撃して陥落させることに成功した。危機に陥った奈勿王は北方の辺境まで逃亡し、高句麗に救援を求めた。広開土王は400年、歩兵と騎兵5万人を急派し、新羅を支援した。高句麗と新羅の連合兵力は金城奪還に成功し、退去する倭と伽耶の軍勢を

追討した。そして、任那加羅の従拔城(チョンバルソン)まで進撃して屈服させ、最終的に現状を復すことができた。

高句麗の救援が成功すると、新羅側では注目に値するいくつかの変化が起こった。第一に、新羅の寐錦(メグム)、つまり国王が直接高句麗に出向き朝貢するようになった。寐錦は「広開土王碑」をはじめ、様々な資料から確認できる新羅の王号である。これを、尼叱今と見る見解もあるが、麻立干の別の表記と見るのが一般的である。元々奈勿王は、高句麗に直接入朝するという要求を拒んでいた。しかし、寐錦が快く高句麗に出向き臣属を表明するようになった。高句麗に直接行った寐錦をよく奈勿王と見做していたが、碑文の前後関係からすると後から即位した実聖王である可能性が大きい。新羅の王が直接入朝したことは、新羅に対する高句麗の影響力が一層強くなったことを示す。したがって、高句麗の文化もまた大挙流入するようになったのである。

第二に、この事件をきっかけに、高句麗軍が新羅の王都と地方の要地に駐屯したと言う事実である。軍の駐屯は、新羅の寐錦が高句麗に朝貢した際に、両国間で合意した事項であると見られる。すなわち、当時新羅は、高句麗隷属下にあったのである。実際、「広開土王碑」にある、属民と規定された内容とも一致する。高句麗が奈勿王の3人の息子の代わりに、10年間人質にしていた実聖を王として即位させたこと、10年余り後には、再び実聖を追い出して代わりに訥祗(ヌルジ)を王位につかせた事件などは、高句麗が新羅の内政に干渉していたことを十分に予測させるものである。新羅は400年以降長期にわたって高句麗に隷属し、政治的な自律性を留保された状態であった。しかし、これは逆に新羅が高句麗の傘下で、跳躍の基盤を着実に準備できる機会でもあった。

第三に、新羅と伽耶の境界が洛東江で区切られたことだ。それ以前は、昌寧(チャンニョン)の比自休が伽耶の七つの国のひとつであったことから分かるように、洛東江の東部にも伽耶に所属する政治的勢力が存在した。それまでは洛東江が新羅と伽耶の国境線として機能したわけではなかったのである。だが、高句麗の新羅救援の後には、洛東江は二つの政治勢力間の国境線として変化した。

総じて、高句麗による新羅の救援と軍隊の駐屯は、一定期間新羅の発展に役立つものであった。しかし、高句麗の過度な干渉は、逆に新羅の発展を束縛する要因となっていった。その結果、新羅は徐々に反発し、自立の道を模索するように



写真2 広開土王碑

なる。高句麗の人質となっていた訥祗王の弟ト好(ポクホ)の救出は、これを象徴する事件であった。

羅済同盟と新羅自立化の模索

400年に広開土王の援軍が洛東江の流域まで南征して伽耶と倭の連合勢力を退けると、新羅は高句麗に隸属し、強い影響力の下に置かれた。高句麗は目的を達成するとほとんどの軍をすぐに撤収させたが、一部は新羅の王都をはじめとする要地に残した。軍を駐屯させた高句麗は新羅の内政に干渉すると同時に、かなりの経済的な見返りを求めた。最初は新羅もその要求を受け入れたが、次第に反発するようになった。この背景には、高句麗が新羅内部の葛藤を巧妙に利用して、支配をより強化しようとしたことも挙げられる。新羅内部の葛藤とは、実聖王と、奈勿王の長男訥祗の間で起こった争いである。二人は五親等で、義父と婿の関係でもあった。実聖は高句麗の力を背景に訥祗を除去しようとしたが失敗し、結局は訥祗が高句麗の協力を得て即位した。

実聖王と同様に、高句麗の助力を得た訥祗王も、最初は既存の関係をそのまま維持しようとした。しかし、一定の時間が過ぎ、それが新羅の発展の妨げになると判断すると、徐々に高句麗から離反し、自立への道を模索した。訥祗王は即位するや、人質として数十年も外国で生活していた二人の弟の帰国させる課題に取り組んだ。当時は正常な外交ルートから帰還させるのは不可能であったので、訥祗は、特別な方法を用いてこれを実践した。王弟の帰国を推進するために選ばれた人物が、朴堤上(パク・ジェサン)であった。彼の出身地については、王京(ワンギョ)、梁山(ヤンサン)とみる議論があったが、近年は蔚山(ウルサン)とする主張が有力視されている。朴堤上は高句麗に先に赴き、ト好を助け、すぐに倭に向かい末斯欣(ミサフン)を救出した。しかし、朴堤上自身は倭に捕らえられ死亡した。

注目すべきは、新羅が高句麗の隸属下にあったにもかかわらず、ト好を新羅に連れてくるために正常な外交ルートを踏まえなかった事実である。これは新羅と高句麗の間に何らかの問題が内在していたことを意味する。当時実権を握っていたのは高句麗なので、新羅も当初は正常なルートで処理しようとしたはずであ

る。だが、正常なルートに問題があったため、異例の方法を選択したのであろう。これは高句麗と新羅の関係に多くの問題を内包していたことを示唆している。

この時期は高句麗内部でも、実聖を支持する立場と訥祗を支持する立場に分かれ、互いに対立している状況だった。正常な外交ルートに反対した方は、訥祗の即位に不満を抱えていた。訥祗王が、朴堤上を動員して異例の救出作戦を推進したのもこのためである。救出に成功できたのは、高句麗の内部に訥祗を支援する勢力がいたからだ。この事件を通じて訥祗王は、結局は自立の必要性を強く感じたはずである。高句麗から逃れられる唯一の方策は、徐々に百済の方に接近することだった。折よく、427年に高句麗が平壤城に都を移した。これを大きな危機と捉えた百済が、いち早く協力を求めて新羅に接近した。共同で立ち向かうことを願望していた新羅もこれを受け入れ、ひとまず433年に羅済同盟を締結するに至った。

このように、発足したばかりの弱小国新羅が初の国際舞台で経験したことは、その後新羅が発展するうえで重要な土台となった。弱小国が生き残るための方法は、大国を積極的に活用することである。6世紀半ばの真興(チンフン)王の代に、新羅が高句麗と百済を同時に敵に回す一大決断を敢行し、成功を収めたのは、この時期の試練と経験が蓄積された結果と看做することができるかもしれない。

高句麗との関係の破綻と変化

羅済同盟が成立したとはいえ、新羅は反高句麗の基調をすぐさま露骨に表しうる立場にあったわけではない。新羅は一定期間、巧妙に二重的な外交を堅持しつつ、状況を窺っていた。すなわち以前のように高句麗とも友好関係を維持しながら、自主化を宣言する機会を狙っていたのである。百済とは友好的関係を緊密に結びながらも、もう一方では、予期し得ない高句麗の圧迫に対応する、両面的な方策を駆使した。新羅が進むべき基本的な方向性は、親百済・反高句麗路線へとなったのである。

新羅と高句麗間の軋轢は次第に深刻なものとなっていった。直接的な摩擦と対立は、中央ではなく辺境地域から生まれた。450年(訥祗王34年)に高句麗の辺将(ピョンジャン)が悉直(シルジク：今の三陟(サムチョク))の野原に狩りに出かけ、

新羅の何瑟羅(ハスラ：今の江陵(カンヌン))城主の三直(サムジク)に殺される事件が発生した。辺将や城主の具体的な実態は曖昧だが、中央から派遣された地方官または軍官ではなく、両方とも該当地域出身の有力者であったと見られる。各領域内の有力者同士の戦いであった。被害を受けた高句麗は抗議する一方、報復として新羅の辺境に対して直接軍事的な行動を強行した。これに対し新羅がすぐに謝罪すると、この事件は一旦収束した。しかし、その後両国間の軍事的緊張は次第に高まり、454年(訥祗王38年)には、高句麗が突然新羅北辺を攻撃する事件が起きた。その翌年に高句麗が百済を攻撃すると、新羅は百済を支援すべく派兵した。このように新羅は露骨に軍事的な対立を試みることで、高句麗と決別していった。

だが、『日本書紀』には、464年以前のある時点から、高句麗の軍隊100人余りが新羅の王都に駐屯していたという記録がある。この軍隊がいつから新羅の王都に駐屯したのかは明確ではない。400年に高句麗の南征が成功すると主力部隊は撤収したが、一部の兵士は残留していた。兵士の数は状況により変動したが、『日本書紀』に書かれた上記の記録の時期も、依然として高句麗兵士は新羅に駐屯していた可能性がある。そうでなければ、訥祗王が即位してから一旦撤収し、ある他の事件をきっかけに再び派遣された可能性もある。ただし、464年の時点では駐屯した兵士はごく少数であったので、外敵が攻撃した際に、高句麗が新羅を直接助けるために駐屯していたとは考えがたい。おそらく軍事的顧問などの名分を掲げて、むしろ新羅内部の動向を監視していたようにみえる。こうした側面を考慮すれば、葛藤が最も激化した455年の軍事衝突以降、両国が一時的に妥協して生まれた高句麗兵の駐屯であった可能性もある。また『三国史記』によると、すぐ直前の数年にわたり、倭が新羅の辺境に対し大規模な侵犯を行った事例があるため、それに備えて一時的に高句麗に助けを求めているのかも知れない。いかにせよ、それ以前から新羅の王都に高句麗兵が駐屯していたのは確実である。これは両国の関係が紆余曲折を経ても、まだ完全に破綻していたわけではなかったことを意味する。

ところが、464年に、新羅が王都に駐屯していた高句麗兵100人余りを急襲して皆殺しにする事件が発生した。『日本書紀』にはこの内容が説話的な形式で記述されている。高句麗の100人余りの駐屯兵のうち一人が休暇を取り母国に戻る時、道案内をしていた新羅人の馬飼に対し、遠からず自分たちが新羅を攻撃す

るという情報を漏らした。馬飼は途中でこっそり新羅に戻り、休暇を取った高句麗の兵士から聞いた話を伝えた。新羅は先手を打って、駐屯していた高句麗兵を皆殺しにした。このとき生き残った兵士が脱出して、このことを本国に知らせた。これによって両国は遂に敵対するに至った。

説話的な内容も混在するが、話の本質まで説話的要素と断定する必要はなく、話の多くは実体を反映したものとみられる。『三国史記』から確認できる当時の状況がその実情を傍証している。すなわち新羅はその後、高句麗の攻撃に備え対策を積極的に推進した。上記の内容をそのまま受け入れるならば、紆余曲折を経験しながらも維持してきた新羅と高句麗の関係は、464年の事件を機に完全に破綻したのである。新羅は高句麗が攻撃してくると予測し、様々な対策を講じていた。これをきっかけに新羅は支配体制を全面的に再建し、その結果新しい支配秩序を構築できるようになった。

2

部体制とその
運営

六部の成立

4世紀半ば、新羅が辰韓の分立した政治勢力の統合体として成立したとしても、支配秩序がすぐさまそれに合わせて構築されたわけではない。新しい支配体制が定着するまでには相当の時間がかかっていた。未だに既存の秩序が強く残存していたからである。新羅の領域に編入された地域も、独立性は失ったものの、まだ既存の基盤が完全に解体されず、一定部分は維持していた。したがって、名実共に中央集権の支配体制を整えるには、数々の努力と過程を経る必要があった。

斯盧国の内部は、元来複数の邑落で構成される構造を有する。その中で、政治的中枢として機能する邑落は、特に国邑と呼んだ。このような内部の構造は、新羅の成立とともに根本的に変わった。辰韓社会が統合され斯盧国も内部結束の強化が推進され、同時に邑落の再編作業も行われたからである。このように、邑落間の再編の過程を経て新しく成立した組織体が部である。

部という名称は、後日のある時点で、新生国新羅に比べ先進国として政治文化的に大きな影響を与えた高句麗を模範として付けられた。だが、斯盧国の諸邑落が、新羅の成立と同時にそのまま転換したわけではなかった。斯盧国の主導権が

昔氏から金氏族団へと移動したのもこの転換期に該当する。部とは、いくつかの邑落が全面的に再編された結果として新たに登場したものであった。部には人的構成や物質的な土台が既存の邑落より一段と大きくなったものもあるが、一方で邑落が他の勢力に吸収され消滅することもあった。複数の邑落が入り混じってひとつの部として再編される場合もあったため、斯盧国を構成する既存の邑落数と、新しく出現した部の数が必ずしも一致するわけではなかった。また、再編の過程を経たため、部は邑落とは根本的に別にする性質の組織体であった。邑落に比べて部は内部の階級文化が一層進展したため、それだけ共同体性は弱まった。

部の成立期を、尼師今期と見る見解と麻立干期と見る見解がある。再編を考慮すると、後者の方が妥当なものと受け入れられている。邑落が部に変わったこと自体が、その直前とは異なり、ある内部構造の変化を伴ったことを意味するからである。新羅の出現は、まさしく邑落を代替した部の成立であるといえる。

新羅の中核的な支配者集団から部が出現すると、すぐにそのような名称が付けられたわけではない。そうした集団が存在し、相当な時間を経てようやく部と呼ばれるようになった。6世紀初の金石文には、同一集団に対して部を付したり省略したりしており、これを傍証する。すなわちその頃まで部という単位名が、まだ完全に根付いていなかったということを意味する。新羅で部という用語が受け入れられたのは、5世紀後半だと予想される。部という用語が採択されたのは、その集団が高句麗の五部と同じように機能した側面があったからである。

新羅の部は、外形は高句麗を真似て受け入れられたが、両者は規模や構造及び運営の面で多くの相違が見られる。高句麗の五部はそれぞれ那(ナ)または那国と呼ばれる、ひとつの邑落国家の規模だ。例えば、国王を輩出した卦婁(ケル)部は、もともとひとつの独立国だった。したがって、個別の那(部)は複数の諸邑落で構成されていた。これと比較すると、新羅で最終的に完成した六つの部は、全て合わせてもせいぜい斯盧国、またはそれより若干大きいくらいの規模である。新羅の六部を高句麗の五部と比べると、新羅の六部全体が高句麗の一つの部ほどに過ぎなかった。これは、その後の両国の支配構造や政治の運営においても差異を生ずる根本的な要因となっていた。

新羅の部は、タク(喙または梁)、サタク(沙喙または沙梁)、モタク(牟喙または牟梁)、ポンピ(本彼または本波)、スブピ(習比または斯彼)、ハンキ(漢祗または漢

只)の六部にまとまる。成立当初から六部であったという見解もある。それとは別に近年最初は三部だったが、部間の激しい競争で規模が次第に大きくなり、最も有力な部が再度三つまたは二つに分化して、ついに六つの邑落がそのまま六部に变化したという見解も出されている。前者は斯盧国を構成した六村と呼ばれる六つの邑落がそのまま六部に変わったという認識が背景にある。しかし、この見解では六村と六部の違いや過程などについては言及していない。ある意味、斯盧国が新羅に転換する過程で、外形はもちろん内部的にも統合運動による再編はほとんどなかったと理解した結果生まれた説である。新羅という新国家が出現したのに、内部で何の変動もなかったのかは懐疑的である。そのため、六つの邑落がそのまま六部に移行したとみる解釈は、多くの問題を抱えている。

一方、後者は前者の疑問から提起された主張である。特に、部が持つ運動性と自律性を基本的な背景と認識して導き出されたのが特徴である。部はそれ自体が政治的な独自性を強く有していただけに、全て均等ではなかった。新羅へと発展する過程で斯盧国の邑落が三つに統合され部に転換したが、この三つの部はそれぞれ規模が異なり、権限と構造が同等ではなかった。部ごと別に対外軍事活動を競って行い、その結果手に入れた戦利品をそれぞれに配分することで、その規模や構造の差はさらに開いた。このような傾向は、時間の流れと共により強固になった。ついには喙のような有力で優勢な部が独自で分化し、六部が成立したという主張だ。

前者は以前から長い間維持されてきた主張であり、後者は新しい金石文の資料に基づく新説である。まだその結果が完全にまとまった状態ではないが、今後、部の重要性を考慮してその成立の過程や性質及び機能についてより踏み込んだ議論が必要であることを示している。

部体制と会議体

六部は、よく支配者共同体と呼ばれている。部は斯盧国内部の勝利者が最終的に結集してできた組織体であったため、これは適切な理解といえよう。そこには斯盧の支配者だけでなく、そこに服属して中央に編入された地方の有力者も含

まれていた。斯盧の内部で再編を通した結果成立したのが部であったため、その過程で既存の体制は自然と変わったのである。

部の出現と同時に、支配層再編の手段として設けられたのが干制だ。部を構成した有力者に干(そこから分化した干群も含む)という称号を画一的に付与した。王京の有力者の場合は、勢力基盤の大小や優越によって既に序列化がある程度進んでいたため、一律的に干という呼称が与えられたわけではない。干も序列によって若干の分化が進んだ。後日、王京人に対して支給した官位、京位(キョンイ)の母体がまさにこれである。

干制の導入は、すなわち支配者共同体の内部で一定した再編の作業が行われたことを意味する。これは新しく成立した支配体制がそれ以前とは根本的に変わっていることを示すものであり、部の成立と共に起こった大きな変化だ。干で編成された有力な支配勢力を代表する首長が、「最高の干」、「首の干」としての麻立干だった。新羅が成立し、今や斯盧国は王都として機能する土台を築いたのである。もちろん斯盧国という認識から完全に脱し、それが王都として確固たる機能を有するまでにはその後かなりの時間が必要ではあったが、とりあえず再編に手がつけられたことになる。そして王都の成立は、その相手となる地方の存在を想定させるものでもある。

干という呼称は、王京六部の有力者だけでなく、地方の有力者にも同時に与えられた。新羅の地方に編入された既存の独立国の有力者の基盤が完全に解体されていなかったため、まだ彼らを完全に制圧するには限界があったからである。そのため、彼らの基盤をある程度認める方法で、干という称号を付与して待遇したのである。これが後に、地方民を対象にした外位という官位の発端である。

こうして始まった当時の干は、中央と地方の間に相違がなかったのが大きな特徴だ。この点は、6世紀に王京人には京位を、地方の有力者には外位を与えることで、身分体系を別途に運営した点とは対照的である。その後、地方に対する支配を強化することで、地方民の序列を大きく弱体化させていった。

このように麻立干初期は、王京人と比べて地方の者が大きく差別を受けることはなかった。これは辰韓の時期の秩序が、ある程度持続されていたことを意味する。まだ中央集権化が推進されなかったことによる当然の結果である。しかし、その後地方への支配力が強まると、地方の有力者の基盤が徐々に侵奪され、大き

く差別を受けるようになった。

当時、麻立干の地位と序列そのものは超越的な存在ではなかった。すなわち、麻立干は新羅の国王だが、基本的には喙という部の長であり、六部の長の中で序列上は一番上だが、絶対的な権力者ではなかった。新羅国家の重要なことは各部の長をはじめ、彼らに匹敵する有力者が参加する会議体で議論された。六部はそれぞれ優劣の度合いに差があったので、会議体の参加者数も部ごとに異なった。有力な部の場合は部長を始め多数が、そうでない部は少数だけが参加した。時間の経過とともにその格差はますます広がった。会議体が干と呼ばれる支配層で構成されたため、高句麗や扶余の諸加(チェガ)会議の事例を見習って干群(カンゲン)会議、または諸干(チェガン)会議といった。麻立干はその干群会議の主催者である。

このように、部の出身で構成される会議体中心の支配秩序を、一般的に部体制という。部体制で最も重視されたのは、会議体を運営することである。新羅国家の全ての重要な事項は、会議を通じて決められたからである。部体制は、それ以前の共同体制から完全に抜け出せなかったことを示している。

干群会議に参加できる資格が王京人だけに限られていたわけではない。干という称号を持つ地方の有力者にも、少なくとも形式的には同じ資格が付与されていた。彼らも最初は中央の政治に一定部分関与できた。もちろん距離上の制約があったため全ての会議にいつも参加したわけではない。ただ、特に紛争へ発展する可能性のある外交上の問題や、軍事力動員を伴う戦争などの重要な事案は、彼らも会議に参加して決定された。これは決定した事項が、地方民にも大きく影響を及ぼすからである。この点は、訥祗王が即位してから、高句麗と倭の人質になっていた二人の弟を救出する策を模索した際、当時最も辺境地域出身の有力者が参加した会議で朴堤上を適任者として選んだ事実からも首肯できる。このように、部体制の初期段階で干が付与された地方の有力者にも、新羅の中央政治に参加できる資格が与えられた点は、辰韓における運営の原理がまだ完全に消滅していなかったことを示す。

部体制の段階では、何がしかの業務を専門的に担当する官府は別途置かれず、当然官職も存在しなかった。しかし、部別に初期形式の官僚組織は存在した。これは実務を担当して内部の序列を示す用途であり、官職や官等を兼ねた性

質を有する。ただ、全ての部が同等な関係ではなかった。六部の内、特に麻立干を輩出した喙部や葛文(カルムン)王を部長とする沙啄部のような部は支配集団層が厚く、干と称される有力者が多かった。当然、彼らを補佐する実務者も比較的多かった。このように麻立干の時期にはまだ国王を頂点とする一元的な官僚体制は整わず、部別に多元的な形の初期の官僚組織であったのが特徴だ。部に限られた事案は、部ごとに独自で決定して実行に移された。

以上のように麻立干の時期の支配層は、ある事案を決定するグループと、それを執行する二つのグループに役割が分かれていた。例えば、大きく分けると干層は前者、奈麻(ナマ)層などは後者に属する。どんな場合でも共同で決定し、執行する構造だ。これが部体制の運営上のもうひとつの特徴といえる。これは、まだ特定の集団が排他的、優越的な地位を完全に確立できず、共同で対処する共同体の性質が強く残っていたことに起因する。

全ての業務が部を中心に運営されたため、麻立干の地位も後日の国王に比べるとそれほど高くなかった。そのため、他の部から常に牽制されていた。特に、喙部に近い規模の地位を有していた沙啄部の長は、麻立干の強力な競争相手であった。これは沙啄部の長を、特に葛文王と呼んだことから分かる。ここから、当時は麻立干と葛文王の二元体制で運営されたという主張も提起されている。麻立干の時期には、葛文王という称号は沙啄部の長をはじめ複数の人々がいた。王妃の父親や王の弟も葛文王と呼ばれた。ただ、彼らがほとんど自分の当代に限られた一回性の象徴的な呼称を有していたのだが、沙啄部の葛文王だけは唯一地位を世襲しており、実力者であったといえる。葛文王という独特な制度が運営されたのは、当時行われ始めた家系分化の現象とも軌を一にする。大きな範囲での王族内部において、王位継承権を排他的に保有した王家や王室の概念が少しずつ芽生えていたといえよう。

部体制の運営とその限界

麻立干の時期に、政治を運営する上で中心的な役割を担ったのは六部である。六部はそれぞれ強い独自性を有し、新羅国家全般の方向性を決定する中核

的な機能を果たした。六部の部長を始め、各部の有力者で構成された会議体で、国の重大な事柄が決まり推進された。

ところが、六部全てが対等ではなかった。人口の構成や規模の面で差があり、大きく力のある優勢な部とそうでない弱小の部という二つのグループに分かれていた。六部の内、喙部と沙啄部の二部が前者で、残りの四部は内部的に若干の優越の差はあったものの後者に属した。彼らの格差は、時が経つにつれて更に大きくなった。そのような側面で、部体制というのは、永続的には維持し難い、一時的な性質のものであるといえる。力のある優勢な二部を中心に政治力が更に結集されると、残りの四部は自然と弱体化した。5世紀頃、部体制は遠からず崩れる運命に近づいていた。

部体制を長らく維持できなかったもうひとつの要因は、内部の構成にもあった。六部はそれぞれ血縁的に基盤が異なる様々な小集団から構成されていた。このような小集団を部内部と呼ぶ見解もある。表面上では六部それぞれが、まるでひとつの血縁集団として独自性を有した強い共同体のように見えるが、実際は系統が異なり政治的な立場や意向も違ういくつかの小規模集団が結束してできた組織体であった。ひとつの拠点となりうる邑落を中心に、いくつかの小集団が結合したからである。小規模の集団は主流と非主流に分かれ、その間には大きな優越の偏差が存在した。小規模集団も、それぞれ互いに激しく競争していた。婆娑(パサ)王の代、その息子祗摩(チマ)の嫁をめとる際の、漢祗部における二つの政治勢力間の葛藤と対立はそのような実情を如実に表している。

つまり、部は成立当初から崩れやすい構造の組織体だったのである。各部の内部はある程度分化した階級に基づいていた。大きくは同じ血族集団のように見えるが、内部は多くの家系から構成されていた。家系は政治的に相互激しく競争する関係を有していた。奈勿王の後継者を巡り直系卑属と実聖王の間で起こった争いは、こうした事情の一端を物語る。彼らは同じ金氏族で、互いに近い血縁関係だった。家系の分化が進むと、同じ血縁であっても政治的な意図が異なる場合は、対立・葛藤を惹起することを明示している。

ひとつの部を構成するいくつかの小規模な血縁集団の家系が分化している姿は、その内部の婚姻からも分かる。麻立干の始期前後の婚姻関係からは、大きく二つの流れが存在したように見える。ひとつは全く違う血縁集団と行う婚姻、

いわゆる族外婚で、もうひとつは同じ集団内で行う婚姻である。麻立干以前の時期からこのような二つの傾向は明らかな対比をなす。おそらく同じ血縁集団の中でも違う形で婚姻をしていたことには、それなりの利害関係と名分が内在していたはずである。同じ集団内で婚姻が一定した傾向を有して持続的に行われていたとしたら、それ自体が変え難いひとつの慣行となっていたことを意味する。最終的には、それが相互排他的な関係を形成し、政治的な志向性まで持つものといえる。後に成立した骨品体制の下での婚姻とは、まさにそのような属性から胚胎されたのである。麻立干の時期における国王の婚姻関係を通じて、このような事情を明確に確認できる。麻立干の時期から始まった奈勿王代を基準にして、その前後関係から実情の概略を察することができる。

金氏族が政治的な勢力の確固たる基盤を構築できたのは、実は奈勿王の祖父仇道の代である。彼には味鄒と末仇(マルグ)の二人の息子以外にも、大西知(テソジ)という息子がいた。大西知は実聖王の父である。しかし、『三国史記』では、大西知の出身を金氏の始祖閼智の子孫であると簡単に言及しているだけで、具体的な家系を提示していない。それとは異なり、『三国遺事』では味鄒王の弟と明記している。実聖王が奈勿王によって人質となり高句麗に送られてから10年間も留まったこと、高句麗の助けを受けてではあるが帰国後ついに奈勿王の後を継いで王位についたことなど、諸般の状況を考慮すると、奈勿王とは血縁がそれほど薄くなかったことは確かである。したがって、やはり四親等と記録した後者の方が、妥当性であると思われる。すると仇道は奈勿王と同じく、実聖王にとっても祖父となる。仇道には尼師今についた味鄒と、奈勿の父末仇、そして実聖の父大西知の3人の息子がいたのである。

兄弟の味鄒と大西知は昔氏と婚姻した反面、末仇だけは格別に金氏の休礼(ヒュレ)夫人と婚姻した。休礼が末仇とどのような血縁関係だったかは明確でないが、同じ金氏族内部での婚姻であったことは確かだ。味鄒には息子がいなかったが、娘は2人いた。2人の娘の内一人は奈勿と、もう一人は実聖と婚姻した。この4人は全ていとこなので酷い近親婚だ。金氏族内部の近親婚の慣行は、末仇から始まった。

奈勿王の長男訥祗は政治的に競争関係にあった実聖王の娘と婚姻したが、二人は六親等だった。訥祗の息子の慈悲(チャビ)は舒弗郎(ソブルハン)という官

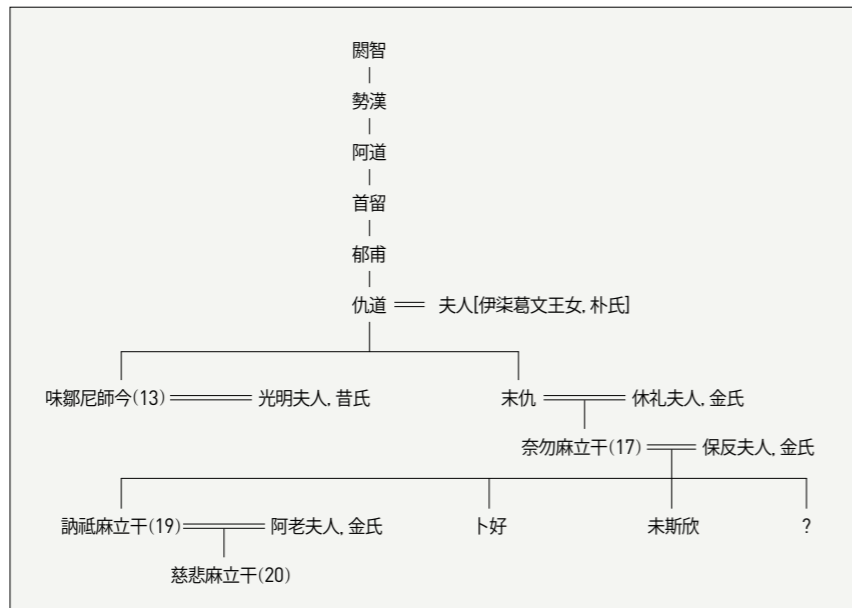


図1 奈勿王中心の家系図

位の末斯欣(ミサフン)の娘と婚姻した。末斯欣は奈勿王の三男で訥祗の弟なので、慈悲はいとこと婚姻したのだ。慈悲の息子の炤知(ソジ)は、伊伐滄(イボルチャン)という官位の乃宿(ネスク)の娘、善兮(ソンイエ)を王妃として迎えた。乃宿は後日、真興王の代に「国史」を編纂した居柒夫(コチルブ)の祖父仍宿(インスク)と同一人物である。すると善兮は居柒夫の父の勿力(ムルリョク)とは兄弟の関係だ。居柒夫が奈勿王の五世孫なので、乃宿(仍宿)は三世孫で曾孫に当たる。炤知も奈勿の三世孫なので、乃宿とは、すなわち兄弟と同じ世数であり、遠くても六親等以内の関係だ。したがって、炤知と善兮の婚姻も相当の近親婚と言える。

以上のように見ると、奈勿王の直系卑属で麻立干についた人は、ほぼ例外なく八親等以内と近親婚をしたことが分かる。麻立干の時期の国王には、近親婚が一種の原則のように固着した状態だった。このような近親間の婚姻は、その後の中古の前半期とは大変対照的な様相である。炤知王と政治的に対決をして王位を継いだ智證(チズン)王はもちろん、その息子の法興(ボプフン)王、そしてその後継に即位した真興王は全て金氏ではなく他の氏族の朴氏と婚姻した。3代にかけて朴氏と婚姻をしたことは、当時その家系ではひとつの慣例のように定着していた

ことを意味する。炤知王は真興王と近い血縁関係ではあったが、既に二つの家系は婚姻の様相が異なっていた。これは互いに政治的な立場と意図が異なっていたことを傍証するものであり、直系と傍系のように家系の分化がある程度は行われていたことを表す事例だ。

このような傾向は、奈勿王の以前から表れた。奈勿王の祖父仇道は朴氏と婚姻し、二人のおじの味鄒王と大西知は全て昔氏と婚姻した。当時はいわゆる族外婚が主流の傾向にあった。反面、彼の父末仇だけは同じ金氏と婚姻し、それがその後もずっと続いた。大西知の息子実聖も奈勿と同じく味鄒王の娘と四親等間の近親婚をした。

すると、麻立干の時期を前後した支配集団の婚姻には、大きく近親婚と族外婚の二つの流れがあったことが確認できる。もともとは後者が一般的な慣行だった。これは他の血縁集団との婚姻を自分の勢力基盤を維持する手段とする傾向だ。反面、近親婚は末仇以降の麻立干の時期、国王中心の支配勢力において主流の婚姻として定着した。金氏族の内、特に麻立干の地位を受け継いだ家系では、激しい近親婚が行われた。奈勿王の直系が近親婚を行ったのは、当時としては一般的な慣行ではなく、むしろ特殊な事情によるものだった。近親婚は他の集団と婚姻をしなくても独自の基盤を十分頑丈に整えていたがために可能なことだった。言い換えると、これは麻立干の時期を開いた金氏族の主流が、それだけ政治的に強い基盤を持った正統だと自負したことを意味する。これに対し、同じ金氏族内でも他の血縁集団との族外婚を追求した家系が別途存在していた。それはほとんど傍系だった。彼らは直系と内部的に競争し、優位を保つためには他の血縁集団と連携する必要があったため族外婚を追求したのである。

麻立干の時期における支配体制の不安定性、急速に行われた家系の分化などは、内外の環境の変化によっては、ともすると秩序を根こそぎ揺るがす要素をはらんでいた。その直接的なきっかけは、高句麗との関係が破綻したことに起因する地方の再編を背景にしている。

3

地方支配の 始まりと方式の変化

地方の再編

新羅は斯盧国を拠点に広い領域を保有した国家だった。新羅が成立すると、斯盧地域はおのずと王京として機能し始めた。斯盧は新羅の政治的な中核勢力が位置した場所で、徐羅伐(ソラボル)、徐伐(ソボル)と呼ばれた。今日の首都を意味するソウルという単語の語源である。

王都の成立は、それと相対する地方の存在を意味する。新羅は王都と共に地方という二つの軸を基に構成された国家だ。当時、新羅の地方は、過去の辰韓の頃の独立的な邑落国家が基本の単位だった。それらは新羅の領域に編入され、次第に独立性を失った。相互同等な関係から、支配と被支配の関係に変わり、色々な形の制約が加えられた。長い間アイデンティティーを表す用途として機能した国名は単純な地域名に変わったり、全く違う新しい地名に代わった。国名がそのまま地名となった場合は、既存の支配構造が完全に解体されてはいないことを意味する。地方の有力者の支配権が一部は取り上げられたが、その地位は相当そのまま継がれた。反面、新しい地名に代わったということは、主な基盤が解体される過程があったことを意味する。これは、在地の有力者が中央政府に反旗を翻

したり、非協力的な場合の措置だった。この時は新羅の支配を受け入れる新しい支配勢力が代わりに前面に立てられた。このような過程を経て、新羅の全体的な領域は着実に再編された。

新羅の中央政府は、領域を編制する上で二つの手段を動員した。ひとつは村制で、もうひとつは前述した干制だ。村とは、もともと3世紀の中国における三国の戦乱期に、自衛的な目的で積み上げた防衛壁が囲む地域を指すことばからできた用語である。高句麗ではこれを受け入れ、色々な集落で構成された村落を指すときに使用した。新羅では高句麗を通じて村制を受け入れたが、最初は地方の中でも特定の政治的な中心拠点を指した。高句麗の村が地方行政の基礎単位の城を構成する下位の単位であったなら、新羅では高句麗の城のような大きな規模を対象にした。概ね、既存の邑落国家の基礎単位、邑落の水準だ。それは、6世紀以降の村が、地方官が派遣される行政の基本的な単位として設定されたことから推測できる。その後、村は徐々にそれを構成する下位の集落を指す用途にまで広がった。これによって新羅の村は、受け入れられた初期には拠点だけを指していたが、いつの間に下位の単位までも指す二重的な用法で使われた。しかし、村制が全体の地域において同時に施行されたわけではなく、とりあえず編制が可能な地域から先に設定し、徐々にその対象を広げた。村に設定された単位の在地の有力者には、干という新しい呼称を付与した。

先にも言及したように、干は王京の有力者だけでなく地方の有力者にも与えられる呼称である。地方の有力者の中でも、村へ編制される過程を経た場所の有力者に限って支配権を公認したのである。始まった当初は、干を所持した地方の有力者は、王京の有力者と同等の待遇を受けていたことが分かる。麻立干は地方の有力者に干という称号を付与し、その地位を保障する現実的な物証として衣服やそれに付属する一切の装身具など、いわゆる威信財を支給した。地方の有力者のものと推測される各地域の大きな墓からは、総じて頭にかぶる冠や冠帽を始め、耳飾り、首飾りなどの装身具類、帯や軍事権を象徴する多様な刀剣類などが出土している。この副葬品は中央の積石木槨墓から出土したものとそれほど差がない。外形的な規模や質量の面において王京の最高レベルのものには及ばないが、すぐ次の等級である。これは地方の有力者が小数の最高位王族級ではなくても、相当の待遇を受ける存在であったことを証明する物証といえる。

ところが、各地方の同じような大きさの墓からは、類似した様相と画一性が確認できる。これは、干という称号を付与された有力者に対し、中央政府からその地位を保証する威信財もほぼ共通したものが与えられたことを意味する。もちろん、地方勢力の規模や政治的な重要度及び有力者の忠誠度などによって若干の差はあったと思われる。これによって、同じく干と呼ばれていても、次第に新しい位階が作られると多様な形で分化していった。これは、後日成立した外位制の初期の姿を反映している。

間接支配方式

地方の有力者には、村をひとつの基準単位として干が付与されたので、彼らはほとんど「誰々の村干」という形で呼ばれた。村干と称された有力者は、中央政府に対して忠誠を誓い、その反対給付として当該地域に対する支配権が付与された。過去の独立した邑落国家の時代における伝統的な権威とは違い、今や中央政府の現実的な威勢を借りて、地方民に対し支配権を行使した。彼らの力が直接及ぶ範囲は当該の村に限らず、伝統的にそれに付随していた一定の範囲までも含まれた。つまり、村は事実上、服従以前の村落国家の国邑に当たる拠点の役割をした。これによって、残りの既存の邑落はおのずと村干の支配下に置かれた。村干は、中央から承認を得た村を基盤にしてその他の邑落にまで影響力を及ぼしたので、中央政府は村干を媒介に支配力を行使することができた。新羅が地方の有力者に、邑落国家時代に行っていた権限を認めたのは、両者間の一定の妥協による産物だった。

新羅の支配体制が整うと、村に編制され干という称号を受ける対象は一層増加する傾向にあった。言い換えると、村干と呼ばれる有力者の数が全般的に多くなったことを意味する。中央政府では村干を増やして、互いに忠誠を競わせる形で徐々に村落の深いところまで浸透しようとした。

各村は、村干をトップにして一定の組織体制を整えた。村政は、様々な在地勢力が参加した組織体を通じて運営された。後日、村司の母体となった組織である。中央と同じように在地の有力者が参加した会議体で、共同で議論された。彼

らの組織は高句麗の事例からして、一定の地位までは名簿を中央に報告して承認を得ていたようである。

このように、村落内部の組織を最大限活用して地方を統治した理由は、中央政府の支配体制が地方官を派遣するにはまだ未熟であったからである。地方の有力者は、たとえ独立性を失うことはあっても、政治的基盤まで完全に失った状態ではなかった。中央政府からかなりの自立性を保障される代わりに、一定量の貢納を義務的に負担した。このように王命を代行する地方官を直接派遣せず、地方の有力者中心の貢納を媒介にして行う地方統治を間接支配という。間接支配とは、まだ中央集権が確固として確立しなかったことからきた、過渡的な地方支配方式であった。

間接支配とはいっても、中央政府からの統制と管理が全ての地域に対して一律的に行われたのではない。在地勢力の地位と存在がそれぞれ異なっていたからである。服属儀礼的な貢納を捧げるだけでほぼ完全な自治が認められる場合、もともとの在地勢力が他の地域に移り全面的な再編を経て全く違う勢力が埋め込まれる場合、既存の有力者がほぼそのまま基盤を保つ場合などに分けられる。

間接支配の段階では、中央政府が地方の有力者の役割と機能にそれだけ頼っていた。だからといって、地方の有力者が勝手に政治力を行使できるよう放置した状態だったのではない。新羅の中央政府は、それなりの多様な監督と監視体系を整えていた。軍事的な要所に中央軍を派遣して統制したり、随時監視官を派遣して観察することも、時には国王が直接巡狩して慰撫することもあった。地域別に競わせて相互結束を妨害するなど、様々な措置を講じた。反乱などで管理の範囲から脱した場合、軍事的な征伐を強行して基盤を完全に解体することもあった。

すなわち、地方官を派遣しない状態で在地勢力を活用した間接支配とは、あくまでも一時的で過渡的な方式なのである。中央の支配体制が徐々に整備されたり、内部における必要性が高まると、王命を代行する地方官の派遣に関する議論が自然と始まった。新羅の支配基盤が徐々に安定かつ定着していき、それと共に内部の生産力が急速に向上すると、直接支配の必要性が一層高まった。また、周辺情勢の変動はこれをさらに促進させた。新羅の中央政府は、5世紀後半に一部の地域を対象に道使のような地方官を先に派遣し、直接支配をするための本格的な準備に拍車をかけていった。

地方勢力の成長と再編

新羅は長い間、高句麗の隷属の下にあったが、徐々にそこから逃れて自立の道を多方面から模索し、国際的な動向を綿密に観察するなど、貴重な外交的経験を積み重ねた。それは、6-7世紀に激しく展開された三国間の抗争において、新羅が国際情勢を正確に読み取って判断するための土台となった。自立の道を歩む過程で高句麗からの強い圧迫によって大きな危機を経験することもあった。それが一方では危機であったが、もう一方では新羅が内部体制の整備を図り新しい姿で飛躍できる絶好のチャンスでもあったのだ。

新羅が高句麗に直接対抗して自立の道を歩むことを決意し、唯一百済との同盟にのみ頼ったわけではない。新羅は当時、自ら高句麗と敵対できる基盤がある程度備えていると自負していた。自ら内的な成長と発展を図りつつ身に付けた自信が大きく影響していた。それだけ新羅は、麻立干の時代を通じて成長を繰り返した。したがって、高句麗の隷下から逃れようとした試みとは、何よりもそのような成長を背景にしたものである。

新羅の急成長は、すなわち、地方の支配力が土台であった。新羅は自らの事情に合わせて地方を適切に統制しながら、内的に大きく成長した。そのような様相は、5世紀に営造された高塚古墳の規模が外形的に極めて大きくなった点、その数量もまた大量に増加した点、それに副葬された遺物の質が先の時代と比較できないほど豊かになった点などから明証できる。それは中央の支配勢力に限った現象ではなく、地方の有力勢力も同じであった。言い換えれば、地方に対する支配に成功した背景は、すなわち、中央の成長であると同時に地方の有力勢力の成長にも求められる。

このように比較的短期間で急速に成長した背景には、当然、農耕の生産力向上があげられる。農業の生産力向上をもたらした原因は、田畑を耕す「タビ」、土を掘ったり除草に使われた「クエンイ」、三つまたのくわ「シェスラン」、原始的な形のシャベル「U字型鉄シャベル刃」、小型のシャベルがついた長い形の「サルポ」、草取りなどに使う手鋤「ホミ」、鎌「ナッ」など、新しく開発された多様な形と用途の鉄製の農器具にあった。皇南(ファンナム)大塚のような大型の高塚古墳では、20点のシェスランと14点のU字型鉄シャベル刃が出土している。同時期の王京の他の高

塚古墳や地方の有力者の墓にも同じように、数は少ないものの農器具が副葬されている。これらの農器具は地域別に有力者が農業の生産力を管理・統制した実情を反映するものであり、その頂点にいたのが麻立干であった。

一方、この頃の農業生産力の向上については、全国的規模で築造され始めた水利施設と牛耕の普及も注目に値する。429年(訥祗王13年)、堤防の高さが2170歩に達する矢堤(シゼ)という貯水池を築造した事実が象徴するように、当時中央政府の主導の下で水利施設も少なからず作られた。『三国史記』の記録からして一般的に502年(智証王3年)に牛耕が始まったと見做されてきたが、それよりはるか前に「ボスポ(犁)」が発見されたことからして、牛耕は実際もっと早い時期に始まっていたことが明らかになった。したがって、智証王の代では農業の生産力を向上させるために国レベルで牛耕を積極的に普及させたと理解されている。438年(訥祗王22年)には、閩に牛車を教えたという。これは単に牛車に限ったことではなく、国レベルで牛を育てたり、扱う技術を教えたことを意味する。したがって、これと共に比較的早い時期から牛耕のような家畜の労働力を活用した農業法も導入されたと見るのが妥当だろう。

以上のいくつかの事柄は、麻立干の時期に農業の生産力が大きく進展した事実を証明するうえで十分な事例といえよう。これは結果的に王京を再整備させた。前述したように、高句麗の攻撃に備えるための目的が主なきっかけであったが、それを実際に施行可能なものにしたのは農業生産力の向上である。その結果、人力と物産はおのずと王京に集中した。ついに王京は飽和状態になり、既存の構造ではこれ以上収容できなくなった。そこで王京再整備の一環として坊里制を取り入れ、対策としたのである。

坊里制を採択したことは、既存の六部の再編と関連がある。490年(炤知王12年)に初めて王京で市場を開いて四方の物資が円滑に流通するよう措置したことは、地方の人力と物産が王京に集中していたことを証明する。初めて市場を開いたということは、剰余が生活に必要な基本的な水準を超えて少なからず蓄積されたことを意味する。地方から取り入れる物産がそれだけ豊かになったことが分かる。ただ、まだ国家が直接乗り出して市場を体系的に統制し管理するほどには及ばなかった。そこから20年近く過ぎた509年(智証王10年)になってから東市(トンシ)という市を設置したのは、そうした実情を反映したものだ。

地方で生産された物産が中央に集まったのは、そのための管理体系を整備してこそ可能なことだった。487年(炤知王9年)に初めて四方に郵駅を設置し、該当官庁に命じ官道を修理するよう措置を講じた。郵駅は中央で発行した文章や政令が、地方まで順調に到達できるようにする補助的な機能を果たした場所である。そのような郵駅を交通の要地所々に設置したのである。これは中央と地方の人の往来や物資の流通を円滑にするための、交通網の組織化を意味する。官道は、国の直接的な管理下においた公式の国道のことである。物産が増えると地方を体系的に統制する必要性がそれだけ高まったことを表す。

農業の生産力が向上し物産が中央に段々と集まる現象は、すなわち、中央の支配勢力内部の貧富の差をさらに広げるきっかけとなった。経済力の格差は政治力と直結した。これによっておのずと支配勢力の内部に葛藤と紛争がもたらされた。前述したように、六部の中で力のある優勢な喙部及び沙啄部の2部とその他の4部の地位の格差は一層広がった。喙部と沙啄部が中心となった坊里制で表れるように、王京の全般的な再編が行われることになった。

王京の再編だけが独立的に行われたのではない。それと共に、地方に対する再編作業もこの時期に始まった。地方の再編を進めるきっかけとなったのは、築城作業である。地方の各所を築城するための労働力動員の仕方や規模などについて具体的に記した記録はないが、468年(慈悲王11年)に泥河(ニハ)を築城した事例からして、15歳以上の年齢に到達した者が動員の主な対象だったようだ。労働力を動員する必要性が高まると、国レベルで年齢別、性別を把握するための基礎的な作業が全国的に行われた。これを現地で管理する組織も当然整えられた。もちろん、地域ごとに最高の地位にある村干がその役割を総括しただろうが、やはりその下位で実務を担当する組織も当然運営されていたはずだ。地方を統治するための基盤となる組織が、国レベルの規模で行われたことにはこのような背景があった。

このように5世紀後半、高句麗との関係が悪化し、国レベルで築城のための大々的な労働力動員が必要になると、これを順調に推進するために各地で地方民を組織化する作業が行われた。その直前まで各地域の状況に合わせて運営されていた地方民の組織は、全国にかけて同じような形で均一になり始めた。地方民を管理するための組織は、国が直接介入するようになってから類似した体系で整

えられた。国の立場でも、そうしてこそ地方全般に対する体系的な管理が容易になるからだ。そのような側面で、当時行われた築城作業は、地方を全面的に組織化する主なきっかけであったといえる。

まず、急がれる地域から築城のための組織化作業が実施されたはずだが、その範囲や対象は徐々に広がった。すぐに全国的に同じ組織を作ることはできなくても、その土台は整ったといえる。このような地方における人力の組織化は、租税体系を整備する土台として機能した。同時に、地方民で編制された公的な兵力を組織化するための基礎作業でもあった。地方でもそれ以前に既に村干の統制の下で、独自の秩序を維持するための自衛的な組織がある程度整えられていた。今やその規模が大きくなり、その後の地方の行政整備と共に地方の軍事組織の基盤が設けられた。

農業生産力の向上は、地方の経済力の規模を大きく増大させた。この点は、各拠点地域に営造された高塚古墳の外形と副葬された遺物が立証している。麻立干の時期に、全ての地方が中央から同じ待遇を受けたわけではなかった。政治的・軍事的に占める割合によって、地域別に差をつけて待遇した。その点は、高塚古墳の規模や数量を始め、そこから出土した遺物の質量から推し測ることができる。中央から地方に進む交通の拠点や要地、または敵対勢力と接近した地域やそれに匹敵する場所は、総じて高塚古墳の規模が大きく数量も多い。そこから出土する遺物も、それにふさわしく立派である。土器のような日常生活品はもちろん様々な威信財も、中央の最高級には及ばなくても、それに次ぐ水準のものだった。麻立干の時期に、地方の有力者が政治的にどのような待遇を受けたのかを如実に立証する事実だ。中央から遠く離れた地域や要地の有力者には、離脱や反乱を防ぐためさらに優遇をしていたからだ。彼らはそのような支援を土台に農業生産力を向上させ一層成長することができた。

反面、王京に近く中央の政治力が直接及ぶ範囲に属したり、または早い時期に新羅に編入された地域などは、総じて高塚古墳の規模はそれほど小さくなく、その数量もまた多くなかった。これは地方官を派遣せず、該当地域の有力者を地方統治に活用していた間接支配の時期に、中央政府が半自治的な基盤を積極的に弱化させた結果であるといえる。これは王京と近い所から、危険要素をはらんでいた勢力を予め除去するためのものであった。

地方官の派遣と直接支配の始まり

ところが、中央政府の立場としては、地方の有力な勢力の成長と発展を、限りなくそのまま放置することはできなかった。ある程度の水準に到達すると、彼らに対する積極的な統制を加えなければならなくなったのである。高句麗と完全に決別する頃、地方の有力者に対する対策も共に講じた。また、高句麗は新羅との葛藤が始まると、地方勢力の離脱を企んだかも知れない。高句麗から新羅に進む道の要所や、それに近い地域の地方民の反発を適切に活用するため支援したとも考えられるからだ。400年に高句麗が南征してから一時兵力を駐屯させたり通過した地域は、先進文化と接した経験がある。高句麗が彼らを対象に、自らの勢力化を図った可能性もないとはいえない。例えば、慶尚北道の榮州(ヨンジュ)、奉化(ポンファ)、東海岸方面の興海(フンヘ)の北部がまさにその地域に当たる。『三国史記』の地理志には、独特にもこれらの地域がもともと高句麗の領土であったと明記されている。464年頃に高句麗が新羅全体を掌握する計画を推進した



写真3 浦項冷水里新羅碑



写真4 浦項中城里新羅碑

のも、このような事前作業が相当進んだからであった。今や新羅は、地方を以前のようなやり方で放置しておけなくなった。高句麗に対敵すると宣言したところで、地方に対する統制を強化するための試みも共に繰り広げるしかなかった。これが全国にかけて行った築城事業の形で表れたのである。

地方の要地を中心にした築城事業は、麻立干の時期の根幹を変えるきっかけになったという点で重要な意味がある。地方民を組織化しただけでなく、逆にこれ

を媒介にして、拡大しつつあった地方の有力者の競争力を弱化させる効果もあったからだ。おそらく築城にかかった諸般の経費の相当部分は、地方の有力者が負担するように誘導したと推定される。これは、彼らの経済力が成長するのをこれ以上放置してはいられない雰囲気とも関わりがある。そのため、地方勢力の成長を段階的に抑制する方策を設けた。

地方への統制は、高句麗との争い及びそれに備えた築城事業をきっかけにして活発に進められたが、同時に地方民の組織化作業も並行して行われた。その具体的な実情は把握し難いが、それを前提にせずには築城のための大々的な労働力の動員は考えられないからだ。そのような組織化以降、持続的に推進されたのは489年(炤知王11年)の「遊んで暮らす百姓(遊食百姓)」を追い出して農作をさせた措置を通じて推測できる。「遊んで暮らす百姓」の実態は大変曖昧だが、文字通り解釈すると、生産の手段がないから遊んで暮らしたのではなく、遊んでいても生きていける有力者を指してそのように「遊食百姓」と表現したようである。彼らが直接農作に従事するように措置を取ったのである。それも特定の地域ではなく全領域を対象にしたということは、まさに地方の有力者に対する再編作業が全般的に試みられたことを示す事実だ。

以上のように、築城のための労働力を動員することを機に、地方別に地方民の組織化が行われた。国家権力が地方の深い所まで浸透する機会が設けられたのである。外部からの危機は、新羅としては内部の結束力を強化させる主なきっかけであった。地方の有力者を再編成するようになったのもその一環だ。地方民を再編する作業は、特定の地域に限らず全国的に行われた。その過程で、既存の村干制の代わりに村主制が新しく導入されたのではないかと考えられている。

村主制がいつ、どのように実施されたのかは定かでない。503年に建てられた「迎日冷水里新羅碑」で村主という職名が初めて見られるため、これを下限とすることに疑いの余地はない。それより2年前の501年に建てられた「浦項中城里新羅碑」には、村主は見当たらない。その代わり、それと似たような有力者を依然として干支と呼んでいる。もちろん、だからといって501年から503年の間に村主制が全面的に実施されたと断定はできない。それ以前のある時点で村主制が受け入れられたが、まだ広く拡散せず両方を混用していたことを反映しているものと思われる。これは村主制が一気に全国にかけて実施されたのではなく、漸進的に広がっ

たことを意味する。そういう観点で、村主制が初めて施行された時点も、そこからそれほど離れた時期ではなかったであろう。

村干制から村主制への転換は、地方に対する全面的な再編が推進されたことを意味する。その時点をきっかけとして考えられる有力な対象は、464年以降本格的に行われた築城事業である。実際、高句麗の攻撃に備えるためには築城と同時に、地方民で編制された兵力を組織化することが急がれていた。築城のための労働力を動員する上で、まずは地方の有力者を組織化し、そのひとつの方法として村主制を導入した可能性が極めて高い。村主制の導入は村干制とは違い、地方が独自性を相当失って、中央政府にそれだけ隷属されることを意味する。既存の干支を保有した有力者の中で、中央政府寄りの立場を取り、おとなしく服従する有力者を選んでまず村主という職名を付与し始めた。

村主制を実施した背景には、地方民を組織化することで地方勢力を弱化させるための意図もあった。このように措置しなければならないほど、有力者の基盤が大きくなっていったのである。もちろん、村主制は一気に全国にかけて行われたのではなく、早急に必要な一部の地域に限って行われ、そこから徐々に、全面的に拡大した。村主制の実施は、地方の支配層には少なからぬ意味があった。国家権力がそれだけ地方に浸透し始めたからだ。中央政府はそれと共に地方官を派遣し、地方に対する直接支配を実現し始めた。

麻立干の時期に地方官が初めて派遣されたのは明確な事実である。中古期、行政単位として設定した城村に派遣された道使という職名が、先に紹介した「冷水里碑」と「中城里碑」にそれぞれ現れているからだ。したがって、5世紀のある時点に、中央から王命を代行する道使が初めて派遣されたことは疑いの余地がない。ただ、村主制と同じように、全国にかけて一気に彼らが派遣されたのではない。政治的・軍事的に急がれる地域からまず派遣し、その後順次その対象地を増やした。初めて派遣した時点は明確でないが、村主制と連係して実施されたと思われる。実行された時期を考える上で注目すべきことは、497年(炤知王19年)に官吏(群官)に対して、牧民ができる才能のある者を一人ずつ推挙するようにした事実である。推挙するようにした対象が群官であることも注目に値する。群官は、ひとまず六部の有力者全てを指していると思われる。すると、少なくとも外形的には六部全体を対象に牧民官を推薦させたことになる。ここでの牧民官とは地方官の

ことで、道使を除外しては設定し難い。道使を初めて派遣するためのものであるか、またはその数を増やすための措置に見える。それぞれ一人ずつ推挙させた事実からして、後者である可能性が高い。そのため、それ以前のどの時期も、道使が初めて派遣された時期と考えられるだろう。ひとつの可能性としては、487年に官道を修理したことが挙げられる。道使の「道」とは「官道」、「使」は国王の「使人」を意味する。官道の修理には、道使を派遣した事実が含まれている。必ずではなくても、それが道使の派遣と全く関係がないとはいえないだろう。

このように麻立干の時期の後半には、色々な側面で変動の兆しがあった。ひとつは、高句麗の干渉から逃れようとして、周辺情勢に緊張感が急速に高まったことだ。これに備えるために内部で結束を図り、支配体制が画然と変わる雰囲気が造成された。もうひとつは、地方の勢力が成長し、一定の制裁を加えなければならぬ状況に至ったという事実である。そのまま放置してしまうと、次第に中央政府にとって大きな脅威になりかねないからである。折よく、高句麗の攻撃に備えて実施した築城事業は、そのような制裁を推進する名分ときっかけになった。これを受けて、地方民を再編し、地方官を派遣し始めた。すると中央と地方の問題が同時に提起された。これを解決する過程で、支配勢力間の利害関係が自然に表出したのである。6世紀初めの「中城里碑」と「冷水里碑」の内容は、そのような実情をよく表している。

4

支配集団の 葛藤と新たな 秩序

内部体制の再整備

実際、高句麗は新羅が敵対関係に回った理由には、百済がその背後で操っていたからだと疑念を抱いていた。504年、北魏に派遣された高句麗の使節芮悉弗(イェシルブル)が世宗宣武帝と交わした会話の中で、金を産出する扶余では勿吉(ムルキル)に追い出され、白い玉を生産する涉羅(ソブラ)は百済と併合したと主張した記録がある。以前は、高句麗が扶余と涉羅に影響力を行使し、金と玉を確保して北魏に送ったが、もはや、そのようにできなくなったということだ。

そんな中、涉羅についてはその実態を済州島だとする見解と新羅だとする見解が対立しているが、後者の方が妥当といえよう。外交辞令の場に出てきた表現なので鵜呑みにすることはできないが、当時高句麗は、まるで新羅が百済に併合されたと認識したほどであった。このような状況下で、百済が高句麗の機嫌を損なわせるような挑発的な事件を起こした。

百済は、蓋鹵(ケロ)王(455-475年)の即位以降、王族中心の革新的な施策を推進したが、それがひとまず成功したことで、支配体制を一新することができた。これが高句麗には大きな脅威となった。体制の改革に成功して一層自信をつけた

蓋鹵王は、469年に高句麗の南辺(ナンビョン)を先に攻撃して領域を広げ、青木嶺(チョンモクリョン)に大きな木柵を設置するなどの挑発行為を強行した。さらに、472年には北魏に初めて使節を派遣して国書を送り、高句麗を攻めてくれるよう切に求めた。このことを知った高句麗は、これ以上百済を放置できないと結論付けた。そして、本格的に攻撃する準備を進めた。

ついに、475年、高句麗は百済を圧迫して王都の漢城(ハンソン)を陥落させ、蓋鹵王を捕らえた。捕まった蓋鹵王は、高句麗の本陣、阿且山城(アチャサンソン)に連れていかれて殺害された。高句麗が攻めてくると蓋鹵王は、弟の文周(ムンジュ)を新羅に急派して援助軍を要請した。文周が新羅から1万の兵力を借りて戻ってきたとき、高句麗は既に漢城を焦土化させ、蓋鹵王を捕らえて漢江を渡り阿且山城まで戻っていた。文周はそこですぐに即位し、漢江流域を去って錦江(クムガン)流域の熊津(ウンジン)に移り百済国を再建した。この知らせを聞いた新羅は、今後迫り来る危機に備え、万般の準備態勢を整えた。

新羅はそれだけでなく、464年以降、高句麗の大々的な侵攻を予測して着実に準備をしていたところであった。467年(慈悲王10年)には、戦艦を修理した。前後関係からして、そこには倭兵に備えるための目的もあったことは否定できないが、高句麗が東海岸に沿って南下するかも知れないという予測から下した対策の一環だ。そして、468年(慈悲王11年)に高句麗が靺鞨の兵力を率いて東海岸北辺の悉直城(シルジクソン)を攻撃した。新羅はそれに備え、何瑟羅の15歳以上の人々を大々的に動員し、通路の泥河に城を築いて対抗した。

翌年の469年には、王都の坊里(パンリ)名を定めた。坊里名を定めたことは、単に文字通りの理由だけではない。これは部体制の下ではあるが、一次的に王都の区画に初めて坊里制を導入したことを意味し、同時に、以前とは異なり王京を大きく刷新したという意味も含んでいる。王都の刷新には、まさに既存の六部の秩序を改編しようとする意図もあった。言い換えると、王都の行政的な改編といえる坊里制の受容は、それ自体が六部体制の再整備を意味するものと解釈される。これを機に六部が完全に解体されることはなかったが、どのような形にしても大きな変化が伴い、後日の事情を勘案すると、喙部と沙啄部が中心となった執権力の強化であったと思われる。表面的には最も力があって優勢な喙部と沙啄部が行政的に坊里制を受け入れたが、他の4部に対して統制する措置を下したのである。6世紀

初めの金石文を検討すると、喙部と沙啄部を除外した他の部には、干群はもちろん奈麻さえもほとんど見当たらない。これはこの時の措置によるものと思われる。まだ六部の根幹は解体された状態ではなかったが、喙部と沙啄部の2部を中心に改編が進んだことは明確な事実だ。言い換えると、王京の坊里制導入は、すなわち、六部制の根本を改編するという考えに基づいて行われた。これは、高句麗の攻撃が強まる危機状態に備えるための一環としてできた措置でもあった。

これに関連して、軍事制度の整備が行われた事実も注目すべきことだ。473年に、阿浪(アチャン)という官等の伐智(ボルチ)と級浪(クブチャン)という官等の徳智(トクジ)をそれぞれ左將軍、右將軍にしたという。二人は、463年に倭人が梁山の方面に攻めてきたとき、共に出征して敵を退けるなど軍功を立てたことがあった。そして、このときになって左、右將軍に任命された。二人はその後、慈悲王と炤知王の時代にかけて活発に軍事活動を繰り広げた。新羅で將軍制が初めて導入された時点と背景は明確でないが、このとき左、右將軍制があったことは、軍制において全般的に改変があったことを意味する。後日、主な官府の長官職を複数設置したのもこのためだ。將軍に左右二人を配置したことは、六部を2部中心に改変したと共に行われた軍制の改変であると思われる。高句麗の軍事的攻撃のような外部の要因が、結局王都の再整備を始め軍制の改変につながり、新羅が全般的な秩序を再編する背景になったのである。

一方、新羅は王都の整備と並行して、地方に対する整理作業にも同時に着手した。470年、三年山城(サムニョンサンソン)を始め、全国にかけて築城作業を実施した。三年山城という名の城が、3年かけて労働力を動員し、行われたということから、築城に相当の力を注いだことを反映している。新羅がこのとき高句麗の攻撃に備えることにどれだけ悩まされたかを一目瞭然に示す事例である。471年には笔老城(モロソン)、474年には一牟(イルモ)、沙尸(サシ)、広石(クァンソク)、沓達(タブダル)、仇礼(クレ)、坐羅(チャラ)などに城を建てた。これらすべての具体的な位置を現在は明確に把握できないが、総じて交通路及び軍事上の要所であったと推測される。

高句麗による攻撃の危機が一層高まると、新羅は前述したような六部を整備しただけでなく、王都そのものを防御する目的で、473年に明活城(ミョンファルソン)を修理した。修理という表現からして、既に築城の基礎はそれ以前に行われ

た状態だったが、これは発掘を通じて現れた事実である。それを再び大々的に修理したということは、土でできた城を石の城にして積み上げたという意味ではないだろうか。明活山城は、慶州の東部に位置し、その規模も大変大きい。慶州から吐含山(トハムサン)のふもと楸嶺(チュリョン)を通して東海岸に行く途中にあるが、この方面に進入する倭兵を防ぐ要地として機能した。ここで城を修理したのは、倭兵だけでなく遠からず攻めてくる高句麗の攻撃に備えた非難所として活用するためでもあった。そして、475年に百済の漢城が陥落したという話を聞くと、王は居所をすぐに明活山城に移した。その後、488年に月城を修理して戻ってくるまで、明活山城は10年余り王城として機能した。

新羅の予想通り、高句麗は475年に百済侵攻に成功してから、481年には靺鞨の兵力を率いて東海岸に沿って南下を繰り返し、慶州のすぐ北部の彌秩夫(ミジルブ：慶尚北道、浦項の興海)まで至った。新羅は百済と伽耶の連合勢力の助けを借りてこれを退けた。484年には、高句麗が内陸の母山城(モサンソン)まで進出すると、やはり百済の兵士と力を合わせてこれを打破した。その後も所々で高句麗との戦闘が起こった。新羅はこれらにおいて単独で、または百済と連合して退けたことで、当初の危機を乗り越えることができた。全体的に見ると、464年以降の5世紀後半は、新羅は高句麗から最も頻繁に攻撃を受けたが、これを成功裏に撃退し、逆に支配体制を新たに整えていく絶好の機会にしたのである。

もともと高句麗の攻撃を誘発した最初のきっかけは、新羅が駐屯兵力を皆殺しにした事件だった。新羅はそれに徹底して備え、高句麗の波状攻撃をうまく乗り越えた。反面、百済はむしろ漢江流域を奪われて南下しなければならないほどの大きな打撃を受けた。このときの経験は、新羅に外交問題を扱う能力を培わせることに大きく影響を及ぼしただけでなく、内部的にも変化を図り支配秩序を新しく構築する主なきっかけとなった。新羅は外敵と戦う過程で、内部を鍛錬し大きく変化していた。

支配集団の葛藤表出と智証王の即位

支配体制を整備すると共に地方への統制力をますます強化する過程で、支配勢力間の葛藤が次第に表出し始めた。先に述べたように、支配集団の家系の分化が行われていた状況であり、そこに利害関係が絡むと、たまっていた葛藤がいつかは爆発する危険性を秘めていた。そのような事情を十分認知していた炤知王も葛藤を解消する方策を模索した。次の事例は、明らかにそのことを示唆している。

炤知王は即位するとすぐに、百官に対して爵を一斉に一段階ずつ上げた。爵が具体的に何を指しているかは定かでないが、官等制の初期の形で、経済的な恩恵まで伴うものだった可能性がある。国王が即位する際に官爵を一律的に上げたことは稀なことではない。後日、真興王や聖徳(ソンドク)王が即位したときも同じような措置をとった。このような事情を勘案すると、官爵を上げることは一般的なことはなかった。したがって、それ自体がある特殊な事情によるものだったと推定できる。炤知王がやむを得ずそのような措置を取るしかなかったのは、当時の支配勢力内部で増えつつあった対立と葛藤の雰囲気とも関連があった。

これに関して、487年(炤知王9年)に奈乙(ナウル)に神宮を設置したことは、特に注目される。炤知王は即位して2年目の480年と7年目の485年に始祖墓を拝謁し、自ら祭祀を捧げた。特に、485年には始祖墓を管理する者の数を20家も増やした。これは、始祖墓を新しく整備するためであった。にもかかわらず、2年後には始祖墓とは別途に神宮を設置した。極めて急に推進されたことだった。

奈乙は始祖が初めて生まれた場所だ。奈乙のもともとの意味は太陽、蘿井という井戸、国井など様々な解釈がある。このときの始祖が具体的に誰を指すのかははっきりしていない。一般的には朴赫居世と見る見解が優勢だ。にもかかわらず、奈乙に安置された主神については見解が食い違っている。始祖墓の主神と同じで朴赫居世と見る説を始め、金氏の始祖である金閼智、奈勿王、味鄒王などとする説、天地神とする説、祭天儀礼を行った場所であるという説などに分かれて、まだ定説はない実状だ。しかし、奈乙は新羅が中央集権の支配体制を確立する過程で、分裂した血縁集団の結束を図るために、宗教的な象徴として機能したという見方が多い。始祖墓が正常に稼働しているにもかかわらず、なぜこの時期に再び他の主神を安置する神宮を設置したのか、その意図は明確でない。それを媒

介にして以前とは異なる、ある求心体のような機能を追求する目的が内在していたかも知れない。言い換えると、新しい神宮を設置して内部の結束を図らなければならないほど、支配勢力間でかなりの亀裂が生じていたのである。

当時、始祖墓もそれ以前と比較すれば機能が大きく弱化した状態ではあったが、そのまま維持された。炤知王は始祖墓の機能を代行するかのよう、495年には神宮を訪問して自ら祭祀を捧げた。始祖墓の機能は、ほとんどが神宮に移った。その後、始祖墓がはっきりと政治的に機能した事例はあまり確認されていないことから推測できることだ。そのため、神宮は当時、始祖墓の役割を代替しながらも、それを一段超えた何かを狙う象徴的なものだったと解釈できる。それを媒介にし、分裂・葛藤していた支配集団に対して新しい姿勢と覚悟で結束するよう誘導するための意図だったと思われる。

その時点で炤知王が月城に戻った事実も軽視できない点である。これは外部から加えられる脅威など、根本的な原因が解消されたとことを前提に断行されたのだろう。すぐ翌489年から、その後の494年、496年、497年と毎年のように新羅は高句麗と戦った。もちろん、高句麗が新羅の辺境を攻撃すると、新羅がそれに対応する形だった。495年には百済が高句麗の攻撃を受け、新羅に援助軍を要請した。新羅はそれに応えて、將軍の徳智(トクチ)を派遣して助けた。これを見ると、新羅が王の居住地を明活山城を置いていた時より、月城に移ってから高句麗との戦いが一層頻発したことが確認できる。これは、明活山城に移った根本的な原因が完全に解消された状態ではなかったことを意味する。にもかかわらず敢えて月城に戻ったが、その背景は単に高句麗に関する問題に限られたものではないことを示唆する。臨時の非難所を清算したことを内外に宣言し、国王の権威を高め、さらには内部の結束を図ろうとする目的があったのかも知れない。496年に宮殿を増築したことも、それと密接に関連している。

上記のいくつかの事例は、炤知王代が支配勢力を統合するために相当の努力していたことを表す。これは逆にいえば、支配勢力間の分裂と葛藤の度合いがそれだけ深刻な状態であったことを意味するものでもある。これに関する具体的な事情は、広く知られている「射琴匣(サグムガブ)」の説話で確認できる。射琴匣の説話は、『三国遺事』にだけ載っている。それを簡単に整理すると、その内容は次の通りである。

炤知王が即位10年目の488年、天泉亭(チョンチョンジョン)に出かけようとしたとき、カラスとネズミが来て鳴いた。このとき、ネズミは「カラスが鳴いている方にいらしてください」と言った。使者が南方の避村(ビチョン)という地域にたどり着くと、二匹の豚が喧嘩をしていたのでそれをしばらく見ていたところ、カラスの行方を見失ってしまった。このとき、ある年寄りが池の中から出てきて書を捧げた。そこには、「開けたら二人が死に、開けなければ一人が死ぬ」と書いてあった。使者が戻って王に捧げると、日官(イルカン)という官員は、「二人は庶民で、一人は王です」と言った。王もそのように考えて開けてみると、「コムンゴを入れておく筒を射よ」と書いてあった。炤知王が宮殿に戻ってきて金属の鎧を射ると、その中で内殿の焚修(ブンス)僧が宮主と姦通していた。

この説話は、全部を鵜呑みにすることはできないが、いくつかの事項は事実性があるものと解釈できる。当時、宮殿にまで僧侶が入ってきて仏事を行っていたこと、彼らと密接に関連した人々が宮主を中心とした女性であったことなどである。炤知王は結局、僧侶と宮主を殺したので彼らとは違う立場であった。言い換えると、当時は仏教が宮殿まで浸透した状態で、これを受け入れるかどうかを巡り激しく議論・対立していたことを予想できる。ついに炤知王が僧侶と宮主を殺したことからして、このとき仏教を受容する立場の者らは一時敗退したとみて良いだろう。

説話の内容からすると、仏教の受容を推進した側は宮主である。宮主が僧侶と姦通したということは、前者が仏教と密着していたことを表す表現だ。宮主も単に個人に限らず、仏教の受容を推進したある背後の集団と繋がっているのだろう。宮主が具体的に誰を指しているのかは明確でない。仮に、炤知王の王妃であれば、多少興味深い解釈ができる。彼女は伊伐滄という官等の乃宿の娘、善兮夫人だ。すると、これは格別注目すべきところだ。善兮は先に述べたように、居柒夫のおばに当たる。居柒夫の父の勿力は、524年の「蔚珍鳳坪新羅碑」で一吉滄(イルキチャン)という官等の人物として登場する。勿力は官等からして、その先の智証王の時代にも政治的な活動をしていたに違いない。

その息子の居柒夫は、幼い頃に出家して僧侶になったことがあり、真興王代の政治と軍事における核心的人物であったことは広く知られている。居柒夫が智証王の家系と繋がっていること、彼自身が出家した経験があること、仏教を信奉した法興王と真興王の代に最も有力な者として活動したことなどからして、彼の家

系は仏教の受容を積極的に推進した勢力のひとつであった可能性が高い。既に金氏族の中では家系の分化が進み、それと同時に、伝統的な支配のイデオロギーをそのまま固執しようとする立場と、新しい時代を目指して仏教のような高等宗教を積極的に受け入れようとした立場が対立していた。それが、炤知王に対する暗殺未遂事件にまで繋がったのである。国王を殺害しようとしたことからして、宮殿の中でどのような対立があったのかを予測できる。しかし、まだ仏教を受容しようとする勢力の基盤がそれほど強くはなかったようだ。

そのような対立は、地方を対象にしたある政策でも表れた。もともと六部はそれぞれ地域別に政治・経済的基盤を確保し、そこに影響力を行使していた。全国的な築城事業を通じ、各地方の事情を細かく把握すると同時に、地方民を再編して統制力を強化し、中央権力が浸透した。このような過程で、六部間の利害関係が激しく対立した。六部の内、喙部及び沙啄部と他の4部それぞれはもちろん、その内部の家系別にも利害関係が異なった。築城を機に地方が再編されると、各部の間では葛藤がおのずと表出し始めた。そのことを明らかに示す事件が、炤知王が晩年に捺已郡(ナルイゲン：今の慶尚北道、栄州)に出かけたときのことだ。

500年(炤知王22年)に炤知王は捺已郡に出かけ、当地の有力者の波路(パロ)の家に留まった。炤知王は幾度も波路から手厚いもてなしを受け、ついに彼の娘の碧花(ピョクファ)とも深い関係を持った。炤知王も基本的には喙部の部長であり、その部族が特定地域と密着していた実情を示している。炤知王が捺已郡を往来する途中立ち寄った古陞郡(コタゲン：今の慶尚北道、安東)出身の老婆が、王の態度を難詰した。その内容は極めて儒教的で、全て信頼することはできないが、特定地域との格別な関係に対して、周辺の他の地域では不満を持っていたことを示している。中央政府の政策が地域別に同等ではなく異なっていた事情を意味するものでもある。古陞郡出身の老婆の藩閥は、まさしく地域の有力者の立場であると同時に、王京の支配勢力の立場まで反映したものと解釈できる。この点は、炤知王がこっそりと碧花を宮殿に連れてきて別室におき、関係を持って子を産んだことから推測できる。

とにかく、仏教の受容を巡る問題、地方に対する再編の過程などで、支配勢力の内部には多くの葛藤が生じていた。二つの事件は、そのような点を暗黙的に示唆している。それは新しい時代を目指す上では必ず経験する陣痛だった。陣痛の強度

と振幅が大きければ大きいほど、対立と摩擦もそれだけ激しく表れるものである。もはや、向かい合っていた勢力間で対立が爆発するのは時間の問題だった。

麻立干の末期には、葛藤していた二つの勢力の間で露骨な争いが広がり、内部的に大きな確執があった。それが炤知王と智証王の対決で表れる。炤知王は寐錦王であり、智証王はそれに匹敵する葛文王だ。前者は国王としての喙部の部長、後者は沙啄部の部長で政治的にはトップ2である。2人は家系が分化し、個人の所属も政治的な立場も異なっていた。寐錦王は伝統を固執しようとした反面、葛文王は新しいものを目指していた。前者が仏教を排斥したなら、後者は仏教を受容する立場だった。両者の初対決は前者の勝利で幕を下ろしたが、二度目の対決では後者が勝利した。

智証王は、「冷水里碑」によると即位する以前は沙啄部の部長の葛文王だった。史書には、訥祗王が亡くなると64歳のとき順調に即位したとされている。しかし、即位したときの年齢が不自然なほど高齢であること、沙啄部の出身であること、炤知王の晩年が寂然としないこと、智証王が即位した年度に記録上差があること、葛文王として政治運営の求心的な役割をしたこと、即位するとすぐに以前とは異なる様々な改革的な施策を活発に繰り広げたことなどの事情からして、智証王の即位の過程が順調ではなかったと推定される。

沙啄部出身の葛文王であった智証王は、普通であれば王位を継承することが困難であっただろう。炤知王の晩年が捺已郡出身の碧花と子を産んだ記事で終わっていることがこれを強く示唆している。おそらく智証王は、順調に王位を継承したのではなく政変を経て即位したとの見た方が適切だろう。そして、即位するとすぐに新しい秩序を構築するための様々な改革施策を推進した。律令の頒布、仏教の受容、官僚組織の整備など、後日法興王代に具体的に実施された革新施策の基礎を磨き、洛東江と東海岸方面で領域の拡張を図って大きな成果を上げた。そのため智証王代は、事実上、名実共に新しい時代といえる中古期に向けた端緒を開いた時代であると評価されている。

第3章

中央集権体制への
転換と運営

律令体制の成立と運営
領域の拡張と支配秩序の確立
官僚制的な体制の定立
新しい支配秩序の志向

1

律令体制の
成立と運営

智証王の改革的施策

普通の場合であれば即位できなかったはずの智証王は、64歳という高齢で王位につき、新たな政策を強力に推進した。色々な面において以前とは違う支配秩序を樹立しようとした。その中でも目を引くいくつかの事柄として、次のような出来事が挙げられる。

第一に、即位して3年目の502年、殉葬を禁じる措置を取ったことである。すぐに炤知王が亡くなったときは殉葬制を維持しながらも男女それぞれ5人と制限していたが、それ自体を完全になくした。新羅でいつから殉葬が導入されたのかは不明だが、最初は人数の制約はなかった。炤知王の死を機に一時的に10人に制限する時期を経て、結局そのような慣行自体をなくしたのである。殉葬を禁じた背景には、人間の命を尊重する仏教の認識と労働力を必要とする時代的な状況が共に作用した。殉葬を禁じる措置は、自然葬全般にも変化をもたらした。2年後の504年、喪服法を制定したことがこれを裏付けている。

喪服法の具体的な内容は記録が残っていないため不明だが、王族をはじめとする貴族の葬礼儀式の方法や手続き、規模など諸般の事柄を国が統制・管理する

という意志の表れだった。遠からず国王を頂点とする新しい支配秩序が構築されることを予告するものだ。これは何も王京の支配層に限ったことではない。その影響が地方の有力者にまで及んだのはもちろんのことだ。

第二に、504年に初めて牛耕を実施したということだ。牛耕を実施した目的は、農業を勧めて生産力を高めることだった。しかし、牛耕に使われた農器具の犁(ボスプ)がこれより前の時期に出土したので、牛耕はこのとき初めて導入されたものではない。牛耕の実施は、牛を飼って農器具を管理すること、農民を動員することなどを国がつかさどり、地方の有力者を直接掌握するという意志を表明したことを示す。言い換えると、中央政府が地方への支配力を一層高めようとしたのである。牛耕を施行したことは、すなわち、新羅国家が葬礼儀式を通じて地方を掌握しようとしたことと表裏一体の施策であった。

第三に、503年、新羅が国号を確定したことである。これまでは新羅を始め、斯盧、斯羅、徐羅伐などの国号を混合して使用していた。これは単に表記上の差に留まらず、意味合いも異なる。大きくは、新羅系と斯盧系に区別できる。斯盧系は、既存の斯盧に根付いた国号で、事実上、現在の慶州盆地だけを限定的に示す狭い範疇を意味する。ここで、斯盧は新羅の王都として機能すると同時に、それを構成する六部を意味するものでもあった。反面、新羅は斯盧を中心拠点として、新しく領域に編入された地域全体を含む広い意味での国号だ。その外見は拡張し続けるものだった。新羅が主に対外的な用途で使われたとしたら、斯盧は王京と地方を区分する対内的な用途で使われるのが一般的だった。二つは長らく併用されたが、これからは新羅ひとつに統合し正式の国号として使用することを表明した。そして、これを「徳業日新網羅四方」によるものであると表現した。

国号を新羅にしたのは、少なくとも外形的には王京と地方がその枠の中でひとつになったことを宣言した意味がある。新羅の国王も、小さい国の斯盧の国王というイメージから脱し、服属する地域までも包括する大きな国の王であるという意識を強く表した。そのために、これまで使用していた麻立干の代わりに、中国式の王号を使い始めた。この時から、中国式の王という呼称は、唯一新羅の国王だけが使用できた。このとき、全ての臣下が、新羅の国王の号を奉る形式をとったのもこのためだった。これによって、新羅国王の格を大きく上げられる土台が設けられた。全領域を治める唯一の支配者であることを宣言し、天下意識の基盤を整えた。新羅の国王

を確定したことは、すなわち、新しい時代の始まりを宣言したことを意味する。

第四に、新羅の国王が自ら国内全体の領土を州郡県に整理したことである。全国をひとつの体系の下で管理する措置であった。もちろん、当時の地方を編制する単位の正式名称は、州郡県ではなく、州郡村だった。このように全国をひとつの単位にして一律的な編制を断行したことには、それなりの意味がある。新羅国王の名の下で全体の領域を再編するということは、あらゆる業績を繰り広げるべく意思を表明したという側面で、国号を確定し中国式の王号を使うことと釣り合わせた措置だった。このために必要なことは、領域の拡張と固守にあった。そのため、最も先に東海岸方面に悉直州を設置し、異斯夫(イサブ)を君主として派遣した。その結果、新羅は素早く東海岸に沿って北上し、江陵一帯までを領域に編入させただけでなく、512年には鬱陵島(ウルルンド)の于山国(ウサングク)まで服属させる成果を上げた。これで全国単位で地方官を派遣し、直接支配を拡大させる基盤を設けたのである。

法興王の律令頒布

智証王が始めた改革的な施策を土台に、その体制を本格的に整備したのは法興王(514-540年)であった。智証王の長男法興王は、父親が推進した基本的な政策を受け継いで制度へと安着させることに力を注いだ。もともとの「牟即智(モズッチ)王」という新羅式の王名以外に、「法を興した」という意味の仏教式の王名を使用したことから分かるように、彼は本当に法を広く興そうとした。法興王は亡くなってからの諡号ではなく、生きていたとき使用した王名だ。そのように呼ばれたのは、仏法を公認した業績によるものだが、その中には律法を興したという意味も含まれている。法興王は仏法はもちろん、律法も定着させた人物であったからだ。

法興王は在位7年目の520年、初めて律法を頒布した。新羅の律令が中国を起源としていることは言うまでもない。中国の律令が高句麗と百済を経て新羅に伝わった。律令は大きく刑法的な律と行政法的な令の二つの体系で構成される法令をいう。中国で国を統治する成文法的な体系として発達した律令は、漢字を始め儒学などと共に周辺地域に伝わり、国家経営の基本的な体制として定着

した。新羅が律令を頒布するに至ったのは、社会の諸般の現象を取り込むべき器の役割をする何かが必要なほど複雑になったことを意味する。律令の中には、国家運営のあらゆる基本的な要素が盛り込まれているからだ。智証王の時代以降、国の制度が次第に整っていくと、ついにはそれを取り込む体制が必要になったため律令が受け入れられたのである。

このとき頒布された律令の具体的な内容については、これまで多くの議論があった。大きくは、新羅国家の運営に関する諸般の法令全般を包括するものと見る立場、そして、当時の新羅の政治と社会の発展をあまりにも低評価したため百官の公服制とその色を規定した限定的な法令に過ぎなかったと見る立場に分かれている。前者は、それを確定できるだけの具体的な記録がないという漠然とした推測に過ぎない。

しかし、550年頃に建てられた「丹陽新羅赤城碑」の発見と共に雰囲気は一変した。そこには、土地制度及びその運営に関する佃舍(チョンサ)法という法律の編目と年齢階級などがあった。これは、当時の律令が単なる公服制を超え、あらゆる範囲に渡るものであったことを立証している。また、1988年に発見された「蔚珍鳳坪里新羅碑」からは、新羅の律法についてより具体的に示す内容が確認された。524年に作られた鳳坪里碑には、真興王代で律令を頒布した事実そのものを意味する「大教(テギョ)法」という表現と共に、付帯的な立法の編目「奴人(ノイン)法」という表現もある。奴人とは新羅人に編入された隷属民を総称する用語なので、奴人法は彼らの身分的な地位と性質などを規定した律令の編目である。同じ碑文からは、「杖六十」や「杖百」など、打たれる回数をつけた名の杖刑の存在を表す表現も見られる。杖刑は、笞刑、徒刑、流刑、死刑と共に五刑のひとつで、中国式の「律」が受け入れられたことを証明する。法興王代の新羅の律令は、中国式の「律」に新羅式の「令」を結合した形で構成されたものであった。

このように新羅の律令は、新しく発見された金石文の資料から具体的な編目を確認されたことで、単に百官の公服の規定に留まるものではなく、国の経営全般にわたる法令であったことが明白になった。ひいては、当時成立したと思われる骨品制、官等制、そして官職制などの運営に関する編目も、断片的な形だとしても、ひとまずは含まれていたものと見られている。新羅固有の刑罰体制ではなかったが、五刑を揃えたことは、新羅の社会が根本から大変な変化を経ていたこと



写真1 丹陽新羅赤城碑

を意味する。法興王代には、律法を頒布しなければならないほど強い執権力が求められる状況であった。

律法を受け入れた目的は、もともとは法律を厳しく適用して住民を抑圧しようとしたのではなく、実は儒学の根本的な精神「仁」を実現するためであった。共同体の社会が解体し新しい中央集権の貴族国家へと変化していく中で、支配勢力がいざ既存の秩序をそのまま固執しようとしたり、または無分別に恣意性を発揮する可能性も存在した。そのため、全ての土地は王のもので、その住民も当然王の民であるという、いわゆる、王土王民思想の下で王道政治を実現し、首長や貴族などの支配集団が恣意的に侵奪することを最初から封鎖しようとした。成文法にしたがって、外形的には公平に法を執行し全ての住民を公民化して新しい支配秩序を安定的に構築しようとした。そうすることで、最終的には、国王を頂点とする中央集権の支配体制を樹立する狙いがあった。この時期は、合理的な原則に基づいて官僚組織を着実に運営することだけが、支配秩序を安定的に維持する上で最も重要なことであった。法興王は、このような状況の下で、律令に体系的支配秩序を盛り込もうとした。このように新羅社会が以前とは画然とした違いを見せるようになった背景には、律令の頒布があったのである。

仏教の公認と上大等の設置

政治と社会的な事情が著しく変わると、それに合った新しい支配のイデオロギーが求められる。国家を形成する初期には支配者の集団が天から降臨したという神話や説話的な形式だけでも自分たちの権威を粉飾できた。共同体ごとにそのような認識が満遍なく広がっていたことをみると、秩序を維持する上で相当の効果があつたのは確かである。だが、社会が一層進展し認識が向上すると、事情は大きく変わった。様々な政治的集団が統合してさらに大きい規模の政治体が出現すると、従来のイデオロギーは、もはや通用しなくなった。その結果、中央集権を図り、それに見合う新しい支配イデオロギーが必要になった。このように変化した状況に適した新しい宗教が導入された。それが、仏教である。

仏教は、競争相手の高句麗や百済では既に4世紀後半、国レベルで受け入れて公認されていた。新羅でも昔から、先進の高句麗や百済はもちろん、中国とも接触していたため、仏教の存在そのものは既によく知られていた。しかし、それを理解して受容するほど、全般的に現実社会の雰囲気が成熟した状態ではなかった。だが、6世紀に入ってからやっと新しい支配イデオロギーが切に求められるようになると、政治・社会的な雰囲気は大きく変わった。

新羅において仏教は、国の宗教に公認される前の5世紀前半、一部の地方に伝わって次第に広がっていた。初めて伝わった地域は、一善(イルソン：慶尚北道、善山(ソンサン))のように王都から比較的遠く離れた周辺部だ。訥祇王の代に高句麗の僧侶阿道(アド)がそこに入ってきて布教をし始めた。この地域は、高句麗の境域から新羅の王都に行くためには必ず通らなければならない交通の要所であつたり、または高句麗の兵力が400年に南征したとき留まった駐屯地であつた可能性が高い。その後、仏教は善山地域周辺に次第に拡散し、ついに王京でも少なからぬ信者が出てきた。

しかし、488年に宮殿の深くまで入った梵修僧が炤知王を暗殺を謀って失敗した事件からも分かるように、仏教受容の問題をめぐる王室の中でも立場が違っていた。仏教を積極的に受け入れようとする立場と反対する立場が対立葛藤していたのである。その事件以降、仏教が国レベルで公認されるまでには多くの紆余曲折があつた。智証王が即位できたのも、そのような葛藤が表面に表れた結果

だ。仏教信者の智証王が即位したにもかかわらず即時公認できなかった理由は、まだ反対勢力が少なくなかったからだ。智証王は無理をせず、すぐには仏教の公認を推進しなかった代わりに、殉葬を禁止したことで受容できる底辺を漸進的に広げる努力をした。そして、法興王が制度を整備することに拍車をかけ、仏教を公認する雰囲気が一層高まった。

法興王が頒布した律令が徐々に根を下ろし、国王権力は一層強くなった。法興王は、軍事的な基盤を強固にする目的で、517年には中央の官府の中に初めて兵部を設置した。六部に分散していた軍事力を集中させ、国王中心の中央軍を設けたのだが、これは国王の軍事権拡大を意味する。法興王は、律令の頒布はもちろん、それを安着させる基盤を設けたのである。法興王は律令を頒布した直後の521年、百済を介してではあるが、中国南朝の梁に使節を送り新羅の存在を知らせた。当時、南朝には仏教に夢中になって法衣を着て出家した武帝が在位していた。梁の武帝が仏教に夢中になっていたことは、百済の聖(ソン)王の仏教政策にも少なからず影響を及ぼした。これは法興王が近い将来に仏教を公認したことの主な背景となった。ただ、新羅ではまだ伝統を固執しようとする貴族の反発も無視できなかった。そのため、公認に至るまでは、ひとしきり激突が不可欠な状況だった。

法興王は即位14年目の527年、側近の異次頓(イチャドン)に、伝統的な蘇塗信仰の中心地のひとつ天鏡林(チョンギョンリム)に仏教を興すという意味の興輪(フンリョン)寺を建てさせた。すると、貴族が直ちに強く反発した。異次頓と事前に計画して推進したことだったが、反対に直面するとそれを和らげるために法興王はやむを得ず彼の首を切る極端な措置を取った。異次頓の首を切った瞬間、白い血が湧き出て、頭は遠く王京の北部にある小金剛(ソグムカン)山の栢栗(ペンニウル)寺に落ちるという異変が起きたそう。これがきっかけとなって、法興王は反対勢力を押し切って、ついに仏教を公認した。

高句麗や百済はそれぞれ外交関係を結んでいた中国の王朝から仏教を直接受け入れたが、新羅は違う。下から受け入れられ、王京や王室にまで広まり、再び多くの紆余曲折を経てついに公認されたのである。この点は、新羅が仏教を受容した様相の特徴である。新羅が仏教を後から公認したにもかかわらず、比較的短い期間で広く拡散させ国の経営にも積極的に活用したのは、そのように独特な過程を経たからだ。

しかし、仏教を公認した時点と展開の様相をおいて、若干の議論がある。興輪寺の創建事業が再び始まった時点が535年だという点に着目し、このときになってやっと仏教が公認されたと解釈する見解がある。531年に貴族会議において、議長の上大等を設置した事実を根拠に、法興王がこの職を貴族に譲歩した一大妥協の結果として仏教を公認したと解釈した。これによると、国王は上大等が主導する大等会議から大いに牽制される、明らかに弱い存在だということになる。

しかし、528年に法興王が下した殺生禁止令は、仏教の公認と関連して見逃せないことである。当時の殺生禁止は、仏教の公認を前提にした場合によく理解できることだからだ。したがって、ちょうどこの頃を仏教が公認された時だと解釈できるだろう。新羅初の寺院、興輪寺の創建作業が遅く再開された理由は、その間の対立と葛藤を宥めるのに一定の時間が必要であったからだ。それが完全に終わってからようやく再開が可能になった。そうすると、上大等の設置も理解できる。

上大等は、大等で構成される大等会議の主催者である。上大等を一名、上臣ともいうように、大等は「大きい」という意味と複数の尊重語尾「等」が合わさったもので、漢字にすると「臣」の意味だ。「臣」の反対は「君」である。したがって、大等会議は、君王を大前提とした臣下の会議体で、上大等はそれを主催する議長だ。それゆえに、大等会議は君と臣が厳格に区別されたことを意味している。上大等は臣下でありながら、同時に彼らを君王と繋げて仲裁する中間者的な役割を担当する存在だ。大等会議に参加できる資格は、一定以上の官等を保有していたり、特定の身分に属する官僚にだけ限定的に付与された。新羅国家の重大な事柄はそこで議論され、国王の裁可を受けて実行に移された。大等会議が後日、和臼(ファベク)会議とも呼ばれたのは、そのためだった。和臼は、「和合(または、和議)」して奏する」という意味だ。和合するということは、すなわち、重大な決定をするとき意見が分かれたらこれを調整して合意を成すという意味である。全会一致で結論を引き出すことが主な特徴だ。結論を奏する対象は、あくまでも国王だった。

このように、大等会議は、君と臣の分別を明確にするための会議体だった。国王の代わりに上大等がそれを主催したということは、まさに国王の格が大きく高まったことを意味するため、それは君と臣の妥協の結果ではない。仏教の受容を巡る戦いで法興王が勝利した結果として上大等を設置し、国王はその上に君臨する存在に浮上したのだ。

大等会議が設置される前は、その母体の部体制の下に会議体が存在して国家の重大なことを決定した。先に述べたように、六部の有力者の干と称される首長層だけがその会議に参加できたため、これらをよく諸干会議という。六部の規模や格によって参加者の数には差がある。六部の現実的な勢力の格差が反映されたものだ。この会議体の主催者は国王の麻立干である。当時、新羅の国王は所属した啄部の代表者で、最高支配者ではあったが超越者ではなかった。会議体の決定から制約を受ける存在だった。

しかし、諸干会議の代わりに大等で構成された新しい会議体ができ、大等会議が結成されると、その代表者は上大等となった。これによって、国王の格は大きく変わった。その前までは国王は麻立干のような性格の寐錦王と呼ばれていたが、530年代には大王と呼ばれ始めた。国王を大王と呼んだのは、その格が貴族の中の第一人者のレベルを超え、超越者的な存在として浮上したことを意味する。大等会議において主催権が上大等に任されたのは、事実上は妥協の結果ではなく大王を一般の貴族官僚と明らかに区分するためだった。大王と呼ばれた新羅の国王は、単なる貴族の代表者を超えて超越的な存在となった。

このように、新羅が仏教を公認したことは妥協の結果ではなく、異次頓の殉教を機に激しく展開された戦いで国王が勝利した結果である。こうなると国王に向かって挑戦する有力者はほぼ制圧できるようになった。仏教を公認することに成功し国王権力も自然と高くなると、新しく設置する上大等は王と近い人物が選ばれた。上大等は国王を牽制するためではなく、支援して代弁する職だった。もちろん、その後国王権力が浮き沈みを繰り返し上大等の役割も一貫したものではなく絶えず変わったが、最初に設置されたときは王と近い者であったことは確かだ。法興王が即位して23年目になる536年、建元という年号を初めて導入したのは、超越的な位置となった国王の存在感を如実に示すものだ。

単に国王権力の格だけが変わったわけではなかった。それまで維持してきた六部体制にも根本的な変化を伴った。独自性の強い部の機能が完全に変わったのである。これによって、麻立干の時期から長らく維持されてきた六部体制は完全に崩れた。部体制の下では、国王も六部の中で革新的な役割をする喙部の部長であった。そのため、国王も人名を表記して所属の部が頭文字に冠称した。しかし、大王と呼ぶようになってからは、新羅の国王は所属の部を称しなくなった。

これは国王が部を超えた超越的な存在として浮上したことを証明する。

部体制の解体が法興王の代に急に行われたのではない。智証王が実力で即位してから着実に体制を改編する過程で、漸進的に推進された。その後は六部の中で力のある優勢な喙部と沙啄部の2部を中心に運営されたので、既存の部体制は事実上は衰退の道をたどるしかなかった。それから仏教の公認を巡って開かれた戦いで国王側が勝利すると、命脈だけを保っていた部の独自の機能は完全に消えてしまった。これによって六部は、王都の地域を区分するだけの機能しかできなくなった。部体制が解体・消滅し、超越的な国王を頂点とした中央集権の貴族国家が誕生したのである。

中央集権の支配体制の土台を整えた法興王は、即位27年目の540年に死亡した。その墓は、哀公(エゴン)寺の北部の峰に造営された。哀公寺は、当時ではなく後日建てられ、その位置ははっきりしていないが仙桃(ソンド)山のふもとである点は間違いない。法興王の墓から、王陵の具体的な位置が、記録としては事実上初めて分かる。それまで新羅の王陵は慶州盆地の中心部、大陵苑(テヌンウォン)一帯に全て一緒に造営された。この一帯には王陵だけでなくその血族とその他の多くの支配勢力の墓も共に造成されたのが特徴であった。このように、支配者集団の墓が一ヶ所に群集して共に造営されたことは、彼らが強く共同体的な意識を持っていたことを反映する。法興王の墓がそこから離れて外郭に別途作られたことは、すなわち、そのような共同体性が実質的に否定されだしていたことを意味する。大王という王号を称して超越的な地位につき、共同体の部体制が消滅すると共に起こった現象である。

骨品制の整備と新しい体制

智証王が即位してから行われた様々な革新的な施策を、その後を継いだ法興王がより強力に推進し、新羅の支配秩序全般は以前とは画然と違う形になった。超越的な地位に浮上した国王の地位にふさわしく、諸般の制度も新たに整備された。そのように制度的な裏付けがなければ、新しい支配体制を永遠には維持できないからだ。律令を頒布したり仏教を公認したのも、そのような背景の下で行われ

た。その中で特に注目を浴びるのは、骨品制という身分制が編成されたことだ。

中央集権の貴族国家が発足して、それを支える基盤となる支配集団の根本的な性格もおのずと変わった。それまでの支配集団は部体制の下で共同体性の強い首長の性質があったとすれば、今やそれと全く異なる性格の貴族官僚が出現した。もちろん、まだ官僚としては微弱な初期の姿ではあるものの、将来進むべき方向は既に設定されたのと同様だ。時間が流れても貴族官僚を適切に再生産できる制度が必要だった。そのために出来たのが骨品制である。

骨品制の始まりは、範囲を広くして考えると無限にさかのぼるが、制度として実際に確認しうるのは法興王7年に律令を頒布してからである。それまでは干と呼ばれる層とその下位の実務を担当する層に大きく分けられていて、彼らの地位が大体世襲されたため、身分的な属性があったのは確かである。しかし、彼らの政治的・社会的地位が制度の中で保障される状態ではなかった。

しかし、法興王が頒布した律令の中で、それが編目となって盛り込まれるとしたら、その意味は大きく変わる。すなわちm単に慣行としてのみ継がれてきた特権が、今や成文法的な制度として保障されるようになったのである。そして、骨品制という身分制度が正式に発足したことで、支配集団を強力に規定するひとつの要素として機能し始めたことになる。もちろん、始まった当初から骨品制が完成度の高い形ではなかった。政治制度が整備され、それにふさわしく内容も次第に整った。言い換えると、骨品制は、最初から固定して普遍的な形式と内容で固着したのではなく、漸進的に支配体制に相応しく整備され運営されたのである。

骨品は、「骨」と頭品の「品」が結合した用語とされてきた。しかし、ここには明白な疑問が残る。頭品の語幹はあくまでも「頭」であって、「品」ではないからだ。ここでの「品」は、単に「頭」の等級を意味する接尾語に過ぎない。したがって、骨品は「骨」と「品」が結合した単語ではなく、骨品と頭品がそれぞれ存在し、これが結合して成立したものである。このときの「頭」は単純に「頭」を指していて、ここには数値が高いものを高く尊く思う認識が反映されている。ここでの「頭」が具体的にどんな「頭」を指しているのかはよく分からないが、人や動物の数を表す単位で使われるのが一般的なため、使える人や保有できる動物の数を表したり、あるいは、一人の人がそれだけの数を担えるだけの能力を表現したものと思われる。頭品の数が多いほど身分が高くなるのもそのためである。

骨品は頭品とは区別されていることからして、これとは違う意味があったに違いない。ここでの「骨」が骨であると解釈する主張、血を表すものと見る見解など議論はあるが、「頭」と関連付けて理解すべきであろう。ここで「骨」は、「頭」という、いわゆる頭の中にある革新といえる骨髓を指すものと見るのが正しい。そのような意味で、単に外面を意味する「頭」よりは、その中に入った革新的な内容物といえる「骨」が一層重視されたといえる。すると、もともと頭に等級があったことから頭品という用語が出てきたように、骨にも別途の等級があったことから骨品という用語ができたのである。

このように、骨品と頭品という用語がそれぞれ併存したが、ある時点に骨品と呼ばれるようになり、この制度を総称して骨品制と呼び始めた。すると、骨品は骨の品を表す狭い意味と、頭品までを合わせた広い意味を同時に持つことになる。後者が、今日一般的に使われる骨品の用法だ。

骨品制はよく、聖骨(ソンゴル)と真骨(チンゴル)の二つの等級に分けられる骨品と、6等級に分けられる頭品など、全体は8等級で構成されると知られている。しかし、法興王7年に律令を頒布したとき、既にこのように8等級の構造が完成した状態で始まったとは考え難い。これは、最上級の聖骨が、真平(チンピョン)王の代になってようやく出現したことからも確認できる。したがって、もともとの骨品制が制度として姿を現した法興王代では、骨はひとつだけ存在し、頭品もそのように6等級に細分された状態であったとは断定できない。最初は頭品が何等級であったのかを予測することは難しいが、真平王の代になって骨から聖骨が分化し、それによって既存の骨が真骨と呼ばれるようになったとき、頭品も一層細分化され、全体が8品で構成される構造を整えたと思われる。八品姓骨という用語は、そのような実情をかすかではあるが反映している。

骨品制運営の鍵は、骨品と頭品の区別にある。骨品と頭品の間には、超えることのできない隔りがある。骨品は最上層の支配集団が所属する身分層を指す。彼らは、政治の運営を基本的な特長とし、全ての特権を排他的に独占しようとしたため、骨品の増加を抑制しつつ運営しようとした。そのため、特別な場合でなければ、骨品は分化できなかった。骨が分かれて聖骨が出現したのは、当時の特殊な政治・社会的事情によるものである。反面、頭品の分化は比較的簡単に行われた。骨品集団が軸となって政治を運営する過程で、既存の体制の骨格を維

持するための方法として頭品の分化が行われた。簡単にできた下位の頭品は、それだけ簡単に消滅するものでもあった。聖骨が骨から上方分化して出現しただけに、簡単に消滅する性質があったのと同様だ。

骨品制が制度化される前に、支配集団は大きく干層と非干層の二つに分かれていた。干層の集団が新羅社会全般の政治的な運営を担当し、非干層はその下で具体的な実務行政を分担した。各自が担う役割は専門性を必要としたため、自然に世襲されたと見られる。しかし、中央集権の支配体制が整いながら、干層でも、そして非干層でも役割にしたがって次第に区画ができ、おのずと優越による等級ができた。干層の内部で「境界線」ができてひとつの明らかな層位ができ、非干層の中でもやはり層位が形成された。

しかし、干層集団の中で最高位層は、自らの特権を維持するために、もともと同じ干群集団の出身でありながらも、境界線の懸隔性を厳しく適用して、それを超えられないように固着させた。ここで、事実上上層部にある干の中でも、「骨」と「頭」の間にはひとつの明らかな境界線が引かれた。最上層の集団が最も注意深く運営しようとしたのは、干層の内部で引かれた境界線だ。もちろん、彼らは自らの特権を維持するために干層の下位と非干層の上位の間の境界線も厳格に維持して管理しようとした。したがって、骨品制は骨品と頭品の間の境界線、そして頭品の中でももとの干層と非干層の境界が引かれて、大きく三つに分かれた状態で始まったものだ。この境界線は時が過ぎるにつれて、超えることができないように厳しく固着化させた。それが、身分秩序の維持だけでなく、骨品制中心の新羅の支配体制を安定的に維持する道であった。したがって、骨品制は構造的には大きく3等級を基本的な軸にして運営された身分体制といえる。

骨品制を運営する上で最も重要な特徴として、王京人を対象とした身分制度であったことが挙げられる。地方民は、骨品制の身分秩序の外に配置された骨品外の存在とされ、それによって彼らだけを対象とした身分体制が別途設けられた。こうした意味で、骨品制は新羅の母体、斯盧国の支配者層を中心にした勝者の身分体制といえる。王京の支配者の共同体を維持する基本的な手段が骨品制だったのである。その実情をより具体的に示しているのが官等制である。

官等制の構造と運営

骨品制が、生まれた時から親の血統によって社会的な地位が自動的に決まる集団的な身分制度であるなら、それと密接に連携していながらも徐々に官僚組織とつなげて運営した制度が官等制である。官等は、ときには官位、官品、官階などと呼ばれる。官等は、官僚制の秩序の中で特定の個人が占める位置を示す身分の表示である。官等の運営を制約するのが骨品制だった。したがって、官等制は官僚制はもちろんのこと、骨品制の枠の中でようやくきちんと理解できる。逆に、官等制は骨品制の実情をさらに具体的にのぞき見ることのできる尺度でもある。

実際、骨品制、官等制、官職制の三者が密接につながっているのは、もともとそれらが分化する前はひとつに入り混じって運営されていたからだ。4世紀以降、新羅の政治と社会が段々と発展して支配体制がそれにふさわしく整備されると、それぞれ分化の道を歩んだ。しかし、既存の体系から完全に脱することができないまま、結局は連携して運営された。麻立干の時期の部体制が発足し、王京、地方を問わず力のある優勢な首長層に与えられた干の存在は、そのような実情を証明する事例である。干を付与された首長は、その地位が血縁的に継がれるという面では身分的な属性を、それ自体が職務を内在しているという意味では官職的な性質を、そして官僚組織の中で等級の属性を有しているという意味では官等的な性質を共に含んでいる。この三つの属性は分化されないままひとつになっていたが、新羅の政治体制が発展する過程と共に細分化された。大舍(テサ)や舍知(サジ)のような一部の官等が後日にも官職として機能したことは、そのような実情を傍証する事例だ。

三国はそれぞれ支配体制を整備し、漸進的な過程を経て官僚組織を整えた。その結果、全てに共通の特徴として官等制を創出し、三国が交渉や交流をしながら相互影響を及ぼすこともあった。これによって運営上様々な共通点もあったが、各国が置かれた状況によってそれなりの明確な特性もあった。これは、政治・社会的な基盤と、それが形成された背景や過程で表れた差によるものだ。

その中でも新羅では、特に官等制を京位と外位の二つに二元化して運営するという特徴があった。京位は王京人だけを対象にしている反面、外位は地方民を対象にした異なる性質の官等制だった。高句麗や百済の具体的な実情はよく分か

らないが、現在まで明らかになった資料によると、二元的に運営したといえる根拠は全く確認できない。したがって、官等制を二元的に運営したのは、唯一新羅だけの特徴であると断定できるだろう。

このように、三国の中で新羅だけが王京人と地方民をそれぞれ別途の官等制の体制の中に入れて二元的な方式で運用したのは、地方民に対する認識と対応の方式が独特であったことによる。言い換えると、三国は地方民を待遇する方式と認識において根本的な違いがあり、それがその後の支配秩序全般にかけて違う様相で展開された。高句麗と百済は少なくとも外形的には地方民を差別せず、積極的に包摂しようとした。しかし、新羅は違った。

新羅は官等制を二元的に運用しながらも、王京人を対象とする京位を中心軸としていた。外位という地方民だけを別途で扱う官等体制を運営したのは、彼らを王京人とは違う身分の構造で編制していたことを意味する。地方民を骨品制という身分体制の中に含めずに除外したのは、結局差別化しようという意図だった。新羅の母体となる斯盧国の出身以外の地方民を他の身分制で編制し、服属する住民という認識を維持しようとしたのである。6世紀に至るまで地方民を対象に奴人という用語を一部使用していたことがそれを傍証する。その後、外位は中央集権の支配体制が整備され、また三国間の抗争が激しくなる中で次第に消滅の道をたどった。7世紀後半の統一期の初期には、ついに完全に消滅して京位に一元化された。しかし、新羅は外位制を介した地方民に対する差別的な認識をついに克服できなかった。よく新羅の社会を閉鎖的だと言う理由のひとつもここにある。

実際、官等制の京位は17等の体制で構成されるが、法興王7年に律令を頒布した時点でほぼ全て完成した。しかし、『三国史記』など文献の記録には、既に儒理王9年(32年)に17の官等体制が全てに整えられたように記録されている。だが、これは後代の事実をそのように遡及して述べたのに過ぎない。最近発見された6世紀初めのいくつかの金石文の資料によると、それまで17等の官等は確実に一部だけが存在していた。当時までは国王を頂点にした官等体制が全て整った状態ではなかった。六部別に部長がそれぞれ自分の官僚を直属で率いて多元的な体制で運用した。ただ、六部それぞれが完全に別途の官等体制を独自で有していたわけではなかった。官等の名称が同じであることからして、まずは統一しているように見えるが、これは中央から一定の統制を受けていたことを意味する。部ごとに

官等を保有した者の数が違うことから見て、部別には独自で管理をしていたが、中央政府に正式に報告して許可を受けるようにするなど、規制の下に置いていた。このように、6世紀初めに至るまで新羅ではまだ国王と頂点とする名実相伴う一元的な官等体制を作れず、多元的な形で運営した。これは、当時の部体制的な政治運営とかみ合う現象といえる。

しかし、律令が頒布されて、京位は角干(カクガン、または、伊伐澹(イボルチャン))から造位(チョイ、または、先沮知(ソンジョジ))に至る17等の体制でひとまず完成したようだ。律令の中の骨品制がひとつの独立した編目となって、官等制に関する規定も共に盛り込まれた。そのとき、骨品制及び官等と共に運営されたと思われる公服制もやはりひとつの項目として設定されたに違いない。その直前まではやっといくつかだけ存在していた京位は急速に整備され、律令が頒布された頃には17等体制を揃えたのである。その後、17等体制の基本的な骨格は変わらず維持された。なぜこれ以上は分化せず17等で止まったのか、そのことが何を意味するかはよく分からないが、とにかくそれが新羅における官等制運営の特徴のひとつに挙げられる。もちろんその後も必要に応じて第1等の大角干(テガクガン)、太大角干(テデガクガン)のような新しい官等もあったが、これらはあくまでも常設の位ではなく、非常設の位であった。

一方、京位を骨品制と連動して運営する過程で、統一期には身分の制約を受ける官僚を対象に、別に特進の道として重位制を設けて運営した。重位制は、阿澹(アチャン)、沙澹(サチャン)、大奈麻(テナマ)、奈麻(ナマ)などいくつかの官等に限って設定されたが、これらも結局17等の基本的な骨格の範囲内で行われたものだ。これはどんな場合でも完成された17等体制の基本的な枠を崩さずにそのまま守ろうとした、新羅の支配層の強固な立場をよく示している。

重位制の存在を通じ、17等の官等体制は大きくいくつかのグループに分かれて運用されたことが分かる。大きくは、上位の干群と奈麻以下の二つの群である。干群の官等は、大阿澹(テアチャン)以上と阿澹以下、奈麻以下の群は奈麻群と舍知以下の二つの群にそれぞれ分類される。これは官等が骨品制と密接に関連していることを意味するが、当初の成立過程と存立基盤の差によるものだ。最初に官等と官職が分化されない状態では、官僚組織は大きく干と奈麻で構成されたが、職能が分化して次第に増設された。両方を基本軸として、上層の干群の

分化が早い速度で行われ、奈麻以下はそれよりは遅れて6世紀頃にほぼ一気に成立した。このように、京位は下方分化したのが特徴といえる。

これらはそれぞれ独自の職能と等級を有し、さらにその間には身分上の境界線まで設定された。まだ初期には官職がそれほど多くなかったため、官等制の性質が入り交じった状態で運営された。そして、官府が徐々に設置され、それに伴って新しい官職が置かれたことで、官職と官等は二つを連動して運営された。概ね、眞平王の代になってから、『三国史記』の職官志にあるような基本的な体制を備えたようだ。とにかく、官等は骨品制及び官職制と一体で運営されたが、その原則と体制は法興王の代になって一気に設けられたのではなく、漸進的な過程を経て整理された。それと共に、初期の性質を完全に脱ぎ捨てることはできなかった。

一方、地方民を対象にする個人的な身分制度といえる外位の場合、京位とは成立の過程と時点にかなりの差がある。501年の「浦項中城里新羅碑」では、干支と一伐(イルボル、または、壹伐)、干支と壹金知(イルグムジ)の二つの体制が存在したことからして、まだ一元的な外位の体制が整えられなかったのは確かだ。503年の「迎日冷水里新羅碑」の段階でもそのような実情が続いた。しかし、524年の「蔚珍鳳坪新羅碑」の段階では干支を最高位として阿尺(アチョク)に至るまで、外位の基本四等級の体制が整えられた。ちょうどこの頃に頒布された律令の中でそのように整理されたと推測できる。その後、征服戦争で領域が増え、それに合わせて地方統治体制が整備・強化されると、基本四等級を骨格にして上級の干支が分化された。外位は干支を中心に上方分化されたのが特徴だが、ついに最高位の嶽干(アクガン)に至るまで11等体制で完成された。下位が固定されたまま干支という上級の官等が分化されたのは、新しい境域に取り込まれた地域の有力者層を包摂するためだった。

外位制の運営は、新羅の地方統治がどれだけ緻密で体系的に行われたかが伺える尺度である。外位もその中で身分制度的な属性を内在しているが、骨品制よりは弾力的に運営された。地方民の内、統治に積極的に協力したり戦争で手柄を立てた場合は、褒賞を与える用途で積極的に活用された。新羅が地方統治を成功できたのは、このような外位の体制を盛んに活用した結果でもあった。しかし、運営上の矛盾と限界があったため、三国間の戦争が終わる頃には遠からず消滅する運命のものであった。そのような意味で、外位は過渡的な官等制だったのである。

2

領域の拡張と
支配秩序の確立

真興王の即位と只召太后の摂政

法興王は、新羅の支配体制が部体制の段階を脱して中央集権の貴族国家へと進入するうえで決定的に貢献した帝王である。末年には自分が公認した仏教に帰依し、王命にふさわしく弘布のために努力した。法興王は540年に亡くなったが、息子がいなかったので7歳の幼い多麥宗(サムメクジョン、または、深麥夫(シムメクブ))が即位した。真興王(540—576年)である。彼が幼い頃に即位したこと自体は、当時の新羅の支配体制の基盤がそれだけ整っていたから可能なことだった。

しかし、真興王は法興王の息子ではなく、外孫であり甥だった。即位した名分がどちらであったかは明らかでない。法興王には只召(チソ)という娘がいたが、立宗(イブジョン)葛文王と婚姻した。真興王はその二人の間に生まれた。立宗は法興王の実弟だったので姪の只召と婚姻したのは近親婚だった。真興王が即位する直前の姿は、「蔚山川前里書石」から窺える。

川前里書石は、蔚山にある太和江(テファガン)の支流、大谷川辺(テゴクチョンビョン)にある大きな岩壁を指す。岩刻画と共に数々の文字が刻まれている。その内容によると、この川辺を徙夫智(サブジ)葛文王とその一行が525年に訪れて、



写真2 蔚山川前里書石乙卯銘

初めて文字を刻み、溪谷の名前を書石谷(ソソゴク)と付けたそうだ。徙夫智葛文王は、真興王の父、立宗である。それから14年の歳月が流れて539年になると、今度は真興王の母の只召夫人が、以前自分の夫の立宗が結婚する前に訪ねたことを思い出し、自分の母の保刀(ポド)夫人と幼い息子の多麥夫(サムメクブ)と一緒に遊びに来て、その横に再び文字を刻んで痕跡を残した。その後、書石谷の存在が新羅の王京人に広く知られ、多くの有力者が訪ねる名勝地となった。あちこちに既によく知られている人物も登場するが、特に、花郎(ファラン)という組織の者がよく登場することからして、彼らの遊びの場のひとつであったに違いない。

書石谷には法興王が直接訪れた痕跡はないが、「另即知(ムズクジ)太王」、「聖法興大王」のような形式の名前が見られるため、当時の最も有力な王族はほぼ全て登場していることになる。539年は、法興王が死去し真興王が即位する直前の年だ。このとき、立宗葛文王が、自分が痕跡を残した書石谷を訪ねる只召夫人と一緒に出向かなかったこと、人々が525年のことを回想していることなどからして、

彼はそれ以前に既に亡くなっていたに違いない。そのため、真興王に王位が継承されたと思われる。

実際、立宗は生きていたとしても即位は難しかったかも知れない。彼は、法興王と共に智証王の息子ではあったが、沙啄部に属する葛文王だったため、正常に王位につくのは厳しかった。喙部の出身だけが即位できたからだ。智証王はもともと沙啄部出身の葛文王だったが、即位してから喙部の所属になり、そのため長男の法興王は即位することができた。しかし、彼の血縁的な正統性はもともと沙啄部であったので、血統上の葛文王の地位はおのずと次男の立宗に回った。そうすると、真興王は本来であれば沙啄部の葛文王に就任しなければならなかったのだが、このときは既に部体制が崩れた状態だった。

しかし、真興王の母親は喙部の出身で、法興王の娘である。真興王は彼の母親を継ぐ者としての資格で即位の正当性を有したのかも知れない。もちろん、法興王が大王になって部体制的な秩序は既に解体されたため、出身の所属に対する厳格性はほぼなくなっていたが、真興王が幼かったにもかかわらず即位できた名分は依然としてそこにあった。只召が真興王の代わりに摂政ができた正統性も、ここにあるといえる。

只召太后は、摂政を始めて大々的に赦免をを断行し、官僚の官爵を1級ずつ上げる措置を取った。これは摂政のための名分だ。その一方で、異斯夫を重用した。只召太后は翌年の541年、異斯夫を兵部令(ピョンブリョン)の官位に任命し管掌させた。これは事実上、異斯夫に実権を持たせたことになる。只召太后は、異斯夫に大きく頼る摂政をしたのである。

異斯夫は、智証王とは血縁的に大変近い関係だったので、その孫の真興王ともそれほど遠くない王室の一族だった。智証王が炤知王と権力争いをしたとき、前者を支援したと予想される。これは、彼が智証王と政治的な意図が似ていたことを意味する。智証王が505年、20歳を超えたばかりの異斯夫を軍事的な要地の悉直州の責任者、君主に任命したのも、彼の能力に加えこのような背景があったためと解釈される。異斯夫はその後、東海岸に沿って北上して領域を大きく拡大し、512年には于山国まで服属させることで智証王の期待に大いに応えた。520年代に法興王が洛東江下流の金官伽倻(クムガンカヤ)を攻略する作戦を繰り広げたときも、先頭に立って輝かしい戦功を立てた。只召太后は血縁関係だけでな

く、長い間積み上げてきた異斯夫のそのような手腕を高く評価して、自分の摂政を助けてくれるよう求めたようである。

このように、真興王が即位した初期の政局を実際に率いた人物は異斯夫だった。このことを明らかに示しているのが、「国史」の編纂だ。異斯夫は、国王中心の集権体制を整える必要性において、新羅の歴史を整理することを建議した。そこで、王室の一族である上に自分とも比較的近い血縁関係であっただけでなく類似した志向の居柒夫を、歴史編纂の総責任者として推挙した。居柒夫の主導で最終的に整理された新羅の歴史書が「国史」である。この本が現在には伝わっていないため具体的な内容は分からないが、いくつかの史書に記録された新羅初期の王系はこれに基づいたものと思われる。特に、金氏の支配体制が確立したにもかかわらず王系がその中心に一元化されず、朴赫居世が新羅の建国の始祖として建てられたり昔脱解が存在するなど、いわゆる三姓交立が記録された事実がそれを裏付ける。その後、統一期に金氏が中心となって新羅王朝を整理しようと試みたにもかかわらず三姓交立の内容が結局否定されなかったのも、初の公式的な歴史書にそのように記録されていたからだと思う。異斯夫が歴史の編纂を建議した際に、「国史とは須らく君臣の善悪を記録し、後代に褒貶を示すことにある」と、歴史を叙述するにおいて儒教の基本的な方針、述而不作の態度を見せたのがこれを明らかに裏付けている。「国史」の編纂そのものは異斯夫の政治的な識見が侮れないものであったことを表す事例だ。

異斯夫は「国史」の編纂を通じ、将来新羅の社会が進むべき方向を提示する一方、実際に国の基盤を着実に整える作業を本格的に推進した。真興王5年(544年)には、兵部令をもう一人設置した。当時、自分が兵部令であったため、二人になった。その後、上大等と執事部という行政機関の侍中(シジュン)という官職を除外して、残りの中央の核心的な官府の長官職はほぼ複数任命された。ともすると、これは当時の時代的な状況からして、全ての軍事を担当した兵部の比重が高まったために行った役割分担だろうが、もう一方では互いを牽制させるための意図も内在している。実際、異斯夫自身は兵部令として軍事を総括すると同時に、政治全般の責任を担っていたため、兵部令をもう一人置かなければならない状況だった。同じ年に、当時中央の核心的な軍団として大幢(テダン)を設置したのもこれと関連がある。大幢を設置する軍制改革と共に兵部令の増設を断行したの

である。大幢は新羅の軍事力の中核となる組織で、その後国王を防衛しただけでなく、領域を拡張する征服戦争を推進する上でも求心的な役割を果たした。このような軍事的な施策は、真興王が即位してから国運をかけて勝負に出た、韓江流域への進出を推進する上で主な基盤となった。只召太后は、法興王が建立を推進していた興輪寺を544年に完工し、僧侶の出家も初めて許容した。仏教と政治が本格的に結合できる道を整えたのである。梁の武帝は、549年に新羅に使節を派遣し、自国に来ていた僧侶、覚徳(カクドク)に仏舍利を持たせて送った。このとき、真興王が百官と共に興輪寺の通りまで出て迎えたという。ようやく新羅は仏教の国として雄飛する基盤を整えた。

真興王の親政と漢江流域への進出

540年、7歳の幼い年で即位した真興王は、在位12年目の551年に成年になると、直ちに親政を宣言した。それを明らかに示す措置が、開国という年号を使用したことだ。法興王が536年に初めて年号を使い始めたが、真興王が即位してからも新しい年号に変えることはなかった。このように1世1元を守らなかった理由は、只召太后が摂政をする上で、法興王の政策をそのまま引き継ごうとした意図があったからだと思われる。その点からして、今や真興王が親政をすると同時に、開国という年号に変えたのはただ事ではないように伺える。それなりの特色ある政策を繰り広げるといった意志の表れだ。特に、年号を開国にしたことは格別注目される。既に国が存在していたにもかかわらず、「国を開く」という意味の「開国」を年号に採択したのは、親政に臨む真興王の剛気が強く内在した表現と解釈できるからだ。したがって、これは「国を開く」という消極的な意味よりは、「新羅を新たに切り開いていく」という強い意欲が含まれた意味である。将来新羅を新しい国に建設したいという強い決議を表した、若い大王らしい姿だ。そして、真興王はその後、様々な面においてそれにふさわしい政策を推進して成功し、新羅国家を堅固なものにした。

真興王は親政を始めた年に娘城(ナンソン、今の清州(チョンジュ)地域)まで初めて出向き、推し進める方向を示した。既にこの方面への進出は只召太后の摂政の

時期に始まっていた。548年、高句麗が濊族を先立たせて百済の独山城(トクサンソン)を急襲するなどの事件を起こした。百済が新羅に軍の派遣を要請すると、真興王は即時將軍の朱玲(チュリョン)に、三千人の兵力を率いて助けるようにした。すると、550年には百済が高句麗の道薩城(トサルソン)を攻撃した。高句麗はそれに対する報復措置として百済の金峴城を陥落させた。その後、高句麗と百済の両国は、二つの城をおいて激しく争った。ついに両国が力をほぼ失った頃、機会を察して異斯夫が二つの城を一気に攻略して奪い取る成果を上げた。異斯夫は二つの城を増築し、そこに甲兵一千人を配置して守らせた。これは、新羅の立場ではもちろん、三国間の関係にも非常に重大な意味がある。なぜなら、そのような行動の根底には、新羅が遠からず百済までも敵に回せることをそれとなく表したからだ。両国の間は433年に軍事同盟を結んでから、幾度の紆余曲折を経ながらも基本的な枠はそのまま保ってきたが、この事件を機に遠からず関係が壊れることを予告したも同然のことだった。言い換えると、新羅が韓江流域に進出するための予備的な行為だった。真興王が親政を始めてから最初の事業として、掌握したばかりの娘城地域まで出向いたのは、そのような政策を実行に移すための一環だった。

真興王が娘城に到着したとき、大伽耶(テガヤ)出身でつい最近新羅に帰化した楽聖の于勒(ウルク)とその弟子たちが、近くの国原(ククウォン、今の忠州(チュンジュ))で徙民されたという話を聞いた。すると、すぐに彼らを河臨宮(ハリムグン)に呼んで、音楽を演奏させるよう指示した。真興王は于勒のカヤグムを聞いてから、翌年、階古(ケゴ)、法知(ポブチ)、萬徳(マンドク)の3人を于勒のところに送って学ばせた。于勒は彼らの能力を察して、カヤグムの演奏、歌、踊りをそれぞれ分けて教えた。真興王はしばらくしてその結果を直接聴いてみて、以前娘城で聴いたのと違わないと大きく喜んで彼らを褒賞した。そして、新羅の国の音楽といえる大楽(テアク)にしようとした。すると、一部の臣下が、カヤグムの曲は滅亡していく国の音楽であるため大楽にするのはあり得ないことだとして反対した。このとき真興王は、大伽耶が滅亡したのは大伽耶の王が淫乱で自滅したのであって、音楽には何の罪もないと難詰し、自分の立場を崩さず強行した。この事件を通じて礼楽を重視する真興王の根本的な姿勢が伺えるだけでなく、将来王道の政治を推進しようとする一面も垣間見ることができる。真興王が開国という年号の下で作り上げようとした新羅国家が、結局は王道政治と繋がっていることを推測できる。

百済は551年、漢江流域の奪還という長らくの宿願を遂げるために、新羅に兵力の派遣を要請した。新羅はこれに応じて兵力を派遣した。これで、百済を中心に新羅及び伽耶の三国の連合軍が結成され、漢江流域に進出する作戦を立てた。実際、既存の文献の記録だけを見ると、新羅が漢江流域に進出したのはこのときだが、550年頃に建立された「丹陽新羅赤城碑」の内容を念頭に置いて考えると、少し違う理解が可能だ。新羅は百済と連合軍を編制するに先立って、既に単独で高句麗の管轄下にあった南漢江の上流方面に進出して成功を遂げた状態だった。赤城碑によると、この作戦を成功裏に成し遂げた人物は名将異斯夫だ。すると、新羅は既に自らの力だけでも漢江流域に進出する計画を立て、それを推進してきたのである。そういう意味で、先に言及した道薩城と金峴城(クムヒョンソン)を新羅が一挙に掌握したことは、決して偶然推進した事件ではなかった。新羅は既に漢江流域への進出を密かに企画して、着実に実行に移していた。百済は新羅のそのような思惑や立場を正しく把握できずに、多くの損害を押し切ってまで自らの主導下で漢江流域を掌握するために新羅を引き込んだ。新羅は思惑を露骨に表さず、百済の要求を聞き入れるふりをしながら、自らの計画を実行に移そうとしたのである。

ひとまず百済と連合した新羅の漢江進出作戦は、居柒夫など8人の将軍が共に推進して大変な成果をあげた。当時、高句麗は突厥が建国をするなど北方の情勢が極めて不安で、内部では貴族同士の争いの影響がまだ払拭されていない状況であったため、南方を気にする余裕がなかった。高句麗のこのような事情は、以前自国の王都の所在地であった漢江流域の奪還を夢見てきた百済にとっては、言うことなしの良い機会だった。そのため、大きな犠牲もなく簡単に目的を達成できた。百済は自国の王都だった拠点都市、漢城はもちろん、今日の南楊州(ナムヤンジュ)と推定される平壤など六つの郡を手に入れた。このとき、新羅は京畿道の東部と江原道の山岳一帯と推定される10の郡を掌握した。

しかし、既に漢江流域を独占しようと思っていた新羅としては、百済の手に入った六つの郡を侵奪する機会を虎視眈々狙っていた。実際、このような試みは一般的に指摘されているように、単に新羅が掌握した10の郡が百済の六つの郡と比べて人的・物的基盤が微弱であったことだけに起因するものではない。もちろん、それ以前から準備したことが、真興王の開国にふさわしい遠大な抱負を実

現しようとした意志があったからだ。その根底には、真興王が百済の力を借りずに、これからは独自で中国と交流・交渉しようとした計画があった。長らくの同盟国だった百済を、逆に永遠に敵対国に回す危険を甘受しながらも漢江流域を独り占めしようとした理由も、まさにここにあった。新羅は油断していた百済の虚をつく作業を推進した。まず、新羅は高句麗と密約をしたと言う諜報レベルの情報を意図的に流した。当時の新羅と高句麗の密約がどの程度まで推進されたのかは明らかでない。これに関してはいくつか見解が分かれている。そのような諜報を入手した百済はこれを深刻に受け止め、552年、倭に軍事を要請して備えようとした。しかし、それが思うままに行かないと、百済は553年にひとまず涙ぐみながら自発的に後退する形で漢城の軍を撤収させた。その結果、新羅は血を流すことなく、百済が掌握していた漢江一帯を手に入れる成果を上げた。

新羅は、確保した漢江流域全体を対象に新州(シンジュ)を設置し、金庾信(キム・ユシン)の祖父でこの作戦で多大な軍功を立てた金武力(キム・ムリョク)を初代君主に任命した。漢江流域一帯を、「新しい地方」という意味の新州と名付けたことには、多くの意味が含まれている。洛東江の流域圏や東海岸の方面とは全く違う性質の領土であったからだ。そこには、開国という年号に非常にふさわしい土地という意味が込められていた。真興王が名実共に新しい時代を切り開いたと宣言したのと同様である。このようにして、三国間の関係は、以前とは全く違う状況を呈していた。

管山城戦闘の勝利と新時代の開幕

百済は、高句麗と新羅が連合して攻撃してきたら敵わないと判断し、やっと奪還した旧領土の漢江流域を諦め、一旦退却した。新羅と直接戦わずに後退したのは、事後に備えるためであった。両国は直接対敵して戦ったわけではなかったため、既存の同盟関係が表面上ではまだ有効だった。実際、百済が戦いを避けて急いで軍を撤収したのも、事後に備える戦略からの措置だった。百済の聖王は、そのような本音を隠して、既存の同盟関係が依然として有効であるという事実を重ねて表すために、自分の娘を真興王の小妃として送った。百済としては、表面上

では新羅に特に反感を持っていないと表明したのである。しかし、内心では報復戦に備えた時間稼ぎの狙いがあった。

新羅としても百済の基本的な立場は看破しつつ、その要求に従った。実情は、将来起こることを予想し、対策を講じていた。それは、554年7月に明活山城の修理を終えた事実から推測できる。明活山城の修理は、近頃発見された「明活山城作城碑」によると、551年から全国の住民を動員して実施していたようである。この年は、百済と共に漢江流域に進出した時期なので、仮にここで失敗した場合、高句麗の逆襲を受ける可能性もあることを考え、万一の事態に備えて万全を期すためであった。その後も修理作業を継続し、554年になって終えた。554年に完成した明活山城の修理は、すでに高句麗よりは百済の攻撃に備えるためのものに目的が変化していたといえる。三国間で緊張感が高まり緊迫した情勢となっていたことを示す事実である。

新羅が予想した通り、百済は明活山城の修理が終わる頃、王都を直接狙って総攻撃に出た。百済としては、漢江流域を再び奪い返すことこそが国運をかけた戦争だと思い全面戦を試みた。しかし、そのような決定に至るまでは容易ではなかった。百済内部で、新羅との全面戦に対する反発が少なくなかったからである。当然、漢江流域への進出作戦が失敗したことに対する責任論も取り上げられた上に、再び大規模な戦争を起こせばその後の経済的・軍事的な負担があまりにも大きかったからだ。そのため、長く政治的に手腕がある元老の大臣は、出来るだけ十分に備えて後日を期すべきとの慎重論を展開した。反面、20代後半で血気盛んな王子、余昌(ヨチャン)はすぐに戦争を推進しようという強硬論を主張した。結局、まだ若かったが実力者で、遠からず年老な聖王に変わって王位につく余昌の主張が通った。百済は漢江進出に失敗した影響がまだ完全に治まらず、まだ準備が十分でなかったにもかかわらず、精鋭兵力3万人を動員して新羅への攻撃を強行した。

余昌を総司令官とする百済の兵力は、まっすぐ益山(イクサン)と南原(ナムウォン)を経て六十嶺(ユクシブリョン)や八良峙(パルリャンジ)を通る道を選択せず、益山、錦山(クムサン)、沃川(オクチョン)を経て若干迂回する経路の秋風嶺(チュブンリョン)、またはその北部の華嶺(ファリョン)方面に進むために北上した。新州方面の軍事の動きを考慮した作戦であったかも知れない。激しい勢いで出征した余昌は、新羅の要塞地の管山城(クアンサンソン)を陥落させ、その一帯を掌握



写真3 慶州明活山城作城碑

して備えるなど、初期には相当の戦果を挙げた。当時、新羅は君主の角干という等級の于徳(ウドク)、伊浪(イチャン)という等級の耽知(タムジ)などを送って対抗したが敗北した。追い詰められた新羅は、漢江流域を守っていた君主金武力の新州の兵力を管山城方面に急派して支援するよう指示した。

管山城の戦いで勝利した余昌は、すぐに王都の泗沘城(サビソン)に留まっていた聖王に勝利を知らせた。聖王はそれを聞くと、尽力を称えるためにすぐ戦地に向かった。聖王は勝利の知らせを聞いて、周りの状況を正しく把握できず急い

で少数の兵力だけを率いて戦地に向かったが、急いでいたあまり最も速い道を選択した。これが取戻しのつかない災いとなった。余昌が進軍した行路ではなく、泗沘城から管山城に直行する最短距離を選択したのだ。折よく、漢江流域で新州の兵力を率いて出発した金武力が管山城付近に到着し、通り道に待ち伏せさせておいた三年山(サムニョンサン)郡出身の地方の有力者、高干(コガン)等級の都刀(トド)が率いる部隊に捕らえられてしまった。全く予期できぬことであった。

捕らえられた聖王は、新州の君主金武力が駐屯する本陣に連れていかれた。金武力は刑を執行しながら、戦争挑発の責任を百済に回す名分を立てた。百済が先攻したこと自体を、長い同盟関係を破棄したことと主張し、死刑を執行するということだった。紆余曲折を経てついに聖王の首を切ると、体は返し頭は新羅の王都へ持って行った。この知らせを聞いた百済は、戦意喪失と戦いへの挫折を味わった。新羅の大々的な攻撃で劣勢になった余昌は、数人だけを連れてやっとのことで生き残り脱出した。動員した精鋭の兵力はほとんど戦死してしまった。管山城の戦いは、新羅の完勝に終わった。百済としては、現状を回復するには相当な時間がかかりそうなほど甚大な打撃を受けた。反面、新羅にとっては、新しい時代を

迎える大きなきっかけとなった一大事件が、この管山城における戦いだった。

管山城の戦いは、百済が単独で起こした戦闘ではなかった。伽耶と倭も少数ではあるが兵力を送り、連合軍として参戦した。新羅としては、これまで百済の主導下で一種の同盟関係を結んでいた伽耶をそのまま放っておくわけがなかった。特に、百済は聖王の死と管山城の戦いで大敗したことによって、内部的に混乱していたため伽耶に力をまわす余力がなかった。新羅は勝利の余勢を駆って、伽耶への総攻撃に乗り出した。

真興王は、伽耶を攻略する準備を着々と進めた。555年、ひとまず上州(サンジュ)から下州(ハジュ)を別途分離して、洛東江の近くの比斯伐(ピサボル)に管轄の中心地の州治を置いた。この年に真興王は北漢(プクハン)山まで出向いたが、これは新しく編入された地方民を慰撫することはもちろん、高句麗の動きを把握するためだった。これと共に、東海岸方面の州治を江陵よりはるか北部の比列忽(ピョルホル)に移して配置した。これもまた、高句麗の南部の境域をかなり蚕食したのである。一方、沙伐(サボル)にあった上州の州治は、甘文(カムムン)に移した。この時に漢江流域の新州の州治もより北方の北漢山に移した。このような州治移動の全般を見ると、高句麗の動向を注視しながらも、その方面の領域拡張を図り、ひいては、洛東江の西方面の伽耶を攻略するための事前準備であったことが分かる。甘文の方面に上州の州治を置いたのは、百済の援助を遮断して、その方面から圧迫するためだった。一方で、比斯伐に主力部隊を配置して洛東江を渡ろうとした。これは、当時、伽耶南北の有力な勢力であった安羅(アンラ)と伽羅(カラ：大伽耶)の連合を遮断するための軍事的な作戦だった。

新羅は比較的弱体の安羅を先に制圧し、即時北部の大伽耶を圧迫して、562年には伽耶全体の領域を掌握した。これで伽耶は、歴史の中に永遠に消え去った。561年、真興王が直接出向いて建てた昌寧(チャンニョン)碑からは、中央軍はもちろんのこと、四方に派遣した君主が兵力を率いて参加した様子が伺えるが、これは新羅が伽耶を攻略するためにどれだけ努力を傾けたかを明らかに示す事例である。

新羅は真興王が即位してから漢江流域を掌握しただけでなく、同時に洛東江流域の伽耶を服属させるという、長らくの宿願も解決した。東海岸に沿って北上を続け、領域を大きく広げた。北漢山碑、磨雲嶺(マウンリョン)、黄草嶺(ファン

写真4 北漢山碑峰と真興王巡狩碑(復元碑)





図1 真興王代の領域図

チョリョン)碑は、そのような姿を物語っている。真興王が親政をして掲げた開国は、これで実現したといえよう。564年、真興王は、北齊に使節を派遣し、初めて自らの力で東アジアの国際舞台に姿を現した。翌年には、北齊から「楽浪郡公新羅王」という爵号を受けた。真興王が、このとき金氏の姓を堂々と使用し始めたの

も、そのような雰囲気を実に反映する。新羅王の地位が、国際舞台で公認を受けたのである。ようやく、最も遅れて出発した新羅が、先を行っていた高句麗や百済と堂々と肩を並べる、三国の成立期に突入した。

皇龍寺の創建と転輪聖王の標榜

真興王は、開国という年号の使用と共に漢江流域への進出に成功すると、それにふさわしい内部体制を再整備する必要性を強く感じ始めた。その一環として、真興王は最も先に宮殿を盛大にする作業を断行した。それがはるかに高くなった国王の権威を誇示する効果を最大化させる道であったからだ。そのため、553年、月城の東方に新しい王宮を建てて移そうとした。しかし、王宮を設立する予定だった場所で黄龍が表れると、そこを寺院に変えて建てさせたという。

寺の建立を終えてから、黄龍が表れたことを考慮して黄龍(ファンリョン)寺と名付けた。そして、しばらくしてその表記を皇龍(ファンリョン)寺に変えたが、これがその後の公式の名称になった。そのように寺院の名称を変えたことには、深い意味があったようだ。もともと黄色は五つの方向を表す五方色(オバンセク)という色の中で中央を意味し、皇帝を象徴する色として使われることもあった。そのような意味で、皇龍寺の場所が天下の中心であると同時に、新羅の国王も皇帝だという認識に基づいている。その後も長い間、皇龍寺が新羅の仏教の中心地であり、国王とも密接に関連しているように運営されたのもそのためであった。

561年に建てられた昌寧碑にある「四方君主」の事例から分かるように、新羅も自らの領域を四方と認識する天下意識を持っていた。そのような天下を管理して治める主人が新羅の国王で、自らを皇帝と認識していた。王宮を新しく建てようとした試み自体は、それを表に表そうとしたものだ。皇龍寺を敢えて「皇」と表記しようとしたのもそのためだった。これによって皇龍寺は、新羅の国王と仏教が結合する中心地として機能し始めた。

王宮を造成する予定だった地区が急に寺院に変わったことには、そこが住居地としてはそれほど適切でなかったからだという要因もあったようだ。当時の新羅の人々は、皇龍寺のすぐ北部を龍宮と呼んでいた。そこは普段から水が湧き出

て、いつも水が溜まっている低湿な土地であったことからそう呼ばれていた。したがって、最初から新しい王宮を造成するということは、低湿な土地を埋める大々的な作業を前提にしたものだった。おそらく、そのように推進されていたものが、急に計画が変更になったのだ。そのように大規模工事をする上で目的を変えることにした名分として、黄龍が表れたという漠然とした事実を掲げたのは釈然としないところがある。これは後日、適切に言い換えただけであって、実際は別の背景と要因があった。

皇龍寺の創建には、553年(真興王14年)に施工して566年にやっと竣工したほど大変長い時間がかかった。最初の寺院であった興輪寺と比べれば多大な努力



写真5 発掘後、整備された皇龍寺址

を注いだ。これは、その目的がそれほど簡単ではなかったことを傍証する。実際、当代に国の宝物と設定された、いわゆる三宝の内、丈六尊(チャンリュクジョン)像と九重塔の二つが皇龍寺にあったことを見ると、これらが占める政治的な比重を大体推し測ることができる。皇龍寺を完工してから、その寺主が新羅の仏教界を代表する「国統」の役割を兼ねたことも、このことを十分裏付けている。

このようなことを考慮すると、王宮の予定地を急に寺院に変えたことの根底には、政治的な目的が強かったように思われる。王宮を大きく建てその権威を表に表そうとする形式的な側面よりは、実質的で現実的な目的が作用したのではないかと推定される。国王の権力が大いに高まると、公認されて間もなく新しい時代にふさわしい支配のイデオロギーとして定着し始めた仏教を政治的に、積極的に活用しようとする意図だった。国王権力の地位は、政治的理念が裏付けられなければ深く根付けなかった。仏教を公認すること自体で満たされるものではなかった。真興王は皇龍寺の創建を前後にして、支配のイデオロギーを構築する作業を本格的に推進した。既に皇龍寺を創建して僧侶の出家を許容したが、550年には大書省(テソソン)という僧官職を設けてもう一步前進した。大書省は文筆を担当する職だが、僧侶がそこに任命されて国王を補佐したのは、仏教と政治の結合関係が一層深まったことを意味する。しかし、大書省を置いたことだけでは高くなりつつあった国王権力を保障し難くなり、一層強い措置が必要な時点となった。王宮を造成しようとしたのが急に寺院に変わったのも、そのような主張が強く提起されたからである。

しかし、当時の新羅は仏教に対する理解の水準がそれほど高くなかった。特に、急に目的が変わった点に注目すると、特別な要因が根底にあったためと思われる。ここで注目すべきことは、恵亮(ヘリャン)という僧侶が高句麗から亡命してきた事実だ。彼は、新羅が551年に漢江流域に進出する作戦に成功したとき、高句麗を離脱して居柒夫についてきた。居柒夫は若い頃出家して全国を遊覧したとき、一時高句麗の境域に入って講経中の恵亮と会ったことがある。その能力をよく知っていたため、居柒夫は恵亮が入国するとすぐに真興王に推薦した。真興は即時、象徴的なものではあるが、最高の僧職といえる国統を新設して恵亮をその座に座らせた。恵亮が当時国統でありながら同時に寺主と呼ばれたことからして、最初は唯一の国の寺院であった興輪寺に駐錫したようだ。仮に、真興王が王

宮の予定地を皇龍寺に変えた目的が仏教を活用するためであるなら、当時の事情からしてそれを発議したのは国統の恵亮しかいないだろう。真興王は恵亮の建議を受けて王宮を皇龍寺に変えたと見られる。これで、仏教は政治と本格的につながる基盤を整えた。一方、新羅の仏教に高句麗の仏教、またはそれを媒介とする北魏の仏教の一部要素が結合したのである。

皇龍寺が長い時間をかけて完工した事実は、その規模と共に存在感が大変大きかったことを反映する。皇龍寺の寺主が国統を兼ねた事実は、仏教の中心的な役割をしたことを意味する。その後も真興王は、恵亮の建議を積極的に受け入れ、皇龍寺を軸にして仏教を政治的に大いに活用しようとしたようだ。ここで注目すべき点は、真興王が自ら転輪聖王を標榜したことだ。

当時の仏教と新羅国家の関係をよく示しているのが転輪聖王である。転輪聖王は、仏法にしたがって領域を広げ帝国を建設し、民を治めて仏国を具現するという仏教の經典に登場する最も理想的な君主像だ。領域を拡張したことは、仏教を広げるためといわれた。転輪聖王が有する権威と莫大な力は、金輪、銀輪、銅輪、鉄輪という戦車の車輪に象徴される。古代インドの統一帝国マウリヤ朝のアショーカ王が現実に出現した転輪聖王の典型とされた。そのような転輪聖王の認識は、中国の南北朝時代に受け入れられたが、特に仏教を支配のイデオロギーとして積極的に活用した北朝では、皇帝がまさしく仏であるという「王即仏」の意識を作り出した。梁の武帝の事例からも分かるように、南朝でもそのような意識が形成されそれが百済でも受け入れられたが、聖王はそれを見習おうとしてできた王名であると推測される。その転輪聖王を、真興王が標榜したのである。

真興王が長男を銅輪(トンリョン)と名付け、次男を舎輪(サリョン、または、鉄輪)と名付けたことは、自らを転輪聖王と認識したことを証明している。この意識は、自分を金輪と前提したためであると推定される。黄草嶺碑と磨雲嶺碑から確認できるように、辺境一帯を巡行するとき二人の僧侶と一緒に連れて行ったのは、その実情を象徴的に示している。真興王は574年、皇龍寺の主尊仏として丈六像を造成した。これを、典型的な転輪聖王として公認されるアショーカ王が醸そうとしたが失敗したという材料で完成させた説話は、自分がアショーカ王よりレベルが上だと自負していたことを示す事例だ。そこには、真興王に先立って転輪聖王のように振る舞った競争相手、百済の聖王に勝ったという勝者の意識もあ

るように思える。575年に丈六像の涙がかかたとを濡らしたが、これが翌年の真興王の死を予告したという話は、丈六像そのものが真興王であることを象徴する。真興王は王即仏の意識に忠実だったが、そのような護国仏教の中心地は皇龍寺だった。後日、皇龍寺に僧侶の慈蔵(チャジャン)が会った神人の息子、護法龍が暮らしていたという説話的なストーリーは、そのような事情の一端を反映している。王宮が急に寺院に変わった背景には、そのような王即仏の意識を実現しようとする意図があった。

王宮を建てて移そうとした実質的な理由は、月城があまりにも狭く、収容能力に限界に至ったからだ。新しい王宮の建設計画が取り消しになると、既存の月城をそのまま使用するしかなかった。政治の精神的な中心地は皇龍寺に移ったが、居住地としての王宮を再整備しなければならなかった。これで、王宮としての月城には次第に変化が見えた。王宮の足りない空間が、月城を中心拠点として段々と外に拡張した。そのことを明らかに示している事実が、月城周辺を取り巻く城の堀、垓字(ヘジャ)の用途の変更である。垓字は月城を防御するためのもので、一部は南川を活用し、残りは人工的に囲んで配置した。月城の垓字は、発掘を行った結果、防御的な機能をしっかりと発揮した時期と比べて、時間が流れると次第に狭くなる傾向が明らかに見えた。これは、垓字のもともとの機能が段々縮小して消滅していったことを意味する。垓字の本来の機能が縮小したのは、すなわち、月城自体が変わったことを表す。これは、王宮の機能が月城だけでは果たせなくなったことによる根本的な変化だった。本宮、または大宮という名と共に多様な宮殿の名称が記録上に残されている事実がそれを証明している。月城が本宮、大宮で、その外回りが拡張して、東宮、北宮、南宮を始め様々な別宮が月城の外側に建てられ、ひとつの群れを作り補えるようにした。真興王が月城以外に新しい宮殿を建設することを諦めたのは、王宮の構図全般を変えるきっかけとなった。これは同時に、新羅の王京における都市の構造が変化を試みたということである。新しい王宮を建てようとした意図には、王京の都市計画まで含まれている可能性があるからだ。

6世紀に入り、新羅国家が急速に発展すると、人口の増加と政治的・経済的な能力の影響で、既存の王宮と王京だけではやりくりできない困難な状態に直面した。そのような兆しは5世紀末から表出していた。このとき、地方官を派遣して郵駅を設置するなど、地方への支配を強化して確保した人的・物的な基盤がおのず

と王京に集中した。これによって、既存の体制ではそれらを漏れなく受容できなくなった。このとき、首都で初めて坊里制ができたり市場を開設した事実がそれを裏付ける。このような様相が6世紀にも続いたことは、東市が別途開設されたことから予測できる。今や王宮だけでなく王京全般がそれにふさわしく変わらなければならない状況になった。法興王が亡くなったとき、墓を王京の中央にある大陵苑に造成せず、別に離れた外郭に移したことには、王京を再編制しようとした意図もあった。

実際、新羅が国家を形成する過程で自然にできた都市の構造と道路網だけでは、人口増加と経済及び行政組織をしっかりと管理するのが困難だった。王宮の新設から始まった新羅の新しい都市計画は、皇龍寺の建立が変更になって、おのずとこれを中心に推進するしかなかった。真興王が転輪聖王を自負し、皇龍寺へと重きの中心が移動するようだった。月城を中心にしてそれを補う別宮が作られ、その周辺をまた官司の建物が囲んだ。同時に、住民と物資の安定的・体系的な居住と管理及びコミュニケーションのための都市網を建設する必要があった。そのために作ったのが坊制だ。坊とは、四角形で一定の規格を秩序正しく整えた単位を意味する。このような坊制は記録上、慈悲王の代に受け入れられたそうだが、これは色々な状況からして、部の下位単位の里制が一部実施されたことに過ぎないと思われる。実際、王京全体にかけてそれを構成する最小限の基礎的な単位として秩序正しい四角形の坊を設置したのは、真興王の代で新しい王宮を企画したときからだ。ただ、それが皇龍寺に変わり、新羅の都市計画はこれを基準に行われたという特徴がある。これで、皇龍寺が単なる仏教寺院ではなく、王京の中央に位置して都市計画の基準となり、ひいては政治的・宗教的に新羅全体をつかさどる機能を担ったといえる。真興王は皇龍寺を中心に政治だけでなく宗教の支配者としても君臨した。

新しい性格の人材養成と花郎徒創設

真興王が親政を始め新羅を新しい国家にするという意気揚々とした宣言をし、しっかりと実現するためには、それにふさわしい人材が求められた。発足したばかり

の国王を中心とした中央集権の貴族国家を安着させるためには、既存の部体制的な性格が強い人物は妨げに過ぎなかった。命をかけて忠誠すべき根本的な対象が、六部やその部長ではなく、新羅国家と国王に変わったのである。国王は彼らを基盤に、王道政治を具現しようとした。先に述べたように、律令はそのために設けられた制度的な装置だ。

国王権力はもちろん、支配体制を安定的に維持するためには恒常的な機関が必要だった。また、これを運営するためには、しっかりと管理できる官僚が切実に求められる。兵部や上大等など、政治的、軍事的に極めて重要な対象を中心に制度的な整備が既に始まっていた。しかし、いざ必要なのは、そのような機関を正常に管理できる人材だ。既存の共同体性に基づくような人物では、新しい時代を率いることができなかった。それこそ、新しい人材が必要な時代を迎えていたのである。

直前の部体制の下では、独自性のある部を基本的な単位として、それぞれ必要な人材を育成して選抜する方式を有していた。長らく伝統的な共同体を運営した経験からだ。今では六部が消滅したので、ここから脱して新しい組織と志向の人材を育てなければならなかった。このために行われたのが、源花(ウォンファ)制だ。源花制は、複数の女性を象徴的に掲げて、彼女らを中心に若い志願者を集めて組織したのが特徴である。新しい性格の人材を養成する努力は、只召太后の摂政のときからまず始まった。源花という若く美しい女性を掲げて、未成年の男子数百人を呼び集めて教育し訓練して人材を育成する方式だ。国は、彼らの中から適切な人物を官僚や軍官などとして選抜しようとした。

しかし、組織の中心の源花に女性を掲げたこと、しかも複数であることが問題を引き起こした。もともと組織を二つに分けたのは、相互健全な競争を誘導して能力を倍加させるという趣旨だった。しかし、最初の源花だった南毛(ナムモ)と俊貞(チュンジョン)の間で葛藤が生じ、後者が前者を密かに殺害する事件が発生した。これは新しい人材養成の方式を追求する中で起こった事件だが、それが決して簡単なことではない事実を示している。源花制が失敗すると、人材養成の方式は改めて模索された。

その後、相当の時間が経過し、新たに設けられたのが花郎徒(ファランド)である。今度は女性ではなく花郎という男性を中心に掲げた。花郎は女性のように化粧をした美男子を意味するので、源花制の残影が残っていた。それは強制的に組

組織したものではなく、自発的な組織であることを表すためだった。したがって、構成された組織も必ずしも二つに制限することなく、ありのままに放っておいた。失敗した源花制の弱点を補うための措置だった。花郎徒を運営する上での特色が反映されたものだ。国家が主導して組織を結成したのではなく、傍らから支援するだけの役割を担当し、まるで自発的に見えるようにしたのである。その意味で、花郎徒は完全な国家組織ではなく、半官半民の特殊な組織といった方が適切だろう。

花郎徒が組織された時点は明らかではない。『三国史記』には、真興王末期の37年(576年)に創設されたように記録されている。しかし、既に新羅が大加耶を対象に最後の攻勢をしかけていた562年当時、花郎として斯多含(サダム)という人物が登場することからして、このときを成立の下限とする。『三国遺事』には、最初の花郎として、薛原郎(ソルウォンラン)という人物が表れる。とにかく、花郎徒が正式に発足した時点を明確に予測するのは困難な状況だ。ただ、花郎徒組織の創設に関しては、真興王代に活躍した居柒夫に注目する必要がある。花郎徒の教育の内容が、出仕する前の彼の幼い頃の経験と極めて似ているからだ。

居柒夫は、官僚になる前に僧侶として出家した独特な履歴がある。そのとき、全国の山川をあまねく回っていたところ、国境を越えて高句麗に入り、高僧の恵亮に会って彼が担当する講經に参加したこともあった。帰国してから青年になると官僚になった。天下を周遊したとき会った僧侶を始め数多くの文士は、「国史」を編纂するとき動員された。幼い頃の体験が大いに役立ったのはもちろんである。

しかし、居柒夫が経験したことを具体的に見ると、花郎と何ら変わりがない。花郎は道義を磨いて歌を楽しみ、全国の山川と景勝地を巡って地形と地勢を学ぶ。それを通じて相互協力して団結し、心身を練磨して風流を楽しみながら公然の気を養った。彼らが全国的に活動した点は注目すべきことだ。このような経験は、後日、軍事活動をする上でも有効であっただろう。このようなことを一人で行ったか、または数人でグループを構成していたのかは分からないが、居柒夫が出仕するに先立って経験したことを極めて似ている。特に、彼が出家したこと自体はもちろん、恵亮に会ったことも注目される。居柒夫と関連付けて花郎徒の組織構成を探てみると、興味深い点が発見できるからだ。

花郎徒は、象徴的な代表の花郎と、その構成員の郎徒で構成された組織である。彼らはもちろん、15歳以上19歳までの未成年者だった。しかし、花郎徒の組

織には、彼ら以外にも僧侶も含まれていた。予備僧侶を指す沙彌僧はともかく、正式の僧侶である比丘僧は国の承認を受けなければ出家ができなかった。僧侶になると彼らは免税されたからだ。したがって、花郎徒の組織に入っていた僧侶は、決して未成年者ではなかった。彼らは、大きく見ると花郎徒の構成員ではあったが、あくまでも花郎徒を教える教師だった。僧侶の名の最後の文字に「師」がつくことがあるが、それは教師を意味する。彼らは当時、最高の知識のある者として、幼い花郎と郎徒を教えた。教育する内容のほとんどは、文字を中心にした經典など基本的な能力だ。彼らが花郎徒に配属されたことは、あくまでも国の承認を受けてのことだった。花郎徒の組織を単に民間機関と見做せない根拠のひとつがこれである。

僧侶は教師として花郎徒を教え、ついに彼らの長所、短所と能力、過ちまでも観察して人事に反映できるように考課し、国の要請によって推挙する役割まで担った。後日の8世紀初め、真骨の貴族の金大問(キム・デムン)が花郎の伝記「花郎世紀」を著述して、「賢佐と忠臣がここから湧き出て、優れた將軍と勇敢な兵卒もそこから輩出された」と、花郎出身の役割を一言で総評したのは、与えられた任務をしっかりと履行したことをよく示している。

居柒夫が幼い頃出家して経験したこと、恵亮に会ったこと、彼らが転輪聖王を中心に皇龍寺の創建を建議して実現させたことなどを考慮すると、二人が建議して実現させたのが花郎組織であると推定できる。興輪寺の僧侶だった真慈師(チンジャサ)と未尸郎(ミシラン)の説話的な物語りが示唆しているように、新羅人は花郎を彌勒の化身であると考えていた。彌勒は、将来の救いのために現れる仏だが、それが花郎の姿で現実の新羅に現れたのとされた。その意識の中には、彼らの力によって、新羅が今後理想郷として彌勒の世界を具現してくれるだろうという期待と希求があった。彌勒の世界は、転輪聖王を自負した真興王が夢見る理想の世界でもあった。そのような意味で、花郎は真興王が現実で実現しようとした新羅の国家像を作り上げる上で主導的な役割をした人材の代表で、花郎徒はその前衛組織だった。真興王がそのように新しい人材育成を通じて願っていたのは、新しい国家像を定立することであった。

このように花郎徒は、真興王が親政してから皇龍寺創建を機に居柒夫と恵亮の建議を受けて創案された、新しい人材を育成するための振興的な組織だった。

創設されるとすぐに加耶への征伐に乗り出した斯多含の行動は、その後も見習うべき行動の手本となった。花郎徒の組織は、一時的に終わらず受け継がれた。次第に様々な花郎徒の組織が出現し、彼らの中ではおのずと競争が起こった。それぞれの組織はそれなりの特色と志向を有していて、それによって彼らを表す組織の独自の名称があった。金庾信が属した花郎徒は、彌勒信仰に重きをおいた「龍華香徒(ヨンファヒヤンド)」という名称だ。彼らには黄券(ファングオン)、または風流黄券(ブンリュファングオン)と呼ばれる名簿があった。花郎徒は青年になると出仕のために組織を去らなければならなかったのも、そのとき名前は消されたが、新しい人物が埋まるとそれぞれの組織は継承された。

このように花郎徒は、真興王が新羅国家を新しく作り上げていく中で必要な人材を養成するために創案した組織だ。僧侶が教師として参加したこと、仏教式の王命や真興王の転輪聖王の意識からも分かるように、現実において理想的な世界を具現するための目的があった。しかし、彼らへの教育の内容は仏教に限ったものではなく、実状は国に対する忠誠、親孝行、友人間の信義などが基本的な徳目だった。後日これが高僧の円光(ウォンガン)の「世俗五戒」で整理されたが、新羅において現実的に必要な徳目だった。言い換えると、仏教の彌勒の世界を理想郷と追及しながら、いざ現実の政治社会で必要な徳目として必ず備えるべき基本となっていた。そのような意味で、花郎徒の組織は表面的には仏教のようだが、実は儒学的な性質が強い。したがって、時代が流れると共に、その宗教的な要素より現実的な要素の方がおのずと浮上した。そのような側面で、花郎徒は一時的に有用な人材を養成するひとつの方法に過ぎない。将来儒学の政治イデオロギーに基づいて本格的な王道政治を追求し新しい時代を切り開いていく上で、通らなければならない過渡的なものといえる。王道政治が本格化する中代になると花郎徒は衰退し、代わりに儒学の経典を中心にした教育機関、「国学」が急に浮上したのはそのためであった。

3

官僚制的な体制の定立

太子冊立制の失敗と真平王の即位

真興王は親政を始めた際に設定した基本的な目標をある程度達成した。領土を少なくとも3倍も広げて人的・物的な土台を大きく整えたこと、皇龍寺を創建して支配体制の理念的な基盤を構築したこと、花郎徒を創設して新しい時代を担う人材育成の土台を設けたことなどは、そのことを明証している。564年に初めて自らの力だけで東アジアの国際舞台に堂々と存在を知らせたのは、そのように蓄積した力の表れである。東アジア世界の一員として活動することを宣言したきっかけであったのだ。そのような意味で、三国統一の土台がこの頃に整ったとする見解は、単なる過剰評価ではない。

しかし、真興王の前には、これらを今後いかにして順調かつ永遠に守り抜くのかという課題を抱えていた。何よりも支配体制を安定させると同時に、地方を体系的に管理して、服属する住民が新羅の民として根付くようにすることが最も急務だった。このため、必要ごとに州治を移動させて再配置したり補強し、四民の階級を実施するなど、村落への支配を強化した。一方、仏教を広く知らせるために仏事を活発に行って仏経を積極的に手に入れるなどの努力も傾けた。そして、

564年以降は、ほぼ毎年といっても良いほど頻繁に南朝または北朝に使節を送った。これは、内治を基盤にして国際外交へと関心を注ぎ始めたことを意味する。このときの出来事は後日新羅が国際的な動向に特に敏感に反応し、それをうまく活用してついに三国統一の勝者になる土台となった。

そのような諸般の施策にふさわしく、568年には年号を「大きく反映させる」という意味の「太昌(テチャン)」に変えた。これは、内政を安定させるという意志の表れだった。そのために最後に推進すべきことは、自分の後継構図をいかに処理するかという問題だった。これは、誰にどのような形で王位を継がせるかによって、自分が成し遂げた業績はもちろん、新しく発足した新羅国家の命運がかかっているからだ。そのため、真興王はこの問題に深く関心を持っていた。

真興王は在位27年目の566年、長男の銅輪を太子に冊立した。太子の冊立は、次期王者としての経験を予め積ませるためでもあるが、後任者を予め決めておくことで、万一その後王位継承を巡って起こりかねない議論を事前に遮断するための意図があった。新羅で太子を冊立したのはこれが初めてのことである。それ以前まではそのような原則が全くなかったり、しっかり定着しておらず、王位継承の体系には問題があった。これは、まだ国王権力が強固に確立していないことによる当然な結果だ。王位継承は、国人(ククイン)と呼ばれる人々で構成される会議体で決定するのが一種の慣例のように固まっていた。真興王が在位中から既に太子を冊立したことは、前例のない新しい試みだったのである。これは、真興王の政策が大きく成功したがために可能なことだった。真興王は、太子を冊立することで、その後の王位継承体制を安着させようとした。

このように真興王は太子を指名して、王位を安定的に承継させることを公式に宣言した。しかし、太子として冊立された銅輪が、6年後の572年に急に亡くなってしまった。真興王が設定した本来の意図が崩れそうな兆しだ。その後、新しい太子が冊立されたのかは記録がない。真興王には、舍輪という次男もいたし、また銅輪太子にも既に息子がいたため、どちらを選択するか迷ったのかも知れない。これが、真興王の後を継いで即位した真智(チンジ)王(576-579年)の正統性巡って起こった議論の始まりであったと思われる。

銅輪太子が死亡する数ヶ月前、「太昌」の代わりに「広く救済する」という意味の「鴻済(ホンジェ)」に年号を変えたことには大きな意味が含まれている。太昌を使

用し始めてわずか4年で再び変えたのは、鴻済という年号の中には、広く救済して慰撫するという意志が盛り込まれているからだ。事実上、このときから太子を王位継承者として教育をさせようと考えていたようである。

しかし、予期せぬことに太子を亡くしてしまった。真興王は、そのことで少なからぬ精神的なショックを受けたと思われる。同じ年の12月に戦死した士卒のために外寺(ウェシ)で八閔筵会(パルグァンヨンフエ)を7日間開いた。外寺が指す対象は明確でないが、王宮外の全ての寺院を意味しているようである。これはその間、新羅国家のために犠牲になった全ての戦死者のための全国的な追悼だった。事前にそういうことを行わなかったために太子が亡くなるという凶事が起こったと認識したのかも知れない。真興王が自分の悲しみを慰める一方で、王位継承の問題で強く悩んでいたのであろう。その翌年には、莫大な財源と功力を費やして、自らを象徴すると思われる丈六像を造営した。太子の冊立に失敗したショックを和らげるための努力とも関係がなくはない。

真興王は576年8月に亡くなった。法興王の墓の近くに埋葬されたが、これは正統な継承者であるという意味からである。その後を継いだのが次男の舍輪、真智王である。真智王は次男だったが、兄が死亡すると父子継承の原則にしたがって即位した。孫の銅輪太子の息子に王位が渡ると戦争になる危険性があったため、真智王が即位したのである。

即位したときの真智王も比較的若かった上、継承の過程で若干の紆余曲折があったので、基盤そのものは極めて不安定であった。そのため、有能で熟練した政客の居柒夫が上大等に就任して王を補佐した。531年に初めて上大等が設置され哲夫(チョルブ)という人物が任命された後、その後任を選任したかは明確でないが、長い間空白であったと思われる。そのような意味で、居柒夫が就任したのは、すなわち、上大等が復活したということだ。居柒夫がそこに任命されたのは、真智王が即位する過程で若干の問題があったためと推定される。

このように、真智王が即位すると、新羅の内政には一抹の不安感が漂った。百済はそのような実状を見抜いたのか、攻勢をかけて不安をそそのかした。そのような中、真智王は在位4年目の579年、急死した。その死は自然な出来事ではなかった。『三国遺事』では、真智王が「政治が混乱して荒淫なため、国人が廃位した」と解釈した。「荒淫だ」という表現は、真智王が自ら犯した過失が廃位の原因だと

解釈しているのである。政治が混迷した結果で荒淫だったのか、荒淫であったから政治が混迷したのか前後関係ははっきりとしないが、真智王の在位中に両方が入り混じって混乱があったのは確かだ。これによって、真智王は国人によって在位4年で廃位になり死を迎えた。ここでいう国人とは、貴族会議、いわゆる、和白会議の構成員を指す。真智王の進退の問題を巡って開かれた和白会議で激しい議論の末、廃位が正式に決まったようだ。和白会議を主宰した居柒夫は責任を負って上大等から退いた。

実際、真智王代の問題は、銅輪太子が死亡して順調に王位を継承できなかったがために起こった、予期されたことでもあった。当時発生した議論の原因が完全に解決されず再発した結果だ。それが政治的な状況を色々と複雑にすると、真智王は政事を行わず荒淫な状態に陥った。荒淫といえる具体的な事柄については、桃花女(トファニョ)という夫のいる女性を襲おうとしたという説話的な物語りから、ある程度推測することができる。きっと正常な婚姻関係ではない、離脱行為が問題になったようだ。

真智王の廃位で銅輪太子の息子が後を継いだが、それが真平王(579-632年)である。真平王が即位したことで、真興王のももとの直系の方に王位の承継が戻った。これを銅輪系と舎輪系の対立と葛藤と見る見解が広く知られているが、まだ当時は真興王の王系では内部の家系が対立するほど分化されていなかった。これは、真智王の息子龍春(ヨンチュン)が真平王の保護の下で宮殿で育ち、後日は王室運営の全般において責任を持つ内省(ネソン)の責任者に任命されたことから簡単に推測できる。したがって、これは国王を頂点とした権力の集中を図ってきた政治勢力と、それに反発して貴族の発言権を中心とした支配体制を目指す政治力の対立と見るのが適切である。部体制中心の権力の分散を目指してきた勢力は、この転換期にはまだ完全に消滅しておらず、体制の中に編入されてきているものの、核心的な勢力に浮上するチャンス虎視眈々狙っていた。彼らは自然と国王権力中心の体制を目指すことに反感を持っていた。その点は、その後の真平王代の動向からも分かる事実である。

支配体制の安定と制度的整備

貴族社会の推戴を受けたこと自体、真平王の即位が順調ではなかったことを意味する。真興王が構築した体制が一気に崩れることはなかったが、基盤が比較的弱くなり不安になっていた。一方、真平王が即位したときの年齢がそれほど高くなかったことも追い風となった。どうすればそのような不安定な支配体制を安定させるかが、真平王に与えられた第一の課題だった。

真平王は即位するとすぐ、居柒夫が退いた上大等の座に、弩里夫(ノリブ)を任命した。弩里夫を、赤城碑の大阿飡の内性格夫智(ネレブジ)や、真智王2年(577年)に攻撃してきた百済を退けた伊飡の世宗(セジョン)と同じ人物とする見解もある。政治的な立場や性向はよく分からないが、真平王は一旦は彼の補佐を受けていたに違いない。一方、真平王は即位2年目の580年、金后稷(キム・フジウ)を兵部令とした。弩里夫と金后稷は、真平王代の初期を率いた主軸であった。彼らが政治と軍事をそれぞれ分担して責任を持っていたようだ。注目すべきことは、弩里夫が伝統的な方式の名を持っていたなら、后稷は漢文式の名前を使っていたことだ。漢文式の名前は、僧侶と国王の名前から始まったが、一般貴族の後稷のような場合は比較的早い方に属する。そのような意味で、后稷は時代を先駆けた人物であると推測できる。

もともと后稷は、中国の周の伝説で、始祖として農業の神を崇めた存在だ。そのような人物の名前を使ったのは、彼の家系が既に儒学に馴染んだ状態であったことを意味する。真平王が狩りに夢中になって政事を疎かにしていたとき、后稷は儒学の経典で諫言し、死んでまで意志を貫いたことはそれを証明している。彼が智証王の子孫であることも注目すべきところだ。したがって、后稷は真平王と血縁的にそれほど遠い関係ではなく、王道政治の理想を実現しようする立場であったと予想される。后稷は真平王を積極的に支持した。後日、儒学を理想として新羅国家を新たに切り開こうとした代表的な人物、金春秋(キム・チュンチュ)や金庾信(キム・ユシン)とも繋がる人物である。

真平王は即位6年目(584年)に年号を「建福」に変えた。なぜ即位したときすぐに年号を変えなかったのかは定かではない。ただ、このときに年号をそのように変えたことには、それなりのきっかけと背景があったようにみえる。このとき真平王が成年になって、親政を宣言するために年号を変えた可能性もある。

真平王の代では13年(591年)に至るまで多くの新しい官府と官職が設置されたことが特徴だ。これを第1段階の官制整備の時期とすると、第2段階で官制が整備されたのは、それからしばらく経ってから真平王44年(622年)になったからである。

まず、第1段階の官制整備である。それまでは、兵部など軍事と関連した官職を筆頭に観察を担当した司正府(サジョンブ)、財政と機密を担当した稟主(プムジュ)など、基本的な官府と官職の設置が中心であったならば、真平王の代では中央官府の全般にかけた基本的な骨格が大まかに整えられた。真平王3年(581年)に官吏の人事を担当した位和府(ウィファブ)を始めに、6年(584年)には貢納を担当した調府(チョブ)、馬政と車乗を担当した乗府(スンブ)、8年(586年)には儀礼と教育を担当した礼部(イェブ)が順次置かれた。これで、統一期の六典組織の骨組みは概ね整った。ただ、それに所属した官員までこのとき同時に完備したわけではなかった。

真平王の前半に置かれた四つの官府の内、位和府を除く残りの三つは長官の「令」と「史」で構成された二元的な体制だった。反面、位和府には長官が別になかったので実務を担当する「大舎(テサ)」と「史」だけあったのが特徴だ。しかし、位和府にも二種類の官員しか置かなかった点では同じ範疇に属する。このように二元的な官員で構成されたのは、最も早く設置された官府の兵部が前例となった。当時までは、兵部も長官の「令」と「史」の二つだけで構成された。ただ、兵部には他の官府が二元的な体制を整えた頃、真平王11年(589年)に「令」と「史」の間に「弟監(チェガム)」を置いたことで3等官体制に発展した。これは、兵部が新羅の官府組織の構成上の基準になったことを示す事実だ。当時の軍事組織の先導性と重要性を反映するものである。

このように、真平王の代まではひとつの官府が二等官制を基本にしたのが特徴だった。その後、真徳(チンドク)女王を経て統一期の神文(シンムン)王の代になってからは、等制の影響を強く受けて計五等官制に発展した。しかし、当時は官府が大きく部と府の二種類で構成されていた。この二つは政治的な比重や重要度によって区分されたもので、その始まりは真平王の代である。ただ、二つの差が明らかではない。このとき、部に所属する属司(チョクサ)が設

置された。属司として最も先に設置されたのは、真平王代の兵部所属の船府署(ソンプソ)で、そこに大監(テガム)と弟監という官職をそれぞれ一人ずつ配置した。これは属司の始まりで、真平王46年(624年)には礼部に大道署(テドソ)、稟主、後日にはそこから分離された創部(チャンブ)に賞賜署(サンサソ)を置いた。真平王代の前半に推進された官府の整備は、13年(591年)に領客府令(ヨンゲクブリョン)二人を設置して、ひとまず幕を下ろした。

これと関連して、同じ年に南山新城(ナムサンシンソン)の築造を完工した事実が注目される。このときの南山新城の築造に関して建てられた碑が、現在まで10基発見された。この碑文は、南山新城が王京の住民だけでなく、当時新羅の領域に属していた全住民を動員した大工事であったことを示している。王京付近の主な城を築城する際に全国の住民を動員する方式は明活山城でも確認されたが、その規模や範囲の面では南山新城と比較できない。当時、領土の大きさからして差があったからだ。それに、城の名を特に新城と付けた事実も注目される。全ての碑文の最初には、仮に南山新城が完成後3年以内に崩壊したら責任を負うという、国を対象に誓う文章が共通して入っている。これは新羅の住民として国に対し忠誠を誓う宣言の意味でもあるが、新城の築造が先に推進された官制の整備とも全く無関係ではないことを示唆している。南山新城を中心にその一帯では、その後数々の仏事が本格的に行われ、新羅の仏国土の中心地に定着する上で新城の築造はその出発点となった。これは、真平王13年に大団円の幕を下ろした官制整備の完結を象徴するものでもある。

真平王13年以降、官制整備の動きは長い間見られなかったが、真平王44年(622年)になってからそれまで別途管理していた大宮(テグン)、梁宮(ヤングン)、沙梁宮(サリヤングン)の三つの宮を合わせて内省の所属にし、そこに長官として一人の私臣(サシン)を置いて統合して管掌するようにした。これは王室の事務全般にかけて改編が行われたことを意味するが、その後続いた第2期の官制改編作業のきっかけでもあった。翌年の真平王45年(623年)には、兵部に大監二人を置いた。官制を整備する度にいつも兵部の整備が先だったのが特徴だが、最も先に、令一大監一弟監一史のような四等官制の組織を整えた事実がそれを裏付けている。これは、真徳王女の代に官府全体にかけて四等官制を一気に整えたことに先駆けたものだ。このように官府の西部は兵部が先導したが、これは当時、軍事的



写真6 慶州南山新城碑第1碑

な必要性がそれだけ強く求められる時代であったからだ。46年(624年)には、侍衛府(シウィブ)に大監6人を置いた。侍衛府が初めて置かれたことになるが、ここでは国王の護衛を担当した。宮中の事務全般を担当した内省と共に国王権力を強化させるために図った措置である。

真平王代は、新羅の官制組織の発達という観点で、注目すべき時期といえる。真平王代後半の官制整備は、前半とは明確に異なる。宮中の業務を専担する統合官府の内省を設置したことを機に、国王権力を実質的に強化しようとしたことも主な目的だった。当時、次第に高まっていた三国間の緊張状況とも密接に関連している。

新しい外交の試み

真平王は、南山新城を築造した翌年の592年、明活山城と西兄山城(ソヒョンサンソン)を改築した。このときも地方民を全国規模で動員したのかどうかははっきりとしないが、その可能性が大きい。その他、王京の北西を管理・統制する要地として機能した富山城(プサンソン)もこの頃に築造された。これで王京を巡る防御態勢は比較的完璧に備ったといえる。これは、新羅が東アジアの国際情勢の変動を的確に把握したことで立てられた対策だ。すぐ直前の真平王11年(589年)に円光が求道活動のため南朝の陳に行ったが、この時点は北朝を統一した新興の隋が陳を圧迫していたときである。こうした情勢がすぐに新羅まで伝わって、三国の間には戦雲が漂い始めた。真平王が王都の防御態勢を強化しようとしたのは、そのような動向を把握したからである。

隋は、589年に陳を滅亡させて南北朝の分裂時代を終えた。数百年間も分裂していた中原で、統一王朝が登場した事実が三国に及ぼした影響は決して小さくなかった。諸般の関係を新しく定立しなければならない局面を迎えていた。隋を建国した文帝は、高句麗の王と百済の王はもちろん、新羅の王を対象に冊立をする措置を取った。まさに、三国間にも新しい秩序を狙う再編の気運が大きく巻き起こっていた。

不安な雰囲気が漂う中で、新羅に対してまず挑発を敢行したのは百済である。新羅に裏切られて漢江流域を失い、管山城の戦いで惨敗した手痛い宿怨を

はらすためだった。敗戦の責任者だった威徳(ウィドク)王は長期間在位して、ある程度国力を正常に回復した状態だった。恵(ヘ)王と法(ポブ)王の短い在位期間を経て武(ム)王が即位し、新羅に対して積極的に攻勢をしかけた。真平王24年(602年)、百済は泗沘城からの最短ルートで小白(ソベク)山脈を越え、新羅の境域に至り、要所の阿莫城(アマクソン)を攻撃した。その後、その方面を囲んで、新羅は百済と激しく一進一退の接戦を展開した。百済は全面的な戦いではなく、持久戦で新羅の領域を蚕食する戦略を取った。一方、603年から漢江方面では高句麗が時折新羅に攻勢を展開した。国境線の要所あちこちで散発的な戦闘が起こり戦線が形成された。韓半島の三国間では、新羅を主な対象とした戦いが起こり、とうとう全面的戦闘に飛び火しそうな雰囲気徐徐に形成されていった。

新羅は両国から攻撃されて窮地に追い込まれると、統一帝国として発足したばかりの隋に積極的に近寄った。孤立状態の新羅としては、頼れる対象は隋しかなかった。新羅はほぼ毎年のように公式の使節、または僧侶を送って隋の内部動向や国際情勢を窺った。真平王は在位30年(608年)に高句麗の攻勢に悩まされたあまり、円光に軍事援助を求める「乞師表(コルサピョ)」という文章を書かせて、隋に攻撃を要請した。中国に対する外交の本格的な始まりである。もちろん、高句麗はその後新羅に対して攻勢を止めなかったが、乞師表の事件は将来新羅が生存のために外交戦を積極的に展開するようになった主なきっかけとなったものである。

隋を対象にした外交戦の展開と関連して注目すべきことは、それを専担する官府が設置されたことである。ちょうどこの頃、外交を専門に担当した独立官府が初めて置かれたことは、外交が占める比重がそれだけ大きくなったことを意味する。外交の方向は、まさに新羅の命運を決定する重大な事案へと発展していた。三国間の緊張感が大きく高まった頃、ちょうど統一帝国の隋が登場して東アジアの秩序が新しく再編される兆しが見えると、外交の重要度が極めて大きくなった。東アジアは外交を通じてひとつに連動する世界的な体制の中に溶け込んでいった。

外交担当機関設置に関する記録には若干の差がある。『三国史記』の新羅本記によると、真平王が13年(591年)に外交を専担する官府として領客府(ヨンゲクブ)を初めて設置したとある。領客府は文字通り、客を処理する部署という意味なので、外交使節の接待を担当した官府であったに違いない。統一期の景德(キョンドク)王のとき、これを司賓府(サビンブ)に直したことはそれを証明している。もち

ろん、だからといって担当の業務が必ずしも外賓の接待に限られていたとはいえない。外部の客をもてなすことが外交の一環で大きな比重を占めていたためそのように表現しただけである。したがって、領客府は外交使節の接待を中心に、外交全般を担った官府であったと見た方が良いだろう。

しかし、領客府の設置に関して、同じ書籍の職官志(チククァンジ)には他の記録がある。これによると、本来は倭典(ウェジョン)があったが、真平王43年(621年)に領客典(ヨンゲクジョン)に変えたという。これが正しいとすれば、もともとの倭典が領客典であり、それが再び領客府に格上げされたことになる。621年まで存在した倭典と、それ以前の591年に設置されたという領客府がどういう関係なのか確実でないため混同するところでもある。時々、職官志には後代の結果的事実を遡及して記録することもあるので、591年の領客府を倭典と見られる余地がないわけではない。しかし、591年は、新羅が隋と外交関係を本格的に推進していた時だということを考慮すると、領客府の設置をただ無視することはできない。これらは主に、隋に対する外交業務を専担したと思われる。

そのような差については決定的な端緒や根拠がない限り、とりあえず二つの記録全てを適切に理解するのが望ましい。591年に領客府を設置したことが、文字通り、官府がなかった状態で外賓のもてなしを担当していたのが、その時になってこれを専担する高官二人を指名した措置であるとしたら、それとは別途に倭に対する窓口の役割を担当した倭典は既に存在したことになる。いつ置かれたものなのかは予測しがたいが、ともすると伽耶が新羅によって完全に滅亡した後なのかも知れない。621年になってからは倭典を廃し、同時に外賓をもてなす機能を一つに合わせ領客典として担当したものと思われる。

このように、それまでは外交の窓口を対象国家別に置いたものを、621年になってから領客典に統合された。このとき倭典を廃止したのは、窓口の中心が中国の方に移ったことを意味する。すなわち、唐中心の外交に集中する意志を表したことであり、外交戦と名付けられる新たな時代が始まったということにあんる。こうした意味で、領客典の設置は、新羅の外交史において格別に注目すべき記念碑的な出来事であった。

ちょうどその年は、中原で隋の後を継いだ唐に対して新羅が使節を初めて送った時点でもあるため、領客典はそれとも無関係ではないだろう。唐の高祖は、

新羅が派遣した使節に応えて、即時、通直散騎常侍の庾文素という者を送り、璽書と共に絵が描かれた屏風や絹300疋を送ったという。そのような雰囲気の中で、領客典が設置されたのである。領客典を設置したことは、新羅が唐を中心に外交戦に力を入れようとした意志の表れである。中国で南北朝が分裂していた時期に、一時新羅は倭との外交に比重を置いたこともあったが、途中で統一帝国が出現すると、そちらの方におのずと重点が移った。倭典型、統一期になってからは再び別途設置されたが、そのときは中央行政官府ではなく、王室の事務一切を専担する内省に配属させたことが特徴だ。新羅が、倭とは王室を中心に特殊な関係を結んでいたことを示唆する。

このとき新羅が外交戦を展開したのは、単に国際的な動向に対応するためだけではなく、それだけ内部の基盤がある程度整ったからこそ可能なことだった。これまで仏教を公認して仏経を積極的に手に入れ、留学僧を多く派遣することで国際情勢を把握することはもちろん、文字の理解度もはるかに向上していた。外交戦を準備する体制が備えられたのである。ただ、円光の事例のように僧侶が中心であり、外交だけを専担する外交の専門家はまだいなかった。しかし、外交の比重が高まり、専門家が必要な時点が段々と近づいていた。その始まりが領客典の設置である。そのような意味で、このときを新羅の外交史の画期と規定しても過言ではないだろう。

釈迦族の意識と王室の整理

法興王の代に公認された新羅の仏教は、真興王の代を経て着実に発展し、整備されていった。特に、仏教は皇龍寺を拠点とし政治と密着して運用され、国の宗教として根付いた。皇龍寺の寺主は、「当然職」の国統で、国王から政策的な諮問を受けて仏教界を総括した。これで新羅の仏教は、政治と切り離せないものに融合された。真興王が転輪聖王を自負したときから、そのような現象は一層顕著になった。それを名分にして活発な征服活動を展開したが、領域の拡張は単なる人的・物的な拡大ではなく、仏法の具現と弘布のためのものと粉飾された。真興王は新しく編入された領域を巡狩するとき僧侶を同伴したが、これはそのような

実情を十分反映している。遅れて公認された新羅の仏教が、領域の拡張に成功し急速に拡散する効果を上げた。

新羅は、仏教国家としての姿を着実に整えた。566年にひとまず工事を終えた皇龍寺では、そこに安置する主尊仏を新しく造営する作業が行われた。外から材料を持ち込んできたという説話が示唆しているように、材料や造営の技術はもちろん、丈六像という莫大な規模からして完成まで極めて大変な作業だった。皇龍寺を創建するとそれにふさわしい規模の主尊仏像が必要になるが、失敗を繰り返した末、ついに真興王が亡くなる2年前の574年に鑄造に成功した。翌年には真興王の死を予期したかのように、丈六像が涙を流したという説話が伝わることからして、それが転輪聖王を標榜した真興王自身を象徴するものだと思っていたようである。これで新羅の政治と仏教は、連動して機能する土台ができたのである。

真平王は、真興王の政策をそのまま充実に受け継いで、仏教に一層関心を傾け、政治に積極的に活用しようとした。彼はまず、内帝釈宮(ネジェソクゲン)という特別な寺院を建立した。帝釈は、天にいながら天上天下の全てを主宰する役割の仏教最高の天神だ。寺院でありながらも帝釈宮と名付けた理由は、帝釈を信仰の主な対象としたからだ。寺院を「宮」としたことと共に、「内」と表現したのが興味深い。帝釈宮を内仏堂(ネブルダン)のように王宮の中に建てたため、名称をそのように付けたのである。ただ、真平王が自ら寺まで出向いたことからすると、その位置は必ずしも王宮の中であると断定することはできない。とにかく、王宮のすぐ近くに国家的な寺院の皇龍寺があったにもかかわらず、王宮直属の内帝釈宮を別に建てたのは、王室の地位を強化する意図と切り離せない関係にあったことを示唆する。これが釈迦族の意識の中に表れている。

638年から643年までの6年間、唐に留学したことのある高祖の慈蔵(チャジャン)は、中国の五台山で文殊菩薩に会ったという。このとき文殊が慈蔵に、「そなたの国王は、すなわち天竺の刹利種王としてすでに仏記を受け、特別な因縁があって東夷共工の種族とは異なる」と言ったと伝えられる。刹利はインドの貴族階級のクシャトリヤの刹帝利を指すので、新羅の王はそこにルーツをおいた特別な血統であるという表現だ。新羅王族の血統が平凡ではなかったことを意味するものと思われる。当時、新羅の人々が有していた一般的な認識は、中国にまでそのように知られていたほどだった。

これは仏教の説話を借りた形式ではあるが、新羅国王の血統が珍しいと思えるような現象が、既に新羅の王室でも存在したことを意味する。真平王の名は白淨(ペクジョン)で、王妃の名は摩耶(マヤ)夫人だった。白淨と摩耶はそれぞれ釈迦牟尼の父と母の名前である。真平王の二人の弟の名をそれぞれ伯飯(ペクバン)と国飯(ククバン)とも呼んだが、彼らは白淨の弟で、釈迦牟尼のおじだ。これをみると、真平王の一族は全て釈迦牟尼の家系の名を使っていたことが分かる。新羅王族を刹帝利種とした根拠がこれである。真平王の一族を単に刹帝利種くらいではなく、釈迦牟尼の一族が新羅で生まれ変わったと思っていたのである。これは、新羅の王族を神聖視する意識によるもので、その他の貴族とは区別しようとする認識が根底にある。そのような意識がいつから出来たのかは明確でないが、真興王が転輪聖王を自負したことから一步前進し、その一族を神聖視したことから始まったものだ。このような神聖な家族の意識は、新羅の王室の権威を高めることを目的とした。また、王室を再整備しようとしたことにも注目したい。

真平王は在位7年目の585年、大宮、梁宮、沙梁宮の三つの宮に、それぞれ私臣を一人ずつ置いた。大宮は国王の住居の本宮を指し、梁宮と沙梁宮はそれぞれ本来の梁部と沙梁部に位置した別宮であると思われる。それらの部がもともと独自の機能を有していた頃を浮かべると、そこは部の首長といえる部長の居館であった。部体制が解体されると、自然に王室の直轄に入り、この時に私臣を置いて体系的に管理した。特に中古期の王室は、沙梁部所属の智証王が即位してからその子孫が相次いで王位を受け継いだため、事実上二つの部はひとつと同様だった。したがって、国王は大宮を居住地としながら自然と梁宮と沙梁宮を共に管掌した。法興王代以降は国王権力が強固だったにもかかわらず、長い間部体制の秩序の残影を完全に清算できないままであった。そのような側面で見ると、三つの宮にそれぞれ私臣を別途置いたのは、王室を大々的に整備しようとした試みの第一歩であるといえる。

しかし、後日の文武(ムンム)王は百済を滅亡させた翌年の2年(661年)、論功行賞をする過程で、本彼宮(ポンピグン)という官署が保有した財貨、田畑、奴僕を金庾信と金仁間(キム・インムン)に褒賞として分け与えた。このような実情を考慮すると、それらの宮はそれぞれ多様な形の財産を保有していたのであろう。すると、それを管理する私臣は、宮そのものはもちろん、そこに付属した財産も管掌する役割を担っていたに違いない。これは、王室の財産を体系的に管理するための措

置で、国と王室の財政と行政を分離しようとした意図があった。中央集権の貴族国家として一段と前進したのである。

実際、部体制が解体されて国王権力が確立しても、まだ部に所属した財産と、国家や王室の財産を分離するなどの基本的な作業がしっかり行われていなかった。しかし、真平王7年、三つの宮にそれぞれ私臣を置いたのは、そのような業務を実質的に推進する基盤が整ったからであると思われる。ちょうどこの頃、中央の官府が多く新設、または整備された。中央の官府が整備されると、分離していなかった王室の事務を別途切り離して管理しようとしたのだ。これは、中央行政と王室を二元化するための最初の作業だが、まだ三つの宮を別々にしていたのは、既存の体制を一度で完全に払拭することはできなかったからである。

その後、真平王は在位44年目の622年、三つの宮をひとつに統合して総括するために内省を置いた。そこには私臣一人だけを配置して、三つの宮を全て管掌させた。三つの宮を分掌した私臣と統合して管掌した私臣は、同じ名称でもその地位は同レベルではなかった。複数の官員を置かなかったこともそれを反映している。私臣と官等の範囲が、中央の核心的な官府と似ているが、複数ではなく一人であるという点で大きな差がある。そして、私臣以下の管理組織を体系的に整えた。これは、王室の事務が中央行政とは別で、完全に分離して運営されていたことを意味する。国と王室の分離は、すなわち、王室の地位が大いに高まったから可能なことだった。王室の事務を別に分離しなければならないほど、王族そのものが神聖な家族と認識されたからだ。言い換えると、王族が神聖な家族と認識され、王室の事務は中央行政の官府から完全に分離された。それによって、王室の概念と王族の範囲などにも大きな変化が表れた。それを明らかに示す事実が、骨族の分化による聖骨の出現である。

聖骨の成立と王位継承

真平王が、釈迦牟尼の家族の名を借りて自分の一族の名前にした目的は、神聖な家族を標榜して王室や王族の地位を高めようとしたことにあるが、その根底には自分の王位に対する継承権を手に入れようとする計画もあった。浄飯王を自負した

真平王の立場では、将来生まれる息子は当然釈迦牟尼であり、息子を正当な王位継承者にするつもりであった。神聖な家族が完成すると、当時提唱されていた王即仏の意識を決定的に補える。仮に、釈迦牟尼に表象された息子が即位したら、新羅はインドよりもはるかに上の、それこそ現実の中の真の仏国浄土になるのである。

しかし、真平王はすっかり期待していたものの、思うままにはいかなかった。あらゆる努力をしても息子ができなかった。新羅の釈迦牟尼は誕生しなかったのである。これは今後王位を継承する際に問題が発生する余地があることを予告している。真平王には息子はいなかったが、娘は3人もいた。長女は徳曼(トクマン)で、真平王の後を継いだ善徳(ソンドク)女王だ。彼女は既に結婚した経験があり、夫は確かではないがおじの伯飯であると推定される。次女は天明(チョンミョン)だが、廃位になった真智王の息子龍春と結婚して、後日武烈(ムヨル)王になった金春秋を生んだ。三女は善花(ソンファ)で、百済の武王と婚姻したという物語りの薯童謡(ソドンヨ)と彌勒寺の創建を発議した説話の主人公である。

真平王が地道に努力を重ねた結果、王室の地位と権威は一層高まったが、問題は息子を生めなかったため王位を正統に継ぐ継承者がいなかったことだ。法興王、真興王、真智王はもともと前代の王の直系の嫡流ではなかった。したがって、中古期に入ってから事実上一度も順調に王位が継承されていないという不幸を繰り返した。真平王は支配体制を実質的、制度的に着実に強化させたが、いざ自分の後継構図を正常に確定できない場合、問題が生じるかも知れないという不安を持っていた。新羅の釈迦牟尼を生んで受け継がせようとした計算もそのような背景から出てきたものだが、失敗する危機に直面していた。

そのように厳しい状況で、真平王が考え出したのが聖骨の観念である。自分の直系を掲げて神聖な家族として始まったものの、今や彼にはそのような名分を立てなければならない背景があった。3人の娘の内、百済の武王と外交的な目的で国際婚姻をした善花を除けば、残りの二人の娘は激しい近親婚をした。銅輪太子も、父真興王の妹で自分にはおばに当たる萬呼(マンホ)夫人と婚姻した。真平王自身の王妃摩耶夫人の父は福勝(ポクスン)葛文王だが、血縁関係は明らかでなく、昌寧碑では名前を確認できない葛文王で、真興王の弟だと推測する見解もある。

しかし、中古期の門を実質的に切り開いたとも評価できる智証王以降の婚姻関係をみると、二つの流れを確認できる。ひとつは朴氏との婚姻である。智証王

の王妃は朴氏で、その後を継いだ法興王と真興王も同じだ。もうひとつは近親婚だ。智証王の息子で沙啄部の葛文王だった立宗は、父親とは違って法興王の娘で自分の姪の只召と近親婚をした。そのような近親婚の流れは、銅輪太子へと続いた。特に、銅輪太子の直系は、そのような近親婚の流れを続けた。そのような中古における王室内部の二つの婚姻の流れの内、真平王の代になってからはほぼ例外なく近親婚がひとつの明確な流れとして定着した。真平王がその一員を神聖な家族であると標榜できた背景と名分には、そのような近親婚も作用したであろう。または、神聖な家族を標榜しながら、真平王がそれを維持する手段として近親婚を積極的に助長した側面もあると思われる。

近親婚は当然、王室と王族の範囲を極めて狭める結果をもたらした。それ以前に金氏の王位を確立した奈勿王系と智証王系の場合、王室や王族の範囲が極めて広がった。しかし、国王を中心に激しい近親婚が行われたため、王族の範囲は大変狭くなった。その前までは漠然としていた喙部や沙啄部から金氏族へと、そして今や近親婚を通じてその範囲が一層狭くなったのである。内省を設置して、国と王室及びその財政が明確に分離されたこともこれを裏付けている。王室の範囲が狭くなったということは、結局、王位を継承する者が特定の集団に限られていることを意味する。これを保証したのが、神聖な家族の意識であった。

真平王は神聖な家族の意識を、天から正式に承認を受けたものかのように振る舞った。即位した年に天から天使が下りてきて玉皇上帝の命令で玉で作った帯を下ろすと、真平王がひざまずいて直接それを受け取ったという。その後、郊祀(王都外の大規模な祭祀)や宗廟の大祀のときは、常にそれを着用した。これを新羅の三宝の内のひとつの天賜玉帯(チョンサオクデ)と呼ぶが、国王権力は天から正統に与えられたものであることを象徴する印として活用された。

このような認識の下で、既存の骨族の意識をそのまま続けるのは困難だった。以前、干を称した支配集団の内、最上層部を最も中核的という意味の骨と称したが、今や彼らの中で現実的に神聖な家族として天賜玉帯を付けられる資格が与えられた家系は特別に区分された。これは骨族の分化を意味するもので、これが聖骨の誕生である。骨族が最初から真骨と呼ばれたのかは分らないが、聖骨の出現で骨族は二つのグループに分かれた。前者は既存の漠然とした広い範囲の王族であり、後者は中古期の後半に政治的な目的を持って表れた狭い範囲の神聖な

王族である。正統な王位の継承権も、彼らにのみ与えられるものだった。622年に王室の事務を専担する内省を中央官府と完全に分離して別に設置したのも、まさにそのような背景からだ。内省が管掌した範囲も、この聖骨に限られた。

このように聖骨は、真平王が追求した神聖な家族の意識の下で、既存の骨族から成立した新しい上層の骨族である。そのような聖骨が作られる中で、骨品制も全般的に再整備された。聖骨が出現して骨品の構造は全体で八品となったが、この頃に頭品の分化も共に行われたからだ。真平王の代に多くの官府と官職が置かれたので、それにしがつて身分や官等制との関係も再設定して運営しなければならなかった。そのような関係を再定立する過程で、骨品制の運用は一層厳しくなった。それはまさに官僚制を整備する過程でもあった。新羅の官僚制の発達史において、真平王代に格別注目すべき理由である。

骨品制は、真平王の代に行政官府を整備して新しく見直された。聖骨が誕生した頃には、骨品制の整備作業は一段落していたようだ。それは薛闕頭(ソルゲドゥ)の事例から確認できる。薛闕頭は漠然と衣冠(ウィグアン)という身分の子孫になっているが、その行いからして具体的には六頭品と推定される。彼は友人と集まったとき、新羅では人に対して骨品を論じるためその種族でない限り才能と手柄があっても克服できないと不満を言い、621年新羅を去って中国に行ったという。薛闕頭がこの頃、そのような不満を持ったのは、7世紀初めには骨品制に対して諸般の整備作業が行われていたことを意味する。六頭品の地位が、それによって一層低くなったことに対し不満を表したのである。

このとき骨品制が新しく確立されるうえで追い風となったのは、官僚制の整備と聖骨の誕生である。頭品の整備が官僚制と関係があるなら、骨品の整備は真平王が王位を継承することを目的に推進した聖骨の出現と直結するものだ。骨品制は官僚制と結合して一層厳しく運用された。真平王は王位継承を推進して息子を産もうとしたが、それがうまくいかないと、神聖な家族という名の下で聖骨という新しい骨品を作り出した。それは、まさに神聖な家族の範囲内で王位を受け継がせるための意図だった。しかし、それが順調に進まず、ついに問題が発生した。

4

新しい支配秩序の
志向

善徳女王の即位と金春秋・金庾信

真平王は、過去に経験した過ちを二度と繰り返さないように、直系の者に継承させようとした。そうしてこそ、自分が積み上げた課業を安定的に続けられるからだ。しかし、結局息子を産めないと、娘にでも受け継がせようと思い活用したのが聖骨の観念である。一人になった長女の徳曼を承継の対象と考えた。自分の実弟の伯飯と国飯は既に亡くなっていたようだ。たとえ彼らが生存していても、真平王としては自分の直系に継がせようとした可能性が大きい。

真平王は、徳曼に王位を継がせるための作業を着実に推進した。そのように期待できたのは、官僚制を整備して国王中心の支配体制が強化されたからであり、自分自身が長期間在位したということも大きく影響した。自らが構築した支配体制が、大変深く根を下ろしていたため可能なことだった。

しかし、真平王が高齢になって亡くなる頃が近づくと、徳曼が即位することに反対する動きが起こった。真平王が亡くなる直前の631年、伊滄の柒宿(チルスク)と阿滄の石品(ソクプム)が謀反事件を起こした。事前に発覚した首謀者の柒宿は捕まって東市で斬刑になり、九族が滅族になる厳罰を受けた。石品は百済に逃げ

たが、家族に会いに戻ってきたとき捕まって死んだ。彼らを厳しく処した理由は王位継承に反対したからだ。反発が続く事態を予防するための措置でもあった。柒宿の謀反は企みで終わったが、徳曼の即位については議論があったことを示している。実際、女王が即位するのは前例が全くないことだった。男性が継承することを当然視していた雰囲気、女性の即位が順調に進むわけがなかった。どんなに対策を徹底しても簡単に終わることではなかったのである。

632年に真平王が亡くなると、願っていた通り徳曼が王位について善徳女王になった。しかし、即位するまでは困難な紆余曲折があったと思われる。その状況をいくつかで整理してみよう。

第一に、厳しく統制・管理をして事前に問題を整理した可能性である。柒宿の謀反事件を鎮圧したのがきっかけだった。真平王が長い間積み上げてきた支配体制が、それだけ整備されていた。第二に、先に述べた神聖な家族や、そこから出てきた聖骨意識の名分が、ある程度は効果があった可能性もある。聖骨意識は即位はもちろん、議論を鎮める上でも適切に利用された可能性が大きい。第三に、金春秋や金庾信のように善徳女王を積極的に支持する勢力の現実的な力が、いくらか影響した可能性だ。彼らはかなりの実力を備えた状態だったため、強い反発もある程度治められたはずである。

このようないくつかの要件が作用しただろうが、反対派がついに女王の即位を受容したのは、支持派が掲げた妥協案を受け入れての結果だった。女王が即位することは、今回だけで終わる過渡的な事件だ。特に、善徳女王は高齢で病弱であったため、新しい後継者を決めることも遠い未来の話ではなかった。すると、新しい承継者が必要となるが、その場に最も適切な者は上大等だった。よって、上大等を置いて交渉をしたのである。

真平王10年(588年)に上大等の弩里夫が亡くなってから、その後を継いだのは伊滄の首乙夫(スウルブ)である。首乙夫は真平王7年、三つの宮の内、梁宮の私臣となった首盼夫(スハルブ)と同じ人物であるか、またはその名前からして一定の関係がある人物と思われる。これは、当時国王の側近を上大等に任命したことを意味するが、その後は長い間、上大等を任命しなかった。真平王は首乙夫の次の上大等を任命せず、空席にしておいた可能性が大きい。だが、40年ぶりに善徳女王が即位する年に、乙祭(ウルジェ)を上大等に指名し国政を総括させた。その後は

上大等をほぼ欠かさず任命したので、乙祭の任命がその始まりとなった。長い間空席だった上大等に乙祭を任命したことが、善徳女王の即位と共に行われたことはただ事ではない。このときの上大等が復活したことは、善徳女王の即位を受け入れることに対する反対給付として、反対派に譲歩したのだった。そのような意味で、善徳女王が即位したことは、上大等の任命と共に行われた反対派と支持派間の妥協の結果といえる。

互いに対立する二つのグループが妥協をしたのは、いざ葛藤が爆発して内乱に広がる可能性があったからであり、そうなると新羅の未来は保障できなかったからだ。それに、百済と高句麗がそれぞれ強く圧迫するだけでなく、中原を統一した唐が周辺勢力を屈服させて東アジアの政局には不安な機運が漂っていた。そのような状況で内乱が起きたら、極めて危険な状況になる可能性がある。ここで対立していた二つの勢力が一旦妥協し、他日を期することにした。

女王の即位に強く反対した勢力は、当然伝統的な貴族である。彼らは国王を頂点に権力が集中する集権的な支配体制に反対した。部体制の運営を受け継いだ会議体を通じ、貴族の発言権を貫く体制を求めた。上大等という妥協案を容易に受け入れたのも、まさにそのためだ。上大等を媒介に国王を牽制し、貴族の立場を代弁しようとした。これによって、上大等の役割も変わり、しばらく上大等には貴族の立場を代弁する人物が指名された。

女王の即位を積極的に支持した勢力は、伝統的な貴族とは違う立場だ。彼らは国王を頂点とする支配体制の強化を積極的に推進した。その中には伝統的な貴族ももちろんいたが、それとは全く違う理念と志向を持った勢力もいた。言い換えると、女王の即位を支援する勢力は極めて複雑だった。しかし、その中で著しく目立っていたのは、新しい時代を切り開こうとした金春秋と金庾信の一派だった。

金春秋は、国人によって廃位になった真智王の孫で、父は龍春(または、龍樹)である。彼は、真智王が廃位にならなかつたら当然後を継いで即位したはずの人物だった。ただ、彼には父真智王の廃位だけでなく、出生にも若干疑わしい問題がある。真智王が廃位になったときの名分と年齢、そして桃花女の説話からして、龍春の出生は当時公認された婚姻の手続きを経た者ではないようだ。桃花女で表現した女性との間で生まれた私生児で、遺児であった可能性が高い。にもかかわらず、彼は真平王の庇護の下で宮中で育てられた真骨の貴族であることは確か

だ。出仕してからは内省の私臣にまで任命された。ただ、彼は正常に即位できる資格があったとは思われず、伝統的な貴族からは常に牽制を受ける立場だった。真平王の次女天明と婚姻はしたものの、根本的に資格が回復したわけではない。それは二人の仲で生まれた金春秋もやはり同様である。

金庾信の曾祖父は、金官伽倻の最後の王、仇衡(クヒョン)王である。金官伽倻系の子孫であったという点で、伝統的な貴族にとっては極めて異質な存在だった。彼の父の武力は、真興王の代に領土を拡張するために戦ったあらゆる戦争で先頭に立って戦功を立てた名将だった。彼は伝統的な貴族から常に激しく牽制された。金庾信の父は金舒玄(キム・ソヒョン)で、母は真興王の妹の肅訖宗(スクフルジョン)の娘萬明(マンミョン)だったが、二人の婚姻のストーリーや妹の文姫(ムンヒ)と金春秋の婚姻にまつわる物語は、そのような実情をよく示している。

このように金春秋と金庾信は両方とも似たような出生の問題によって、伝統的な貴族から常に牽制され疎外される立場だった。そのため、互いの事情を察し合っ

揺れる集権体制と唐との外交

善徳女王は、支持派と反対派の適切な妥協下で即位した。その後、二つの勢力が妥協したことによる牽制と均衡状態が続いたので、善徳女王の代にはこれといった改革的な施策を展開することは困難だった。現状を維持するのが最善策であった。善徳女王が異常に仏事に没頭したのも、このためである。政治的な構

造を改編することは、いざ牽制と均衡を崩すリスクがあった。

善徳女王の代は、まるで薄氷を踏むような状況で、それぞれが陰で未来の事態に備えていた。支持派と反対派は相互に牽制しながら、それぞれ機会を待ち望み力を育んだ。一触即発の危機の最中にいた善徳女王は、様々な圧力で辛苦な生活を送っていた。芬皇(ブンファン)寺や霊廟(ヨンミョ)寺などの寺院や瞻星台(チョムソンデ)のように、政治色の薄い事業に高い関心を注ぐしかない状況だった。

善徳女王は各種のストレスによって病が徐々に悪化した。在位5年目の636年には、いかなる薬も効かなくなった。そのため、健康を回復するために皇龍寺に高僧を呼び集めて「仁王経」を講論する百高座を開き、百人を出家させ僧侶になるのを許可した。「仁王経」には護国に関する内容が多く護国経とも呼ばれるが、善徳女王の回復がまさに護国だと認識していた。翌年、少数ではあるが百済の兵力が玉門谷(オクムンゴク)という領域の深くまで浸透した事件も、簡単に制圧はしたものの内外に不安感を与えた。また、しばらくして高句麗が漢江北部の七重城(チルジュンソン)に対して挑発したことも、そのような雰囲気さをさらに悪化させた。

しかし、善徳女王が在位して11年目になる642年、百済が兵力を大挙動員して洛東江西部の40余りの城を攻略する事件を起こした。これは全面的な戦闘に近い水準の戦争だった。新羅は深刻な危機状況と判断し、すぐ唐に援助兵を要請したが成功しなかった。百済は続いて、洛東江の西方面の軍事的拠点の大耶城(テヤソン)まで攻略した。洛東江流域のかつての伽耶の領域は、ほとんど百済の手に渡った。百済の武王が600年に即位してから、智異(チリ)山のふもとを中心に少しずつ占領した結果である。王都からそれほど遠くない地域に戦線が形成されると、新羅の内部では大きく不安感が漂った。新羅と百済は全面戦争に飛び火しそうな兆しを見せた。641年に即位した義慈(ウィジャ)王は、翌年自分に反感を持つ政治勢力を除去する宮廷クーデタを断行したが、それによる不安を宥めるために新羅に対して挑発したのである。

大耶城の陥落はそれ自体でも新羅にとっては少なからぬ打撃だったが、総司令官の大耶城の君主が金品積(キム・プムソク)である点が大きな問題だった。彼は自分が王京から連れて行った幕僚の妻だけでなく、地方の有力者の妻を欲しがり、内部の結束力を深刻に害した。それに、百済が攻めてきたとき、品積は自分の妻と共に城から出て降伏しようとした。大耶城出身の竹竹(チュクチュク)が最後

まで抗戦することを主張したが、それを振り切って生き残ろうと降伏したが殺されてしまった。彼が地域の総司令官として見せた行いは、当時一般の人々も普段守るべき徳目とされた世俗五戒の内容とは正反対だった。大耶城を失った責任はもちろん、彼の行いは当然非難の標的になったはずである。

しかし、品積は当時善徳女王を支持する勢力の片方の軸、金春秋の婿だった。金春秋は、すぐに政治的に劣勢になり、婿が娘と共に死んでしまった悲しみを宥める余裕もなくなった。長い間維持してきた勢力のバランスは、崩れる危機に直面していた。反対派が彼をそのまま放っておくわけがなかった。金春秋は、どういう形にしる積極的な姿勢をすぐに取らざるを得なかった。善徳女王に対し、自分が高句麗に直接行き、援助兵を要請し、大耶城の戦いでの敗北を雪辱すると懇請した。ちょうどそのとき高句麗では淵蓋蘇文(ヨンゲソムン)が政変を起こし、栄留(ヨンリュ)王を退けて寶蔵(ポジャン)王を立てて政権を左右しているところだった。新羅とは長らく敵対関係であっただけでなく、内外で強硬な立場を取っていた淵蓋蘇文が執政している限り、高句麗が彼の要求を受け入れるはずはな



写真7 陝川大耶城遠景

かった。そのような状況で、金春秋が援助兵を要請しに高句麗に行くことは、ある可視的な成果を上げるためというよりは、危険を押し切った行為そのものが彼への非難を鎮めると同時に、高句麗内部の事情を偵察するための目的であった可能性が高い。高句麗は、漢江方面の竹嶺(チュクリョン)一帯の土地をすぐ返還するよう無理な要求をした。淵蓋蘇文は、これを断った金春秋を獄に入れた。金春秋は高句麗に入るとき、起こるであろう状況を予め予想して準備をしておいた。彼は高句麗の内紛を適切に利用して、賄賂と策略で無事に脱出できた。

高句麗との交渉に失敗した新羅は、唐に目を向けた。643年には相次いで唐に使節を送り、緊迫で危機的な状況を助けてくれるよう繰り返し要請した。このとき新羅は、百済が高句麗と連合して攻撃したため、滅亡が目先まで来ていると切実に訴えた。百済が高句麗と連合したことを格別に強調した理由は、唐をすぐに挑発させるための策だった。これに対し唐太宗は、新羅の使節を慰労しながらも、三つの策を提案して選択するよう強要した。一番目は、唐が小規模の辺境地の兵力と契丹・靺鞨の兵力を動員して攻撃すれば一時的には危機を乗り越えられるということ、二番目は、数千の赤い服と旗を新羅に与え、高句麗と百済の兵力が到着したときそれを広げて見せると唐兵だと思い逃げるだろうということ、三番目は、百済が新羅を侮るのは女が王であるからなので、唐の王族を派遣して新羅の王に代替すれば直接数百隻の軍船に兵力を乗せて送ってくれるとのことだった。新羅の使節は三つの内どれをも選択し難かった。すぐには三番目の策が切実に求められるものの、それには唐の王族を新羅の国王にしなければならないという条件が付いていた。唐太宗は、どうすることもできず戸惑っている使節を、凡庸で能力がないと詰問した。

実際、唐の内部では、高句麗を狙った全面戦争を既に決定して推進していた。640年に高昌を征服すると、残りの強敵は高句麗だけとなった。唐は高句麗を容易に屈服させるために、多くの情報を収集して動向を精密に観察するなど、事前準備を徹底して行っていた。過去に隋が三度も高句麗への遠征に失敗した経験とその結末をよく知っていた唐としては、そのような過ちを繰り返さないために徹底して備えていた。そのため、唐太宗が提案した三つの策は、事実上は断るための名分に過ぎなかった。唐が遠からず実行に移そうとしたのは、新羅にとっては何の効果もない一番目の策だった。

しかし、いざ唐太宗が言ったことは、新羅の朝廷に少なからぬ波紋を広げた。唐が援助兵を送る条件として掲げた女王の統治に関する問題だ。後日、これが「女主不能善理」という表現を作り出した。これを女王の反対派が攻勢の主な名分として活用し、その内容が使節を通して新羅国内に伝わると世論が沸き立った。ただでさえ百済の攻撃で不安な内政がさらに混乱した。善徳女王が即位するとき構築された牽制と均衡の原理が崩れ、一触即発の危機状況を迎えていた。

皇龍寺に九重塔を建立

新羅が百済の攻撃で危機に陥って唐に援助兵を要請した頃の643年3月、求法のために唐に渡っていた慈蔵が5年間の生活を終えて帰国した。それは善徳女王が唐太宗に要請したからだ。善徳女王は、慈蔵が当面の危機を打開できる適任者だと考えた。善徳女王は慈蔵が出家する前にも、空席の台輔(テボ)という官職を務めて欲しいと無理に勧めたほど信頼していた。もし受け入れなければ、慈蔵の首を切ることもあり得ると脅迫した。善徳女王は、当時葛藤していた勢力が牽制・対立する中、危うい政局を乗り切るのに慈蔵ほど適切な人物はいないと思った。しかし、慈蔵は一日たりとも戒を守れなくなるなら、死も受け入れるしかないと言明し、断固として拒否した。善徳女王は仕方なく出家を許容するしかなかった。

慈蔵の父、茂林(ムリム)は真骨の貴族出身で、彼の家系は当時最も有力な家柄だった。茂林には子孫がいなかったため、千部(チョンブ)観音に息子が生まれたら出家させると祈って慈蔵が生まれたという。慈蔵は官僚として活動し、結婚して子供ができてから出家を決断した。きっと彼が官僚として見せた能力を善徳女王がよく知っていたため、台輔に付かせようとしたようだ。

慈蔵は5年間唐で生活し、当初目的とした求法活動を繰り返し広げたことはもちろん、長安に行って太宗と会い、もてなしを受けることもあったそうだ。彼は唐内部の動向全般に関する情報などをよく知っていた。新羅が百済の攻撃で危機に直面していて、唐に使節を送り兵力を要請した事実についてももちろんよく知っていた。慈蔵が太和池に到着したとき、神人(シンイン、または、円香(ウォンヒャン)禪師)が、新羅は女が王になって徳と威厳がないから隣国が攻めてくるので、戻った

ら皇龍寺に九重塔を建立すると隣国が相次いで降伏するという策を伝えたとする内容の説話が残っている。これは慈蔵が新羅の様々な状況をよく知っていて、対策まで予め考えて帰国したことを意味する。帰国そのものが善徳女王の要請によるものであるなら、当面した危機を克服できる方法を、当然慈蔵から諮問を受けようとすることを予想できたはずである。これは、善徳女王の慈蔵に対する期待がそれだけ大きかったことを意味する。

慈蔵は帰国するとすぐに善徳女王に対し、皇龍寺に九重塔を建立するよう建議した。そうすると新羅の周りの九夷が自ら服属するという名分を掲げた。新羅最初の九重塔を建立することを、安弘(アンホン)という僧侶が既に提言したことがある。中国に長い間留学した経験のある安弘は、625年に帰国してから似たような名分を掲げて九重塔の建立を提案した。安弘は隋の文帝以降、中国で行われた様々な仏事を経験し、そのような主張をしたと思われる。しかし、当時は新羅が大きな危機に直面した状況ではなく必ず必要なものではなかったため、簡単には受け入れられなかった。慈蔵も出国する以前からそのことをよく知っていたはずだ。今回は、色々と新しい情報と共に戻ってきた慈蔵が、当面した内外の危機を克服する方策として皇龍寺に九重塔を建てることを建議すると、容易に受け入れてもらった。慈蔵は当然起こりうる反対を宥める方法として、そのことがもたらす効果を神人から予言として聞いたかのように作り立てたのだ。善徳女王も当面の危機を乗り越えるこれといった方法が特になかったので、とりえず慈蔵の建議をすぐに受け入れた。慈蔵を大いに信頼していた上に、善徳女王の政治に反対する勢力も仏教を支配のイデオロギーとしていたため、そのことに簡単に同意したのである。

実は、慈蔵が九重塔建立を推進した背景には、もうひとつの政治的な目的があった。当時新羅が置かれていた内外の事情を考慮すると、大規模の仏事はいくら慈蔵が建議したことだとしても大変無謀なことのように思われる可能性もあった。悠長に大工事を敢行できる状況ではなかったからである。新羅にとっては、軍備を増強して目先の百済の攻勢に備えることが何よりも急がれる課題だった。国の中心的な寺院の皇龍寺に九重塔を建立するからといって、必ずしも内外の緊張がすぐに和らぐという保障もなかった。にもかかわらず、莫大な経費をかけてまで九重塔を建てようとしたのは、新羅内部で政治的意図があったと考えられる。

こうした側面でまず注目すべきことは、百済から最高の技術者を招聘したとい

うことだ。新羅は百済に数々の宝物を提供して職人を送ってくれるよう要請した。百済は新羅の提案を受け入れ、阿非知(アビジ)という職人を送った。新羅に対して積極的に攻勢をしかけていた百済が、新羅の要請を素直に受け入れたことにはそれなりの意図があったのだろう。義慈王が主導した政変によってもたらされた内部の不安定な状況がまだ完全に解決されていない上に、新羅を攻撃して確保した領土を体系的に整備管理するためには一定の時間が必要であった。そのとき、新羅が職人の派遣を要請してきたのである。百済としては、それ自体が、新羅が一旦敵対しないという意志表示であり、あたかも休戦を提案したかのように受け入れた可能性が高い。新羅が軍備よりは別の方面に目を向けたことも、百済にとってはプラスになると判断して要求を受け入れた。

新羅が狙ったのは、まさにそれだった。九重塔を建てて、また職人を要請することで百済の対応と動向を観察し、緊迫した状況を少しでも回避しようとしたのである。仮に計画通り行われるなら当分は休戦状態になるため、一時的にせよ危機的状況から脱してその間に内部の安定も図れると判断した。莫大な経費を投じて九重塔を建立した背景には、そのような意図があった。結果、両国の利害関係がかみ合い、阿非知を派遣したことでしばらくの間休戦状態になった。

一方、それと共に内部から安定を図ろうとする意図もあった。唐からの「女主不能善理」という諜報は大きな波紋を広げ、ともすると外部からの危機より内部の分裂がより深刻は状況だった。善徳女王を支持する勢力が一層不利になった。内外の危機を克服する目的で行った外交活動が、むしろ国内の事情を悪化させたのである。手を付けられないほど広がった世論を鎮めるために、適切な措置を取らなければならなかった。外からの脅威に加え内部でも激しい分裂が続くと、新羅



写真8 慶州皇龍寺址九重木塔刹柱本記

は滅亡するかも知れないという認識も広がった。反対派が九重塔を建立することに同意したのもそのためだった。表面では外部勢力の屈服という名分を立てたが、実際は国内の分裂を鎮めることが、九重塔を建立する主な目的だった。

この事業を推進する実務の総責任者に、金春秋の父、龍春が任命された。龍春は小匠二百人を率いて、慈蔵が提案した九重塔の建立を主導した。龍春は善徳女王の側に立った人物で、慈蔵とは同じ立場であったため、九重塔の建立は事実上、善徳女王の支持勢力が主導したことになる。ただ、慈蔵と龍春、春秋は既存の新羅社会に対する根本的な認識や目指す方向まで同じではなかった。その点は、後日金春秋が執権に成功すると明らかになる。九重塔を建立することは、女王の反対派も合意して当面の新羅の危機を克服し、内部の安定を取り戻すため世論の結集を狙う意図が強かった。

このように見ると、皇龍寺に九重塔を建立する事業そのものは、仏事ではあるが実は政治色の強い行為だった。善徳女王が内外で当面した危機と試練を克服するために、慈蔵の建議を受け入れて一種の勝負をかけたのである。これは、皇龍寺を修築することであると同時に、政治と仏教の一体化を改めて実現しようとする目的もあった。女王の政治に反対する勢力までも賛成したのは、そのためである。しかし、それを通じて狙っていた目標はそれぞれ異なっていた。それは、唐による高句麗侵攻という一大事件と、その結果で露出することになる。

毗曇の乱と新たな指向

皇龍寺九重塔の建立がほぼ終わりかけた頃、状況が一変した。唐が高句麗を全面攻撃する作戦を展開しようとしたのである。唐は、640年に高昌を滅亡させてから、今や高句麗だけを残していたので、攻略の準備に拍車をかけた。唐は641年に大徳という使節を送って、高句麗の辺境から王都に至るまでの地形と地勢、軍事状況をひとつ残らず把握した。彼は任務を終えて戻ると、『高麗記』という報告書を唐太宗に提出した。

このように唐が高句麗との全面戦のために事前の準備を徹底して進めたのは、隋の失敗を繰り返さないためだった。隋の煬帝は建国して間もない頃、高句

麗を三度も無理に攻撃して、その失敗の後遺症で滅亡に至った。また唐もまだ建国して間もない状態だったため、基盤がそれほど強固ではなかったのである。それに、太宗が即位するとき起こした政変の影響も完全に消失していない状況だった。敢えて高句麗への攻撃を敢行しようとしたのも、これを成功させて内外の問題を整理しようとする意図があったからである。太宗が直接遠征に出たのも、こうした目的があった。

唐太宗は、完全な勝利のための準備作業の一環として、644年にまず司農丞という職の相里玄奘を高句麗に送った。これは、高句麗内部の動向を把握させると同時に、戦争の名分を探すためだった。相里玄奘はその直後の645年の初め、百済と新羅に太宗の詔書を伝え高句麗への遠征に参加するよう促した。これに対して両国は違う反応を見せた。百済は唐の要求に従わず、むしろ高句麗への攻撃が始まるとその隙を狙って新羅を攻撃した。しかし、百済と違い新羅は唐の要求に応え、3万または5万の兵力を派遣した。『新唐書』に5万と出ていることからして、これは新羅が唐に対して公式に通報した数値であると思われる。

しかし、新羅の派兵が簡単に決まったわけではない。派兵そのものをおいて内部で大きく議論が起こった。百済が攻撃するかも知れないと懸念する反対派と、唐の強い要求を断れないという賛成派の主張が対立した。表面では派兵の人数を5万としたが、実際は3万ほどを送ることでひとまず妥協したようだ。百済との戦いに備えての措置だった。そして、懸念していた通り、百済が隙を狙って西部の辺境にある七つの城を陥落させる事態が発生した。それに、太宗の高句麗への親征も失敗に終わってしまった。これによって、新羅の内政は責任問題をめぐり大混乱に陥った。出征が終わる頃の645年11月、伊滄の毗曇(ピダム)が上大等に任命されたことは、これと関連して無視できない事件である。

善徳女王5年(636年)に任命された前任の水品(スプム)の行方は明らかでないが、毗曇が645年に上大等に就任した。前後の状況からして、毗曇が上大等に任命されたことは、出征事件と関連があるようだ。特に、その後の毗曇の行方まで念頭において考えると、彼の上大等就任は出征によるものであったに違いない。

戦争の結果を受けて、兵力の派遣を強く主張した側の立場は当然不利になった。派兵による被害規模は確かではないが、敗戦そのものに加え百済に領土を奪われたことは問題だった。したがって、参戦を主張した勢力が弱体化した。これ

を落ち着かせるために出した一種の交渉カードが、水品の代わり、または空席状態の上大等に強硬論者の毗曇を任命することだった。唐に積極的に接近するなど外交活動を推進した方が女王を支持する勢力で、参戦を積極的に主張した方もやはり彼らだった。参戦に反対した方はやはり女王の反対側に立った者で、最も積極的に反対論を展開した代表的な者は毗曇だった。そんな毗曇が上大等になったことで、ひとまず一触即発の緊迫な状況は乗り越えたが、実情はいつ内乱が生まれてもおかしくない状態だった。毗曇側がそのような折衷した提案を受け入れた理由は、次の王位を受け継ぐ上で最も有利な座が上大等であったからである。善徳女王が遠からず亡くなると予想されていた状況も、そのような決定の受け入れに作用した。

内部の葛藤はしばらく落ち着いていたが、影では絶えずもめていた。問題は、善徳女王が亡くなってから、どのようにするかにかかっていた。反対派は二度と女性が王位についてはならないという立場だった。名分は、唐太宗が言った「女主不能善理」だ。一方、まだ即位することは厳しい状況の金春秋を中心とした女王支持派は、聖骨の男性が存在しないという「聖骨男尽論」を名分に、善徳女王の四親等の勝曼(スンマン)を推した。この点に関しては、両方の間で全くの譲歩や妥協はなかった。両方の立場が激しく対立する状況で、金春秋が倭に渡った。646年9月、新たに発足した倭の大化改新の政府で、改革を率いた主な人物の高向玄理が新羅を訪問した。彼が12月に帰国するとき、金春秋も答礼としての訪問を名分に共に倭へと向かっている。金春秋が倭に渡航できたのは、対立していた両派の合意によるものではあるが、その根底には違う狙いがあった。

「女主不能善理」派は、金春秋不在の隙を利用して、大きな計画を立てていた。「聖骨男尽論」派は、倭を相手にした外交的な目的以外に、女王の即位に関する動向と情報を把握する狙いもあった。倭では東アジアで初めて593年に推古天皇が、また642年には皇極天皇が天皇になるなど、既に二度も女帝が承継する経験をしている。倭で女帝の即位が可能であったのは、その直前に正統な後継者が不在のまま天皇が亡くなって、戦争が起こる危険性が大きかったため、一種の妥協策として皇女が即位したのである。これはあくまでも特殊な状況の過渡的な対処方法であった。645年に大化改新の推進派が執権に成功すると、皇極天皇が即時に退いたことはそれを裏付けている。そのような情報は、女王支持派にとっては

良い名分だった。金春秋は答礼使としての倭への渡航という形式的な名分を立てたが、実はそのような実情と動きを把握するのが本来の目標だった。

女王支持派の先鋒である金春秋不在の間に、上大等の毗曇は647年1月初め、廉宗(ヨムジョン)などを扇動して、明活山城を拠点に自ら即位しようと反乱を起こした。もちろん、「女主不能善理」を名分にした。ここでいう女主とは善徳女王はもちろん、その後真徳女王を推戴しようとしたことに対する反発でもあった。善徳女王は、乱が始まる時点の1月8日に亡くなった。善徳女王は殺害されたわけではない。既に高齢で病弱だったので、反乱が起こるとその衝撃で亡くなった。善徳女王を継いで勝曼が即位したが、それが真徳女王である。

毗曇の乱は1月17日まで、十日余り続いた。支配する貴族が大きく二つに分かれて、王京全体が反乱の渦に巻き込まれた。最初は毗曇派が優勢で、王軍の拠点月城を囲んで攻撃した。王軍の勢力が弱まった際、名将の金庾信が知恵と策略を発揮して兵士の士気を高め、ついに危機を克服した。1月17日になると状況が完全に逆転し、王軍は毗曇の反乱を鎮圧した。新しい政権が発足すると、毗曇の乱に直接加担した首謀者30人と彼らの九族まで連座して殺すなど、厳刑に処した。これは、今後反乱が再発しないようにする、警告措置であった。そして、これが、事実上新しい時代の幕開けとなった。



第II篇

新羅の 三国統一と 展開

三国統一と中代の支配体制

下代の開幕と展開

新羅の滅亡

第1章

三国統一と
中代の支配体制

金春秋の執権と中代における王権の成立
百済・高句麗の滅亡と三国統一
中代の支配体制と運営原理
仏教教学の発達と文化の成熟
国際関係の変化と中代における王権の没落

1

金春秋の執権と
中代における王権の
成立

金春秋に対する極端な評価

『三国史記』によると、新羅人は自国の歴史を上代、中代、下代の三つの時期に区分して、太宗武烈(テジョンムヨル)王以降からその直系が即位した恵恭(ヘゴン)王(在位765―780年)までを、新羅の中心的な時期「中代」に設定したという。これは新羅の人々が太宗武烈王、つまり金春秋が執権した時期を、新羅の歴史を展開する画期的な分岐点として認識したことを示す。現在、歴史学会でも新羅の「中代」を政治的な安定と文化的な繁栄を享受した、新羅最高の全盛期と理解している。

金春秋が生きた7世紀前半は、東アジア全体が激動の時代だった。隋と唐が五胡十六国以降、長い間分裂していた中国地域を統一して周辺部に力を誇示すると、5世紀以降東アジアの各国が勢力のバランスを取って安定を保った国際秩序は脅かされることになる。強力な隋と唐の登場に対抗するため、高句麗は契丹と靺鞨の部落の統制を強化し、また新羅に奪われていた漢江流域を再び取り戻そうとする戦略を樹立するなど、590年以降の新羅と高句麗は過去とは比較にならほど厳しい戦争状態に突入した。さらに、高句麗が新羅の北方を襲った隙に、百済も新羅の西方を攻撃して、洛東江方面に東進した。

金春秋は、緊迫に展開するこのような国際情勢の変化に能動的に対処し、新羅が置かれた国内外の問題を解決しようとした。彼は、王道政治に基づいた儒教の政治イデオロギーを受け入れ、新羅の中央集権体制を刷新し、新羅と唐との軍事同盟を結んで三国統一の戦略の基礎を整えた。金春秋は、単に唐の力に頼ったのではなく、新羅の安全と発展のために、唐の進んだ国家体制と東アジア戦略を直視して活用した。金春秋は、その後300年を維持した新羅の政治、経済、外交、文化の新しい模範を作った。

もちろん、唐という外勢を取り入れて、同族国家の百済と高句麗を滅亡させた裏切者「背族者(ペジョクジャ)」であると、金春秋を激しく非難する評価を始め、金春秋の政治・外交的行いを極めて否定的に捉える認識が今でも学会に蔓延している。しかし、金春秋の行動に「背族」という近代的な民族主義の基準を適用するのは無理なことである。金春秋の親唐外交を「慕華主義」や「外勢依存」としてのみ評価するのは、彼が外交で追求した究極的な目的を正しく理解していないからである。

春秋と毗曇、名前が語る歴史

金春秋が太宗武烈王として即位したのは654年だが、彼が実質的に新羅最高の権力者に浮上した時点はそれより先の、上大等の「毗曇の乱」を鎮圧した647年のことである。「毗曇」は仏教の大乗経典の名前である反面、「春秋」は孔子が書いた歴史書で儒教を代表するものである。7世紀前半、新羅政界のライバルだった二人の指導者の名前は、このようにそれぞれ仏教と儒教から借用した。毗曇の没落は、新羅の政治イデオロギーが仏教から儒教に転換する「時代の変化」を暗示しているようにみえる。毗曇が仏教を支配のイデオロギーにした理想国家で「真骨連立」の王国を目指したのに対し、春秋は儒教的な王道政治に基づく「国王中心」の集権体制を確立させることを政治的な目標とした。

もちろん、当時新羅では、依然、支配イデオロギーとして仏教が根強く残っていた。仏教的な理想の君主「転輪聖王」や「王即仏(王は即ち仏である)」の思想を通じ、仏教も新羅の王権強化に大きく貢献している。また、花郎徒でも僧侶が花郎を補佐して、郎徒を教育・善導するなど国の発展段階で起こる人間社会の葛藤や

矛盾を宗教的に癒して新羅人の団結を導き出した上に、国家観を高めることにおいても大きな役割をした。とはいえ仏教は宗教であるため、当時新羅が置かれていた内外の危機を克服する正しい政治システムを確立する上で、大きな役割を果たせないという本質的な問題があった。

当時、新羅で儒学が徐々に政治と文化への影響力を広げたのもそのためだった。真平王代以降、儒学と中国の礼制は新羅の官僚組織を整備する上でイデオロギー的な基礎となっただけでなく、実生活で道徳を実践する原理にまで影響を及ぼした。仏教に儒教の思想を調和させて結合した円光の「世俗五戒」は、まさにそのような時代的な結果だった。また、612年(真平王34年)に二人の新羅の青年が3年間、詩経、尚書、礼記、左伝など儒教の経伝を学んで国に忠誠することを誓った「壬申誓記石(イムシンソギソク)」や、『寒い冬が来てこそ松の木と朝鮮松の気概が分かる』と言った論語の句が、当時新羅の支配層の格言として広く流行したことなどは、この時期に儒学が新羅社会にどれだけ深く浸透していたかをよく表している。特に、『お前は仏教を学ぶか、儒教を学ぶか』と問う父親の質問に、『仏教は世俗から離れた教理なので儒学を学ぶ』と答えた強首(カンス)の答えは、真平王以降高まっていた儒学の政治的な地位をよく示すものである。強首をはじめ、この時期に儒学を学んだ新羅の青年は、金春秋の革新的な政策と羅唐同盟の外交を支える最も重要な人材だった。

儒学が新羅で急浮上したことには、何よりも王権側が積極的に受け入れて普及させようとした意志が大きく作用した。儒学的な能力のある官吏は漢字や漢文に優れていたため、三国間の抗争の局面において税金を効率的に徴収して兵力を迅速に動員する文書行政システムを可能にした。しかし、儒学を受け入れた目的はこれだけではなかった。儒学の根本は「孝」にあり、この孝は究極的に「忠」に帰結する。「壬申誓記石」で儒学を学ぶことを誓った青年たちの目標も「国に対する忠誠」である。儒学は、「君君臣臣(君主は君主らしく、臣下は臣下らしくなければならない)」のように、臣下と決して同格にならない超越的な王権と、それに対して絶対的に忠誠することを、官僚の頭の中に容易に刻み込むことができた。また、王道は「文徳」だけでなく「愛民」のための「武徳」を兼ね備えなければならないため、戦争が民を没落させるのではなく、むしろ民を救うためのものだという政治的な扇動も可能にした。

「毗曇」のような仏教式の名前が流行っていた時代、彼らと区別される「春秋」という名前は、幼い春秋の自意識を形成する上で大きな影響を及ぼした。これは後日の金春秋の行動からもよく分かる。成人になると「字」という新しい名前をつける儒教の礼法「冠礼」が、新羅では金春秋の息子の名前から初めて確認できる。また、648年に金春秋が唐太宗と会って一番最初に要請したのも、唐の国学で行われる孔子に関する積奠と講論に参観することで、春秋が新羅に戻ってきてから国学建立の礎を築いたことは、儒学と中国の文化を受け入れようとした金春秋の態度と認識をよく示している。毗曇の乱以降、真徳女王の代に金春秋が断行した中央集権の官僚体制確立のための革新的政策や、礼制の受容、唐との親密な外交関係の構築などは、全て父の龍春が付けた彼の名前「春秋」から既に芽生えていたものといえる。

真徳女王の即位とその意味

647年正月、上大等の毗曇と廉宗など旧貴族の反乱を鎮圧した金春秋と金庾信は、政局を完璧に掌握した。毗曇は、「女王はうまく統治できない」と反乱を起こしたが、金春秋派はそれに屈することなく、善徳女王に続いてまたも女王を推戴した。真徳女王である。金春秋は当時疎外されていた下位骨品出身と地方出身の者を呼び集めて自分の勢力の基盤とした。また、彼らを国家の公的秩序に取り込むための官僚組織を拡充し、国王を頂点とする集権体制の確立を図った。しかし、これによって、従来の貴族連合体制を支持する真骨の大等勢力と葛藤が生じてしまう。

法興王以降、新羅の王は自分を「太王」と称し王権を強化するために努力したが、真骨の権門(クォンムン)が真智王を廃位させた事件からして、当時新羅の王権には制約があったようである。新羅国家とは、王を含む真骨勢力の共同支配の上に築かれた建物のようなものだった。王と真骨が、特定の地域に対する一定の支配権といえる食邑や禄邑の制度を通じて経済権と軍事権を分割支配し、その地域の再生産は真骨が責任を持つ方式、つまり国は王と真骨の権力が入り混じって運営された。真骨の連合体制は、生産力が不安定で自然災害に脆弱だった古代社会においては、王が全国を一元的に支配して国家財政の全般を総括するシステムよ

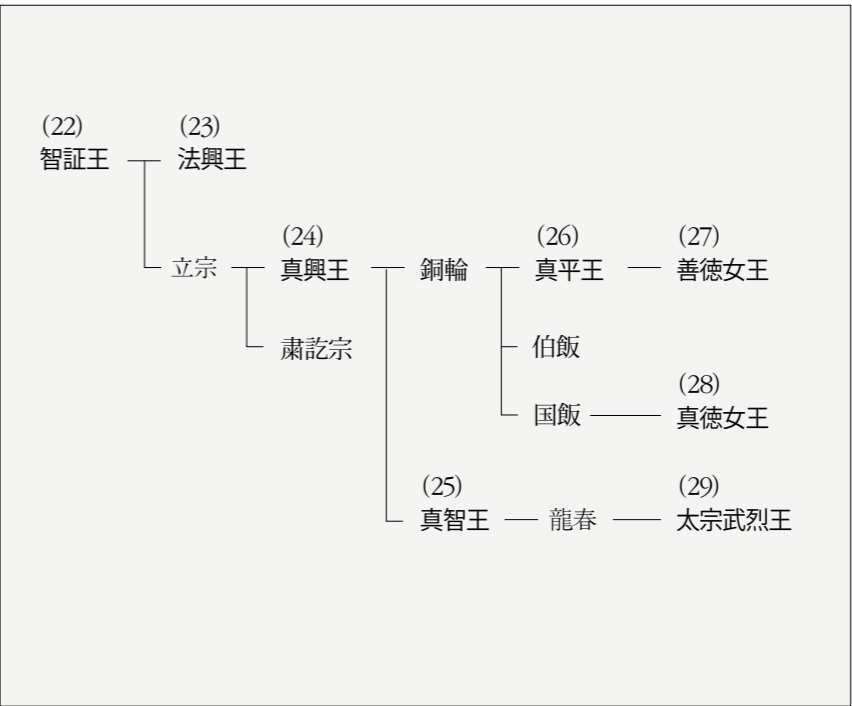


図1 真興王~太宗武烈王の王系図

りは、財政的な危機に対処する上で有利な点の多い、極めて柔軟な体制だった。

このような新羅の国家システムを維持するためには、真骨勢力の協力が必ず必要だった。王は独自で政策を決定せず、真骨貴族の「会議」を通じた協議を経て政策を決定した。また、この貴族の会議体の構成員「大等」という官職は、高句麗における大対盧(テデロ)の選任や淵蓋蘇文の家門における「部大人(ブデイン)」職継承の事例のように、真骨の家門から共同推薦を受けて王が追認する形だったと言われている。また、大等会議を主宰する上大等も、大等の中から王が任命したが、本質的には大等集団と同じ立場の存在だった。

真骨も王と同じように新羅国家の成長を望んでいたが、その結果を王室が国家の政治を独占し、王が真骨固有の特権や既存の真骨連合体制を毀損するのであれば、たとえ王であっても座視しえなかった。王権の成長に不満を抱いた真骨の大臣は、王権を補佐する金龍春・春秋の親子、金舒玄・庾信の親子など王党派の急速な成長に葛藤を抱いていた。

もちろん当時、真骨の大臣も大抵は中央集権の国家システムを確立すること

が、新羅が避けて通れない国家的課題であると認識していた。高句麗・百済と連日続く予期せぬ激しい戦争局面の中で、今のような真骨の権力分割体制は、国が総力戦を展開する上で大きな問題になりかねないことを真骨もよく知っていた。ところが、当時真骨の権門は、王室が改革局面を活用して王権を成長させ、これを基に自分たちの従来の固有の特権を奪う可能性もあるという不安と不信があり、真骨の貴族間でも互いに利害関係が絡んで解決策を見出せずにいた。

一方、善徳女王は高句麗と百済の侵略を外交的に防ぐため、積極的に親唐外交路線を推進したが、唐太宗は新羅に対し、「女が王であるから、百済が新羅を侮り攻撃が絶えない」と侮辱した。さらに、642年金春秋の婿の金品釈の乱暴な振る舞いと卑怯な降伏で大耶城を百済に奪われ、王室と王党派の立場はさらに狭くなった。大耶城は今の陝川(ハプチョン)地域で、洛東江西岸の軍事的要地にある。この大耶城をはじめ40余りの城が陥落し、新羅は昔の加耶の領土を全て百済に奪われた。その結果、小白山脈という安全な防御ラインを失って、洛東江を挟み百済と対峙しなければならなくなった。百済の軍が洛東江を越えると、首都の慶州がすぐ陥落するかも知れないという絶体絶命の危機に直面していた。

金春秋が命をかけて直接高句麗に行き、援助兵を要請する外交を展開したのも、このような孤立状態に追い込まれた新羅の王室と王党派の立場を改善するための対策だった。しかし、淵蓋蘇文は金春秋の要請に拒絶する。さらに、唐太宗による高句麗侵攻も、645年に安市城(アンシソン)における戦いで敗北し挫折してしまう。これに加え、唐の高句麗遠征の援軍としてと新羅軍3万人が高句麗を攻めて北進したが、その隙を狙っていた百済が新羅西部の国境にある七つの城を奪った。新羅の民心は動揺し、女王の指導力は地に落ちた。新羅の支配層の間では、高句麗と百済が協力して攻めてきたら滅亡するかも知れないという懸念が、現実になりつつあった。

このような新羅の政局の不安を一層増加させたものは、善徳女王以降、王位を継承して即位する聖骨の男がいなかったことである。真平王が最初から聖骨の男がいなかったため、王女の善徳を立てたように、彼が決めた狭い範囲の聖骨の家系の中には、善徳を継ぐ王位継承者は彼女の従妹の「勝曼(後日の真徳女王)」しかいなかった。真平王が臣下に強要した王位継承のやり方通りであれば、善徳の後を継いでもう一度女王が即位しなければならない状況になったのである。王党派は女王以

外には他の選択肢がなかった。しかし、善徳女王の親唐外交路線が効果を発揮できない状態では、真骨は再び女王が即位することを容認しえなかった。結局、上大等の毗曇は、「女王はうまく統治できない」ため、反乱を起こしたのである。

しかし、毗曇は敗北した。これは真平王と善徳女王が備えていた金春秋と金庾信の勢力のおかげである。上大等の毗曇の勢力を制圧した金春秋は、自分の政治的ビジョンを実践できる絶好の機会を手に入れた。毗曇の乱は、王権と真骨大等の対立と拮抗関係において前者が勝利し、新羅に中央集権体制が確立される決定的なきっかけとなった。金春秋は、「女王はうまく統治できない」という毗曇の主張を一蹴して再び女王を立てた。少し無理をすれば春秋が直接王になることもできたが、再び女王を即位させたことには、臣下は介入できない、新羅王権が象徴的に内外に標榜する神聖性と絶対性があったからだ。

金春秋の渡唐外交と親唐政策

真徳女王が即位した翌年の648年、金春秋は唐太宗に会うため60近くの年齢にもかかわらず直接中国に渡った。現実の権力掌握者が、難関の多い外交交渉に直接乗り出す危険を甘受したのは、ことの重大性と深刻さを示している。金春秋はまるで新羅の命運を、唐との外交の行方にかけていたようだ。彼は唐に渡ることが当面の内外の危機を克服し、新羅にとって将来の政策実現のために最善の道であると考えたのである。唐との外交交渉に成功して味方を確保することは、内部の安定を図るという意味があり、同時に、将来新羅の社会を新しく作り上げていく上で、中国の先進文化を学び取るという意味もあった。

そのような面でまず注目されるのは、金春秋が唐太宗と会った場で、唐の国学で行う積奠の儀礼と国学の講論教育に参観したいと言ったことである。積奠は孔子を称える祭儀の儀礼で、国学は儒教の教育の場である。このような春秋の提案は、儒学に夢中で中華を慕う姿を示し、太宗の心をつかもうとする外交的な修辞ともみられるが、新羅の国家体制を儒教の政治的イデオロギーに一新しようとする自らの夢と抱負を表したものでもあった。金春秋は既にはるか昔から儒学の教育を通じて人材を育成することに深く関心を持っていた。金春秋が外交的な目

的を明かす前に、先に唐の儒学やその教育に深く関心を注ぐと、唐太宗は自分が直接書いた碑文「温湯碑」と「晋祠碑」、そして新しく書いた歴史書の『晋書』を贈り、新羅の王に次ぐレベルの「特進」という官職を与えるなど、特別にもてなした。すなわち、春秋を将来新羅の君主になる人物として礼遇したのである。

金春秋は表面ではまず国学に高い関心を示したが、実際渡唐の目的は隠していた。従来新羅の使節が毎回唐に行って、高句麗や百済の攻撃からの守護を要請していたのとは一線を画す。金春秋の本音が気になった太宗が、むしろ唐に渡った目的を先に尋ねた。そのとき初めて金春秋は、まるで待っていたかのように、自分が考えていた新羅の事情を詳細に述べ始めた。このときの二人の会話は密約のように隠されていたが、偶然にも後日新羅と唐が激しく戦った羅唐戦争期に、その実態が明らかになった。新羅が百済の領土を手に入れ、唐に反旗を翻すと、唐の將軍の薛仁貴がこのことを咎める手紙を文武王に送った。これに対し文武王は、亡父金春秋が唐太宗と会ったとき、太宗が「高句麗を攻撃するのは土地や財物が欲しいからではない。百済と高句麗を平定したなら、平壤南部の百済領を新羅に与える」と直接約束していたという事実があるとする答申書を送った。

これは当時、唐太宗が金春秋と共に高句麗を征伐するために新たな戦略を立て、このとき唐が単独ではなく新羅との協力や軍事同盟を積極的に考慮したことを示している。さらに注目すべきことは、唐が高句麗だけを攻撃した既存のパターンとは異なり、百済と百済を順次征伐するという戦略に大きな変化があったことだ。しかし高句麗はこれまで新羅よりも頻繁に唐に朝貢の使節団を派遣していたため、太宗が百済を征伐することを先に言い出したとは思えない。これはもともと金春秋の考えで、高句麗への征伐に失敗した太宗の心をつかむために金春秋が出した外交交渉のカードであったと思われる。

645年、唐が高句麗を遠征した際に、新羅は3万人を動員して高句麗の南部を攻撃したが、百済はむしろこの隙を狙って新羅の七つの城を奪った。『隋書』に示されているように、既に唐太宗も百済が高句麗寄りであることに気付いていた。また、安市城での手痛い撤退を経験した太宗としては、遼河(ヨハ)に集中した高句麗の防御力を分散させ、平壤城を攻撃する際に最大の弱点といえる軍需品補給の問題を解決するために、新羅のより積極的な軍事援助が必要であった。結局、金春秋と太宗は高句麗を滅亡させるという互いの利害関係の一致を確認し、

このためには、まず百済から征伐して、高句麗を攻撃する上で新羅を南方の安全な基地にすべきとの新しい戦略に合意したのである。金春秋と太宗が会ったとき出兵する時期は決めなかったが、羅唐連合軍がまず百済を滅亡させ、その後高句麗を征服するという軍事作戦の計画は既に構想していたに違いない。高句麗より先に百済を征伐すべきだという金春秋の構想と提案は、彼の優れた外交能力を示すものである。百済は金春秋の巧妙な外交によって滅亡したといっても過言ではないだろう。

金春秋は、口頭の約束ではあるが、ひとまず羅唐軍事同盟という大きな成果を上げて帰国した。これで、金春秋の能力は十分に証明され、彼の政治的な存在感も一層増していった。

金春秋は帰国すると、支配体制を新たに構築する基礎工事に着手した。つまり、唐の制度を積極的に受け入れるようにしたのである。これには、唐との軍事的な同盟関係を内外で固めるための誇示という目的、自らの即位基盤の強化という二重の目的があった。その最初の試みとして、649年に唐の衣服制を受け入れた。651年に唐服を着た新羅の使節が倭に行ったとき、この唐服は外交摩擦を引き起こした。それだけでなく倭では新羅を攻撃しようという主張まで出てきたが、これは唐服を着用することの威力を示すものである。新羅の周辺国でも唐との同盟を認知し始めた。金春秋の狙いは一旦成功したといえる。

金春秋は、唐服の受容をはじめとして、諸般にわたる唐制度の受容に拍車をかけた。650年には真骨に牙笏を持たせ、独自の年号を使うことを諦め、唐の永徽の年号を受け入れた。同じ年に真徳女王が即位したばかりの高宗の治政を賛美した「太平頌」を直接絹に刺繍をして金春秋の息子法敏に持たせて送ったのも、唐との緊密な関係をより強固にするためだった。唐の官服と年号、そして太平頌を通じ、新羅は唐中心の天下の秩序に帰依したことを内外に宣言したのである。

国王中心の支配体制に向けた第一歩

金春秋が追求したこのような親唐政策は、実は外交戦略に留まるものではなかった。むしろ本質的な目標は、中国の進んだ政治イデオロギーと儒教的な礼

制、国家儀礼などを受け入れて王権を強化し、中央集権体制を確立することになった。金春秋は、真徳女王5年(651年)、大幅に政治を改革して、その第一歩を踏み出した。

金春秋はまず、既存の稟主を解体させ、「執事部」と「倉部(チャンブ)」という二つの独立した官府を発足させた。これは王の秘書としての機関と財政機関を一層強化したものである。執事部は、王政の機密を管理する王の直属機関だ。執事部は、王と行政を分担して執行する一般官府との間で、上からは王の王命を受け、下からは多くの官府を繋げて統制する地位を有していた。一方、倉部を別に設置すると同時に「賞賜署」という官署をその傘下においた。賞賜署は、国のために献身し功を立てた者に報奨を与えることを担当した。金春秋は、国王に忠誠を誓う者に物質的に正当な報奨をし、今後自分に忠誠を尽くす勢力を包摂・養成しようとしたことが分かる。金春秋は倉部を通して国の財政と経済を着実に掌握し、賞賜署を通しては士類(サリュ)と呼ばれる新人の学者を国に忠誠させようとした。

651年の改革で忘れてはならないのは、中央官署の組織を、令(長官)一卿(次官)一大舎一史の四等官制に組織化し、行政官僚を養成する国学の基礎を磨いたことである。もちろん、このときは教育職の博士、助教、そして下級職の大舎と史にそれぞれ2人を置く初歩的な官員の構成だったが、新羅における儒学教育を通じた人材養成の種は、金春秋がまず蒔いたことが分かる。国学を設置したことは、各官庁の職級を四等級制にしたことも密接に係わっている。四等級制は行政の指揮体制と業務を分けて効率的に行うためのものだが、これを支えるためには大舎や史などの実務行政を担当する人材を円滑に補充しなければならなかった。結局、国学は四等級制を実現するために必ず必要な基礎的な役割をしたと言える。

国学の前は、新羅では花郎徒が人材の養成を担当した。花郎徒の人材選抜は、真骨の子、花郎との関係によって決まった。これは貴族の推挙制ともいえるものだ。それに花郎と郎徒の間には、公的なものよりプライベートな関係の方が大きな比重を占め、これによって花郎によって推挙された郎徒は貴族の家臣のような役割を遂行した。結局、花郎徒は公的に官僚を選抜するための過渡的な制度だった。新羅を儒教の政治イデオロギーに基づいた国王中心の官僚体制に転換しようとした金春秋には、花郎徒の制約を補える新しい人材養成システムが必要となったが、それが唐太宗と会ったとき積奠と講論への参観を要請する形で表れ

た。そして、帰国するとすぐに新羅において国学の土台を設けた。

しかし、真徳女王の代に断行された金春秋の国学設置の過程を見ると、国学という名称を使っていたかも定かでなく、職級が低い下級行政職だけを設置するなど初歩的な水準に過ぎなかった。これは、金春秋が国学を全面的に受け入れることに現実的な負担を強く感じたからだと思われる。毗曇勢力は除去したが、内部にはまだ金春秋の改革に反対する真骨が残っていて、さらに三国統一の戦争の最中という状況で反対勢力との葛藤を甘受してまですぐに推進するよりは、国学設立の基調を維持しながら政局の行方を見守ったものと思われる。結局、国学は金春秋の孫の神文王の代に完成した。

真徳女王5年には、王宮の侍衛府も設置された。侍衛府は国王を警護する禁衛(クムイ)軍のことである。このとき侍衛府には、三徒、つまり三つの部隊が設置されたが、真平王代の侍衛監と比較すると、禁衛軍に対し大々的に人員を補い再編したことが分かる。禁衛軍の拡大は王権の地位を高め、その力を誇示して真骨貴族の反乱を未然に防止する効果を狙ったものである。行政と経済を掌握するために執事部と倉部を設置したことと同様で、侍衛府もやはり軍事的な面で王権を支えるために設けられた。

真徳女王5年には、礼部、音声署、大道署、典祀署など、礼部や祭祀、儀礼関連の付属官庁などが大きく整備された。音声署は音楽を管掌した官府で、大道署は寺典(サジョン)、内道監(ネドガム)という別称からわかるように、王宮の中の寺院を管理する機関である。一方、典祀署は祭祀の儀礼を管掌する官庁である。儒教の「礼」は「楽」で完成される。礼と楽は切り離せないものだ。このような官庁は、真徳女王5年の正月に初めて実施された賀正礼(ハジョンレ)を担当し、荘厳な演出をする役割を果たした。国王が朝元殿で、百官から新年の祝賀を受ける賀正礼は、新羅全体を国王に集中させ、王権の中心性と絶対性を視覚的に示す儀礼だった。金春秋は儒教的な国家儀礼を受け入れ、王者の権威を確立しようと努力した。このような国家儀礼の受容と整備は、彼が王に即位してからさらに強化された。

金春秋が推進したこのような制度改革は、自らの執権を狙った事前の整備作業の一環でもあった。新しい王道政治を実現定着させることは、まず制度を先に整備しなければ成功できない。また、そのような改革の過程で自分を支持する人材を要職に置き、自らの派閥の力を高めた。これは遠からず当面する王位継承に

着実に対応するための戦略でもあった。金春秋の王位継承が、それだけ困難な課業であったからだ。

金春秋の即位

真徳女王が654年に亡くなるまで、金春秋は王位継承の第一人者として真骨に広く認められる存在ではなかった。女王が亡くなってから、和白会議では上大等の閼川が当分摂政をすることが決まった。摂政を指名することは実際、国王が幼かったり適当な継承者がいない場合にやむを得ず取る過渡的な措置だ。閼川を摂政に選出したことは、女王が亡くなった後の後継者に対する原則がまだなかったことを意味する。

しかし、閼川はこれを断った。既に現実的な実力者、金春秋の力と意図が画然と表出している状態だったため、彼に即位を要請するしかなかった。金春秋の即位は、一次的に真徳女王の代に親唐外交と内政改革を通じて成長した金庾信を始め新しい貴族勢力が心強い基盤となった。上大等の閼川もこれを無視できなかった。閼川は金春秋が王者の徳を有した立派な人物だとし、新しい王として迎えることを主張した。金春秋は3度にかけて断ったが、ついに即位した。3度譲ったという「三譲」は、聖賢の故事を単に実現したのではなく、祖父の真智王を廃位させたその和白会議が今や自分の即位を切実に求めているという形を借りて、自分の家柄を復権させ自分の王位継承を正当化するための儀式であったと思われる。

太宗武烈王は即位した年に、まず父の龍春を「文興(ムンフン)大王」に、母の天明を「文貞(ムンジョン)太后」に追贈し、王権の伝統性を確立した。もともと五廟制の成立に関しては、文武王代という説、神文王代という説が取り上げられたが、追封(チュボン)大王制というものが武烈王の代から見られることから、五廟に新入する措置であった可能性が高く、太宗武烈王が五廟制を導入したと思われる。

金春秋の父の龍春は、真智王が廃位されなければ、早くから後を継いで即位したはずの人物だ。春秋は即位するとき、父の龍春を葛文王にする伝統的な儀礼に満足せず、中国の五廟制を受け入れて新羅の宗廟(チョンミョ)制の仕組みを完全に刷新した。五廟制は、王になれなかった現王の直系の先祖も宗廟に位牌を祭り祭祀を

捧げる方式だったため、廃位された真智王と父の龍春を大王に復権させることができたのである。これは自分の地位を高める最も強い象徴的な措置だった。中古期の王室が仏教的な聖骨の意識を通じてその他の真骨貴族の家柄と自分たちを差別化した半面、金春秋は新しく儒教の儀礼を受け入れて中代の王権の力を誇示した。

儀礼と律令の整備

唐の儒教的な国家儀礼を直接経験した太宗武烈王は、そのような礼制と儀礼が国王の権力と中心性を可視化する象徴的な機能を果たすことを明確に理解していた。先にも言及したが、これは金春秋が百官の「賀正礼」を初めて新羅に導入したことや、王に即位してから4年後(657年)に設置した「大日任典(テイルイムジョン)」という官署などを通じても分かることだ。

大日任典には、典儀(チョンウィ)、典謁(チョンアル)、典引(チョンイン)、典事(チョンサ)などの官員が確認できる。これらの官職は唐や後代高麗の事例からよく分かることだが、儀礼の進行を担当する職だ。典儀は主に儀礼の手続きを知らせ、典謁と典引は王と官員の出入りを導いた。王室の業務を担当する内省に所属していた引道典(インドジョン)にも、上引道(サンインド)、位引道(ウィインド)、官引道(カンインド)など儀礼の進行に関する職名が確認される。これらの官員も、国の儀礼を専担したと思われる。このように、儀礼だけを担当する専門的な官員が中代の初期から存在していたことは、当時既に国の儀礼がかなりの水準まで発達していて、金春秋が国家儀礼を自分の権威を確立することに積極的に利用していたことを意味する。

全ての儀礼は具体的な形式を通じてのみ具現化する。儀礼の手続きを担当した官員らは、儀礼を進行する上で最も重要な役割を遂行する。彼らが儀礼の手続きを熟知し、儀礼の厳粛性が維持され、儀礼での王と官員の位置と行為は流れるように動く。中心が権威を創出する土台になる。儀礼は中心と周辺、上下関係の礼制に見える形にしたもので、複雑であればあるほど、その関係はより鮮明に表れる。その厳粛と長い時間待つこと、繰り返される「再拝」に耐えて、中心は権威が得られ、周辺は上下関係を受け入れることになる。

例えば、百官の賀正礼も大日任典がその手続きを担当したと思われる。この儀礼は、朝元殿という王宮の中心的な場所から始まったが、「百官」という表現から分かるように、新羅の全てが南面した新羅王に象徴的に集中する儀式で終わるものである。地方官の州都督(チュドドク)が捧げた上表文が王に伝わり、中央の官吏と六部から選ばれた人々が万歳をするのが賀礼儀式の最後の場面であった。また、地方でも都督を始め地方官が村主を率いて、遠く離れた国王に向かって朝拝をする儀礼があったとされる。このように、中央集権国家において王京の儀礼は、常に地方を包摂、帰付させる方式で具現化する。これが、儀礼が目指す本質だからである。国王は絶対的な中心を希求し、儀礼はそれをみんなに直接見せて感じさせる場であった。

一方、太宗武烈王は即位と同時に、理方府格(イバンブキョク)という法令60条を新たに法制化し、律令政治をさらに強化した。理方府は真徳女王5年に金春秋が直接新設した官府で刑律と律法を管掌したが、文武王7年(667年)には左右の理方府へと拡大改編されたほど、中代の王権を支える核心的な官庁だった。理方府格は唐の律令格式の体制を受け入れて、既存の新羅の律令の不十分な面を補うためのものである。唐でいう「格」は既存の律令では適用し難い事案が発生したとき皇帝が「勅」を下して新しい原則を提示し、その中で恒常性のあるものを法典の形で整理したものを意味する。格は律令に帰付する下位の法の次元を超えた、比較的独立的な性質を持つ。

金春秋が即位するとき、既存の新羅の律令を補い新しく編纂した「理方府格」を始め、「律令格式」の修正と革新を支持した文武王21年(681年)の「遺詔」からも分かることだが、中代初期には制度改革を法的に裏付けるための作業を疎かにしなかった。これは当時、新羅の律令統治体制が大変成熟していて、唐の律令を参考にしながらも自らの条件に合わせて変容する段階にまで到達していたことを意味する。これは金春秋が、中国の文化を新羅の条件に合わせて創意的に変容させて受け入れたことを表している。

太宗武烈王は即位2年目の655年、長男の法敏を太子に冊立し、自分の息子に高い官職を与えて王権の安定と王室の権力基盤をさらに強化した。656年には唐から帰国した次男の金仁問(キム・インムン)を軍主に、658年には唐から帰国した息子文王を執事部の中侍(チュンシ)という官職に新しく任命し、直系の親族によ

る支配体制を構築した。そして、彼の即位に多大な貢献をした金庾信を660年に上大等に任命し、自分の王権をより専制化できる基礎を築いた。

伽耶系という政治的欠点のある金庾信が上大等に任命されたことは、実は上大等が貴族勢力を代表するという本来の機能を失い、中代の王権とより密着していたことを意味する。したがって、既存の上大等中心の貴族連合体制は弱体化していった。反面、新羅の中代の社会では、王が任命した宰相と王命の伝達を担当し、国王と各官庁の業務を効率的に繋ぐ執事部の中侍の権限が比較的強くなった。太宗武烈王は親唐外交を通じて唐の勢力を味方にし、内政においては自分の息子や金庾信など最側近を政治的に配置して王権を安定させた後、ついに百済への征伐戦争を断行する。

2

百済・高句麗の
滅亡と三国統一

羅唐連合軍の攻撃と百済の滅亡

659年10月、唐は百済への征伐を決定して出兵を準備し始めた。唐は出兵を決定した事実が外部に漏れないように徹底した。新羅に対してもすぐ知らせず、金仁問と当時唐にいた倭国の使節団が帰国することも止めたまま、百済への遠征に備えた。唐が新羅に出兵を知らせたのは、遠征の準備がほぼ終わった660年3月になってからである。唐の13万大軍は6月18日、萊州を出発して百済に向かった。1900隻で構成された唐軍の船団は、その末端が見えないほど限りなく続いたという。

唐軍の出征に合わせて5万の新羅軍を率いた太宗武烈王は、百済の泗沘都城(サビドソン)にすぐ進まず、新羅北方の南川停(ナムチョンジョン：今の京畿道利川(イチョン))まで行って留まった。これは唐の出征軍と円滑に連絡を取り、百済の防御力を乱すための迂回作戦だ。太子の法敏は6月21日、徳物島(トクムルド：今の京畿道徳積島(トクジョクド))に到着した唐軍司令官の蘇定方を迎え、それぞれ海路と陸路に進軍して7月10日に泗沘都城で会うことにした。

唐軍は新羅の水軍の案内を受け、沿岸の航路に従って南陽(ナムヤン)湾を南下してから、泰安(テアン)と安眠島(アンミョンド)を回って7月9日錦江河口の伎伐浦

浦(キボルポ)に入った。太宗武烈王は沙羅之停(サラジジョン：今の清州(チョンジュ))を通り南下して今突城(クムドルソン：今の慶尚北道尚州(サンジュ))に留まり、金庾信が率いる5万の新羅軍は百済に行く道の要所炭峴(タンヒョン)を越えた。錦江の中流に位置する泗沘都城を手に入れるために、唐軍は錦江河口の伎伐浦から本流を遡って上がり、新羅軍は逆に錦江の上流から炭峴を越えて泗沘に進んだ。炭峴と伎伐浦は泗沘都城へ進む上で最も重要な場所で近道だったが、百済側の防御はほとんど見当たらなかった。このように660年7月初め、新羅軍5万人と唐軍13万人で構成された羅唐連合軍が百済を攻撃したが、百済は唐の出兵計画に全



図2 唐・新羅連合軍の百済侵攻図

く気付かなかっただけでなく、出兵に気付いてからも適切に対処できなかった。

百済は唐軍が徳物島に到着するとやっと侵攻の事実を知り、急いで対策を立てようとした。しかし、羅唐連合軍の泗沘城への侵攻戦略と水陸両面からの攻撃と奇襲に対し、これといった手を打てなかった。さらに、義慈王は執権後期に王権強化政策で貴族と葛藤し、政局が大いに混迷していた。羅唐連合軍が既に目先にまで到着いても、意見をまとめられず右往左往していたのである。黄山伐(ファンサンボル)で新羅軍を防いだ階伯(ケベク)と5千の決死隊の壮烈な最期も、百済の滅亡を数日遅らせる程度に過ぎなかった。

義慈王は上佐平(サンジャピョン)など最高位官僚と王子らを唐軍に送り、謝罪の書を捧げたり、罪を誤って財物とご馳走で懐柔するなど唐軍の退却を哀願した。蘇定方は全てを断り、四つの軍に包囲された泗沘都城は陥落の危機に陥った。7月13日の夜、義慈王は熊津(今の忠清南道、公州(コンジュ))に脱出して戦列を整えようとしたが、結局7月18日に熊津方領(ウンジンバンリョン)の禰寔進(イエシクジン)の投降により捕らえられ、唐に降伏した。7月29日、今突城にいた太宗武烈王が泗沘城に到着し、8月2日には義慈王が王子と君臣が見守る中で自ら太宗武烈王と蘇定方に杯を捧げた。義慈王の悲哀は、百済の貴族の慟哭する声に埋もれたという。700年の百済の社稷がわずか数日でこれといった抵抗もできず虚しく崩壊したのである。9月、蘇定方は義慈王を始め王族、大臣と民1万2千人を率いて凱旋し、唐軍1万人と新羅軍7千人を駐屯軍として残した。

百済復興運動とその消滅

実際、百済の滅亡は軍事力が弱かったというよりは、羅唐連合軍の奇襲攻撃の前で戸惑った中央政府が一気に崩れたといえる。さらに戦争は泗沘城や熊津城など百済の中心地域でのみ展開されたため、ほとんどの地方には相当な軍事力がそのまま残っていた。したがって、事実上羅唐連合軍と百済の戦争は、義慈王の降伏で終わったのではなく、むしろその時から新たに始まったといえる。泗沘城の陥落以降、3年間もの長期にわたり百済復興運動が激しく展開されたのもこのためである。

百済復興運動は、最初唐軍の略奪と冷酷な殺戮に激憤して自然発生し、組織を持たずに展開された。しかし、福信(ボクシン)や道琛(トチム)など中心となる指導部ができてからは、一層体系的に整い始めた。福信は倭に渡っていた百済の王子扶余豊(プヨボン)を迎えて王に擁立し、倭の協力と支援を要請した。これに対して倭は3〜4万人以上の軍事を派遣するなど、物的にも人的にも支援を惜しまなかった。

最初に百済復興軍ができた地域はほとんど黒齒常之(フクチサンジ)や福信のように自分の出身地や勢力の根拠地、または派遣されていた赴任地だった。特に百済は義慈王が降伏した当時5方、37郡、200城の地方統治組織が完全に崩れてはいなかったため、地方官が彼らの任地の方城(パンソン)や郡城(クンソン)などを中心に挙兵して復興運動に合流した。泗沘城に駐屯した唐軍は、復興軍の激し



図3 百済復興軍の主要根拠地

い攻勢によって何度も孤立することもあった。初期に百済の西部と北部地域で始まった復興運動は、661年には東部と南部地域に拡大し、ついに200余りの城を奪還するほど旧百済の領域の全域が復興軍の活動領域となった。道琛は唐軍に「いつ帰国するのか」というからかいの言葉と共に、唐軍の帰国を慫慂するに至った。百済復興運動の氣勢が高まると、唐は追加の軍を派遣し、文武王も直接新羅軍を率いて討伐戦に参加した。

羅唐連合軍が百済復興軍に攻勢をしかけ始めたのは、662年7月、新羅軍が熊津道を開通して孤立した唐軍の包囲を助けたのが一次的なきっかけだった。さらに、この頃は復興軍の内部に不和が発生し、道琛が福信に殺害された。その後、扶余豊と福信の主導権争いが続き、ついに663年、扶余豊が福信を処刑するに至った。復興軍の内部では葛藤が起き、一部は唐に投降して、他の一部は扶余豊の合流を拒否するなど急速に勢力が弱まった。さらに、初期には百済南部の平野地帯の農業生産を通じて物資を円滑に受けられたが、次第にこの地域が新羅に渡ると、倭からの兵糧支援も途絶えて、復興軍の物資不足が深刻化した。

663年7月、百済復興軍の中心地、周留城(チュリョソン)を鎮圧する作戦には、文武王が金庾信など28人の将軍を率いて出征するなど総力を傾けた。羅唐連合軍は水陸の要所加林城(カリムソン：今の忠清南道、林川(イムチョン))を迂回して周留城を攻める戦略を立てた。文武王率いる新羅軍と劉仁願、孫仁師率いる唐軍の連合で編制された陸軍は周留城を攻撃し、劉仁軌と杜爽、百済の太子だった夫余隆(プヨユン)など唐軍が主軸の水軍は白江口(ベクガング：今の錦江河口)に向かった。

周留城の復興軍も羅唐連合軍の攻撃に備えて、高句麗と倭に援助軍の派遣を要請した。高句麗は唐の側面攻撃に備えていたため援助軍を直接派遣することはできなかった。だが、倭は援助軍を派遣し、百済と倭の連合軍が羅唐連合軍と対決戦を展開した。663年8月18日、羅唐連合軍は周留城を完全に包囲し、8月27日に唐の水軍は白江口に入って来る倭の水軍と豊(ブン)王が率いる復興軍と戦って、400隻を壊滅させる大勝利となった。豊王は高句麗に逃げた。白江口の戦闘で勝利し氣勢を高めた羅唐連合軍は、9月7日、周留城まで陥落させた。羅唐連合軍が熊津で合流し出兵してからわずか50日後のことである。周留城から逃げた復興軍と百済の遺民は、倭に亡命していった。

一方、新羅は百済の復興軍を鎮圧するという名分で、百済の領域で勢力を拡

大させた。唐は外交官の杜爽を派遣して新羅政府に圧力をかけ、新羅と百済の境界を画定する会盟を強要した。新羅はそれまでは百済の復興軍を全て鎮圧できなかったという理由で会盟を断ることができたが、復興軍を鎮圧すると会盟を拒否できなくなった。唐は665年8月、扶余隆を熊津の都督とし、文武王と就利(チィリ)山で会盟を結んで、旧百済の領域に対する唐の支配力を強化した。

平壤城の陥落と高句麗の滅亡

百済が滅亡した翌年の661年、唐は海路を通じて遠征軍を派遣し、高句麗の平壤城をすぐに包囲した。従来遼河方面から攻撃したのとは完全に異なる戦略だ。このとき、唐軍は無理な攻撃をしてむしろ包囲されると困難な危機に直面したが、ちょうど新羅軍が南部から進撃して食糧と物資を供給したため、唐軍は安全に退却できた。金春秋と唐太宗が百済を先に滅亡させる構想に合意したのも、唐が直接平壤城を攻撃するためだった。百済の滅亡は、高句麗の防御戦線に大きな変化をもたらした。

従来隋煬帝や唐太宗が高句麗への征伐に失敗したのは、遼河から平壤城までの長い補給路を維持しなければならない戦略上の弱点があったからであった。しかし、今や唐は百済の滅亡で、高句麗の南部に新羅という強い軍事基地を有している。新羅の軍事と食糧の援助を受け、南北両方から高句麗の首都平壤城を簡単に攻撃できるようになった。また、新羅から兵糧の供給を受けて冬場の軍事作戦も可能になったため、唐は高句麗の戦力を消尽させる長期戦に戦略を修正した。

このように不利な情勢の中、高句麗では664年10月に淵蓋蘇文が亡くなった。栄留王を殺して血みどろの争いで政権を手に入れた淵蓋蘇文の権力は元来弱小だった。信頼できる者は自分の息子や親族しかいなかった。したがって、おのずと息子に権力が集中した。淵蓋蘇文が亡くなってから彼の息子の間で起きた権力争いは、既に淵蓋蘇文も予測していた。淵蓋蘇文は亡くなる直前に、『兄弟同士、水と魚のように心を合わせなさい』と切実に遺言を残したが、兄弟の権力欲には無用であった。視察に行っている間に弟に権力を奪われた長男の男生(ナムセン)は、高句麗の2番目の首都の国内城(ククネソン)と10万人を率いて唐に投降し、つ

いに666年9月唐軍の先導者となった。この内乱の影響で比列忽(ピョルホル：今の咸鏡南道、安辺(アンビョン))地域を防御していた淵蓋蘇文の弟の淵浄土(ヨンジョント)も同じ年の12月に12の城と共に新羅に降伏した。比列忽一帯の12個の城は、江原道北部と咸鏡南道南部一帯の地域であるため、ようやく羅唐連合軍は平壤城の東部も攻撃できるようになった。

長い戦争で疲弊した高句麗は、執権層内部の分裂と反逆行為まで重なると、堅固な抵抗力も自然に崩れてしまった。このような高句麗の分裂の隙を狙って、667年9月には唐の攻勢が始まり、遼東(ヨドン)の新城(シンソン)が陥落した。ついに668年、扶余城、比列忽、臨津江(イムジンガン)方面から押し寄せてきた羅唐連合軍は平壤城を完璧に取り囲み、同じ年の9月高句麗は歴史の中から姿を消した。平壤城は陥落したが、未だ降伏していない高句麗の各地方の城では、継続して唐へ抗争していた。高句麗王朝を再建しようとする復興運動も起こった。高句麗の復興運動は、新羅と唐の戦争において重要な変数となった。

平壤城の戦いにおいて新羅軍は大きな功を立てた。平壤城を陥落させる過程で最も重要な戦いは、平壤城外部の防御線、蛇川(サチョン)を突破することだった。卑列(ピョル)州行軍の総管、金文穎(キム・ムンヨン)などは、蛇川の野原で高句麗の太々莫離支(テデマクリジ)という官職の男建(ナムグォン)率いる軍と激突した。当時、共にいた唐の軍士は、敵陣の意気込みに驚いてまともに戦うこともできなかったが、金文穎の新羅軍は高句麗軍と匹敵するほどで、退かなかった。特に、大幢の少監(ソガム)という官職の本得(ポンドウク)は、この戦いを勝利に導いた一番の立役者だった。この戦いでは、漢山(ハンサン)州の少監、金相京(キム・サンギョン)を始め、多くの大將が戦死した。一方、牙述(アスル)出身の沙浪、求律(クウル)は、蛇川での戦いで橋の下に入り、水を渡って進軍して敵軍と戦い大きな勝利を勝ち取ったが、命令に従わず自ら危険な場所に入ったため、立役者であっても功勲が認められなかった。彼は悔恨のあまり首を吊って自殺しようとしたが、周りの人々が助けて死ぬこともかなわなかったという。このような求律の事例から、軍律によって命令に従う当時の新羅軍の厳しい規律と軍紀を十分推測できる。蛇川で高句麗軍を撃破した新羅軍は、平壤城陥落のための最も重要な橋頭堡を築いた。その後、斧壤(ブヤン)出身の軍師(クンサ)という官職の仇杞(クギ)は、平壤城の南橋を突破した。さらに、平壤城を擁護していた周辺の小城も比列

忽出身の軍師、世活(セファル)によって陥落し、平壤城の外部の防御線が完全に崩壊した。続いて、誓幢(ソダン)という軍団の幢主(タンジュ)という官職、金遁山(キム・ドゥンサン)が平壤城外部の陣営を破壊して平壤城をより強く包囲・圧迫し、戦局は完全に新羅軍有利に変わった。そして、黒嶽令(フクアクリョン)という官職の宣極(ソングク)は平壤城の正門を、南漢山(ナムハンサン)出身の軍師、北渠(ブクゴ)は平壤城の北門を突破した。それまで堅固な防御を誇っていた平壤城も、勇敢な新羅軍の前についに降伏してしまった。その勢いで、漢山州の少監、朴京漢(パク・ギョンハン)は平壤城の中で、高句麗の軍主、述脱(スルタル)を刺殺して軍の士気を引き上げた。

このように平壤城を陥落させる過程からも分かるように、新羅軍の勝利には、中央軍はもちろん地方出身の者が大きな功を立てた。これは、地方民に対する文武王の待遇と政策が適切かつ有効であったことを意味する。その後、百済と高句麗の遺民まで包摂しようとした、新羅の三国遺民統合政策はこうして整備されていた。平壤城は陥落したが、降伏していない高句麗の地方の城では、唐に対する抗争が続いた。高句麗王朝を再建しようとする復興運動も起こっていた。高句麗の復興運動は、その後の新羅と唐の戦争において重要な変数となった。

対唐戦争の勃発

668年、羅唐連合軍の大々的な攻勢で高句麗は滅亡したが、新羅は高句麗の滅亡を喜んでばかりはいられなかった。これに先立って唐は、663年新羅の領域を「鶏林州」とし、文武王に対して新羅の王号以外に追加で鶏林州の大都督という官職を与えた。これは同盟国の新羅までを、唐の地方に過ぎないと見做した思惑を表したものである。新羅は、百済と高句麗を平定すれば平壤から南の領土は全て新羅に与えるとの、金春秋と太宗の648年の密約だけを信じてただ待つわけにはいかなかった。高句麗が滅亡すると、次が新羅であるのは火を見るように明らかなことだった。

これと関連して、新羅が668年から700年まで25度にわたり極めて頻繁に日本に使節を派遣した事実が注目される。その始まりは、高句麗が滅亡するちょうど1

カ月前からである。天皇も羅唐連合軍の攻撃を不安に思っていたため、文武王と金庾信に新羅の使節を介して船舶や絹など各種の贈り物をし、さらに新羅の使節を丁重にもてなした。これによって、660年以降、互いに争った経験のある新羅と倭の間に、国交が再開された。

新羅が、高句麗の滅亡直前から予め倭に使節を派遣して友好関係を回復したのは、仮に起こりうる唐との戦争に備えて、日本を味方にしておくための外交的な努力だった。百済と高句麗の領域を既に占領して新羅の目の前に駐屯している唐の兵力は、新羅が対敵するには手強い相手だった。しかし倭まで唐側に立ったら、新羅の存立は保障できなくなる。その後、新羅は倭に使節団の代表として、大阿曇以上の真骨の貴族や高官を派遣し、その都度大規模な贈り物もした。新羅は対唐戦争が勃発する前から、既に緻密に準備を進めていたのである。しかし、これは逆にいえば、当時新羅が唐の侵攻に対してどれだけ不安と恐怖を感じていたのかを示している。

668年、唐は平壤に安東都護(アンドンドホ)府を設置し、高句麗地域を自国の領域にした。高句麗が滅亡すると、これまで潜在していた百済の領土に対する帰付権をめぐり、新羅と唐の葛藤が表出した。新羅は高句麗が滅亡した直後から公然と旧百済の地域に進撃し領土を手に入れる一方、高句麗の復興軍を包摂して対唐抗戦に利用した。いよいよ新羅は670年3月、新羅の薛烏儒(ソルオユ)将軍と高句麗の太太兄(テデヒョン)という官職の高延武(コヨンム)将軍率いる2万の部隊が力を合わせ、鴨緑江(アムロクガン)対岸の唐軍の前哨部隊、烏骨城(オゴルソン)に駐屯していた靺鞨の騎兵を攻撃した。その後7年にもわたって展開された新羅と唐の戦争は、このように新羅が先に唐を攻撃して始まった。弱者だった新羅が先に戦争を選択した背景には、対唐戦争と密接に繋がっていた西域の「土蕃(今のチベット)」の動向と密接な関係があった。

対唐戦争の経過と勝利

660年以降、唐が百済と高句麗の戦いに全力を尽くすと、西域では土蕃が成長して、親唐勢力の土谷渾を抑えシルクロードを掌握した。669年9月、土蕃が天山南路を急襲すると、670年に薛仁貴が率いる韓半島に駐屯した兵力が、土谷渾の戦いに投入された。これによって遼東や韓半島北部地域の唐軍は非常に委縮し、



図4 新羅の対唐戦争図

670年3月新羅軍は鴨緑江北部の烏骨城まで作戦の半径を広げて攻撃できた。同年7月、薛仁貴が率いる10万人の唐軍が大非川(今の中国青海省共和県付近)の戦いで土蕃の軍によって全滅すると、新羅は旧百済のほとんどの地域を掌握した。唐は新たな軍を投入して反撃したが効果はなかった。新羅は672年、泗沘城に所夫里(ソブリ)州という区域を設置して百済が新羅の領土になったことを宣言し、地方行政体制を改編して、旧百済地域に対する支配力を強化した。

唐は671年7月に高句麗の復興運動の中心地にある安市城を攻略して遼東地域を安定させ、672年4月には土蕃の使節が長安に到着すると唐の高宗と武后に接見した。両国間に和解の雰囲気は漂うと、戦力を新羅に投入して672年7月に平壤に軍営を設置し、新羅を攻撃するために万全の準備を整えた。これに対応して北進した新羅軍は、黄海道地域で唐軍と激突した。戦いの初めの頃、載寧(チェリョン)地域の戦いでは新羅が勝利したが、続く石門(今の黄海道、瑞興(ソフン))における戦いでは唐の高侃率いる精鋭騎兵の騎馬戦術に押されて、新羅の中央軍団が全滅するという大きな敗退を喫した。このとき生きて戻ってきた息子の元述(ウォンスル)に金庾信が背を向けたのも、当時の敗北が新羅の朝野に極めて大きな打撃を与えたことを示している。同じ年の12月には、高句麗の遺民が守っていた白水(パクス)山を唐軍が攻撃して陥落させ、援助のために到着した新羅軍まで撃破した。その後、新羅軍は戦線から後退し、唐軍の進入路に城郭を築造するなど防御にのみ尽力した。戦線は臨津江流域で一進一退を繰り返した。

673年の冬まで唐軍の攻撃は続いた。しかし、673年12月、土蕃が天山地域の西トルコの諸部族をそそのかして天山北路を封鎖しようとする、と、羅唐戦争は674年の全期間と翌年の2月まで14ヶ月間小康状態に入る。670年に土蕃に天山南路を奪われた唐は、その代案として天山を北部から迂回する天山北路を利用したが、これまで脅かされると、このルートを防御することに全力を尽くした。

674年に戦争が小康状態になったのは、新羅が戦列を再整備できる貴重な期間となった。新羅の朝廷は親唐貴族を取り除き、高句麗と百済の貴族に官爵を与えて、高句麗の王族安勝(アンスン)が率いる高句麗の復興軍を益山地域の金馬渚(クマジヨ)に移して暮らすようにし、彼を「高句麗王」と冊立して自治国として認めるなど、高句麗と百済の遺民を包摂することに力を注いで唐との長期戦に備えた。唐の騎兵に備えた長槍幢(チャンチャンダン)や弩幢(ノダン)という部隊を整

備して拡大させ、道の要所には山城をしっかりと建てて唐の侵攻に備えた。

675年1月、土蕃の使節が長安に来て平和会談を行うと、その年2月、唐軍は韓半島を改めて攻めてきた。劉仁軌が率いる唐軍は、臨津江の南まで南下して七重城(チルジュンソン)を打ち破り、そこを前哨基地として買肖城(メチョソン：今の京畿道、楊州(ヤンジュ))まで掌握した。しかし、戦争は675年に新羅軍が唐軍を買肖城で打ち破り、翌年に戦局を挽回するため西海岸に侵攻しようとした唐の水軍を錦江河口の伎伐浦で打ち破って、新羅の勝利に終わった。

唐の高宗は、676年以降も韓半島を支配する意志を示し続けた。すなわち、唐は新羅が大同江の南の地域を統合したことを認めようとしなかった。高句麗と百済の王孫をそれぞれ「高麗朝鮮郡王」、「百済帶方郡王」として自国の首都に留ませ、機会があれば彼らを先頭に立たせて再び新羅を攻撃する意志を堅持した。678年9月に高宗は改めて新羅を攻めようとした。しかし、土蕃を征伐することの方が急がれたため実行されなかった。

678年、唐の18万の大軍は、670年に大非川で敗北した際に諦めた安西四鎮を取り戻そうと再び土蕃に出撃したが、また大敗してしまった。このとき唐の朝廷は土蕃への対策を議論する会議で、やむを得ず防御戦略を取ることで意見が一致した。高宗が、『高句麗は遼河を渡れず、百済は海を超越できなかったのに、過ぎし日にはしきりに毎年軍隊を送って国力を浪費した。過ぎたことではあるが後悔している』と言ったのは、当時唐が置かれていた状況を如実に表している。

新羅が唐との戦争に完璧に備えたこともあるが、一方では新羅と、もう一方では土蕃と、両方と戦争をするはめになった唐のジレンマにより、新羅は対唐戦争で有利な戦略を展開できた。羅唐戦争は実に、土蕃と唐の戦争と両輪のようにかみ合っていた。対唐戦争において新羅が勝利した最も重要な要因は、土蕃の戦況を積極的に活用した新羅の外交力である。唐は土蕃に足元を取られて新羅に敗北し、結局一元的に世界を支配しようとした野望も諦めることになった。唐の敗北とその影響はゴビ砂漠の北部にも伝わり、680年代には突厥が再び復興して遊牧世界を統一した。世界の中で唐の求心力が少しずつ崩れていた696年、遼西の営州(今の遼寧省朝陽)でも契丹族の酋長、李尽忠の乱が起こり、この反乱は高句麗の遺民が渤海を建国する絶好の機会となった。

対唐戦争の歴史的な意義

北方の遊牧民族の浸入で300年近く分裂していた中国が、隋と唐によって再び統一し、7世紀の東アジアの世界は新たな渦に巻き込まれた。特に唐は630年の東突厥帝国、635年に吐谷渾王国、646年に薛延陀を次々と滅亡させ、トルキスタン地域の内陸アジアと数々の国々にも勢力を及ぼした。そして、隋と唐の世界秩序に対抗した百済と高句麗までも、それぞれ660年と668年に征服した。

このような隋唐帝国の登場を、東アジアにおいて新しい「一元的な世界秩序」が形成されたと理解するのが既存の学会の一般的な見方である。しかし、これは隋・唐が標榜した彼らだけの主張を繰り返していることに過ぎない。このような体制は周辺世界が容認しない強圧であって、「秩序」とは言えない。隋・唐が成立してから羅唐戦争までは、戦争の時期だった。隋・唐の力の前に滅亡した数々の国家と種族がいた。このような戦争の時代を、世界秩序が確立した時期とは表現できない。さらに、唐の世界支配に対する野望に反対し、強く立ち向かった周辺の世界が当時現存していた。また、突厥、土蕃、ウイグル、南詔など周辺の多くの民族が交替して強盛になり唐帝国を脅かした、いわゆる「世界の連環性」も確認できる。

既存の学会は、古代の東アジアの国際秩序が変貌した過程、つまり過渡期の状況をみて既に秩序が完成したと誤認した。また、このような見方は、世界を構成する同等な二つの要素、すなわち「中心」と「周辺」に対して同等な見方ではなく傾いた観点から始まっていると思われる。5―6世紀と同じように、7世紀以降の東アジアにおける世界秩序も、中心と周辺の勢力均衡の中で維持された。これは渤海の成立により更に具体的になったが、このような世界秩序が成立したきっかけは、他ではなく、三国を統一して対唐戦争において唐を破った新羅の勝利から見出すべきである。実際、渤海の成立も、新羅が対唐戦争を勝利に導いたから可能なことであった。

羅唐戦争は隋・唐と高句麗が衝突した延長線上に位置し、古代東アジアにおける世界秩序の確立に最も大きな影響を及ぼした出来事である。また、新羅の三国統一は単に新羅が百済と高句麗を滅亡させたことに留まらず、「中国」を自負した隋・唐が世界を一元的に支配しようとした野望を阻止させ、中国と周辺世界が共存する新たな世界の体制を導き出した国際戦であった。

3

中代の支配体制と運営原理

中代「専制王権論」に対する反省

現在の歴史学会では、新羅の中代を政治的な安定と文化的な繁栄を享受した新羅の全盛期と理解している。つまり、中代には『王権が専制化して貴族勢力を制圧し、太子制度を通じて武烈王系の王統が安定化した。さらに、拡大した領土と人口を統治するために、政治機関を王の秘書機関の執事部を中心に再編して拡大し、地方を九州・五小京と郡県に編制して中央集権を完備した。その結果、聖徳大王神鍾(エミレの鐘)、仏国(プルグク)寺、石窟庵(ソクグラム)など華やかな統一新羅の文化が満開した』とみている。

前述の新羅中代の「専制王権」のイメージは、我々にとっては極めて親近感があり当然なものであるため、疑いの余地がないように思える。しかし、王権が専制化し中央集権が完備したことが、果たして国の発展なのだろうか。真骨は民を搾取して、王は民を保護する守護者だったのだろうか。これまで我々は新羅の政治的な構図を「王権対臣権」に単純化し、あまりにも単線的に、王権の強化と中央集権を国家発展の正しい方向であると理解してきた。

唐の支援を受けた新羅の金春秋は高句麗と百済との外部の戦争では勝利し

たが、内部の政治的な構図においては、全てのことが王権が希望する方向で展開されたわけではない。新羅国家を維持するには王権だけでなく、その正反対にいる真骨勢力の協力が必ず必要だった。新羅は王を含む真骨の共同支配の上に建てられた建物のようなものである。真骨の専横だけでなく、王権の専制政治も新羅国家を危うくする余地があった。

しかし、『三国史記』とは異なり『三国遺事』では、新羅人が金春秋とその直系の王朝を中代に特化せず、下代と共に結んで新羅の「下古」と認識し、異なる時代区分をしていたことが分かる。ともすると、現在学会が認識しているのとは違って、新羅人にとって中代は政治的な安定と繁栄を享受した新羅の全盛期ではなかったかも知れない。有名な郷歌(ヒャンガ)の作家忠談師(チュンダムサ)が景德(キョンドク)王に捧げた安民歌も、逆説的に「不安な民」を代弁した歌であるかも知れない。実際、現在の国語学会ではそのように解釈する傾向が強まっている。

私たちが見られないもの、しかし新羅人は見た中代はどんな姿だったろうか。一面だけを際立たせては、物体の全ては見られない。照明された部分は明らかに華やかだが、その光の裏には常に影がある。中代の王権の光と影を全て視野に入れたとき、ようやく中代の社会を正しく理解することができる。

金欽突の乱

676年に唐軍を撃退した文武王は、唐とこれ以上の紛争を避けようと努力した。大同江から南の旧高句麗の領域を実質的に占有したが、唐を刺激しないために漢江から北の地域では積極的な郡県支配はしなかった。さらに唐との関係を回復するために、謝罪使も派遣した。しかし、唐は新羅を認めず、再び攻めるチャンスだけを狙っていた。

文武王はまた、生前に倭兵を鎮圧するために感恩(カムウン)寺を建てようとしたが完成できず、『東海の大きな岩の上に葬せよ。死後に国を守護する龍になって仏教を奉じ国家を保衛するだろう』と遺言を残したほど、当時新羅は唐だけでなく日本のことも共に悩まなければならなかった。対唐戦争の直後、新羅の対外関係は何ひとつ満足できないほど極めて不安だった。

内政も同様である。対唐戦争の最中、文武王は内部の分裂を防ぎ王権を強化するために、多くの真骨の貴族勢力を唐寄りの裏切者や反逆者にして取り除いた。戦争の局面を利用して、王権が政敵を除去したのである。汚名を着せられて死んだ仲間を見ながらも、貴族は統一の過程で強大になった王権の前で、とりあえず憤むしかなかった。しかし、貴族の鬱憤は王も感じるほど強いものだった。

681年に文武王が亡くなって神文王が即位すると、自分の義父の金欽突(キム・フムドル)が謀反を企んだとして斬首の刑に処した。この事件には多くの貴族がかかわって殺されたが、神文王は扇動した者だけでなく末端で加担した者までも徹底して探し出した。兵部令(国防部長官)の金軍官(キム・グングァン)とその息子には、この謀反を知っていながらも告げなかった罪で自決するよう命じた。

神文王が金欽突の乱を処決して下した教書には、『思いがけず喪中にソウルで乱が起こるとは想像もできなかった』とし、予想外の反乱に衝撃を受けたとされているが、即位と同時に一瀉千里に乱を收拾したことからして、既にこの謀反は即位する前から感知していたと思われる。むしろ神文王が自分に対抗できる真骨の核心的な勢力を未然に徹底して除去し、強力な専制王権を確立するために、この謀反を利用した可能性が高い。

王の義父とは、王権と運命を共にするはずの者である。それでもなお王の義父が反逆を主導したとは、当時王と真骨勢力の葛藤がどれだけ深刻だったのか十分予測できる。朴、昔、金の三姓の共存が象徴するように、新羅では王位を特定の家系が排他的に独占する、王室の神聖な権威が確立していなかった。新羅が滅亡する頃に朴氏が再び王位を継承したことがこのことを示している。「太王」の称号で王権が一層強化された法興王以降、王位を継承できる神聖な家系として「聖骨」の意識が出現したが、真智王の廃位からも分かるように、依然として新羅の王権は真骨勢力を代弁する協議体の「大等会議」を軽視することはできなかった。

国王中心の中央集権体制と宰相制の導入

中代の王権を初めて立てた金春秋は、どうすれば大等勢力の真骨の権門を無力化させて強力な王権を確立できるかに没頭した。前述した通り、金春秋が追求

した親唐政策は、単なる外交戦略ではなかった。唐の進んだ儒教の政治イデオロギーと礼制、儀礼を受け入れて王権を強化することの方がむしろ本質的な目標だった。これに関して、善徳・真徳女王代から「国相(ククサン)」、「宰相(チェサン)」など従来は見られなかった新しい官職の名称が登場しており注目される。金春秋が唐太宗に会いに行ったとき、公式の肩書も「国相」だった。

新羅では国の重大事を大等の合意で決定し、これを「和白」と呼んだ。和白会議は南堂(ナムダン)と政事堂(チョンサダン)、そして神聖処(シンソンチョ)の四霊地(サヨンジ)などで開催された。6世紀前半までは議決した内容を国王を始め会議の構成員の共同名義で教示して頒布したが、法興王18年(531年)に上大等が設置されてからは、大等会議で議論し合意した内容を上大等が国王に上奏すると、国王がそれを裁可して命令を下したり、または王命の形で頒布して国政を運営する方式が定着した。しかし、中古期に「上大等」が主宰したこのような会議の方式に、新しい変化が見られる。

宰相制度は唐から受け入れた。唐の場合、通常宰相は天子を補佐して百官を総領し、万事を治める存在を指す。新羅を継いだ高麗でも宰相制が継承された。高麗においての宰相も、政事を議論して政策を樹立する職だった。結局、宰相は国政を自由に議論して国王に建議し、また国王の諮問の要請を受けて国政を議論することで、国王の最終的な決定権を補佐する機能をしていたことを意味する。新羅の宰相もやはりこのような性質から大きく外れない。新羅の国王は上大等、兵部令、侍中、内署の私臣(殿中令:チョンジュンリョン)などを上宰相(1人)、南北相(2人)、第三宰相(複数)に任命した。宰相制度は登場した時点からして、善徳女王以来、金春秋が国王権力の影響力を強化させる政治改革のひとつとして整備したに違いない。宰相は国王が任命し、宰相会議の結果は原則的に王の裁可を受けてから執行された。したがって、統一期以降、宰相の任命権や会議の案件を執行する最終的な決定権を持つ国王に権力が集中していたことは言うまでもない。

高官を「宰相」に任命して国政を運営するこのようなシステムは、王権を中心に効率的に国政を運営するために導入された。中代の王権は宰相の任命権や国政の最終的な決定権を基に真骨の貴族を牽制し、王が任命する宰相を通じて政策を議決し執行する新しい政治の運営システムを稼働させた。宰相は中古期の大等会議の構成員「大等」とは質的に異なるものである。大等は真骨権門の共同推

薦を受けて王が追認する形式だった。つまり、大等は血縁に基づいた世襲制だが、宰相は全的に王が任命する官職だった。

「一統三韓」の意識と麗・済の遺民の包摂

新羅の「三国統一」に対する自尊心は、既に当時の新羅の人々の言辞に登場している。金庾信の玄孫の金長清(キム・ジャンチョン)が書いた「金庾信行録」を見ると、673年に亡くなる直前の金庾信が文武王に、『三韓がひとつの家系になり、新羅が「小康」、つまり太平には及ばなくとも極めて安定した社会になった』と自負している。神文王6年(686年)に建立され、清州市で発見された新羅の寺蹟碑にも、「新羅が三韓を統合して領土を広げた(合三韓而廣地)」という言葉がある。

ここでの「三韓」という用語は、馬韓・辰韓・弁韓という元々の歴史的な実態とは関係がなく、新羅・高句麗・百済の「三国」と同じ意味で使われた。その過程にはいくつかの歴史的な契機がある。何よりも、隋唐帝国の膨張的な東方政策が三国それ



写真1 清州雲泉洞事跡碑

それぞれに対する関心を高め、これをきっかけに中国人は、三国民が互いに密接に関連した歴史的事実であることを認知するようになった。当時、新羅・高句麗・百済の三国はそれぞれ違う民族(ethnic group)に区分されるほど、血統的・文化的違いなどは決してなかった。三国の言語・血統・風習が類似していると、中国側の文献によく言及されている。中国人は三国を同質的な国家群と理解し、合わせて三韓と呼び始めた。651年に唐の高宗が百済の義慈王に送った国書では「海東三国」と言及し、また「三韓」と表現した事例がこのことをよく表している。

最初から別途の古代国家として成立した三国は、互いに数々の戦争と政治的な反目を繰り返して対立意識が大きく高まり、相互間の共同体意識や絆の意識は微弱だった。だが、このように対立した三国が同じ歴史共同体に昇華した転換点で、7世紀後半に訪れた。まず、百済と高句麗の滅亡が直接的なきっかけとなって、麗・済の遺民が新羅というひとつの国家の中に統合された。続いて、百済と高句麗を滅亡させた唐が新羅まで屈服させようとなると、新羅は唐との戦争にも躊躇せず「民族包摂政策」を通じて唐を三国共同の敵にする戦略を駆使する。これは三国が融合して統一する直接的なきっかけとなった。

660年に太宗武烈王は百済を滅亡させた直後、百済人であっても才能を推し測って官僚に任用した。文武王もこのような包摂政策を続けた。高句麗が滅亡してから唐と対決すると、文武王は670年に高句麗の復興軍と共に合同で、唐の前哨部隊が駐屯した烏骨城を攻撃した。この戦いは、当時高句麗の遺民に対する新羅の包摂政策が効果があったことを示している。文武王12年(672年)8月に、新羅軍が高句麗軍と共に唐軍と戦って多くの戦果を挙げた事例も同じケースである。

文武王は三国統一の基礎を築いた先王の武烈王の諡号を唐の太宗と同じく「太宗」とし、高句麗の王族安勝を受け入れて高句麗の王(後日の報徳(ポドク)国王)に冊立するなど、諸侯を有する中心国家の君主へと新羅の王権の地位を高めた。また、左・右の司録(サロク)館を設置して禄俸(ノクボン)制を実施し、王権を補佐する頭品官員層の経済的な基盤を安定させるなど、既存の真骨連合体制から疎外されていた頭品層を国家秩序の中に統合する刷新策を講じた。

さらに、百済と高句麗の貴族と各地域の勢力にも新羅の官等を与え、その遺民を宥め統合しようと努力した。本来新羅は王京六部出身にのみ京位の官等を与え、服属する地方の者には外位の官等を与える差別的な二元の官等制を実施し

た。だが、三国間の戦争が激しくなると、地方民の積極的な参加を引き出すために、功を立てた地方民に京位を与え首都に居住できるようにする事例が増えた。さらに、文武王は唐と戦争をして百済と高句麗の遺民を包摂し、より強く結束を図るために彼らにも京位を開放した。このような過程を経て、ついに文武王は外位制を無くして官等制を京位に一元化し、三国民を全て単一の官等体制で包括した。これは、既存の王京六部中心の権威体制を解体し、統一新羅の民は全て同じく王の臣下であり、王の民であることを強調するためだった。

また、百済と高句麗の僧侶や世論主導層を優遇して包摂し、地方人の信仰と儀礼の対象であった各地域の山河に対する祭祀も中央で掌握した。僧侶や各地域の祭祀は、地方民が結集する求心点になる恐れがあるため統制した。このような措置は京位の一元化と共に、中央集権の統一国家を目指した中代王権の政策の方向をよく示している。

国学の設立と中央官僚機関の革新

神文王は、太宗武烈王と文武王の政策を継承し、王権を強化するためにより果敢な政策を断行した。即位と共に金欽突の勢力を攻めて除去したのは、たとえ義父だとしても王権に挑戦する貴族は絶対許されないという宣言である。これを始めとし、既存の権力構造を再編しようとする神文王の王権強化政策が次々と進められた。統一以降の新羅を制度的に設計して完成させた人物は神文王である。

即位2年(682年)には儒教的な政治イデオロギーに立脚した人材教育と官僚養成を目的に、国学を設立した。国学は、金春秋が執権してから既に準備し始めたが、このときになってようやく完成した。国学は王権を補佐できる頭品階層が政界に進出できる通路だった。六頭品の強首と薛聡(ソルチョン)は、この道を切り開く上で最も大きく貢献した人物である。特に、薛聡は「吏読(イドウ)」を完成させて文書行政システムの定着に貢献し、九經に「口訣(クギョル)」を付けて漢文經典を韓国語で教育できる基礎を設けた。

『花の国を治める花王の牡丹が最初は薔薇を愛したが、その後現れたオキナグサの忠義な姿を見て心で葛藤し、結局はオキナグサの懇切な忠言に感動して正

直な道理を尊ぶことになる』という薛聡の「花王戒(ファワンゲ)」は、神文王が真骨の体制から逃れて官僚制に立脚した支配体制を完成して欲しいと思った自分の心を迂回して表現した作品である。これは、国学設立以降、頭品階層の政治的な成長と情熱をよく表している。

三国を統一した新羅は、拡大した領土と人口を統治するために、より整備された中央の官僚機関と地方の行政組織が必要となった。神文王は官僚の人事業務を管掌した位和府を筆頭に、工匠(コンジャク)府、例作(イェジャク)府など、中央政府を中国の六典の組織に準ずる方式で体系化した。即位5年(685年)には各官府に行政実務を担当する舍知が設置され、文武王代に設置された末端の行政担当者の史と共に、令―卿―大舍―舍知―史の効率的な5段階の官僚組織が完備された。大舍以下の実務行政官僚は、国学を通じて成長した頭品層で補われた。

九州五小京と天下観

新羅は百済と高句麗の領土を取り込んで州、郡、県で新たに編制した。本来「州」は新羅が領土を拡張する過程で任意に設置した軍政的な地方組織だったが、統一戦争が一段落すると広域行政単位となった。神文王5年(685年)に完山(ワンサン)州(今の全羅北道、全州(チョンジュ))と菁州(チョンジュ：今の慶尚南道、晋州(チンジュ))の設置を最後に、新羅は自国の全国土を「九州」に再編した。

一方、新羅の領土が小白山脈と漢江を越えて、韓半島の覇者になる過程で、新羅の王京は次第に国土の南東部の端に押し出されるような形になった。このような弱点を補うために、新羅は既に智証王の代から王京以外に「小京」を設置し、国土を効率的に支配する方策を推進した。既存の金官(クムグァン)小京(今の慶尚南道、金海)、北原(ブクウォン)小京(今の江原道、原州(ウォンジュ))、中原(チュンウォン)小京(今の忠清北道、忠州)以外に、神文王5年(685年)には西原(ソウォン)小京(今の忠清北道、清州)、南原(ナムウォン)小京(今の全羅北道、南原)が設置され、五小京の制度が完備した。この小京に中央の貴族と伽耶、百済、高句麗など、新羅に併合された国家の貴族が暮らすようにし、各地域の政治的文化的拠点の役割を遂行させた。

新羅の九州は、中国で最初の王朝を開いた夏の禹王が天下を九州に区分した

ことを真似たもので、新羅の一統三韓の意識と共に天下観を示している。神文王は九州を三国の領域に意図的にそれぞれ3州ずつ分けて配置した。新羅の3州、百済の3州、高句麗の3州が統合して一統三韓の九州になったことを示そうとした。このような神文王の九州編制には、新羅が三国を平定したことと、三国が入り混じってひとつの天下になったという意味が含まれている。もちろん、当時新羅の九州には、旧高句麗のほとんどの領土は含まれなかった。だが、新羅は高句麗の王族安

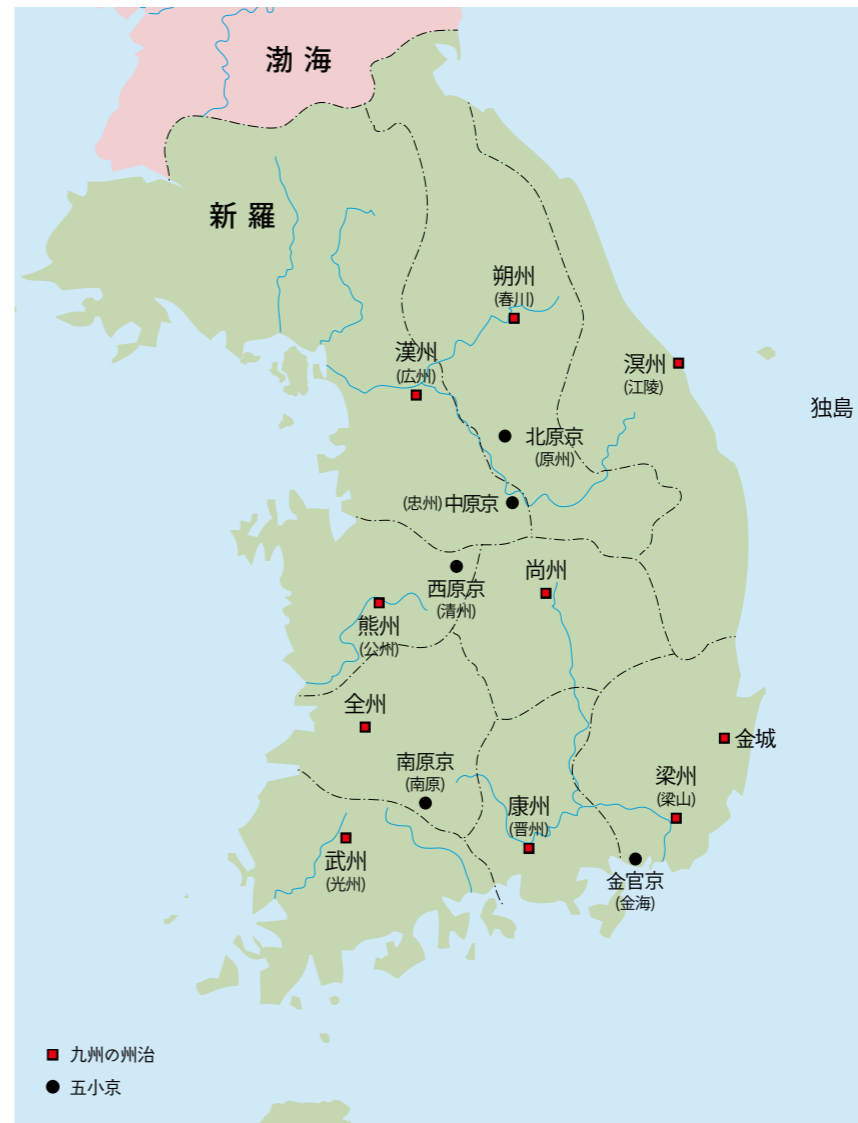


図5 九州五小京

勝を「高句麗王」と冊立し、益山の金馬渚(クムマジヨ)に暮らすようにさせるなど、高句麗の王室を新羅内の諸侯に包摂した。

このように新羅王室の三国統一に対する自尊の意識は立派なものだった。これは唐が金春秋の諡号を太宗にしたことを問題視すると、新羅の朝廷が対処する過程でもよく表れる。唐の則天武后が神文王12年(692年)に使節を送って、『先王の金春秋が唐の太宗文皇帝と同じ諡号を使っているのは、分相応ではない。須らく早く諡号を変えよ』と責めると、神文王は、『先王が成し遂げた「一統三韓」の功が極めて高く、太宗という諡号を付けた』として唐の要求を一言の下に拒絶した。

金春秋が一統三韓の功を立てたという新羅王室の自尊の意識は、その後も伝承された。景文(キョンムン)王(在位861―875年)が月岳(ウォルアク)山の月光(ウォルグアン)寺に留まっていた大通(テトン)に住持を追認して与えた文章にも、『昔、太宗武烈王が、民が塗炭の苦しみを味わうことに心を痛み、三韓を征服して統一を成し遂げた』として、この事件を特に称えている。太宗武烈王と文武王が百済と高句麗を統合した功労で、新羅の宗廟から永遠に毀損されない不遷之主(プルチョンジジュ)になったこともこれを示す。

また、神文王は既存の新羅の軍団に、新しく征服した高句麗人、百済人、報德国人(安勝の高句麗国)及び靺鞨人などを中央軍団に編制した。これで、最終的に新羅の中央軍事組織の九誓幢(クソダン)が完備された。九誓幢の内、新羅に編制されたのはわずか三つの軍団だけで、残りの六つは新しく取り込んだ高句麗人三つ、百済人二つ、靺鞨人一つの軍団で編制された。それだけでなく、中代の王室は日本に使節団を送るとき、報德国(つまり高句麗国)や肅慎(つまり靺鞨)の使節を共に送ったが、これもやはり日本に対して、新羅がこれらの国家と種族を現在支配していることを誇示したものである。神文王が即位7年(687年)に五廟に捧げた祭文で、『異域の使節が珍しい宝物を捧げて職貢(朝貢)する』と強調したのも同じ文脈で理解できる。

「新羅村落文書」と地方支配

「村落文書」は、民政文書、帳籍などとも呼ばれるが、人口調査や税金を徴収するために作った帳簿で、地方官庁で所属の村落の経済的な状況を調査し中央に

報告するものである。現在残されている文書は、孝昭(ヒョソ)王4年(695年)に西原小京付近の四つの村を調査して整理したもので、当時新羅の地方に対する支配方式を理解できる最上の資料だ。日本の奈良、東大寺正倉院に代々伝わり、1933年に発見された。

「村落文書」には県と村名、村落の規模(円周)、戸口数、馬と牛の数、田畑の規模、クワ、チョウセンマツ、テウチクルミなどの木の本数が記録されている。様々な項目にかけて極めて詳しく記録されているのは、効率的に税金を徴収するためだった。この文書は3年を周期に再作成され、伝染病や飢饉などで人口に大きな変化がある場合は随時追記することもあった。この文書を通じ、当時中央政府が地方の農民を統制・支配する力が非常に大きかったことが分かる。

当時、新羅の地方社会の基層の農民は「自然村落」に居住し、多数の「自然村」がひとつの行政単位の県を形成した。いくつかの自然村を代表する者を「村主(チョンジュ)」と呼んだ。中央では県に地方官を派遣したが、村主の助けを借りて村民の税金と人手動員などを管理監督した。村民は居住地を移すたびに、世帯または個人別に事案によって転入と転出の申告をするのが義務だった。地方官は国の徴収を避け隠れて逃げた者も文書に詳しく記録し、民を各地域単位で緊縛させようとした。

「村落文書」に記録された四つの村は、全体の戸数が43戸、総人口は442人(男子194、女子248)で、奴隷階級の奴婢は25人だった。村民はこれを男女別、身分(奴婢)別に区分し、さらに年齢によって「老(老人)」、「除(一部税金が免除になる者)」、「丁(税金を負担する丁男)」、「助(男子を助けられる青少年)」、「追(少年)」、「小(子供)」などの六つの等級に分けて記録した。それ以外に、四つの村は、馬61頭、牛53頭を始め、クワ4249本などの経済林も有していた。田畑の規模や馬、牛の数、そしてクワの本数からして、これらの村落の経済的な状況は、後代の朝鮮時代における一般の村落と比べてはるかに良い。このことから、この文書の村落は、新羅王室の財政源として、特別管理された村落である可能性が提起されている。

「村落文書」からは、統一期以降の社会経済的な発展に伴って、古代的な人頭税体制から徐々に脱却していたことが確認できる。文書をみると、当時新羅では各世帯の財産規模によって9等級に区分した戸等制を実施し、これに基づいて全体の村落が負担すべき税金を計算した。このような9等戸制と計算の方式は、太宗武烈王が制定した「理方府格」という法令を通じて実現された制度のひとつであ

だったため、農民の土地も国家が世帯に与えた土地だという意味の「烟受有番(ヨンスユダブ)」と命名されたが、実際は私有を認めて売買されていた。

付け札木簡「荷札」と税金の輸送

古代には、税金を現物で中央に納付した。このとき官庁では、納税者を明確に確認するため、納付者の住所、名前、税額などを記録した付け札を木で製作し、税金の包みに付けた。これを「付け札木簡または「荷札(ハチャル)」という。木簡は文字を記録するために木材を整えて細長く作った木の板を指し、古代東アジア社会で紙が普及する前に最も広く使われた。また、税金は最終目的地の中央の収納先まで長時間移動するため、この付け札には耐久性に優れた良質の木を愛用した。

この付け札木簡は、木簡の上段に穴を開けたり、上段の左右をそれぞれV字型に切り込み紐で結んで税金の包みに付けられるよう加工した。時には、税金を包装する紐や包みそのものに差し込むため、先が尖った形に削ったものもある。

慶尚南道、咸安(ハムアン)の城山山城(ソンサンサンソン)では、560年頃に制作された500点余りに達する新羅の付け札が発掘された。この付け札には、納税者の「住所」、「名前」、「税額」が記録されている。このことは当時新羅が、これらの納税者を村別に把握し戸籍を作成していたことを示している。これは、「新羅村落文書」(695年)より130年も先に、既に新羅の中央が徴収のために各地方の民を調査・登録したことを意味する。雁鴨池(月池, アンアプチ)でも新羅の付け札木簡が出土したことから、このような木簡を活用した税金輸送方式は、統一期以降も続いたことが分かる。

中央の行政官署では、州、郡、県単位で集計され報告を受けた数々の村落文書を基に、全国の戸数を集計し、各地方行政単位の経済力を把握した。中央の税金を徴収する担当部署の調府や倉部は、この資料を基に地方に税金と賦役を課し、国家の様々な徴収政策を樹立したのであろう。各地方では地方官が村主を通して、村落単位や納付者が支払うべき税金を付け札木簡にひとつひとつ記録し、税金の包みに付けて中央に輸送した。中央の収納官庁では、収納台帳と税金に付着されている付け札木簡を対照して、税金を納付したかを徹底して確認した。

ったと思われる。太宗武烈王は統一戦争が激しくなって農民の階層分化現象が深刻になると、農民の没落を防止して国家の税収も安定させるため、既存の人頭税中心から各世帯の経済状況も考慮する方法で徴収する制度へと革新した。ただし、「村落文書」には土地より人口に関する項目が量的にはるかに多く、詳細になっている上、年齢や等級別の統計が重要な項目として集計され、各世帯の財産算定基準は、土地より丁男の数がより重要視されたと予測できる。

また、「村落文書」では、村主の公務に対する対価として、免税地だった田地の「村主位番(ウィダブ)」、地方官庁の運営と財政のために割り当てた土地の「官謨番(カンモダブ)」、官僚の内視令(ネシリョン)に支給された職田「内視令番(ネシリョンダブ)」などの各種土地の項目が確認される。このような多様な土地は村主の監督の下で農民が耕作し、生産した穀物の一部を地代として官庁または官僚に納付した。この時期の土地の所有関係は、王土思想に基づいて観念的には全て王の所有

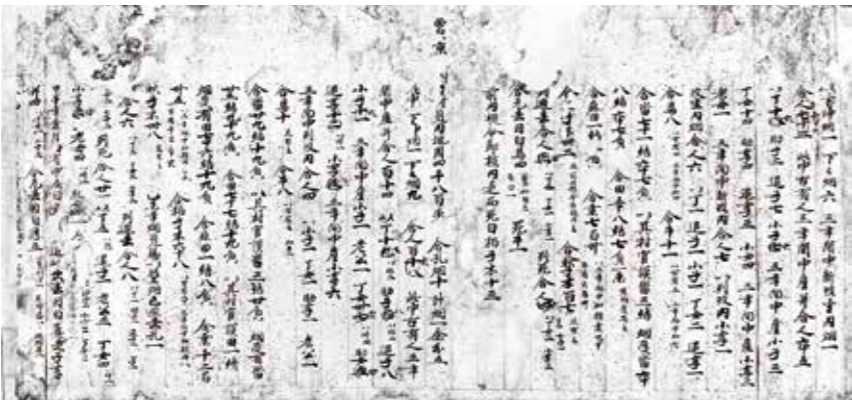


写真 2 日本の正倉院所蔵の新羅村落文書

禄邑の廃止と中代の支配体制の限界

中央と地方の行政体制と徴収制度を整備した後、神文王は即位9年(689年)に従来官吏に支給した禄邑(ノクウプ)制を廃止して、毎年穀物を官庁から支給する禄俸(ノクボン)制を実施した。このような官需官給の禄俸制は、頭品階層に対しては既に文武王代に実施した措置だが、このときになってついに真骨を含む全ての官僚へと拡大した点で違いがある。総じて禄邑とは該当地域の租税を真骨の貴族が国の代わりに直接受け取る制度だったため、禄邑のをなくすことは、真骨の貴族の地域支配を遮断しようとした制度改革といえる。神文王の中央集権政策の中で、真骨貴族に最も強い打撃を与えた。

しかし、同じ年に神文王が王京を慶州から現在の大邱の達句伐(タルグボル)に移そうとした遷都計画は、真骨の反対に直面して思うままに行かなかった。首都は既存の支配体制が凝縮された象徴的な空間である。神文王は真骨貴族の本拠地の慶州から脱して、中代における王室の新たな空間を設けようとしたが結局失敗した。これは中代の王室における王権強化政策が真骨の貴族から全般的に支持を得られず、一定の制約のあるものだったことを意味する。

中代に入って、特に神文王の代では中央集権力が著しく強化され、新たに整備された中央と地方の行政組織に基づいて、王は強力な専制権力を行使した。だが、この新しい政治の運営システムを支えたのは、頭品階層の成長や能力を優先にする官僚体制ではなかった。大等会議の代わりになったのは、少数の特権的な真骨の家門だ。特に、金春秋の息子と婿、その孫が宰相の職を独占するなど、権力を独り占めにした。金春秋と共に中代の王室を切り開いた立役者の金庾信の孫さえも、聖徳(ソンドク)王代の初期に既に核心的な権力から排除されるほど、中代の王権を支えた権力の上層は極めて閉鎖的だった。頭品の身分層が官職に進出できるのは、依然として執権する真骨貴族の推挙によって行われたため、権力は徐々に彼らに集中した。

中代の王室の王権強化政策は、血の粛清を経て急進的に進められたため、文武王と神文王は自分が信頼できる極めて近い血族を、政策を推進する上で前面に掲げるほかなかった。新羅の政治体制は最初から真骨中心の閉鎖的な構造だったが、中代に入って以前より権力の幅がさらに狭くなったのである。これによ

り、政局の不安は一層深まった。中代を通して真骨の反乱が絶えなかったのが、これをよく表している。

しかし、このように不安だった中代の王権が、神文王以降も80年余りを続いた理由はなんだろうか。それは百済と高句麗の滅亡で、税金を徴収できる地域が従来より1.5倍以上増加したからである。また、統一戦争期と比べれば国防費の支出がほとんどなかったため、国の財政はいつに増して豊かだった。実際、中代の王権を支えたのは、強化された王権でも、宰相職を独占した血族でもなかった。権力から疎外された真骨の不満を容易に鎮圧できたのは、王が彼らに与えた経済的な富である。禄邑の廃止が、真骨勢力のこれといった抵抗を招かずに行われたのは、既存の禄邑に匹敵する、いや、それより更に多くの禄俸が反対給付として真骨に与えられたからである。彼らの大邸宅の「金入宅(クムイブテク)」は文字通り金が溢れていた。

しかし、国の財政に問題が発生して禄俸が安定的に支給されなくなると、押さえつけられていた真骨の抵抗がいつでも起こり得るものとなった。これはすぐに現実となった。廃止となった禄邑は、70年ぶりに景德王16年(767年)に再び復活した。



写真3 咸安城山山城木簡

4

仏教教学の発達と
文化の成熟

中代王室の仏教政策

中代社会では、仏教の政治イデオロギーとしての役割は縮小し、その代わり大衆の暮らしを慰めて癒す仏教の思想と信仰的な側面に対する関心が高まった。これによって、中古期に国家の仏教としての色彩を強く表して展開された新羅の仏教は、統一以降、高句麗と百済の発達した教学と教理研究の成果などを受け入れて統合し、より多様な仏教思想を花咲かせた。

新羅の国家体制が整いつつあった中古期には、転輪聖王や真種説など仏教的神聖性が王室の権威を確立する上で重要な役割をした。しかし、百済と高句麗の攻撃が繰り返され政治的な不安が続き、女王の即位に反対する毗曇の乱を経験し、仏教だけではこれ以上王室に対する貴族と民の支持を得られなくなった。

ここで、太宗武烈王以降の中代の王室は、その執権の正当性を仏教の神聖性ではなく、君主の道徳的な資質と民に対する恩沢、徳治を強調する儒教的な政治イデオロギーから見つけ、その後それを実現するために各種制度の改革と関連の政策を繰り返し広げた。『龍はごく小さな生物で、国王には適合しない』との僧侶の勧めにもかかわらず、倭寇から国を守るために死んで東海の龍になろうとした文



写真4 慶州感恩寺址全景



写真5 慶州文武王水中陵全景

武王の姿勢からも、民に実質的な恩恵を与える王を強調した儒教の修辞を容易に読み取ることができる。

文武王は664年、寺院に財貨や土地をむやみに寄付できないようにする措置を取るなど、仏教寺院に富と経済力が集中して民が被害を受ける現実を座視しなかった。さらに、669年に仏教教団の僧政を担当する官庁の政官(または、政法典)をつくり、核心的な国の寺院にも管理機関を設置して、その建立と運営を中央行政体制の中に取り込んだ。仏教寺院と教団の問題を仏教界に自律的に任せていた中古期とは違い、中代には仏教の教団を国が管理する対象に取り込んで統制した。

このように中代の王室は、政治運営の面で仏教より儒教的な原理を重視したが、だからといって王室が仏教の信仰から遠ざかったり、国の安寧を祈願する祈福処としての寺院の機能を見捨てたわけではない。文武王は死後の葬儀を仏教式で行うよう遺言を残し、実際荼毘式で行った。中代の王室では、先王の冥福を祈る願利も王京の四方に建立した。

さらに、中代の初期には統一や唐との戦争により民は動揺し政局は極めて不安定で、王室は密教の呪術的な儀礼に心酔していた。文武王は679年、密教僧の明郎に、唐軍を撃退するための四天王(サチョンワン)寺の建立を推進させた。また、彼の墓地になる大王岩(テワンアム)の近くに国を守るための感恩(カムウン)寺も創建した。この寺院は神文王の代に完工し、国家の危機を知らせる「萬波息笛(マンパシクジョク)」という楽器の伝説の舞台となった。神文王はまた、密教僧の恵通(ヘトン)の建議を受け入れて、奉聖(ポンソン)寺も建立した。

唐に留学して戻ってきた明郎と恵通は、単に呪文を暗唱していた従来の密教の儀式から脱し、新羅を守る無数の天王、神王、龍王などの姿を具体的に制作して、直接五感で感じられるようにする、より大衆的で感覚的な密教の作法を示した。四天王寺の塔の基壇に浮彫で表現した良志(ヤンジ)の塑造(ソジョ)像は、四天王の家の神将と夜叉を超写実主義の技法で彫刻したもので、四天王の信仰を通じて戦争の不安を癒し民心を治めるために企画された中代の記念碑的な作品である。

神文王は684年、四天王寺をはじめ、奉聖寺、感恩寺、霊廟寺、皇福(ファンボク)寺などに成典を設置した。成典は寺院の建立から寺院の運営及び経済的な後援までも国家が責任を負うために設置した官庁のことだ。護国と王室願堂の性格を有する、このような「成典寺院」は、中代王室の大々的な支援の下で繁盛した。

王室では先王の冥福を祈るために、追福事業の一環として成典寺院に巨大な造営物を建立した。神文王の王妃、神穆(シンモク)王后は、亡くなった神文王のために皇福寺に三重塔を建立し、仏像を制作して奉安した。神穆王后と孝昭王が亡くなってからは聖徳王によってこの皇福寺の塔内に「無垢浄光大陀羅尼経」が奉獻された。その後、この経典は、新羅の造塔信仰の根本的な経典として大きく脚光を浴びた。一方、景德王は父の聖徳王を称えるために20トンに達する「聖徳大王神鍾(エミレの鐘)」を作ることを企画したが、幾度も失敗し、恵恭王の代になってようやく完成した。

中代には、地方でも寺院が建立され始めた。676年に新たな仏教思想の華嚴学を唐から取り入れた義湘(ウィサン)は、華嚴の伝法道場で国家の支援を受け栄州(ヨンジュ)の太白山(テベクサン)に浮石(プソク)寺を創建した。683年には宰相の忠元(チュンウォン)の建議にしたがって、屈井(クルジョン)県(慶尚南道、梁山(ヤンサン)市の行政機関を移して、その場に靈鷲(ヨンチュイ)寺を創建した。

仏教の大衆化と「阿弥陀浄土信仰」の拡散

中代に入ってから仏教の政治的な影響力は小さくなったが、一般大衆の仏教信仰と信仰活動は更に広がった。中古期に円光と慈藏(チャジャン)によって占察経と阿弥陀経などが受け入れられ普及し、大衆教化の基礎が設けられた。また、統一以降、このような傾向はより強くなり、首都の王京には下層民の中にも仏教信仰に参加する者が現れ始めた。中古期の仏教が王室と貴族中心であったとすれば、統一を前後に新羅では、市場と村を行き来しながら庶民に仏教の教えを分かり安く説明し、彼らと共に生活しながら仏教を布教する、いわゆる閭巷仏教を起こした僧侶が確認される。

真平王の代に活動した恵宿(ヘスク)は、600年に安弘と共に中国に留学しようとしたほど名望が高い僧侶だったが、田舎に隠れて生活しながら一般の大衆と共に修行をした。狩猟に没頭していた国仙(ククソン)に自分の太ももを犠牲にして殺生の過ちを悟らせ、国王の招請も断って、民衆の中で仏教信仰を伝えた。その後、恵空(ヘゴン)のように貴族の作男出身であるにもかかわらず出家して教学を発展させ

る者も現れた。彼は僧侶になってから小さな寺で暮らし、編み籠をかぶって道端で歌い踊り、大衆と共に生活した。大安(テアン)も教学で名高い僧侶であったが、王室の招請を拒んで、自ら狂ったふりをしながら道端で一般の大衆と共に生活した。

このような仏教大衆化の流れの中でも、元曉(ウォンヒョ)は最も目立つ人物だった。新羅の教学を堅固にした名僧であるにもかかわらず、仏教的な実践では僧俗間には全くの差がないことを自ら示すために、俗人に戻って小性居士(ソソンコサ)と名を変え、村中を回りながら歌い踊り芸人のふりをして仏法を伝えた。特に、彼は衆生が念仏を通じて極楽で往生できるという「阿弥陀浄土信仰」を伝えた。元曉によって、「卑しい身分の者も仏教を知り、十人のうち八人や九人は阿弥陀仏を唱えられるようになった」との称賛が伝わる。

統一期には奴婢が西方浄土に往生したという事例が登場するほど、阿弥陀信仰が社会構成員全体へと拡大し、阿弥陀仏像も全国的に相当多く制作された。阿弥陀信仰が広く流行したのは、簡単な念仏だけでも極楽に往生できるという教えが、一般の人々にも容易に受け入れられたからである。ここに、現世の苦痛を常に見て聞いてくれる「観音菩薩信仰」が庶民の心に浸透し、「法華経」が社会全般で広く読まれ始めた。芬皇寺の千手観音に祈って、盲目の子の目が見えるようになったと言う内容の郷歌は、当時、観音信仰が流行していたことを何よりも明確に表している。

円測(ウォンツク)と唯識思想の発達

統一を前後に、新羅人は中国はもちろん、遠くはインドにまで直接仏法を学ぶために、長い求道の旅に出た。阿離耶跋摩(アリヤバルマ)と恵業(ヘオプ)は新羅人だが、インドのブッダガヤにある菩提寺と摩羅難陀で仏経を研究したものの結局帰国できず、その地でこの世を去った。聖徳王の代に慧超(ヘチョ)は、中国を経てインドと西域各国の仏教聖地を巡礼した後、「往五天竺国伝」という旅行記を残した。阿離耶跋摩、恵業、そして慧超の事例は、当時新羅の人々の海外求道活動が極めて活発であったことを示している。

これによって、中代には唐とインドから直輸入された多くの仏教理論が研究さ

れ、韓国の仏教史において最も際立った教学の全盛期を謳歌した。特に、独自の思想体系を樹立した円測、義湘、元曉などの仏教学は、中国と日本にも多くの影響を及ぼし、東アジアにおける仏教学発展の土台を構築した。このような教学の研究で最も先に頭角を現したのは、中国の唯識思想を発展させた円測(613―696年)だった。

東アジアの仏教学では、南北朝時代以降、全ての人が仏になれる仏性を持っているという「如來蔵」の思想が広く受け入れられていた。当時、中国で流行していた摂論系列の唯識学にも、このような如來蔵思想が混入されていた。しかし、645年にインドで直接唯識思想を研究した玄奘(ヒョンジャン、600―664年)が帰国し、既存の摂論学に大きな問題があることが明らかになった。玄奘は、

唯識とは物事を有りのままに見られない誤った認識を探究し説明する学問であり、インドでは唯識と如來蔵思想が厳格に違うもので、もともと唯識と如來蔵思想が区分されていた初期の地論学がより正しかったと論証した。

円測は、真平王の代に幼い歳で中国に留学して既に摂論学に造詣が深かったが、玄奘の帰国を機に旧唯識の過ちを認識してから、玄奘の新唯識までもこなす抜群の能力を発揮した。また、インドと西域諸国の言語に精通し、玄奘の仏経翻訳事業においても最も重要な役割を遂行した。また、玄奘は自分が持ってきた仏経の翻訳に集中するあまり新唯識を説明する著述を残す余裕がなかったが、円測は玄奘が翻訳した新唯識の経論に注釈をつけて新唯識の理論を体系化した。これによって、玄奘に新唯識を学んだ窺基(キュギ)などの新人の弟子たちに嫌われ、玄奘の思想を盗用したという黒色宣伝により被害を受けることもあった。しかし、658年以来、唐皇室の積極的な後援の下、西明寺で窺基の慈恩学派に匹敵する西明学派という流派を成し、唯識学者としての彼のスタンスをより強固にした。

円測はもともと中観の立場を受け入れている旧唯識思想で勉強を始めたため、玄奘の新唯識とは違い、中観と唯識の空・有の対立的な立場を幅広く受け入



写真6 中国西安西明寺円測塔

れて理解し、これを克服しようとする態度であった。円測の唯識思想は、旧唯識の枠に論理的な新唯識の理論を加えて完成させた理論体系だ。円測の唯識思想は、弟子の道證(トズン)が692年に新羅に帰国したとき新羅に伝わった。

特に、道證の弟子の太賢(テヒョン)は、「成唯識論学記」など多くの著述を通じて、円測の理論に玄奘を継承した窺基の学説まで結合させ、華嚴学の見解も参照し独創的な新羅の唯識思想を完成させた。元曉もやはり中観と唯識の比量が同じであることを論証する「判比量論」を作り上げ、空・有の争論は言説に執着したことによると指摘して、これに執着しない超越的な姿勢を強調した。元曉は玄奘が翻訳した論書の内容を、以前の唯識学の論書と照らし合わせてまとめようと努力したが、主に旧唯識の立場で新唯識を理解しようとする立場だった。

義湘と華嚴学の発達

唯識学と共に中代の仏教学を代表する学問は華嚴学である。華嚴学は「華嚴経」の内容に基づいて全ての存在の相互連携性を強調する思想で、唐初期に智儼(602―668年)によって基本的な理論体系が確立した。華嚴学は如來蔵思想を批判した玄奘の新唯識に対抗して、仏と衆生の同一性を「法界縁起」を通じて解明しようとした点で、中国固有の仏教学の誕生を知らせたという象徴性がある。

新羅の華嚴学は、文武王元年(661年)に唐に留学し智儼の弟子として学んで帰国した義湘(ウィサン：625―702年)によって受け入れられた。義湘は真骨出身で、帰国後皇福寺に留まってから、しばらくして弟子たちと共に太白山に入り、浮石寺を創建して華嚴学の講義をしながら過ごした。義湘の華嚴学は、彼が作った「華嚴一乘法界縁起図」によく表れている。

華嚴思想の核心を七言三十句の詩で要約した法界図は、文章が中心から始まって上下左右に回転する一種の図表の形になっており、黒い文字は衆生を、文字を貫通する赤い線は仏の悟りを、白い紙の背景は衆生が生きる世の中を象徴する。これは衆生の世界がまさに仏の世界であり、彼らが生きる空間が相互繋がっている一乘法界の縁起の構造であることを表したものだ。つまり、互いに繋がっていて、ひとつがなくなると、もうひとつも存立できないため、「一」と「多」の相入相即を

説いて、ついには衆生と仏が同質であることを論じた。法界縁起は、現状の世界で差別的に見えることの全てが、実際は互いに維持することでそれぞれの姿を現しているため、実情は全てが差別のない中道として存在すると強調する。

これによって義湘は、全ての者の平等性と調和を強調し、大衆に対する教化を実践した。義湘は弟子たちに釈迦の平等教団を強調したが、義湘の弟子の中には真定(チンジョン)や智通(チトン)と呼ばれる下層民や奴婢出身までも存在した。多源性で社会を包容する華嚴思想は、葛藤と矛盾をもう一元高いものと認識し、統一期の社会の安定的な雰囲気を形成することに貢献した。義湘は地方榮州の浮石寺で、大衆への教化と弟子の養成に尽力したため、首都慶州の仏教界ではそれほど大きな影響力を発揮できなかった。当時中心的な教団は、密教と唯識学派が主導して頭角を現していた。その後、中代末に景德王代になって義湘の弟子であった表訓(ピョフン)、神琳(シンリム)などが王室と繋がって、その後義湘

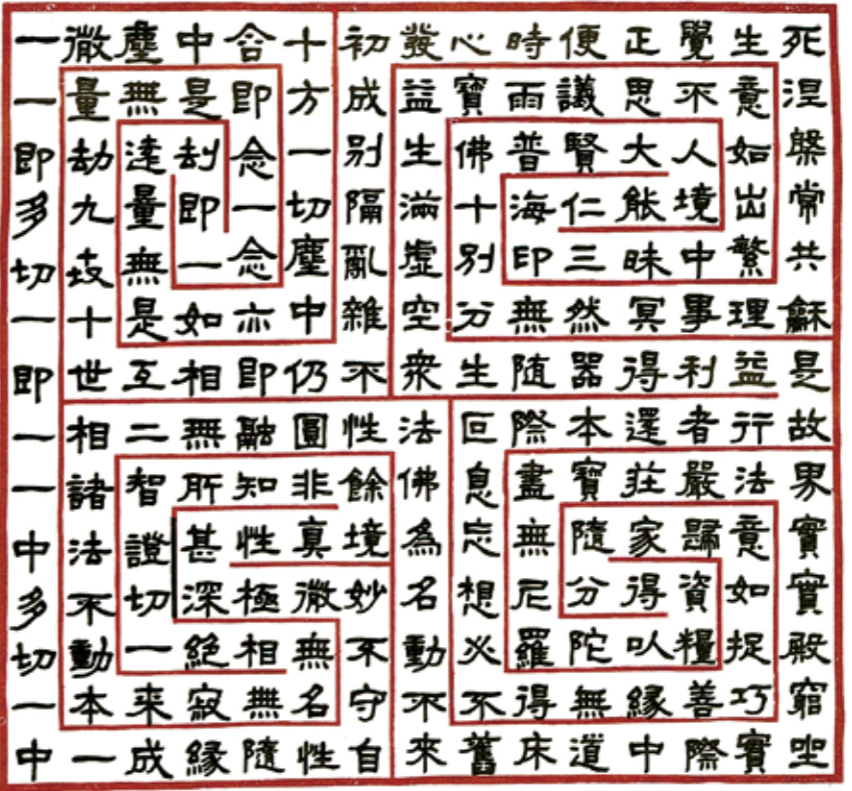


写真7 義湘の華嚴一乘法系図

るために、「大乘起信論」の思想体系に注目した。

起信論には、この本がインドの経典を梁の武帝の時に翻訳したと記録されているが、この本は内容からしてインドよりは中国で書かれた可能性が高い。東アジアの仏教界がこの本に大いに関心を持ったのは、元曉のこの本に関する独特で絶妙な注釈書のためだ。元曉より先に、隋と唐の初めにも既にこの本に関する注釈書はあったが、後代に及ぼした影響力は元曉の注釈書とは比較できなかった。

起信論では一切の存在は衆生が有するひとつの心、つまり一心の発現であり、それは真如門と生滅門に区分されるが、両者は同じく心の静寂な側面と動く



写真8 元曉の判比量論

の華嚴学は新羅教学の中核に発展していく。しかし、唯識学者が多様な理論を勉強して様々な経典に注釈を付けたのとは異なり、義湘の弟子は義湘がそうであったように、華嚴教学を体系化させることよりは具体的な実践を重視した。

元曉の「一心」思想と「和諍論」

中代の新羅の仏教教学に貢献した人物は、元曉(617―686年)である。円測と義湘を始め唯識と華嚴の研究者らは中国に行って直接学ぶか、中国から入ってきた理論に基づいて自らの思想を展開した。しかし、元曉は中国に留学せず、また中国の仏教学とも区別される独自の思想体系を構築した。彼の思想はむしろ中国と日本の僧侶によって積極的に受け入れられ、後代にも大きな影響を及ぼした。

元曉は押梁(アプリャン：今の慶尚北道、慶山(キョンサン))郡の頭品官人層の家門で生まれた。650年に義湘と共に中国へ留学しようとしたが、高句麗軍にスパイと誤解されて実行できなかった。しかし、義湘と共に百済地域に留まっていた僧侶普徳(ボトク)を訪ね、「涅槃経」を修学した。涅槃経は、仏法の全ての教えは結局ひとつであり、衆生が全て真の教えに向かうことになるという「一乗」思想を説いた代表的な経典である。元曉は後日、義湘と共に再び留学しようとしたが、夜中に骸骨に入れた水を飲んだところ甘く感じられると、「全ては心が作り出す」ことを悟り、留学を諦めたという有名な逸話が伝わっている。その後、元曉は、新羅で玄奘の経典と注釈で自ら学習して研究し、これを従来の教学と照らし合わせ、これを基に独自の思想体系を確立した。

さらに、一般社会の問題にも深く関心を持ち、民の疲れを癒す菩薩の衆生済度を自ら実践した。元曉は661年、羅唐連合軍による高句麗の平壤城攻撃に参加して新羅軍を危機から救い、ついに還俗すると太宗武烈王の娘の瑤石(ヨソク)宮主と結婚して薛聰(ソルチョン)を生んだ。これは、大衆教化を重視した元曉の行いと、中代王室の爲民政治的な意図が相互共感できたからであると思われる。

元曉が中国に行かなくても普徳などから学んだ一乗思想は、玄奘の唯識学とは互いに対立している面がある。特に、唯識学は仏になれる衆生がいると言う「五性各別説」を主張し、全ての衆生が仏になれると強調する一乗思想とは互いに矛盾する立場である。したがって、元曉は一乗思想と唯識学の思想の差を克服す

側面を区分したもので、実際はひとつに統一されると説明している。元曉はこのような起信論の思想に基づいて、様々な仏教の理論を総合した。元曉は、起信論こそが、『多くの論書の中で一番であり、多くの論争を払拭できる主人だ』と宣言した。元曉が仏教の大衆化に乗り出した僧俗不二の全ての行動も、世間と出世間の全ての存在が一心の発現と違わないという彼の思想を、自ら実践したのである。

起信論を基に「一心」思想を説いた元曉の思想は、東アジアの仏教学で独自の地位を確保した新羅教学研究の精華と言える。元曉は涅槃と摂論を通じて身に付けた如來藏思想を深化させ、これを基に起信論の一心思想へと進んだ。元曉は、起信論疏、金剛三昧経論、そして華嚴経疏などを著述して、一切の法が時空に関係なく相入相即する広蕩たる世界であると述べた。

このように元曉は、起信論疏と金剛三昧経論に基づいて、互いに対立する理論は真理を互いに違う側面で論じているとし、仏教の根本的な目的は差別を超越した絶対的な真理、一心を身に付けることであると主張した。互いに対立する理論が、実際は対立しないものだと言った元曉の「和諍論」も、まさにこのような立場から出たものだ。元曉は十門和諍論で、当時仏教学で互いに対立するとされる概念が、実情は同じ真理の姿を違う次元から異なる方法で説明しているのだと解明し、真理の本当の姿を見るためには、言語の概念にとらわれてはならないと強調した。つまり、仏教の教学の多様性を認めながらも、彼らをより高い次元で和諍・統合させようとした。元曉の著述は、中国と日本、ひいてはインドにまで伝わり、大きな影響を及ぼした。

三国統一を成して強い中央集権体制を目指していた新羅では、このように活発な国家の仏教教団に対する支援を背景に、仏教教学の研究でも大きな成果を成し遂げた。唯識と華嚴、そして如來藏の思想を中心に展開された新羅の仏教界の思想的な追求は、相互関連して新羅の仏教哲学を一段と発展させた。統一以降展開された、このような新羅の仏教界のダイナミックな姿は、その後、仏教の教団が王京中心から地方社会に拡散する出発点でもあった。

一方、新羅教学の発展は、印刷術の発展へと繋がった。義湘の一乘法界図は、もともと板刻を通じて幅広く広げようとしたようだ。これは結局、仏国寺の釈迦塔に奉安した無垢浄光大陀羅尼経の木版印刷術となる。この時期、中国や日本の板刻術はほとんどスタンプの水準であったが、釈迦塔に奉安された陀羅尼

経は、後代の木版と同じ方法で印刷された点から、新羅の印刷術が技術的に発展していたことが分かる。

都城の景観と成典寺院

新羅の首都、都城の四方の入り口には、雄大な「成典寺院」が建立された。南には四天王寺、北には奉聖寺、西には靈廟寺、東には奉徳寺が位置していた。今は寺院が崩れ、その華やかな姿は見られないが、四天王寺の塔を飾った事実的な彫刻の緑釉神将埴(ノクユシンジャンジョン)や奉徳寺にかけられていた聖徳大王神鍾(エミレの鐘)のことを考えると、これらの寺院の威容が十分に想像できる。

四天王寺は羅唐戦争を勝利に導いた精神的な帰依処だった。四天王寺の北に位置する狼山(ナンサン)の善徳女王の墓地が忉利天で表象されるように、四天王寺は須弥山の頂上、忉利天に上がる仏国土、新羅の入り口、境界地点と認識された。結局、四天王寺は新羅王京の南端に過ぎない空間ではなく、密教儀礼の中では仏国土新羅の入り口で、ここは四天王が守る仏国土の境界地だった。

その後、奉聖寺創建から始まる、密教僧の恵通が主導した神文王代の新しい成典寺院体制は、四天王の守護を受ける新羅仏国土をより視覚的に表現して、王京の四方に成典寺院を建立する過程だった。新羅中代の王権は、密教の曼荼羅的な世界観を都城の四方に位置していた成典寺院を通じて実現し、首都の慶州を天下の中心、四天王の守護を受ける仏国土の中心にしようとした。

都城の四方に設定された成典寺院は、ここから再び四方に伸びて行く官道に従って天下九州と繋がる。また、地方人は都城に入る入り口でこれら「成典寺院」と初めて対面する。成典寺院では、王室や国家の安寧を祈願する様々な国家儀礼が開かれた。上京する地方の人々は華やかで尊厳な仏教寺院とその儀礼に圧倒され、永遠に不滅の新羅王権を想像したことだろう。

さらに、都城の四方の境界では、疫病など都城に入り得る災いを防ぐために、定期的に道の神に対する祭祀も行われた。このとき陰湿な気運を防ぐ陽物として男根を建てた。これが後日、村の境界の標識となる木像「チャンスン」の起源となった。新羅の都城は四方の境界に建立された成典寺院や道路を彷徨う邪悪なも

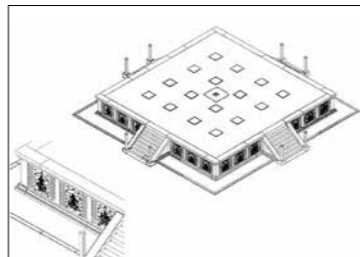


写真9 慶州四天王寺址出土塑造神将像(上)とドローイング

のを追い出す厄払いの儀礼を通じて、地方と隔絶された神聖な空間となった。都城は、境界地点の独特で非日常的な景観を通じて、都城の人々と地方の人々全てが感じて意識する中心の場に昇華された。

このように新羅は、首都の慶州都城の独特な景観と象徴的な儀礼を通じて、国家権力の威厳と中心を演出した。都城はまるで巨大な「劇場」のようだった。都城という「舞台装置」で行われる国家儀礼は、税金を運搬して上京する地方の者にも、都城に居住する官僚にも、同じように巨大な権力を体感させ、彼らの心の中では国王に対する忠誠と服属意識を呼び起こす力となって作用した。

新羅中代の王権は、基本的に唐との事大的な関係を維持しようとしていたが、「太宗」武烈王の諡号の問題からも分かるように、大帝国唐との戦いで勝利した自尊の意識も失わなかった。成典寺院に基づいた新羅独自の国家儀礼は、「護国と王室の永続」を祈願した中代王権の意志から創出され、中代王室はそのような儀礼を通じて新羅国家を天下の中心に位置づけ、それを支配する自らの絶対性を視覚的に誇示しようとした。

文書行政の発達と吏読の創案

新羅では官庁において文書行政システムが相当の水準に発達していた。文章は漢字で記録されたが、漢文ではなかった。韓国語は尊称、時制などの語尾と助詞が発達した膠着語であり、また漢文は韓国語と語順が違い理解できない面が多かった。新羅の人々は漢文を学ぶと同時に、漢字を借りて自らの言葉を表現する新しい文字体系の「吏読」を創案した。

新羅の人々はぎっしりと書かれた漢文の間に「スペース」を入れることを考え、その間に自分たちの句読、助詞、そして語尾などを挿入して、漢文を膠着語に転換して翻訳する表記法を開発した。これによって吏読は、基本的に語幹は釈読して、そこに付く語尾や助詞は音読する「訓主音従(フンジュウムジョン)」という表記法となった。これは、漢文経典を解釈するために、漢文の間に当て字を付ける方法が登場するきっかけとなった。

6世紀半ばの新羅の文字資料では、同じ時期の高句麗、百済とは異なって韓国語の多様な「助詞」や「先語末語尾」などを漢字を利用して表記しようとする努力を持続的にしていたことが確認される。高句麗では6世紀に入ってから、韓国語の表記法そのものが停滞、または後退していたのとは異なり、新羅ではむしろより発展していたのである。

新羅の人々は7世紀末以前に、既に自分たちの言葉を漢字を利用して完璧に表現することができた。新羅では文章の最後に「之」を記録して終結を表現した高句麗式の表記法より進み、「過去形語尾」、「尊称形語尾」など先語末語尾の表記法も開発した。例えば、韓国語で「ボダ(見る)」は、漢文の「見」を語幹にして訓読し、

語尾の「ーダ」は「之」を音読して語幹の「ポ(見)」に付けた。つまり、「見之(ポダ)」と表記したのである。このような原理を発展させ、「ポアッタ(見た)」は過去形語尾の「在」を語尾の前に挿入して「見在之(ポアッタ(見た))」にし、「ポショッタ(見られた・ご覧になった)」は尊称形語尾の「賜」を過去形語尾の前に挿入して「見賜在之(ポシオッタ)(ご覧になった)」と記録した。

後代の表記法、郷札(ヒャンチャル)にも劣らない円熟した吏読表記が7世紀半ばに既に使われていたため、三国統一以降の新羅は唐の律令の文書式を受け入れながらも、その文章の内容だけは吏読で記録する、新羅独自の文書式を創案した。これは高句麗と朝鮮にも影響を及ぼし、後代、官庁の文書は全て漢文ではなく吏読で記録された。漢文を作成して使用することに慣れていた朝鮮でも吏読で文章を記録したことからして、新羅の人々が漢文を書く能力が劣っていたから吏読を発明したのではなく、自分たちの意志を自らの言葉でそのまま表記しようとした意志から、吏読が創案されたことは明確である。

一方、新羅の人々は、中国典籍の漢文の文章の間に句読点と解釈の順番などを表示したり、吏読を簡単に記号化して助詞や動詞の語尾などを漢文の文章の間に書いて、漢文を読みながら韓国語ですぐ直訳できるようにした。このような漢文の間の当て字を口訣と言い、これを集めた人が薛聡(ソルチョン)だった。薛聡は儒教の經典に口訣を付けて、国学で後学を教育した。新羅の吏読と口訣は、後代日本の「カタカナ」と「ヲコト点」の始まりとなり、後代東アジアにおける漢字の受容と翻訳の歴史を新たに作る極めて貴重な資料である。

木簡から見た宮中の日常

木簡に記録された内容は、個人的な簡単な文字の練習から、国家の複雑な行政文書に至るまで、古代社会の各種記録物が全て確認できる。木簡に記録された内容は、断片的な記述であっても当代の生きた情報と語彙を盛り込んでいる。特に、王宮の庭園の雁鴨池(月池)や月城の垓字などで発掘された木簡は、これまで資料が不十分で明らかにされていない新羅の宮中の日常を詳しく教えてくれる。

まず、雁鴨池で出土した「門戸(ムンホ)木簡」を通じて、新羅王宮の警備システ



写真10 月池出土 木簡

ムが理解できる。新羅ではまず、宮殿の門にそれぞれ警備を決めて、門別に警備の名前を書いた門戸木簡を制作した。また、きちんと警備をしているのか、監督者が門戸木簡に直接警備が行われたかどうかをチェックした。このようにチェックした木簡は、その後の警備に対する食糧支給に活用された。門戸木簡を活用した宮殿の門の警備システムは、古代日本にも影響を及ぼし、新羅と同じ様式の門戸木簡が日本の古代の宮殿でも発掘されている。

王宮月城の垓字では、「医薬処方箋」を記録した木簡が発見された。雁鴨池でも医薬処方が記録された8世紀代の木簡が出土したが、月城の垓字の木簡を通じて、新羅では既に6世紀から中国の医書を学習していて、薬剤の効用と調剤の容量を熟知した医薬が処方されていたことがはっきりと分かる。「真興王巡狩碑(568年)」で確認される「薬師(薬剤師)」が、王や貴族のためにこのような処方をした人物である。

雁鴨池で出土した食べ物の器の付け札木簡からは、「醢」のような水産加工物



写真 11 空から見た月池全景

の名称が多く確認される。西海岸地域は塩が豊かで、塩辛類が多く作られた。反面、慶州が位置した東海岸地域は塩が不十分で、穀物で発酵させた水産物の醃が多く作られた。雁鴨池の木簡に「醃」が多く見られるのも、このような理由からだ。このような醃の木簡のうち「高城醃」は、今日も東海岸地域で多く食べる「カレイの塩辛」と推測される。

当時の新羅王室では、このような水産加工物を大きな壺や小さい瓶に入れて倉庫で保管したが、発酵食品であるため製造日を明確に付け札木簡に記録し、発酵期間を考慮していたことが確認できる。雁鴨池の付け札木簡を通じて、過去には想像もできなかった新羅王宮の調理法と食文化までも研究できるようになった。

5

国際関係の変化と 中代における 王権の没落

唐との関係改善

韓半島で百済、高句麗が滅亡した三国統一戦争は、韓半島の古代国家だけでなく中国の隋、唐、遊牧世界の契丹と靺鞨、そして日本までも直接・間接的に介入した古代東アジアの世界大戦だった。特に、新羅と唐は文武王8年(668年)以降、新羅が百済の領土を占領して高句麗の遺民に対し統合政策を繰り広げるとより大きく対立し、羅唐戦争に発展した。これによって文武王8年以降、聖徳王2年(703年)まで、両国は事実上国交が断絶した状態だった。

唐との関係が断絶した7世紀末から8世紀初めに、新羅には自己中心の小帝国観が成立した。新羅王が高句麗を王族の金馬渚に安置し、「高句麗王(その後、報徳(ボドク)国王に冊立)」や、天下を意味する「九州」に地方を編制したこと、「上表一詔書」のような皇帝級の文書行政、「太宗」という諡号などからして、文武王から神文王代初期に限られる短い期間ではあるが、新羅でも自らを世界の中心とするイデオロギー的、制度的な作業が行われた事実を確認できる。

さらに新羅は、冊封国の高句麗(報徳国)の使節団を自らの護衛の下で日本に幾度も派遣し、肅慎人を自国の使節団に含めることもあった。これは新羅が高句

麗、肅慎(靺鞨)などを支配している小帝国であることを日本に誇示するためだ。また、新羅に來た日本の使節団も藩国と表象され、新羅に朝貢をする形式の外交儀礼を行った可能性もある。

しかし、唐の圧迫の下にあった突厥、靺鞨、契丹、渤海など東アジアの多くの民族が復興した7世紀末を起点に、唐に不利になった国際情勢を利用して、新羅は唐との冷戦関係を新たに定立しようとした。神文王3年(683年)、新羅は報徳国の安勝に金氏の名字を与え、王京に居住させた。この措置は、唐との関係を改善するために、新羅内部で冊封の国籍の地位を有する報徳(高句麗)国をなくそうとしたのである。これによって、神文王4年(684年)には報徳国で反乱が起き、その後新羅がこれを鎮圧して、新羅内部の「小高句麗」国は完全に消滅した。神文王は6年(686年)に唐へ使節を派遣して『礼記』を請求し、これに対して則天武后は『吉凶要礼』を下賜した。このような一連の過程は、神文王が唐との和解を模索し、唐の世界秩序と儀礼の形式を受け入れようとする意図の下で断行した事前の措置であることをよく示している。

さらに、大祚榮が営州を脱出して唐の追撃を振り切り、靺鞨と高句麗の遺民を集め東牟山で渤海を建国した698年以降、唐は新羅とこれ以上冷戦中の葛藤関係を堅持するのが困難な国際的な状況に陥った。したがって、聖徳王(702—737年)と唐の玄宗(712—755)の時代には、渤海の勢力拡張と、渤海と唐の戦争を機に、新羅と唐の関係は急速に緊密になり、羅唐戦争以前の状態を回復した。

渤海と唐の戦争と新羅の参戦

719年に大祚榮(渤海の高王)が亡くなり、長男の大武芸、つまり武王が即位した。武王は即位してから仁安という独自の年号を使用し、独立国家としての地位を固めた。また、多くの渤海部族を統合するなど、領土拡張に全力を傾けた。諡号が武王であるのも、生前に武力懲罰に大きな業績を残したことを意味する。『新唐書』の渤海伝は、「武芸が即位して大きく領土を開拓すると、北東の女真族が恐れて臣下に服属した」と伝えている。新羅が聖徳王20年(721年)7月、北方の国境に長城を築いたのも、武王の領土拡張政策と関連がある。

また、727年には渤海が初めて日本に使節を派遣した。その時の外交文書を

見ると、「面目なくも多くの国を主管し、僭越にも多くの藩国ができたため、高句麗の昔の土地を取り戻して夫余の風習を継承した」と記録されており、武王の自尊の意識が表れている。このとき、渤海が日本に使節団を送ったのは、唐と親しくなった新羅を牽制しようとする側面が強かった。当時、渤海は北東の黒水靺鞨の問題を巡り、唐と対立した。発端は、武王の征服に脅威を感じた黒竜江流域の黒水靺鞨が唐に使節を送ったことからだ。唐の玄宗は、これらの地域を唐の領土と見做し、黒水州として統治官を派遣した。渤海は、唐のこのような措置を、渤海を前後から挟み撃ちする敵対的な政策と受けとめた。

これにより武王は、孤立を避けるために日本と国交を結ぼうとし、726年には弟の大門芸などに、黒水州を武力で懲罰させた。しかし大門芸は、無謀に黒水を征伐することは渤海の自滅を招くとして懲罰に反対した。しかし、武王が意志を変えないと、大門芸は仕方なく黒水州に進撃したが、国境線に到着してからもう一度、征伐を撤回するよう諫言した。すると怒った武王は、従兄の大壺夏を送り軍の統率を代行させ、大門芸を召還しようとした。すると、大門芸は唐に亡命した。

大門芸の召還交渉を巡り、唐と渤海間で緊張が更に高まった。732年、武王は將軍の張文休に、山東半島の登州を攻撃させ、刺史の韋俊を殺害した。すると、唐も大門芸を幽州へ送り、軍隊を徴集して渤海を攻めた。また、大僕員外卿の金思蘭を新羅に送り、733年(聖徳王32年)に渤海の南方の国境地帯を攻撃させた。当時、唐の力だけでは渤海を完璧に制圧できなかったため、渤海の南方にあった新羅を取り込んで、以夷制夷の方法で渤海を制御しようとした。

新羅は渤海の南下を阻止し、また、戦争によって悪化していた唐との関係を一気に解消できるという点から、当時の唐の提案を積極的に受け入れた。当時、新羅は渤海を攻撃したが酷寒と大雪により兵士たちが半分以上も凍死して仕方なく軍を帰らせたと唐に報告したが、実際新羅は渤海と唐の戦いに全力を尽くして唐を助けようとはしなかったようだ。このような新羅の戦略は、もともと大祚榮が営州を脱出して唐と緊張関係にあったとき、彼に「大阿漚」という官職を与えて彼の定着を助けようとした事例からも分かるよう、既に渤海建国の初期から堅持してきたものだった。聖徳王は唐との親善関係を再定立し、また、渤海の南下だけを阻止するため、渤海と唐の葛藤を後押ししたり、または放っておいた。結果的に、新羅のこのような政策は効果があった。735年、新羅は唐の以夷制夷を逆に利用して、このとき

唐から涇江(ペガン：今の大同江(テドンガン))以南を新羅の土地として認めてもらった。羅唐戦争はこの時になってやっと公式に終戦を迎えたと言える。

一方、渤海の武王が亡くなってから、その息子文王が即位し、唐も結局渤海と和解する。唐が文王を「渤海国王」に冊立して、渤海と唐の間にも平和が訪れた。羅唐戦争以降激動していた東アジア世界に、今や唐を中心にして新羅、渤海、日本などが共存する、比較的安定した国際関係の枠が定立された。各国間には使節の往来が頻繁になり、民間レベルの交流も増えた。こうした中、新羅と渤海及び日本は、唐の先進の文物を受け入れ、自国の発展に力を注ぎ、華やかな文化を花咲かせた。

新羅と渤海の関係

新羅と渤海は互いに交流し競争して、220年も併存した隣国である。最近、渤海を韓国の歴史に包摂するために、新羅と渤海の間で同族意識が存在したという主張が提起されているが、このような考え方はむしろ韓国の歴史を体系化する上で逆効果を招く可能性が高い。

『新唐書』には、新羅の人々が、渤海人は鋸のような歯と鋭い爪で人を食べる野蛮人だと蔑視していた事実が伝わる。また、新羅の人々はもともと機織り遊びを意味するキルサム(カベ)に起源する秋夕(チュソク)の節句を、いつからか渤海を退けた戦勝日として記念するなど、渤海に対する敵愾心を強く表した。学者、崔致遠(チェ・チウオン)も渤海を高句麗を継承した妨げの存在だと表現した外交文書を唐に送っている。このような資料からして、新羅の人々は渤海を、高句麗を継承した敵対的な国と認識していたに違いない。

中国の資料によると、渤海には隣国に進む五つの重要な道路があるが、その内のひとつが「新羅道」として挙げられている。新羅道は、渤海の首都の上京から東京、そして南京を経て新羅の泉井(チョンジョン)郡(今の咸鏡南道、徳源(トクウォン))に至る道だ。当時、豆満江(トゥマンガン)流域にあった渤海の東京から新羅の泉井郡の間には39の駅があり、その間に渤海の南京が位置した。新羅道を通じて渤海と新羅が接触した具体的な事実、『三国史記』で二度確認される。さらに、唐の使節の韓朝彩がこの新羅道に沿って渤海から直接新羅に入ったという

日本側の記録もある。この交通路は、渤海と新羅を繋ぐ機能だけではない。時には、渤海の使節が日本に進む経路としても使用された。777年1月に、渤海の使節が南京の吐號蒲を出発して日本に向かったのである。このように渤海と新羅の間には、使節の派遣がなかったわけではないが、経済的な交易や友好的な常時の外交関係は、ほぼ確認されない。三国史記に見られる二度の使節派遣や渤海の資料の新羅道を根拠に、同族意識を有していたと説明するのは問題がある。

むしろ、韓国の歴史を体系化する上では、新羅と渤海の相互間の意識より、その後の歴史の中で後代の人々が両国をどのように見つめていたのかが、重要であろう。渤海が高句麗を継承したということは新羅の人々も明らかに認識していたが、後三国を統一した高麗も渤海を姻戚の国と見做し、渤海が滅亡するとその支配層と遺民を積極的に包容した。また、宋の使節徐兢の高麗図経や李承休(イスンヒュ)の帝王韻紀(チェワンウンギ)を見ると、高麗の有識者は渤海を、高麗成立の前史と理解していることが分かる。

さらに、朝鮮後期には、新羅と渤海の歴史を、三国時代から続く「南北国」の歴史と見做すべきとの柳得恭(ユ・ドクゴン：1748—1807)の主張が提起された。これは、渤海考の序文で、『金氏が南側を領有すると、大氏が北側を領有して渤海とした。これが南北国だ。当然、「南北国」の歴史が存在すべきであるにもかかわらず、高麗がこれを編纂しないのは誤りだ』として、現在、私たちがこの時代をどう呼ぶべきかを、厳格に教えてくれている。

私たちが生きる時代も、きっと後世では南北分断時代、南北韓時代などと呼ぶだろう。分断という悲劇を克服し、世界史の流れに能動的に対処するためには、新羅と渤海の内外情勢と各国の歴史を冷静に分析することが、ひとつの糸口になる。もちろん、過去の南北国時代を現在の南北分断と同一視することは避けるべきだ。しかし、新羅と渤海、そしてそれを巡る周辺の世界が相互に合従連衡していた状況は、今日の私たちに示唆するところが大きいであろう。

唐との「朝貢」貿易

聖徳王以降展開された新羅と唐の朝貢と冊封の関係は、古代中国の政治的な理想であった王道思想を外部へと拡大させたものである。これを周辺の世界

の立場から見ると、中国と周辺国間の形式的な臣属関係に基づいて、平和的でありながらも安定的な国際秩序が確立したと理解する必要がある。その中で新羅の王権も安定を維持できた。新羅は聖徳王(702—737年)の在位期間だけでも45回唐と交渉をしたほど、両国の人材・物的交流は大きく拡大した。新羅は唐と交流する過程で、盛唐の文物を受け入れ、西域の文化とも接することで、文化の質的成長を成した。当時、新羅は唐から「君子の国」、「仁義の国」と称えられるほど、文化と思想が日に日に成熟した。

唐との外交関係は、単なる使節の往来に留まらなかった。「朝貢」という形式を通じて政治的、文化的な交流だけでなく、物的交流、つまり交易が活性化した。唐との公的な交易は、再び新羅を介して日本にまで拡大した。統一前の新羅の朝貢品は主に地場産品だったが、統一後はその構成が豊かになり、技術的に優秀な製品が加わった。例えば、実物そっくりの模様の毛織カーペットや生きているかのように人々が動くミニチュア製品など、その驚異的な作りには、唐の皇帝も驚くほどだった。

三国統一以降の新羅王室と貴族は1.5倍に拡大した領土と人口の中で豊かになった。7世紀末には首都慶州で市場が3ヶ所に増えたほど、支配層の財貨に対する欲求は爆発的に増えた。優秀な職人を掌握した王室と貴族は、個別の工房を整えて奢侈品を直接生産したが、品質や種類には満足できなかった。自然と彼らは、世界中の華やかな物品が集中する中国のシルクロード、海路など海外の市場に関心を持った。

日本との外交葛藤

新羅と日本は、百済復興運動の際は互いに交戦国だったが、高句麗が滅ぶと唐の圧迫に対応するため、新羅は668年(文武王8年)、日本に先に使節団を派遣して外交関係を再開した。その後、両国は活発に交流して緊密な関係を維持した。これによって、新羅から日本に公式に使節を派遣した最後の年、779年(恵恭王15年)まで、新羅は日本に45回の使節を、日本は新羅に25回の使節を派遣した。7世紀後半から8世紀初めまで、新羅は日本に律令国家建設に必要な知識と先進の文物を伝えた。

しかし、聖徳王が執権してから新羅と唐の関係が次第に改善し、そして701年

に大宝律令が完成したことを機に日本も律令国家体制を整えると、新羅と日本の両国は外交上の儀式的の問題で大きく葛藤した。唐のように天皇制の律令国家を建設しようとした日本の朝廷は、対外関係においても新羅を藩国と見做し、自国の下位に置く外交形式を固執した。しかし、両国の外交関係において新羅が唐と日本の挟撃を恐れていた7世紀末から8世紀初めにも、日本と新羅の間を中華と藩国の関係で設定するのは不可能だ。

これと関連して、新羅及び日本の使節団が相手国に滞在した期間が注目される。新羅の遣日本使は長くても4ヶ月を超えず、平均2—3ヶ月内に任務を終えて帰国した。これに比べて、日本の遣新羅使は最小限7ヶ月から10ヶ月以上新羅に滞在した。これは、日本的な小中華の世界は新羅にとって大きなメリットがなく、むしろ反対に日本が新羅を通じて中心の文化を学習、受容したことを端的に示している。

結局、8世紀以降、新羅と唐の関係が次第に改善し、これと反比例して新羅と日本との関係は疎遠になっていた。このような変化は、既に神文王代の689年に、日本側が、新羅の使節団の官位が低くなっていることを問題視したことから垣間見ることができるが、両国の関係が著しく悪化したのは、渤海の建国を起点に新羅と唐、渤海と日本を軸にする新しい東アジアの合従連衡以降のことだ。新羅は733年、渤海と唐の戦争に援軍を派遣し、これに対して唐は735年に大同江以南の土地に対する新羅の支配権を認めた。新羅と唐が緊密な関係だった726年から732年まで、新羅は日本に使節団を一度も派遣せず、その間渤海が727年に日本に使節を派遣して、渤海と日本は国交を樹立した。

唐との関係を羅唐戦争以前の水準に回復した新羅は、日本との関係において従来とは違う高圧的な姿勢を示し始めた。734年、日本に派遣された新羅の使節団は自らを「王城国」と表現して日本側に追い出され、続いて735年に新羅に派遣された日本の使節は『新羅が常礼を守らず、使節の言葉を受け入れない』と報告した。当時、日本側は新羅を懲罰する計画を議論するほど、新羅の変わった態度に憤慨した。にもかかわらず、景德王は742年、新羅に来た日本の使節が傲慢だという理由で受け入れなかった。それだけでなく743年、新羅は日本に送る国書で、従来日本の王に贈っていた「調」という表現をなくし、これを「土毛(特産物)」と改称した。すると、日本はこれを問題視して新羅の使節をすぐに送り返した。

このように、渤海と唐の間で戦争が勃発した733年を起点に、新羅と日本との関

係は大きく悪化した。新羅は唐との友好的な関係を背負って、日本に従来とは違う高圧的な姿勢を取り、日本はこのような新羅の態度が733年以前に定立された両国の「常礼」に違反したとして咎めた。

日本との交易の増加

日本との外交的な競い合いが続いている間も、新羅は絶えず日本に使節団を派遣した。新羅は732年、734年、738年、742年、743年と5回にかけて使節を派遣した。特に、この頃の使節団は以前とは比較できないほど大規模で、しかも時間の経過と共に使節団の人数は増え続けた。「続日本紀」から確認できる、この時期の新羅の使節団の規模は、714年に20人、719年に40人、723年に15人、732年に40人だったのが、738年には147人、742年には187人、752年には700人、763年には211人、764年には91人、769年には187人、774年には235人となった。両国の外交関係が悪化しても、新羅の使節団の規模はこれとは逆に752年まで継続的に増加した。

当時、新羅で対日外交を担当した官庁は、内省所属の「倭典」だった。内省は新羅王室の業務を総括した官庁だが、その下には特に手工業に関連した官庁が極めて多い。倭典は対日交易品の生産を奨励し、交易品の輸送と管理など、対日交易に伴う全般的な行政業務を遂行したものと推定される。王室の業務のうち手工業を管掌する行政組織がこれほど膨大だったのは、当時の手工業の技術がそれだけ大きかったことを暗示する。この需要先として最も可能性が高いのは、何よりも日本との交易と言える。

当時の日本への交易品の数が確認されているのは、686年に60種、688年に80種であり、714年には新羅の使節に交易品の代価として日本から真綿5,450斤を支払っている。概ね、7世紀末以降、新羅の日本との交易量は大きく増加した。732年以降、新羅の使節団の規模が大きく拡大したのも、このような傾向の結果と思われる。倭典が内省の中に設置されたのは、まさに、このような日本との交易を新羅王室が主導していたことを意味する。

対日交易には、王室だけでなく真骨貴族も参加した。特に、当時の政局を掌握した上宰相のような最高権門が王室と密着して対日交易を積極的に主導した。

この点は、733年を起点とした新羅の外交的態度の変化が、それまで対日外交に積極的であった上宰相の金順貞(キム・スンジョン)が亡くなって、彼の代わりに執政した上大等の思恭(サゴン)によるものと日本側が理解していたことから容易に分かることだ。思恭を反日の人物と理解することが多いが、733年以降も新羅からより拡大した使節団が派遣されたことからして、思恭を含む新羅の執政者にとって、対日貿易の「メリット」は無視できないものだった。

新羅の王京、禹金里(ウクムリ)に居住していた長春(チャンチュン)が、735年に「海賈」について行ったところ風波に遭い漂流しながらも生還したという話は、景德王当時、新羅の支配層が対外交易にどれだけ熱中していたのかをよく表している。特に、中国との関係が羅唐戦争以前に改善した733年以降、新羅の対外交易の規模はより拡大した。また、日本も新羅と外交関係が悪化する中でも、新羅の使節団との九州における交易だけは止めなかった。これによって、733年以降、日本に派遣された新羅の使節団の規模は、以前より当然拡大した。

8世紀、新羅の日本への交易品

8世紀、新羅の代表的な輸出品は、真鍮で作った鍮器だった。「アンソンマッチム」という諺まで作り出した、後代の優れた朝鮮鍮器も安城(アンソン)で生産されるが、この技術も実は新羅から始まったものである。新羅の職人は、器やお盆、匙など、どんな物でも真鍮で作り上げた。華やかな金色の新羅の鍮器は、日本の貴族層を誘惑する、とっておきの商品だった。

新羅では、この鍮器を逆羅(サブラ)と呼んだが、日本がこれを輸入して、「サブラ」という名もそのまま受け入れた。これによって、8世紀以降、日本では鍮器を「サブラ」と呼んだ。サブラは逆羅を日本式に発音した単語である。しかし、時間が経過し、日本人はこの言葉がどこから来たのか分からないまま使用するようになった。面白いことに、10世紀頃の日本の文献は、このサブラの元々の意味が、鍮器生産で有名な「新羅(逆羅)＜雑羅＜新羅」を意味すると説明している。まるで、中国の陶磁器に熱中していたイギリスが陶磁器を「チャイナ(中国)」と言ったように、この時の日本も鍮器を「新羅」と呼んで、韓半島から来た鍮器に心を奪われた。

さらに興味深いことは、このような認識が中国でも確認されるという点だ。中国では12世紀頃に鍮器を「斯羅(シラ)」と呼んだ。しかし、当時の中国のある学者は、新羅と高麗の莫大な鍮器製作に関する記録を読んで、自分たちが使っている「シラ」が、もしかすると鍮器の生産で有名な「斯羅」から来たのではないかと推測した。このように、当時日本と中国は両方とも、「鍮器と言えば新羅」と認識していた。それだけ新羅の鍮器は東アジアにおいて、「生産が追い付かない」ほどの有名な商品だった。

新羅の鍮器以外にも、当時の交易の過程を垣間見られる資料は以外と多く残っている。1, 200年前に日本へ輸出した新羅の交易品が、鮮やかな色彩の当時の包装のまま残されていると言えば、信じられない人も多いだろう。それは、東大寺の倉庫、「正倉院」の宝物である。驚くことに、この倉庫は千年をはるかに超えた奈良時代の日本の王室と、東大寺の日常品を、現在まで全く損傷なしに保存してきた。9,000点以上に及ぶこれらの遺物は、嘘のように、最初製作したそのままの色彩を維持している。

奈良時代、日本の支配層が使用した正倉院の宝物の中には日本産もあるが、シルクロードや海路を通じて入ってきたアラビアや中国、東南アジア産の遺物が相当の割合を占めている。日本はこれを通じて、自らを「シルクロードの終着地」と宣言し、古代日本が世界の文化と呼吸していたことを誇っている。現在日本は、これらの遺物が中国に行った日本の使節団や僧侶などが購入したものだと説明している。もちろん、正倉院の遺物の中にはそのような経路で入ってきたものもあると思われる。しかし、当時の日本は航海技術が遅れていたため対外進出が活発でなく、中国との交流も微々たるものだった。結局、日本側の説明は当時の状況とは合致しないものだ。

1975年、慶州の雁鴨池の発掘が始まり、このような疑問は謎が解けた。なぜなら、新羅の支配層が使用していた雁鴨池の遺物が正倉院の遺物とあまりにも類似していたからだ。実際、雁鴨池で発掘された青銅のハサミは、まるで同じ職人が作ったかのように正倉院のものと形や模様がほぼ同じである。このように、当時両国の支配層が類似した趣向の物品を使用していたのは、8世紀以降、東アジアの貿易を掌握した新羅の交易圏内に日本が位置していたからである。当時、日本人にとって新羅の船は、荒波も切り抜ける神話のような存在だった。正倉院には、新羅で製作したのが確実な物品が意外と多い。まずは、「新羅村落文章」



写真 12 日本正倉院所蔵佐波理加盤文書

が発見されてから有名になった、仏経を包む新羅の「経帙」だ。これ以外にも、新羅の土器に入れられて日本に渡った新羅の「羊脂」や「高麗人参」のような薬品もある。また、当時日本で「新羅琴」と呼ばれたカヤグムも挙げられる。このカヤグムには、前面の下段に幅の広い金箔の波の模様があり、その間の所々に水草が金で美しく飾られている。弦をかける雁足(キロギバル)にも金色の水草が飾られ、大変華やかだ。演奏をすれば、すぐにでも水面の上を飛んでいく群れになった雁が、千年の音色を聞かせてくれそうな気がするほどだ。

新羅の経帙や薬品、カヤグムなどは、新羅から天皇への贈り物として日本に渡った可能性があるが、正倉院に現在残っている遺物には、新羅と日本間の商業的な貿易を前提に考えずには、その流入の経路が説明できない物も極めて多い。その内のひとつが、奈良時代に東大寺の僧侶が使っていた正倉院の鍮器製品で



写真 13 日本正倉院所蔵新羅琴

ある。正倉院の鋤器には、現在日本の他の場所では使用されない「サハリ」という名称が付けられている。正倉院には、436の器、700の皿とお盆、345の匙など極めて多くのサハリ製品が保管されている。しかし、この「サハリ」は、先に述べた「サブラ」のように、新羅の鋤器、「逆羅」を日本式に発音したものだ。

これを証明するかのように、サハリの加盤の皿の間で、8世紀初めに書かれた新羅の古文書が発見された。加盤とは、段々と小さくなる皿をいくつも重ねて、その上に蓋をした皿のセットで、僧侶の食事の儀礼に使われた物と思われる。この皿の間から発見された古文書は、新羅で鋤器の表面が傷つかないように挟んだ「包装用の紙」と推定される。

当時、新羅は使い切った公文書の紙を集めて、物品を包む時にリサイクルした。現在、正倉院には、日本が新羅から購入して一度も使わず元通りに保管したサハリの匙のセットがある。このセットは円形と楕円形の匙二つを紐できつく結んである。このようなサハリの製品は、その量や包装した状態の遺物からして、東大寺がある経路を通じ多量で購入した可能性が高い。正倉院の片隅で、752年新羅と日本の交易の過程を表す、最もはっきりとした資料が溢れ出てきた。

752年の新羅使節団と「買新羅物解」

正倉院には、木と岩を背景にした豊満な美人が立っていて、コラージュ技法で彼女の服を実際の羽毛で飾った、6扇構成の「鳥毛立女屏風」がある。この屏風を

修理するとき、日本の古代文書が屏風の下貼り、または裏打ち紙として使われていたことが明らかになった。現在まで30枚余り集められたこれらの文書は、752年に日本の貴族が新羅の使節団が持ってきた交易品を購入するために、自分たちが購入する物品の名称と数量、価格を記録して、日本の管轄官庁に提出した文書であることが分かった。この文書は、新羅の物品を購入する許可を申し込む文書であるという意味から「買新羅物解」と呼ばれている。

この文書によると、当時の対日交易品には、高麗人参などの薬品、蘇芳などの染料、黄金及びその他の鉱物、逆羅などの鋤器の食器類、多様な儀式の道具、毛織のカーペット毛氈、食用品、皮革製品、本など、新羅で生産されたあらゆる生活用品と、中国市場やアラビア商人から購入したシルクロードと海路の珍しい香料、薬品、化粧品、染料などがある。これらの物品は小さくても値段が高い物で、多くの品物を船に乘せられなかった新羅が、最も利益が残る物を考えて用意したものだ。現在まで発見された文書を見ても、当時新羅は日本に100余りの物品を200点以上販売した。しかし、この文書は偶然残っているものであり、しかも国の公式な許可を受けるためのものに過ぎない。

新羅は、752年(景德王11年)に7隻の船、合計700人に至る大規模使節団を日本に派遣した。この時の使節団は、前例がないほど極めて大規模で、個人的な取り引きまで考慮すると、当時の交易量は莫大なものであったと思われる。752年の新羅の使節団は、九州の大宰府に到着してから、370人余りは九州に残し、二か月半以上かけて6月14日、最終到着地の日本の首都奈良に着いた。もともとの700人のうち半分ほどは大宰府や大阪のなにわに残って滞在し、非公式の貿易に従事した。結局、当時の新羅の使節団は単なる外交官ではなく、世界最高の物品を備えて大規模なセールスに出た巧みな商人だった。「買新羅物解」を見ると、正倉院に所蔵された奈良時代の日本の支配層の遺物は、その多くが新羅の使節団を通じて購入したものであることが分かる。

日本は、新羅と外交的に競い合いをしている中、遣隋使や渤海使を通じて新羅を代替する新しい海外の物品の流入路を開拓しようと努力したが、大きな効果をあげられなかった。結局、日本はその後、新羅との公式的な使節交換を諦めて、九州の大宰府を窓口とした両国の交易関係だけを認める形で、「新羅物」を再び受け入れた。768年に天皇が新羅の交関物を買い入れるよう大宰府に備えられ

た真綿を日本の貴族に最高2万屯から最低1千屯まで賜与した事実は、このように変化した両国の関係をよく示している。733年以降展開された新羅と日本の外交的な争いは、結局大宰府を媒介にした交易関係という新しい両国関係を作り出した。これを新羅が快く受け入れていたのは、8世紀以降新羅が追求した日本に対する外交の基本的な姿勢が、交易において利益を追求することにあったことを意味する。752年の交易もその中に含まれる。

日本は新羅の使節を入京させて、「藩国」の使節としてもてなそうとしたが、新羅はこれに反発した。にもかかわらず、両国の関係は続いた。新羅が738年(孝成王2年)以降、交易を目的とする使節団だけは引き続き九州の大宰府に派遣したからである。新羅と日本の外交は、その後、唐を通して発生したいくつかの事柄以外は、ほとんど確認されない。764年、唐に留学してから渤海を経て日本に渡った僧侶の戒融(ケユン)が無事に帰国したのか、彼の安否を確認して欲しいという唐の勅使の要請を口実に、新羅は日本に使節を派遣した。また、769年(恵恭王5年)と774年には、日本の遣唐使、藤原清河の書信を伝えるために新羅が日本に使節を派遣した。しかし、このような関係さえも新羅と日本の外交は、執事省と大宰府の実務交渉を中心に行われた。

唐との外交の交通路を確保する上で新羅の協力が必要な日本の朝廷は、779年、大宰府の官吏を新羅の朝廷に派遣し、唐から帰国する途中耽羅(タンラ)に漂着して拘禁された日本の使節と唐の使節を日本に返してくれるよう依頼した。新羅は、日本の朝廷の要請を受け入れ使節を派遣したが、新羅と渤海に対して日本優位の外交形式を確立しようとした日本の朝廷が再び新羅王の「表文」を求めたため、その後新羅は日本に使節を派遣しなかった。

新羅が日本との公式的な外交交渉を終えた理由は、渤海の文王代に政治・軍事的な面で渤海と唐の関係が大きく改善し、これによる北東アジアの緊張関係が緩和されたため、新羅が日本との外交関係を敢えて維持する必要性を感じなかったからと思われる。日本もやはり渤海を通じて唐と交流が可能だったため、新羅と日本の交易量は8世紀半ばを頂点に次第に減少し、ただ新羅の民間の商人だけがその一部を担うようになった。結局、渤海と日本の関係に反比例して、新羅と日本の関係は次第に消滅した。

中代没落の前夜

三国史記に記録された天災地変の記事の世紀別統計を見ると、計43種584回の記録のうち、240回の記録が8世紀から9世紀に集中的に表れている。これは、他の世紀に比べて2倍も多い数値だ。一方、天災地変の記事が最も多かった王を順番に羅列すると、聖徳王42回、景德王28回、恵恭王28回の順で、中代後半に集中している。これは、従来、中代の繁栄の全盛期と評された聖徳王から景德王代が、新羅の歴史上最も不安な時期であったことを意味する。

天災地変の内、農業生産や農民の生存により直接的な打撃を与え得る飢饉や疾病、洪水、干ばつ、季節外れの雪、霜、雹、昆虫の被害などだけを区別して世紀別の傾向を改めて整理してみると、これもやはり、先の天災地変の統計値の割合とほぼ類似している。8世紀前半、聖徳王代から急増し、8世紀半ばから9世紀前半にかけてピークに達してから、9世紀半ば以降少なくなっている。したがって、上述の新羅における天災地変の統計値は、単に天文の異常現象を観測した数値ではなく、新羅社会の生産構造を崩す破壊的な自然災害の頻度数であるに違いない。結局、聖徳王代は、中代のピークを予期させる黎明期ではなく、中代没落の前夜だった。

このことからすると、聖徳王から恵恭王に至る中代の最後の70年は、新羅の人々には最も過酷な時代であったと思われる。特に、太宗武烈王の百濟遠征、文武王の高句麗遠征に続いて展開された羅唐戦争までを含めると、新羅の人々にとって「中代」という時期は、「一統三韓」という中代王権の自尊の意識とは関係なく、最も惨憺たる「戦争と災異の時代」と認識された可能性が極めて高い。景德王代に、上大等の金思仁(キム・サイン)が相次ぐ「災異」を理由に時政の良し悪しを極論し、恵恭王代に、「災異」が頻繁に起こり民心が背を向けて国家が危うくなったという編年の記事が、三国史記と三国遺事に相次いで出てくることも、この時期の自然災害を見つめる支配層の不安感が相当な水準に達していたことを物語っている。

自然災害と伝染病の流行

弱り目に祟り目で、このような自然災害は飢饉に繋がり、これによる栄養欠如と



写真 14 慶州南山三陵谷石造薬師仏坐像

免疫体系の弱化が伝染病の流行に繋がったということは、8世紀から9世紀の新羅社会でも確認できることだ。特に、当時の伝染病は、頻繁な対外交流の中で国際的に流行した。8世紀から9世紀は、新羅と唐、そして渤海、古代日本などが互い外交と貿易のために最も活発に交流した時期で、これによって国境を行き来する伝染病の種類が増えた。特に、特定の病原菌に対して耐性のない地域にも無差別に疾患が伝わり、その破壊力は既存の伝染病とは比較できない深刻なものだった。

730年代、古代日本の最高権門の藤原不比等の4人の息子が「天然痘」にかかって相次いで死亡し、785年には新羅の宣徳王が「疫病による発疹」で死亡するなど、当時の伝染病は支配層も避けられなかった。もちろん、薬もまともに使えない一般の人々はなおさらだ。疾病は貧しい者にとって、より過酷なものだ。

このような自然災害と伝染病を克服しようとした中代王室の対応策は、年代記の所々で確認できる。例えば、倉庫の食糧で民を救恤し、気候を正確に予測するために漏刻博士や天文博士を置いた。また、医学生を要請したり、医博士を増やし、国家危機の度に医術に優れた者を特別採用する政策を実施した。

しかし、自然災害と伝染病の原因が正確に分からなかった当時、一般の人々の不安感と危機感を鎮められる、最も積極的で効果的な対応策は呪術的、宗教的なものであった。病を治す神通力を持っているという「薬師仏」の造営が、8世紀末から9世紀前半に集中的に表れていることも、これをよく示している。特に、景德王代には、中央と地方にかけて数々の仏寺ができた。黄龍寺の巨鐘、奉徳寺の聖徳大王神鍾(エミレの鐘)、仏国寺と石窟庵、そして、芬皇寺には30万斤以上の巨大な薬師仏を国家が主導して造成した。それまで、これらの仏寺は華やかな中代文化の満開と理解されたが、民の不安感を和らげるための国家の呪術的、宗教的政策であったという観点で見直す必要がある。

国家秩序の動揺と禄邑制の復活

「安史の乱(755―763年)」は、唐内部の政治体制だけを崩したものではなかった。この乱によって、唐と繋がる国際秩序が揺れ、新羅の王権も動揺し始めた。特に、新羅では自然災害が相次いで発生し伝染病が流行していた状況で、国際

秩序まで不安定になり、支配層の葛藤と危機感が最高潮に達した。このような不安感の中、中代末期には王権に挑戦する真骨貴族の反乱が以前よりも頻繁に起きた。自然災害と伝染病、そして政局の不安という循環構造は、新羅国家の生産、再生産構造までも荒廃し、これによって国家財政に深刻な問題が発生した。結局、757年(景德王16年)、景德王は過去に神文王が廃止した禄邑制を再び復活させるしかなかった。

統一以前の新羅の真骨支配層は、禄邑制によって自らの経済的利権を維持していた。禄邑制は、貴族の官等と官職によって国家が一定の地域単位を分け与え、これに基づいて該当地域に対する貴族官僚の租税受領や力役などの人身的な支配を可能にした制度であり、真骨の地域支配に極めて有利な制度だった。新羅統一以降に神文王は貴族の経済的基盤の禄邑制を廃止し、禄俸制を実施した。禄俸制は、国家が一律的に取り上げた税金を財源にして、これを官僚の官位と官職に対する服務の代償として分け与える制度だ。これは、禄邑制とは異なり、貴族が農民を個人的に支配することを統制することができた。

このように禄邑制は、真骨に地域への支配を許容する短所はあるが、真骨が租税を取り上げるために一定地域の生産と再生産に責任を取る構造だったため、国家財政の枯渇を解消できる唯一の代案であった。もともと新羅が真骨の共同支配の上に建設されたのも、古代社会の生産そのものが不安定で、自然災害に大変脆弱であったからだ。中代王室は新たに征服した高句麗と百済の領土からの税収増大に基づいて、既存の「真骨共同体」を乗り越えようとしたが、8世紀半ば以降発生した相次ぐ自然災害の前で、また、古代社会の本質的な限界の前で屈してしまった。

真骨権門の勢力拡大

統一以降、一部の真骨勢力が淘汰されて王権が強くなり、中央集権化が進展して全国の土地と民に対する中央政府の支配力が大きくなった。これと共に、官僚組織など支配体制の開放性にも大きな進展があった。しかし、真骨中心の骨品制は、依然として新羅の政治と社会を動かす重要なものだった。統一以降、頭品

の身分層や地方民と中下層民出身が高い身分につく機会は比較的増えたが、長らく平和が続く中で、中代社会でも階層間の移動は減り、王の親族と側近が政治権力と経済的な富を独占する閉鎖性が強くなった。禄邑制の復活により、真骨権門の勢力基盤は日に日に拡大し始めた。

『新唐書』には、「新羅の宰相家には禄が絶えることなく、労働(奴婢と下人)が3千人になるが、甲兵もこれと似た数がある。また、牛、馬、豚も同じ数があり、島で放牧をし、食べたい放題に弓で射て捕らえた。民に穀物を貸し、返せない者は奴婢にした」という記録がある。これはほとんど、恵恭王(765—780年)の初期に新羅に來た唐の使節、顧愔が書いた「新羅国記」から引用したものとされるが、当時新羅最高の真骨権門の経済的な状況を理解できる興味深い資料だ。

真骨権門は、広い私有地と牧場を有し、王の親族や勲功を立てた者であれば、食邑も与えられた。景德王16年以降には、禄邑制の復活によってより莫大な経済的基盤を保有できるようになった。禄が絶えることなく入って来るということは、これを指して言ったのだ。一方、宰相家の「労働(奴婢と下人)」3千人は、それと似た規模の武器の数からして、必要であれば宰相家の私兵にもなれる部類だった。

さらに、宰相家には、出生のために武芸と知略を備えた門客、謀士などが集まった。彼らは貴族の指揮下で普段は貴族の田荘を管理し、また貴族に政治的な助言をして、非常時には私兵を組織して指揮する役割をした。真骨貴族と門客の結合は、骨品制の制約を受ける主従関係だったが、個人的な結合関係とも理解できる。

既に、中古期から真骨貴族の指揮下には、公的な軍組織以外に、貴族が個人的に選抜した人物が存在した。大耶城の城主、金品釈の幕客の竹竹(チュクチュク)や、金庾信が高句麗に行った金春秋を助けるために選抜した決死隊3000人がそのような場合だ。彼らは、親族や共同体単位で徴兵されたのではなく、特別な目的を遂行してからも貴族との個人的な関係を維持し、任された任務にしたがって動いて、貴族の武力の主な基盤となった。

地方の有力者や没落した農民の一部も首都に上京し、生存と出世を狙った。彼らは、統一戦争によって増えた兵力の需要と迅速な動員力が必要な際の募兵に応じることもあり、貴族の指揮下で出世を図った。官吏を選抜するための花郎徒の花郎と郎徒の関係も、成長するにつれ次第に貴族と門客の関係になる可能性のあるものだった。力のある貴族は、政治的、軍事的な必要に応じて、積極的

に彼らを受け入れた。金庾信が新羅の旧貴族ではなく、血縁と地縁の基盤のない伽耶系の新進の貴族であるにもかかわらず、むしろ中代新羅最高の権門に成長できた背景には、このような幕客を自分の勢力に引き込むことに成功したのが主要因としてあるのだろう。

恵恭王殺害と中代の没落

中代末期、真骨勢力の私兵組織と関連して、もうひとつ注目されるのは地方の勢力である。このような点は、恵恭王代の貴族勢力の反乱を、「王都及び五道州郡の九十六角干が互いに戦ったこと」と表現していることから分かる。中古期末、善徳女王16年(647年)に起きた毗曇の乱を見ると、当時の中央貴族の反乱は王京を中心としたひとつの地域に限られていた。しかし、中代初めに起きた金欽突の乱では、神文王の命令書に、「禍が内外に通じた」としたことからして、中代の時期には中央貴族が地方勢力を反乱に活用していたことを明確に確認できる。これは中代に入ってから、中央貴族の基盤が従来とは異なり、首都慶州を超えて全国的に拡大していたことを意味する。

中央の貴族は、国家の公的な軍事組織にも自分の一派を任命して掌握したり、内外の軍の指揮官を支配下において自身の勢力にしようと試みたものと思われる。しかし、公的組織は運営上の問題や国の兵士の自発的な忠誠心を確保できないという面で、勢力のある貴族は自身に忠誠を尽くす部隊、つまり私兵組織の養成にはるかに多くの努力を傾けたことと思われる。したがって、反乱に動員された国の兵士は単なる兵士と言うより、この機会を狙って出世を図る地方民であり、勢力のある貴族に包摂された私兵のような存在であったと思われる。

新羅の貴族層は、土地の所有を増やし、着実に経済的な基盤を積み上げた。貴族層が土地を集積したのは、主に寺院、土地の略奪によるものであり、このように貴族が土地を収奪することを、禄邑制が復活した新羅の政治状況では止めることができなかった。その結果、土地を失った多くの農民が日雇いで暮らしを立てる、いわゆる傭作労働者になったり、これよりも酷い状況に陥った民は、自分の子や自分自身まで奴婢になるしかなかった。一般の農民は、生産の主軸であるに

もかわらず、一方では国家の民として、もう一方では貴族の農場に拘束された隷属民として、二重の抑圧の下で貧窮になっていた。このような社会経済的な環境によって、一般の農民は力のある貴族の私民となった。

景德王に続いて、幼い歳で即位し恵恭王は、真骨の無理な要求を受け入れながら、彼らを調整して新しい秩序を築き上げるには力不足だった。景德王が、天下は全て王の土地であるという意味で自ら決めた九州の地名も、恵恭王が即位するとすぐに、過去貴族の禄邑だった頃の昔の地名で再び呼ばれるようになった。王は真骨が求める通り動いたが、即位してからまもなく、臣下の大恭(テゴン)が大きな反乱を起こした。その影響は全国各地に広がり、3年以上も真骨貴族の反乱が続いて起こった。結局、恵恭王は、5道の「州郡」と共に「96角干」が互いに戦う大きな乱に直面する。今や、新羅の王位は96人の角干で象徴される真骨勢力の合従連衡により、その向背が決まることになった。

中代の最後の王、恵恭王(765—780年)は、王権に絶えず挑戦する真骨を制御できず、結局、金志貞(キム・ジジョン)の反乱を鎮圧することを言い訳に軍を立ち上げた上大等の金良相(キム・ヤンサン)と伊滄の金敬信(キム・ギョンシン)によって殺害される。その後、王位は金良相に渡る。宣徳王である。これで、太宗武烈王直系の中代王室は終わり、下代が始まった。

第2章

下代の開幕と展開

下代の幕開け
真骨貴族の分裂と角逐
真骨貴族の連立
思想界の新しい動向

1

下代の幕開け

下代の意味

『三国史記』『新羅本紀』の末尾部分では、新羅史の時代区分が紹介されている。内容は次のとおりである。「国の人々が始祖から真徳王までの28王の時代を上代、武烈王から恵恭王までの8王の時代を中代、宣徳王から敬順王までの20王の時代を下代」と呼んだ。つまり新羅人は真徳王から武烈王へ、恵恭王から宣徳王への王位継承が新羅史における画期的な事件と考えていたのである。3代の時代区分は、現在も通用している。

中代の様々な王はすべて太宗武烈王の子孫である。反面、宣徳王とその後を継いだ元聖王は奈勿麻立干の子孫である。その後の金氏の王はすべて元聖王の子孫である。中代は太宗武烈王系で、下代は元聖王系の時代である。

三国統一戦争が終わった後、新羅は平和と安定の時代を迎えた。一方、下代になると、政治的混乱を極めた。農民は凶作と飢饉に苦しんだ。豪族と呼ばれる地方の有力者たちは次第に中央政府に対し、独立的な姿勢を固辞した。混乱を極め、新羅は結局三つの国に分裂してしまった。つまり、中代は新羅の全盛期であり、下代は衰亡期といえる。

仏教の「三時説」によると、時間の経過に伴い、仏法が衰退するといわれている。正法の時代、像法の時代を経て末法の時代、つまり「末世」になるという。下代の新羅人は自分たちが末世を生きていると考えていた。下代に現れた様々な社会的混乱は末世に現れる混乱だと考えられた。新羅人は恵恭王と宣徳王を境に王の系統が変わり、衰退期に入ったと認識し、その結果、当時を「下代」と呼んだのである。

下代の前半期には真骨貴族が王位を巡って争うことが多かった。その隙を狙って地方では豪族が台頭した。その先駆的な存在が張保臯である。それを受け、真骨貴族は互いに争うのではなく、彼らとの連立という方策を取った。これにより、一見新羅は安定を取り戻したように見えた。しかし、まもなく破局が訪れた。889年、つまり真聖女王3年、全国において農民が蜂起した。蜂起はその年だけでなく、絶えず起きた。このような背景の下、後三国時代が幕を開けた。935年、敬順王が高麗太祖に降伏したことにより、千年の王国・新羅は歴史の裏舞台へと消えた。

宣徳王の即位

武烈王と文武王は三国統一戦争を勝利に導いた。王室の権威は高まり、神文王はこれを背景に王権を強化した。中代の王権は聖徳王の時に全盛期を謳歌した。しかし、次の王である景德王の時にあって真骨貴族は王権に挑み始めた。757年(景德王16)3月、祿邑が復活した。この措置は真骨貴族の挑戦に対する景德王の妥協策だったのである。一方、王権を強化しようとする試みも絶えずあった。祿邑を再び支払うことにしたその年の12月、王は全国の州・郡・県を漢式に変えた。759年(景德王18)には官府と官職の名称を中国式に変更した。「漢化政策」は単なる改名に留まらず、唐の制度を参考にして、国王中心の支配体制を強化するためのものであった。

真骨貴族の王権に対する挑戦は、景德王の後を継ぎ、恵恭王が8歳の時に即位して母後の満月夫人が摂政を行ったことをきっかけに本格化した。768年(恵恭王4)8月に一吉・大恭が弟の阿・大廉とともに反乱を起こした。反乱軍は33日間宮殿を包囲したが、平定されたという。あるいは王都及び5道州郡の96角干が互いに戦い、三ヶ月間続いたとも伝わっている。770年(恵恭王6)には大阿・金融が

反乱を起こしたが、伏誅された。この時は中代の王権下で地位が次第に低くなったことに不満を抱いた金庾信の後裔が加担した。

774年(恵恭王10) 9月、金良相が上大等となった。金良相の祖父金元訓は聖徳王が即位してまもなく中侍を務めた。父金孝芳は聖徳王の娘の四炤夫人と結婚した。金良相は聖徳王の外孫というバックアップに政治権力を握った。764年(景德王23)、阿・大として侍中を務めたが、768年(恵恭王4)まで在任した。外祖父の聖徳王を追悼する梵鐘製作事業では、上宰相・金邕とともに検校使として工事の責任を担った。梵鐘が完成した771年(恵恭王7)には、彼は角干として肅正台(司正府を改名)と修城府(京城周作典を改名)の長官を兼任した。家の背景や政治的履歴を見ると、金良相は本来、中代王権の支持者だったようである。

ところが金良相は、上大等に就任して1年足らずで二回にわたって反乱が起きた。775年(恵恭王11)6月には、伊・大・金・隱居が反乱を起こした。その二ヶ月後の8月には、伊・大・廉相と正門が謀反を起こした。金・隱居は767年(恵恭王3)、新王の即位を知らせ、冊封を要請する使節として唐に派遣された。任務を成功させた彼は768年(恵恭王4)10月に侍中に任命され、770年(恵恭王6)12月まで在任した。廉相は758年(景德王17)から760年(景德王19)まで侍中を務めた。彼の在任期間中、百官の名称を漢式に変えるという措置が断行された。正門は廉相の後任で、現職の侍中であった。775年に起きた二回の反乱は国王の支持勢力が起こした。「王党派」の中で何かの理由により政治的分裂が起きたものとみえる。

反乱を鎮圧した後、金良相とその一派はすぐ大胆な措置を取った。776年(恵恭王12)正月、景德王の時に中国式に改定された百官の称号をすべて元に戻した。この時、漢式に変えていた州・郡・県の名も元に戻されたものと考えられる。これは景德王が推し進めていた漢化政策に対する全面的な否定であった。ひいては下代の開幕を予告するものでもある。金良相は777年(恵恭王13)、上訴で恵恭王の政治運営を徹底して批判した。これにより彼は反王派の指導者としての地位を確固たるものとした。

780年(恵恭王16)2月、伊・大・金・志・貞が徒を率いて宮殿を包囲した。4月、金良相は伊・大・金・敬・信とともに国王の側近にある悪の輩を取り除くという名分の下、反撃を企てた。金・志・貞などは殺され、混乱の渦中、恵恭王とその妃も亡くなった。恵恭王が宣徳王と金良相(金・敬・信の間違いであろう)に殺されたという記録から考え

ると、王と王妃は金良相一派により殺されたのであろう。政変では太宗武烈王の子孫の金周元も、ある程度一翼買ったようである。武烈王権は、それに反対する真骨貴族の連合により崩れてしまった。

恵恭王の後を継ぎ、金良相が即位した。それが宣徳王であり、奈勿麻立干の10代孫に当たる。宣徳王は即位直後、父・孝方を開聖大王に追封した。祖父など先代の先祖を除き、父のみを大王にしたのは、外祖父の聖徳王を五廟から抜くことができなかったからである。五廟では始祖大王(味鄒王)、太宗大王(不遷位)、文武大王(不遷位)、聖徳大王、開城大王が祀られている。中代の王が三人もいる点が注目に値する。

宣徳王の時は太宗武烈王の後裔の金周元が政治的に頭角を現した。彼は777年(恵恭王13)10月、侍中に任命された。当時は、金良相が政局をリードしていた時期である。金周元は武烈王の子孫であったが、政治的には金良相と同路線であった。彼は宣徳王即位の直後(780)、侍中の職から退いた。しかし、上宰相として政治的影響力を行使し続けた。金周元は子息のいなかった宣徳王の後を継ぐべく有力な王位継承候補者であった。

一方、宣徳王即位の最たる立役者は金敬信であった。彼は王になった金良相の後を継ぎ、宣徳王の時に上大等として在任し続けた。金敬信は宣徳王と同様、奈勿麻立干の子孫であった(12代孫)。しかし、彼は次宰相で、王位継承の序列でも金周元より順番が後ろであった。

宣徳王は784年(宣徳王5)、王位から退こうとしたが、臣下たちの反対により押し留められた。翌年の正月、病床からの遺詔には「常に王位を譲り、退こうとした」とある。宣徳王は、武烈王系の金周元を支持する勢力と、奈勿王系の金敬信を支持する勢力との間で、政治的に大変な困難に立たせられたものと思われる。下代が幕を開けたとはいえ、武烈王系の影響力は無視できなかったのである。

一方、宣徳王は涇江鎮を設置し、礼成江以北地域を統治させた。それより先の735年(聖徳王34)、唐から大同江以南地域に対する領有権が認められ、この地に対する開拓が本格化した。748年(景德王7)には大谷城(平山)以下の10の郡・県を設け、762年(景德王21)にはそのうち6の郡・県に城を築造した。宣徳王は中代以降の北進政策を受け継ぎ、781年(宣徳王2)、使者を派遣して大同江以南の州・郡を按撫させた。その翌年の782年には礼成江以北に進出するための交通の要

地にあった大谷城を昇格させて涇江鎮を設置し、人民を移住させた。783年(宣徳王4)には阿湊・体信を大谷鎮の軍主に任命することにより、涇江鎮の設置は一段落ついた。

その後、涇江鎮の管轄地域はさらに北へと拡大し、憲徳王の時は取城郡(黄州)とその三つの領県を新設した。これにより新羅の領域は大同江以南にまで達した。826年(憲徳王18)には漢山の北側の人民1万人を動員し、300里に上る涇江長城を築造した。これは礼成江以北に対する国土開発事業の一段落を意味する。

元聖王系の成立

子息のいなかった宣徳王は跡継ぎを指名せず亡くなった。つれて金周元と金敬信が王位を争った。結局は金敬信が王位に継いだ(785年2月)。記録によると、北川の氾濫によりその北側に住んでいた金周元が王宮に入れない隙を狙い、金敬信が先に宮殿に入り、即位したといわれている。多くの臣下が宣徳王の母親である貞懿太后の教旨を受け入れ、金周元に王位を継がせようとしたが、金敬信が彼らを脅し、先に王宮に入って王になったともいわれている。要するに、地位が低く王位継承の序列でも順位の低かった金敬信が武力行使などの手段を動員し、有力な王位継承候補者だった金周元を排除して王位を継いだのである。その後、新羅末、3人の朴氏の王を除いては、すべて元聖王の子孫が王位を継いだ。元聖王系王室が始まったのである。

元聖王は即位年、つまり785年2月、聖徳大王と開聖大王の両廟を撤去し、始祖大王、太宗大王、文武大王と祖父の興平大王、父の明德大王を五廟に祀った。元聖王としても、三国統一の二人の主役を五廟から取り除くことは難しかったのである。元聖王の後を継いだ昭聖王は父金仁謙、つまり恵忠太子を恵忠大王に追封した。五廟制を全面的に改編したのは、次の哀莊王の時である。王は即位の翌年である801年2月、太宗大王と文武大王の2廟を別に建て、始祖大王を筆頭に、高祖・明德大王、曾祖・元聖大王、祖父・恵忠大王、父・昭聖大王の四つの親廟を加え、新しい五廟を構成した。もちろん、これは当時の摂政であった金彦昇が主導したのである。これにより王室の先祖の祭祀において、中代王室の残影を取り除くことが

できた。五廟制の改編は元聖王系王室の成立を知らせる意味があった。

元聖王は即位年の785年2月、長男・金仁謙を王太子とした。ところが、金仁謙は791年(元聖王7)に亡くなる。王は792年、二男金義英を太子としたが、彼も794年(元聖王10)に亡くなる。次に元聖王は795年(元聖王11)正月、金仁謙の子であり孫の金俊邕を太子とした。非常手段を用いて即位した元聖王は、太子を定めるという正常で安定した王位継承を願ったのである。

798年12月、元聖王が亡くなり、799年正月、金俊邕が王位を継いだ。昭聖王である。昭聖王は即位の翌年、つまり800年6月に死亡する。治世は1年半であったが、王は死の少し前、王子・金清明を太子とした。昭聖王の後を継いで太子が王



写真1 慶州掛陵(伝元聖王陵)

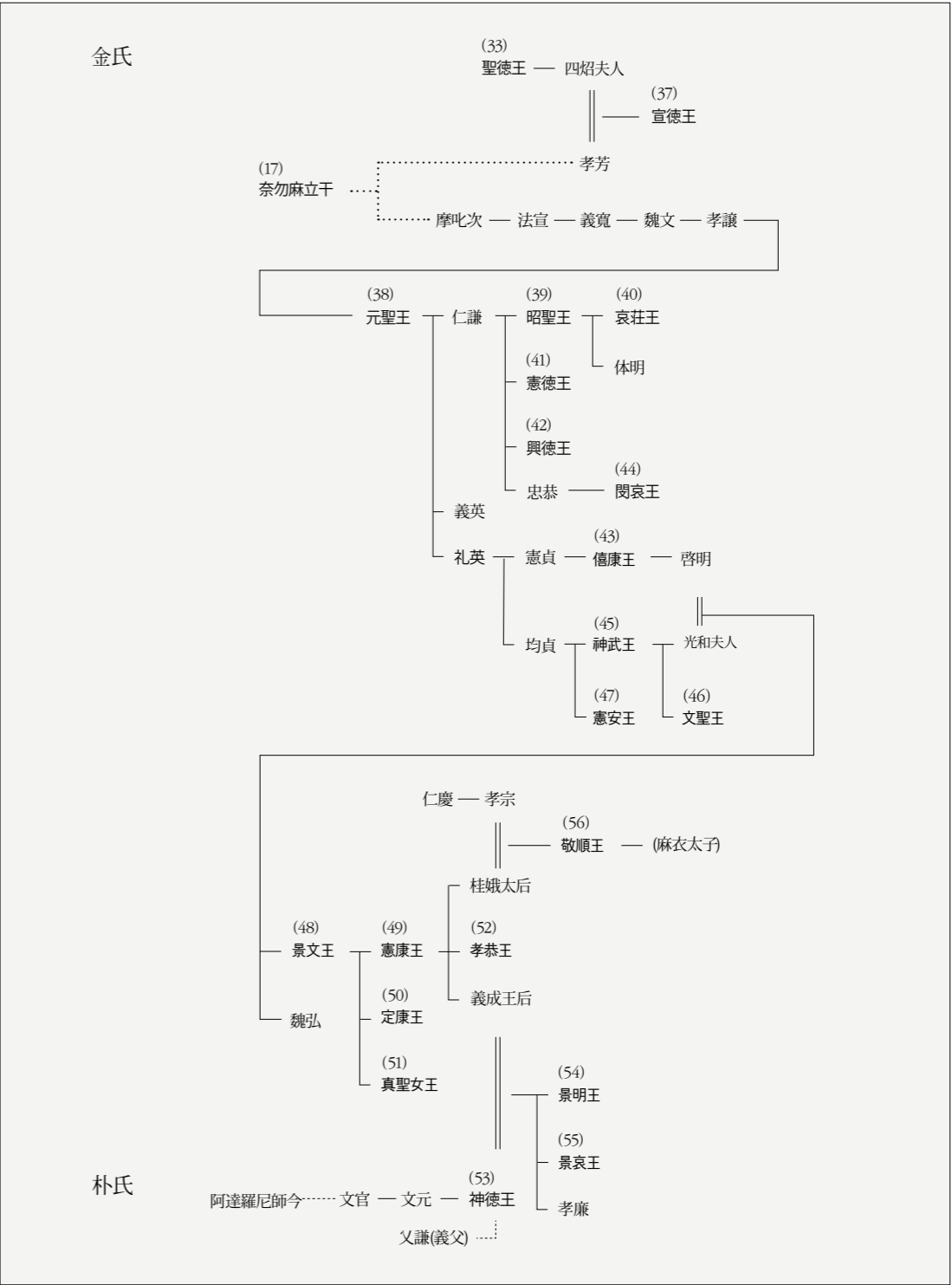


図1 下代王位系譜図

となった。哀莊王である。当時の王は13歳であった。したがって、実権を握った叔父・金彦昇が摂政を行った。809年(哀莊王9)、金彦昇は哀莊王を殺害し、自ら王位を継いだ。彼が憲徳王である。これにより、太子への王位継承の原則は、一旦破られた。

ところが憲徳王は822年(憲徳王14)、弟・金秀宗(または金秀昇)を「副君」(または「儲貳」とし、「月池宮」に住ませた。「副君」(「儲貳」とは、太子を意味する。「月池宮」は東宮と考えられている。憲徳王は弟・金秀宗を太子とし、彼が憲徳王の後を継いで即位した。つまり興徳王である。「興徳王が王位を継ぎ、宣康太子が監撫」という記録がある。宣康太子とは金忠恭のことで、彼は興徳王の弟であった。跡継ぎのいなかった興徳王は弟・金忠恭を太子としたのである。幾つかの事情はあったが、元聖王系王室では太子による王位継承の原則を堅持しようとした。

一方、元聖王は太子を決めると同時に、近親王族を要職に就かせることで王権の安定を保証しようとした。王になる前、金俊邕は789年(元聖王5)に唐へ使節として派遣されて帰国した後、大阿湌となった。翌年は波珍湌として宰相となった。791年(元聖王7)10月から792年8月まで侍中を務め、792年に兵部令となったが、795年(元聖王11)に太子となった。ところが、新羅では一人の官吏が複数の官職を務める兼職制が一般的であった。したがって、金俊邕も一つずつ官職を次々に歴任したのではなく、複数の官職を兼職した可能性がある。金俊邕は一時期、侍中、兵部令、宰相を兼任し、後には兵部令と宰相を兼任したと考えられる。

金俊邕の弟・金彦昇も兄と同様の政治的成長過程を経た。彼は790年(元聖王6)に使節として唐に行ってきた大阿湌となった。翌年には元侍中の悌恭の乱を鎮圧した功労が買われ、逆湌に上り詰めた。794年(元聖王10)2月に侍中となり、796年4月(元聖王12)に兵部令となって侍中を辞任した。ところで金彦昇は795年(元聖王11)には宰相となっているので、その後の一定期間、侍中と宰相、兵部令と宰相を兼任したはずである。

近親王族による権力独占現象は、その後も続いた。金彦昇は甥の哀莊王が即位すると、御龍省の私臣と上大等を兼任した(801)。804年(哀莊王5)には金秀宗が侍中に就任し、819年(憲徳王11)には上大等に任命された。記録には記されていないが、金忠恭もすでに哀莊王の時に権力の中核に関わったはずである。彼は817年(憲徳王9)1月に侍中に任命され、821年(憲徳王13)4月まで在任した。822年

(憲徳王14)正月には副君となった兄・金秀宗の後任として上大等に任命された。金忠恭は政事堂において内外官の人事問題を処理するなど実権を握った。金礼英の子息・金憲貞は807年(哀莊王8)に侍中に採用され、810年(憲徳王2)正月まで在任した。813年(憲徳王5)当時、彼は伊湌として国相、兵部令兼修城府令の官職に就いていた。金憲貞の弟・金均貞は812年(憲徳王4)春から814年(憲徳王6)8月まで侍中を務めた。彼は金憲昌の乱の時には伊湌で、討伐軍の司令官として参戦した。

下代が幕を開けたとはいえ、政治面では中代とそれほど違いはなかった。哀莊王の時の五廟制改編は恵恭王の時の五廟制の改編と同様、王室の直系先祖に対する祭祀により、王権を強化する目的があった。元聖王以降、多くの王が太子決定にこだわったが、これは中代でも同様であった。神文王と景德王は王子を産めなかった王妃を宮殿から追い出し、新しく王妃を迎えたこともある。近親王族の要職の独占も中代と同様である。したがって、元聖王系の王権の強化は権力の中核から疎外された真骨貴族の反発を呼んだ。

2

真骨貴族の
分裂と角逐

金憲昌の乱

甥の哀莊王とその弟・金体明を殺害して即位した憲徳王は弟・金秀宗と金忠恭を重用し、王権の安定を図った。一方、元老の真骨貴族を礼遇した。812年(憲徳王4)、伊浪・忠永が70歳になると、几杖を下賜した。819年(憲徳王11)には伊浪・真元が70歳になると、やはり几杖を下賜した。70歳にはならなかったが病気で歩行がままならなくなった伊浪・金憲貞には特別杖を下賜した。823年(憲徳王15)正月には元順と平原、それぞれの角干が70歳になり、官職からの辞退を乞うと、几杖を下賜した。憲徳王は几杖を下賜するなど、元老の真骨貴族を礼遇することにより、王位篡奪や近親王族の権力独占に対する真骨貴族の不満を無くそうとした。しかし、これは弥縫策に過ぎなかった。彼らの不満は822年(憲徳王14)3月、熊川州都督・金憲昌の反乱という形で噴き出してきた。

元聖王は即位直後、太宗武烈王の子孫である金周元とその後裔を懐柔しようとした。元聖王は自らとの王位争奪戦で負けて溟州に退去した金周元を溟州郡王とした。そして溟州に属する幾つかの村を食邑として与えた。790年(元聖王6)には金周元の子息・金宗基を侍中とした。

金周元のもう一人の子息である金憲昌は813年(憲徳王5)正月、武珍州都督に任命された。814年(憲徳王6)8月には侍中に昇進し、816年(憲徳王8)正月まで在任した。再び地方へと赴き、菁州都督を経て821年(憲徳王13)4月には熊川州都督に任命された。彼は、都督と侍中を歴任したにもかかわらず、再び地方で都督として6年間過ごさなければならなかった。金憲昌は憲徳王から冷遇されたのである。彼は権力からの疎外され、そして反乱を起こした。

金憲昌は国号を長安とし、年号を慶雲とした。彼は武珍州、完山州、菁州、沙伐州の四つの州都督と国原京、西原京、金官京の仕臣及び様々な郡・県的首領を脅し、掌握しようとした。菁州の都督・向榮は推火郡(密陽)へと逃れた。漢山州、牛頭州、歙良州、湔江鎮、北原京などは反軍の攻撃に備え、守備を強化した。

急報を受け取った憲徳王はまず王都の警戒を強化し、鎮圧軍を派遣した。一吉浪・張雄が選抜隊として戦場に赴き、迎浪・衛恭と波珍浪・悌凌がその後を追った。伊浪・金均貞、迎浪・雄元、大阿浪・金祐微などは主力部隊の3軍を率いて出動した。角干・金忠恭と迎浪・允応は蚊火関門(慶州・外東面)を守らせた。花郎の明基と安楽も郎徒を率いて参戦した。いくつかの戦闘において勝利を収めた鎮圧軍は反軍の根拠地であった熊津城(公州)に集結し、約10日間城を包囲して攻撃した。城が陥落する直前、金憲昌は自死した。乱に加担した金憲昌の宗族と郎党239人が殺された。

825年(憲徳王17)正月には金憲昌の子息・金梵文が高達山(驪州)の山賊・寿神など百人あまりと反逆を企てた。彼は平壤(ソウル付近の楊州)を都とするため、北漢山州を攻撃した。金梵文の乱は都督・聡明により鎮圧された。

金憲昌父子の反乱は失敗に終わった。しかし、その意味は決して小さくない。金憲昌は父・金周元が王になれなかったことを反旗を翻した名分とした。金憲昌の乱は王権に対する武烈王系の再挑戦という性格を併せ持っていたのである。

これに対し、元聖王系の王族は連合した。金憲昌が反乱を起こす直前、上大等から副君となった金秀宗が反乱の鎮圧を総括したはずである。上大等・金忠恭も参戦した。金礼英の子の金均貞と、その子の金祐微は主力部隊を導いた。選抜隊に合流した悌隆は金憲貞の子の金悌隆と思われる。反面、金周元系は分裂した。金宗基系は反乱に参加せず、元聖王系の王室に協力した。反乱が失敗した後も金宗基系は政治的に健在だった。しかしその後、武烈王系は再び王権に挑戦



憲徳王の時に地方の農民の事情はそれ以前より悪化した。食糧を求めて唐や日本にまでわたる人が続出するほどであった。金憲昌が新しい国の建設を標榜したのは、このような事情を背景にしている。新羅を否定した反乱はかつてないことである。だからこそ王室と中央政府の権威は、大いに損なわれた。朝廷の地方に対する統制力は弱化し、地方の有力者が登場するきっかけをつくった。後に甄萱は後百済を、弓裔は後高句麗を建国した。「金憲昌の乱」はその先駆けともいえるであろう。

憲德王の後を継いで即位した興徳王としては、金憲昌の乱の後遺症を最小限に押させることが急務のひとつであった。そのため、真骨貴族社会の分裂を克服するために和合の方法を模索した。王は反乱に加担しなかった金宗基の子孫を重用した。金宗基の孫である金昕は822年(憲徳王14)、使節兼宿衛学生として唐へ渡って帰り、南原太守、康州都督を経て宰相となった。もう一人の孫の金陽は828年(興徳王3)、固城郡太守としてはじめて官職に就き、中原小京大尹、武州都督となった。金庾信を興武大王に追封した時期については、景明王の時とする説もあるが、興徳王の時とみる説が有力である。つまり、この措置は金庾信の後裔を懐柔するための措置と見ることができるからである。

一方、興徳王は金憲昌の乱により地に落ちた王権を強化する必要があった。彼は先王と同様、近親王族を要職に就かせた。興徳王は弟・金忠恭を重用した。従兄弟の金均貞は835年(興徳王10)2月、上大等に任命された。その息子である金祐徵は828年(興徳王3)正月に侍中となり831年(興徳王6)正月まで在任した。834年(興徳王9)正月に再び侍中となったが、父親が上大等に就任すると、辞退した。興徳王はその後任として金忠恭の子である金明を任命した。王は従兄弟の金均貞を上大等として起用すると同時に、甥の金明を侍中に任命した。興徳王は金礼英と金仁謙の後裔を優遇することで、一種の勢力均衡を図ったのである。

元聖王系王室も中代の王室と同様、儒教の政治理念に基づいた律令制による



写真2 慶州興徳王陵

統治を目指した。そのため、元聖王は788年(元聖王4)、儒教の素養を身に付けた官吏を選ぶため、読書三品科を施行した。昭聖王は即位年の799年に菁州・居老県を学生緑邑とした。これは儒学の教育機関である国学の内実化を図った措置である。

哀莊王は805年(哀莊王6)8月に「公式」約20条を頒布した。律令の細目である「式」を改定した。この時、官吏の人事を担当する位和府と四天王寺成典、以下成典の長官と次官の職名が中国式に変わった。つまり、衿荷臣や上堂のような新羅固有の名称が中国式の「令」や「卿」などに改称されたのである。さらに、例作府など様々な官庁の大舎以下の史など下級官職の定員を減らした。

哀莊王は806年(哀莊王7)、仏事を規制する教書を発表した。新しく寺院を創建することは禁じ、修理のみ許したのである。また、仏教の行事における贅沢品の使用をも禁じた。王室と真骨貴族の間で流行っていた寺院の建立や華やかな仏事の施行を禁じるにより、それによって生じる様々な弊害を防ごうとした措置である。また、808年(哀莊王9)には使者を12方面に送り、様々な郡・邑の境界を分けて定めた。これは全国的に実態調査を行い、地方の行政区域を再整備することで地方に対する支配を円滑に行うための試みと考えられる。但し、その内容の詳しくは知られていない。

興徳王も律令の改定により執権体制を整備しようとした。興徳王陵碑の碑片の銘文には「格式是皆」という字が刻まれており、興徳王の時、「格式」の編纂また

は修正作業が行われたことが分かる。その具体的な内容はほとんど知られていないが、これと関連し、829年(興徳王4)、執事部が執事省に改称されたという点も注目値する。下代になって執事部の政治権力が強くなった結果、執事省へと改称された。これは唐の三省制に因んで王権を強化するための措置だったと考えられる。759年(景德王18)、官府と官職の名称を中国式に変えたのは、王権強化のための措置のひとつだったことを考慮に入れるべきである。

興徳王は身分制を整備しようとした。これは834年(興徳王9)に頒布された教書から分かるが、その背景を次のように述べている。「人間には上下があり、地位には尊卑があり、名称と法式、衣服も異なる。ところが現在風俗は次第に薄くなって、民衆は先を争って贅沢や豪奢さを重ね、珍しい舶来品を崇拜することで粗野な地元産を嫌うに至り、礼節が乱されること甚だしく、風習が破壊されるまでになった。」当時は骨品制に基づく社会的規範がゆるくなり、特に貴族層の贅沢風潮が蔓延していた時代である。この教書は支配層の紀綱を正すというところに第一の目的があった。真骨以下の六頭品、五頭品、四頭品、平人、百姓に至るまでの身分の等級による規制事項は『三国史記』『雜志』の色服車騎器用屋舎条に書かれている。

興徳王がこのような教書を出した政治的背景について、風習に対する政治的規制、骨品制の社会的基礎を構成する同族集団への政治的再評価、地方に住む様々な集団の政治的再編などが挙げられる。これとともに、中国の皇帝の地位に対応する超越的存在としての国王の位置づけ、という解釈もあり得る。つまり、国王と王室の権威を高めるのにその目的があるということである。この点から見ると、教書の頒布は執事部を執事省に改称し、王権強化を図った興徳王の意図と相通じるところがある。

王位争奪戦

跡継ぎのなかった憲徳王は弟・金秀宗を太子とした。やはり同様の状況だった興徳王も弟の金忠恭を太子とした。ところが、金忠恭は835年(興徳王10)2月頃死亡したものと見える。続いて興徳王は従兄弟の金均貞を上大等に任命した。王に跡継ぎがいなかったため、これは後継者として指名したも同然である。もちろん、金忠恭

の子である大阿湊・金明も考慮の対象だったはずである。但し、金明は19歳だったので、したがって金均貞に比べて政治的貫禄が足りなかった。金均貞は憲徳王の時にすでに侍中を務め、金憲昌の乱を平定するのに功績を残したのである。興徳王としては近親王族のうち、金均貞と肩を並べる王位継承候補者を探すことはできなかったであろう。但し、金明を侍中に任命することで金均貞に対する牽制とした。

興徳王は在位11年、つまり836年12月に享年60歳でこの世を去った。王は先に亡くなった王妃と合葬するよう遺言に残したのみで、後継者については何も言い残していなかった。そうなると、上大等の金均貞が即位するのが順当に見えた。王に推戴された金均貞は子の金祐徴をはじめとし、礼徴、金周元系の金陽などの支持者とともに、積板宮に入って「族兵」から守られた。ところが、侍中の金明がこれに強く反発した。彼は金均貞の甥であると同時に自らの姉妹の夫でもある金悌隆を王に推戴した。そして阿湊・利弘と裴萱伯などを味方につけた。金明、利弘などが軍隊を率いて宮殿を包囲し、武力衝突が起きた。金均貞は殺害され、金陽は矢に刺されたまま金祐徴などとともに難を逃れた。王位争奪戦は金明一派の勝利に終わり、金悌隆は即位した(827年正月)。彼が僖康王である。

僖康王は即位と同時に侍中・金明を上大等に、阿湊・利弘を侍中にそれぞれ任命した。しかし、政治的実権は金明が掌握した。一方、王位争奪戦で敗北した金祐徴は金明一派を恨む流言を広めた。金明などがこれに不満を表すと、837年(僖康王2)5月、金祐徴は清海鎮へ逃亡した。828年(興徳王3)4月、清海鎮の設置を許可した時、金祐徴が侍中を務めていたので、彼は張保臯とは特別な縁があったと考えられる。続いて礼徴が阿湊・良順とともに清海鎮に行つて金祐徴と合流した。

838年(僖康王3)正月、金明は侍中・利弘とともに乱を起こし、僖康王を自害させ、自ら王となった。つまり、彼が閔哀王である。その年の2月、金陽は軍隊を募集し、清海鎮に入り、閔哀王を打倒する計画を話し合った。閔哀王の篡奪の知らせは金祐徴一派に謀反の名分を提供した。金祐徴は張保臯に閔哀王とその一派が自らの父親を殺した敵であるだけでなく、王を殺した逆賊であると説得し、軍隊を出してくれるよう要請した。張保臯は軍人5千人を旧友の鄭年に与え、金祐徴一派の手助けをさせた。

金陽を総司令官とする金祐徴・張保臯連合軍は二回の戦闘において王軍を撃破した。王京に進撃した連合軍により閔哀王は殺害され、金祐徴が即位した。彼

が神武王である。神武王は早くから金憲昌の反乱の時に指揮官として参戦し、功績を残した。その後、二回も侍中を歴任するなど、政治的経験も豊富だった。ところが、神武王は自らの能力を発揮することもできず、在位半年でこの世を去った。

興徳王の死後、熾烈な戦いだった王位争奪戦は、元聖王系の中の様々な家系の連立と対決の中で展開していった。つまり、元聖王の二人の子である金仁謙系(金明=閔哀王)と金礼英系(金均貞)、金礼英の二人の子である金憲貞系(金悌隆=僖康王)と金均貞系(金祐徴=神武王)が絡んで戦ったのである。ここで金周元の子孫である金陽が金均貞と神武王を支持し、金昕は閔哀王の味方に回った。

骨品制の原理によると、真骨貴族の子孫は特別な欠格の理由のない限り、その身分を保つことができた。自然淘汰や政争により没落するケースもあるにはあったが、真骨貴族の数は増える一方であった。このような状況の中で真骨または武烈王系、元聖王系という大きな範疇の連帯意識は次第に薄れていった。それよりは、より一層狭い範囲の家系構成員が結集することになったのである。五廟制が確立し、直系相続が重視されたことが、その傾向に拍車をかけた。王族を含む有力真骨貴族家の様々な家系が枝分かれし、一つの社会的・政治的単位として機能したのである。

一方、王位争奪戦で真骨貴族の私兵が動員されたという点も注目に値する。最初、金均貞を護衛していた「族兵」がそうである。これと対峙し、金悌隆と金明が動員した兵力も彼らの私兵だったはずである。金憲昌の乱の時、花郎・明基と安楽が郎徒を従えて出征したが、その郎徒も私兵のような集団だったとする見解がある。乱が鎮圧された後、金憲昌の種族、味方239人を処刑したが、その一部は私兵の一員だったはずである。

統一新羅の有力な真骨貴族は莫大な富を蓄積した。その事情が中国側の記録に伝わっており、内容は次のとおりである。「宰相の家には禄が絶えず、奴僕3千人がいた。甲兵(甲冑と武器)、牛、馬、豚は(奴僕の数と)同様の数である。家畜は海の中央(島の)山に放牧し、必要なときに矢を放って狩る。」ここでいう甲冑と武器を3千ほど所有しているという記述から、数多くの私兵を雇っていたことが分かる。奴僕、つまり奴婢を武装させて私兵にしたり、流民を集めて私兵にすることもあったはずである。有力な真骨貴族は禄邑や農場、牧場などを経済的基礎とし、相当数の私兵を養成した。彼らが、王位争奪戦に動員されたのである。

3

真骨貴族の連立

張保臯の台頭

張保臯は9世紀初め頃、唐へわたって徐州(江蘇省徐州市)の武寧軍の軍中小将となった。武寧軍は徐州節度使の主力部隊で、平盧淄青節度使・李師道を討伐するための先鋒部隊となった。軍中小将は兵士1千人を指揮する高位の将校であった。張保臯は李師道の戦闘で功績を残し、出世したと考えられる。

819年2月、李師道を最後に唐に反旗を翻した地方の節度使は、すべて平定された。その後、唐では軍費を削減するため、各節度使の指揮下にいた兵力を減らした。その過程で張保臯は武寧軍を離れたと考えられる。日本側の記録によると、824年頃、張保臯は日本の博多地域と関係を築き、貿易活動を展開したとされている。武寧軍を離れて以来、張保臯は海上貿易に従事したのである。

安史の乱以降、李師道の祖父である李正己とその子孫は55年間、山東省一帯を統治した。李氏一家は平盧淄青節度使という本職以外に、海運押新羅渤海兩藩使の官職を兼任して黄海の海上を掌握し、貿易を独占していた状態であった。819年に李師道を最後に李正己家が没落し、私貿易が活気を現し始めた。武寧軍に務めていた張保臯はこのような状況を把握し、貿易活動を始めたものと見ら



写真3 莞島清海鎮遺跡

れる。当時の山東半島は、中国大陆と韓半島、そして日本列島を結ぶ重要な交通の要地であった。この地域は各国の使節はもとより、民間人の往来も活発であった。特に新羅人は山東半島一帯に「新羅坊」という社会を形成していた。張保臯はここを交易活動の根拠地とした。

唐において活動していた張保臯は828年(興徳王3)に帰国し、興徳王へ清海鎮

の設置を建議した。彼は海賊が新羅人を捕まえ、奴婢として売る行為を根絶すると約束した。興徳王は張保臯に大使という官職とともに1万人の軍人を与え、莞島の清海鎮を守らせた。清海鎮が設置された後は、韓半島の南西地域に出没していた海賊は姿を消した。中国側の記録によると、興徳王の在位期間に該当する唐・文宗の太和年間(827年～835)以降から海で新羅人が拉致されることは根絶されたという。

ところで、当時に朝廷から張保臯に1万人の軍人を与えることができたとはどういって考えにくい。莞島一帯の住人1万人をまとめる権限を、彼に与えたのではないかと推測される。莞島は張保臯の故郷ではないであろうか。そうであれば、彼が莞島において勢力の基盤を築いた後、自分の勢力を興徳王から追認されたということも考えられる。とにかく、清海鎮の軍隊は国家の公的な軍隊というより、張保臯の私兵集団と推定されている。これに関連し、「大使」という官職が、新羅の官職体系にはなかった例外的なものだったことも注目に値する。新羅では国境地帯と海岸に軍鎮を設けたが、その長官は頭上大監(都護ともいう)または鎮頭と呼ばれた。大使という官職は張保臯と清海鎮の独自性を物語るものとして解釈できる。

一方、張保臯は海上貿易を通じて富を蓄積した。大唐売物使と交関船を送り、唐との交易を行った。交関船は登州・文登県・清寧郷の赤山浦(山東省栄城市石島鎮)から南は江蘇省・揚州地域などを往来した。当時の揚州は東南アジアとアラビアなどの商人も訪れる国際貿易都市であった。張保臯は彼らの品物を新羅や日本に売る仲介貿易を通じて利益を得た。張保臯は日本に貿易船とともに、「廻易使」を送った。彼は博多に貿易の拠点を設け、日本の官員と直接交易を行うこともあった。張保臯の貿易船からもたらされた品物を日本では「唐国貨物」と呼び、高価であったにもかかわらず、非常に人気が高かった。

張保臯は金祐徵が神武王として即位するのに、決定的な功績を立てた。神武王は張保臯を感義軍使に任命し、食邑2千戸を与えるなど、優遇した。神武王の後を継いだ文聖王も即位後まもなく、先王の即位の立役者である張保臯の功労を高く評価するという教書を発表した。そして彼を鎮海將軍とし、章服を下賜した。ところでその前に、金祐徵は張保臯に、自分の即位を手伝う代わりに張保臯の娘を王妃として迎えると約束した。この約束を守ろうと、845年(文聖王7)3月、

文聖王は張保臯の娘を第二王妃にしようとした。しかし、朝廷の臣下は「今、弓福は島の人なのに、その娘を王室の女性として迎えることはあってはなりません。」とって反対した。文聖王も臣下の主張に同調した。張保臯は娘の婚姻の約束が反故になると、反乱を企てたが、846年(文聖王8)春、朝廷から送り込まれた刺客・閻長により殺害されてしまった。851年(文聖王13)2月に新羅の朝廷は清海鎮を閉鎖し、その民衆を碧骨郡(金堤)に集団移住させた。これにより清海鎮は無くなってしまった。

ところが、張保臯の死亡年度については異説が存在する。国内の記録とは違って日本の記録には、彼が841年11月に亡くなったと伝えている。それでは張保臯の娘を王妃として迎えることへの反対論議や張保臯の謀反は841年(文聖王13)11月以前のことでみなさなければならない。この説と関連し、842年(文聖王4)3月、金陽が自分の娘を文聖王の王妃にしたという記録が注目に値する。つまり、張保臯とともに神文王の即位の立役者といえる金陽は、張保臯の娘を王妃に迎えることへの反対意見をまとめ、その計画を反故にし、その代わりに自分の娘を王妃にしたと解釈できる。

張保臯の娘が王妃になっていれば、張保臯の中央政界への進出は可視化し、彼の政治的影響力は拡大したはずである。ところが、張保臯は島の人、つまり地方の人であった。王京の真骨貴族の立場からすると、地方の人に中央進出を許すわけにはいかなかった。新羅の骨品制は王京の人々の特権を守るために考案された制度である。その点からすると、張保臯は海の貿易王としてのみならず、骨品制の矛盾に抵抗し、王京の真骨貴族に挑戦した地方の人としても捉えるべきであろう。

830年代末、王位争奪戦からわずか3年足らずの時期に、有力な王位継承者の金均貞と僖康王、閔哀王が亡くなった。王宮と王京は戦場と化した。また、地方の軍閥である張保臯により、王位の方向が決定されるような事態となった。このような状況下では、中央政府の地方に対する支配力は甚だしく弱体化するしかなかった。たしかに張保臯は失敗してしまったが、その後、地方の有力者が全国的に登場するようになった。そしてこのような事態は、真骨貴族の共同利益を脅かすものであった。したがって、真骨貴族は一種の連立の体制を余儀なくされた。

金均貞系と金憲貞系の連合

神武王が在位6ヶ月で亡くなると、太子・金慶膺が即位した。文聖王のことである。文聖王は即位直後、王位争奪戦で父金祐徵と生死を共にした金陽を蘇判兼倉部令とした。そして840年(文聖王2)の春正月、礼徴を上大等、義琮を侍中、良順を伊瀆とした。文聖王は神武王の即位を助けた功臣を中心に政界を改変した。

ところが、王位争奪戦の後遺症というべきか、余震は続いた。張保臯の謀反はその代表例である。他にも841年(文聖王3)、一吉浪・弘弼が謀反を企てたが発覚し、逃亡した。847年(文聖王9)には神武王擁立の立役者であった元侍中の伊瀆・良順が波珍浪・興宗とともに反乱を企てたが殺害された。849年(文聖王11)には伊瀆・金式が伊瀆・大昕などと反乱を企てたが、やはり殺害された。大昕は閔哀王側の軍隊を率いて、金祐徵・張保臯連合軍に立ち向かった人物である。

文聖王は元聖王系内における派閥間の妥協を通じて、王位争奪戦後の混乱を收拾しようとした。まず、僖康王の子・金啓明と文聖王の妹の光和夫人が婚姻関係を結ぶ。婚姻が成立した時期は840年頃、つまり文聖王即位の頃と推定される。それを考えると、神武王が結婚を進めたものとも推定できる。この婚姻は従来の対立・権力闘争の関係にあった金均貞系と金憲貞系、凡金礼英系の和合と妥協を示すものである。

文聖王は847年(文聖王9)8月、自分の子を太子とした。この時、金陽は侍中兼兵部令とした。金陽は848年(文聖王10)夏、侍中を辞任し、その代わりに金啓明が侍中となった。849年(文聖王11)には義正を上大等に任命した。誼靖は文聖王の叔父で、王の後を継いで憲安王となった金誼靖と同一人物である。文聖王在位の後半期には、王と太子を頂点に功臣であり外戚の金陽、金均貞系の上大等・金誼靖、金憲貞系の侍中・金啓明がそれなりに勢力の均衡を保ち、政局を主導した。

852年(文聖王14)11月、太子が死亡した。857年(文聖王19)8月には金陽が死亡した。彼は神武王擁立の立役者であり、王の義父で、文聖王を支える柱であった。王は非常に悲しみ、金庾信の例に従って金陽の葬儀を行うよう指示した。金陽の死は文聖王にとって大きな衝撃だったらしく、同年9月、文聖王も亡くなってしまう。

文聖王は叔父の金誼靖を次の王に、という遺詔を残した。その遺詔に従って金誼靖が即位し、憲安王となった(857年)。遺詔によると、金誼靖は長年宰相とし

て国政を担ったという。金誼靖は当時、上大等であった。文聖王の時に金陽とともに「南北相」として活躍したという記録を見ると、840年(文聖王2)に侍中に任命された義琮も金誼靖である可能性がある。注目すべき点は、憲安王が元聖王系の二人の子孫である金仁謙系と金礼英系との結合を象徴的に示す人物だったという点である。つまり、王の父系は金均貞、金礼英へと繋がり、母系は金忠恭、金仁謙へと繋がる。憲安王は即位直後、金安を自らの後任の上大等として任命した。侍中の任命記録がないことから、金啓明は侍中に留任されたと考えられる。

憲安王は金啓明の子・金膺廉を婿として迎えた。金膺廉は花郎であった。彼は860年(憲安王4)9月、宮廷で開かれた宴会に出席したが、憲安王は彼に、四方を遊覧している間、良い行いをしている者を見たかと質問した。この質問について、金膺廉は高い官職に就いていながら謙譲な態度を取る人、財産が多いにもかかわらず儉約な人、勢力を持っているにもかかわらずそれを盾にしない人、この三つのタイプの人について話した。この話を聞いた憲安王は、金膺廉の資質を高く評価し、婿として迎えた。これにより、金均貞系と金憲貞系の連合構図はより堅調なものとなった。

憲安王は861年(憲安王5)正月に死亡した。その後を継いで金膺廉が即位した。憲安王は遺詔において「朕は不幸にして息子がおらず、二人の娘しかない。故事に善徳・真徳の二人の女王がいるが、これは雌鳥が夜明けを知らせるようなもので、それに倣うことはできない。婿の膺廉はまだ若い、老練な徳性を備えている」とし、婿の膺廉を王位を継がせるよう言い残している。前に文聖王は遺詔により叔父の憲安王に王位を継がせた。その後、父子相続でない王位継承では先王の遺詔がその正当性を確保するものとなった。つまり、憲安王がそうであり、定康王が真聖女王に王位を継がせる時にそうしたのである。真聖女王は甥の金堯を太子とした後、再び遺詔の性格を持つ禪位教書を発表し、王位を継がせている。

景文王が即位することにより、王統は金均貞系から金憲貞系へと変わった。王は仏事により元聖王系の後裔の和合を図った。景文王は862年(景文王2)、元聖王の冥福を祈るための寺院である鵠寺を建て直そうと計画した。鵠寺の建て直しはそれから3年後にはじまったが、それが元聖王系の後裔の和合のためであったことは明らかである。景文王は863年(景文王3)9月10日、八公山・桐華寺の願堂前に石塔を建て、閔哀王の業績と徳を称えた。870年(景文王10)5月、景文王



写真4 大邱桐華寺閔哀王石塔舍利盒



写真5 慶州皇龍寺址九重木塔刹柱本記

は宝林寺に南北2基の石塔を建てた。この石塔は憲安王の往生を願って建てられた。景文王は石塔の建設により金仁謙系はもとより、金均貞系勢力の和合をも望んだのである。

景文王は在位11年、つまり871年正月に皇龍寺九重木塔を補修し始め、872年

11月25日に工事を終わらせた。周知の事実だが、皇龍寺は新羅を代表する寺院だった。新羅を守るとされる三宝のうち、二つがこの寺院にあり、丈六尊像と九重木塔がそれである。景文王が九重木塔の修復を行ったのは、王室の地位を高め、様々な政治勢力を王室を中心に結集させようとする意図によるものであった。

866年(景文王 6)10月に伊滄允興が弟・叔興、季興とともに反乱を企てた。2年後の868年(景文王8)正月には伊滄・金鋭と金鉉が、874年(景文王14)5月には伊滄・近宗が反乱を起こした。景文王は866年正月、父を懿恭大王に追封し、王子・金最を王太子とした。允興の乱はこれと関連があるように見える。金鋭は文聖王の従兄弟であった。彼は855年(文聖王17)には熊州・祈梁県(牙山・新昌面)の県令であったが、王の従叔・金繼宗、金勛栄などとともに慶州・南山・昌林寺無垢浄塔の建設の責任者となった。上記の三回の反乱は王統が金憲貞系へわたったことへの金均貞系の反発と関係するのではないかと推定される。

景文王は反乱に対し、強固な姿勢を見せた。つまり、允興などは岱山郡(星州または井邑市・七宝面?)へ逃げたが、彼らを捕まえて殺害し、族滅した。近宗が宮殿を攻撃すると、王室を保護する禁軍を派遣し、平定した。近宗は味方を率いて逃げたが、彼を捕まえて車に結んで八つ裂きの刑にした。景文王は元聖王系の中の各系派の和合を図ったが、王権に挑戦する王族や真骨貴族には強固な姿勢を見せた。一方、官制改編による王権の強化を図った。

近侍機構と文翰機構の拡大

景文王は即位前は花郎として活動した。彼は興輪寺の僧侶であり、自分の率いた郎徒の教師だった範教師の忠告に従い、憲安王の長女と結婚した。即位後は国仙・邀元郎、与昕郎、桂元、叔宗郎などが彼を支持した。景文王の即位と政局の運営において、花郎勢力の役割が大きかったことを示唆している。

一方、景文王代を前後して漢化政策を通じて執権体制を強化しようとする試みがあった。これは9世紀後半に作成された金石文資料によりある程度窺うことができる。つまり、759年(景德王18)から776年(恵恭王12)初めまで使われた中国式の官府と官職の名称が大体9世紀後半になって再び使用されたのである。官府

の場合、穢宮典が珍閣省へ、領客府が司賓府へ、内省が殿中省へ、司正府が肅正台へ改称されて登場している。官職名の場合、兵部の次官職に該当する大監が侍郎へ、その下の大舎が郎中へ、弩舎知が司兵へ、倉部の次官職に該当する卿が侍郎へ、その下の大舎が郎中へ、租舎知が員外郎へ改称されたことが分かる。涇江鎮の長官は頭上大監であったが、9世紀末頃の様々な金石文には中国式名称の都護となっている。

景德王の漢化政策は王権強化のためのものであった。それを考えると、9世紀後半に進められた漢化政策は、以前の深刻な王位争奪戦により失墜した王権を回復するためのものだったといえる。これと関連し、まず注目に値する官府は、中事省である。中事省は本来、洗宅であったが、景德王の時に中事省へ、さらに恵恭王の時に以前の名称に復古した。872年(景文王12)に再び中事省へと改名された後、新羅が滅亡するまでその名は存続した。

中事省は国王直属のものと東宮直属のものがそれぞれ存在した。国王や太子への侍従が本来の任務だったようである。ところが9世紀後半は所属官員が文翰機構である崇文台の学士職を担当していた。例えば、景文王の時に名筆として広く知られていた姚克一は、崇文台と東宮中事省の官職を兼任した。中事省が侍従の任務を超えて詔書を作成し、または太子に儒学を講義するなどの文翰機構の役割も併せ持っていたと考えられる。

近侍機構の機能の拡大という側面で、宣教省も注目に値する。宣教省は9世紀後半の金石文でのみ見られるが、860年(憲安王4)以前設立されたものと考えられる。宣教省は国王の命令に従う国王直属の官府であった。ところが、その名称は渤海の宣詔省と非常に類似している。この点で宣教省は国王の教書を作成・宣布する官府であった可能性もある。

王権の回復期といえる9世紀中頃、王命に従う機関の必要性はさらに大きくなった。その結果、従来の国王の単なる侍従機関に過ぎなかった洗宅を、再び中事省と改名し、その機能を強化することで一種の「内朝」を形成するのに中心的役割を果たしたと思われる。景文王は中事省や宣教省などを通じて、側近の勢力集団を形成し、それに基づき王権強化を推し進めたものと考えられる。

875年7月8日、景文王は在位15年目にしてこの世を去った。太子・金暲が王位を継いだ。それが憲康王である。王は即位後すぐ伊滄・金魏弘を上大等とし、大

阿滄・父謙(または鋭謙)を侍中とした。魏弘は憲康王の叔父で、景文王の時から政局の運営に深く関与した。865年(景文王5)には継宗、勛榮などとともに鵠寺を建てなおす仏事を行った。唐の冊封を受けた景文王に代わり、宗廟において報告したりもした。871年(景文王11)からは上宰相と兵部令として皇龍寺九重木塔の補修の仏事を司った。憲康王は即位の時、15歳ぐらいだったと思われるので、金魏弘は摂政の地位にあったとも考えられる。

憲康王の時は文翰機構が昇格・拡大したことが注目に値する。9世紀後半の金石文資料を検討すると、880年(憲康王6)頃、翰林台が瑞書院へ改名され、翰林郎の代わりに学士および直学士が設置されたことが確認できる。崔致遠、朴仁範など代表的な渡唐留学生出身者が学士職に起用された。瑞書院は当時の文翰機構における中心的機関だったのである。景文王の時と同様、この時期の文翰機構も近侍機構と緊密な関係にあった。崔致遠は侍読兼翰林学士における知瑞書監事を兼職した。まるで文翰機構と近侍機構が一体化したという印象も受けるが、これはやはり内朝の強化という意味で把握することができる。

憲康王は880年(憲康王6)9月9日、左右の臣下たちと月上樓に上り、四方を眺めた。王京には民家が軒を連ね、絶え間なく歌声が聞こえてきた。王が侍中・敏恭に「現在、民間では藁ではなく瓦造りで家を造り、木ではなく炭で飯を炊いていると聞いたが、それは本当か」と聞いた。敏恭は自分もそのように聞いていると答えた後、それは王のおかげだと王を称え、王は臣下たちのおかげだと話した。翌年の3月、王は臨海殿において様々な臣下のために宴会を開いた。王はコムンゴを演奏し、臣下はそれぞれ歌を作成して献上し、思う存分楽しんだ。まるで泰平の世のようであった。しかし、その裏ではすでに暗い影が忍び寄っていた。

憲康王が金剛嶺への行幸の時は北岳の神が現れて舞を舞い、同礼殿において宴会を開いた時は地神が現れ、舞を舞ったという。山神が歌いながら「智理多都波都波」と詠んだが、智慧をもって国を治める人々が未来を知り、多くが逃亡してしまったので、都は将来破壊するという意味だったという。地神と山神が国が滅びることを知り、警告したが、憲康王をはじめとする誰もそれに気づかず、結局、国が滅亡してしまったのである。

4

思想界の新しい動向

六頭品出身儒学者の動向

骨品制度において、真骨の次の身分は六頭品であった。六頭品は真骨に比べ、政治的出世をはじめとし、様々な面において不利であった。したがって、彼らの中では早い時期から学問を身に付け、出世の道を切り開こうとした者がいた。例えば 強首や薛聰は文章または儒学の知識に基づいて出世した。彼らをはじめとし、六頭品出身の儒学者は学問的見識に基づき、王権と結託しようとする傾向があった。

元聖王は788年(元聖王4)の春、読書三品科を施行した。読書三品科とは儒教の経典や歴史書の読解のレベルによって上品・中品・下品の3等級に分けて官職に就かせた制度のことをいう。上品の上に特品が別にあったので、実際は四品に分かれていた。この制度の施行について「以前は弓矢でのみ人物を選んだが、ここに至って変わった」と記されている。読書三品科の施行により、儒学を勉強せず、官吏になることは原則的に不可能となった。

読書三品科

等級	試験科目
特品	五経・三史・諸子百家書
上品	『礼記』・『孝経』・『論語』・『春秋左氏伝』・『文選』
中品	『曲礼』・『孝経』・『論語』
下品	『曲礼』・『孝経』

読書三品科がはじめて施行された翌年の789年(元聖王5)、子玉を楊根県の小守に任命する過程で議論が巻き起こった。執事部の末端の官吏であった毛肖が「子玉は文籍で官吏になっていないので、分憂之職(地方官)には任命できない」と反発した。しかし、侍中は「渡唐留学生」だったので、起用に問題がないとし、王の許可を得て子玉を任命した。「文籍」とは、国学または読書三品科を意味するものと考えられる。渡唐留学生を含め、儒学の知識を備えた者が官吏になるという原則が作られたのである。

一方、9世紀から唐への留学が大いに流行した。837年(僖康王2)3月、当時、唐の国学において修学していた新羅の留学生は計216人に上った。840年(文聖王2)には修学年限の10年の過ぎた宿衛学生など105人が集団で帰国した。この時代は熾烈な王位争奪戦が繰り広げられ、その影響がまだ尾を引いていた時期であった。従って、このように多くの人が帰国を先延ばしにしたのは、国内の情勢を観望していたからであろう。それを考慮に入れても、下代の渡唐留学生はかなりの数であったことは想像に難くない。

821年(憲徳王13)、金雲卿が唐において外国人向けの試験である賓貢科に及第した。賓貢科が別に存在したのではなく、唐の進士科に合格した外国人を、賓貢進科と呼んだという意見もある。金雲卿を皮切りに、唐の科举に及第した者は58人に達した。そのうち、著名人としては874年(景文王14年)に合格した崔致遠をはじめとし、朴仁範(876年、憲康王2年)、崔承祐(893年、真聖女王7年)、崔彦撝(906年、孝恭王10年)などがある。

読書三品科において成績の良かった人は、主に国学生または国学の卒業生であった。中でも六頭品の出身者が少なくなかった。読書三品科を通じて六頭品出身の儒学者は官界への進出が保証された。子玉の例で見るように、渡唐留学生は優遇された。中では科举の及第者は唐において官吏を務めることもあった。新羅

に帰ってからは「国土」といわれ、かなりの優遇を受けた。渡唐留学生、賓貢科の合格者には六頭品出身者が多く含まれていた。国学 - 読書三品科とともに、渡唐留学 - 賓貢科は六頭品出身の儒学者にあって、政治的出世の礎となった。

下代の六頭品出身の儒学者は、先輩の儒学者がそうであったように、国政を補佐するケースが多かった。例えば祿真是818年(憲徳王10)に執事侍郎で、官等は阿飡であった。この点から見て彼は六頭品だったと考えられる。祿真是憲徳王の時、上大等として官吏の人事問題を処理していた金忠恭に「大きな人材には高位を与え、小さい人事には軽い任務を与える」ように助言している。能力による人材の登用を強調している。

景文王は863年(景文王3)2月、国学を訪れている。博士以下の教授官に経義を講義させ、彼らの物を下賜した。憲康王も879年(憲康王5)2月、国学を訪れている。両王は儒教の教育と儒教の政治理念の本山として国学を重視した。この時の国学を国子監、太学へ改変したであろうという見解も存在する。一方、この頃は近侍機構と文翰機構の拡大による王権強化が進められた。唐への留学から帰ってきた六頭品出身の儒学者達は重用され、瑞書院のような文翰機構において学士として活動した。

六頭品出身の儒学者達は王権に支えられ、政治的・社会的力量を育てていった。しかし、だからといって身分の限界を乗り越えることはできなかった。そのため、科挙のように学問の実力に基づいて人材を登用する制度の導入を望んだ人が現れ、あるいは骨品制そのものを否定する人も出てきた。

真聖女王の政治的後見人であった金魏弘が急死すると、女王は少数の側近に権力を与えた。ところが、彼らにより政治の紀綱が乱れたという非難がはびこった。この頃、女王の側近による失政を非難する文章が出回った。朝廷では王巨人の仕業だと見て、彼を逮捕した。王巨人が悔しい想いを監獄の壁に書き記すと、その日の夜、急に雲や霧に覆われ、カミナリやヒョウが落ちたという。結局、王は彼を解放せざるを得なかった。王巨人は儒学者で、六頭品出身だったと思われる。彼は志半ばにして大耶州に隠居していた。それより先に、憲康王の時、智慧のある者が皆逃げ、国が滅ぼされるという予言があったという。六頭品出身の儒学者の中には王室の失政を批判し、王京を離れて隠居した人物もいた。

894年(真聖女王8)、崔致遠は真聖女王に「時務十余条」を上奏した。その内容は伝わっていないが、そこには新羅末期の混乱を克服するための方法が記されて

いたはずである。崔致遠は渡唐留学生で、科挙に及第して唐の官職についた。このような経験から、時務策では、能力により人材を登用する制度の導入を提示したのではないと思われる。また、崔致遠は各地で地方官を歴任した。だからこそ、当時の地方社会の実状を良く知っていたはずである。時務策には農民蜂起と豪族の台頭に対する対策が書かれていたはずである。

真聖女王は崔致遠の時務策を快く受け入れ、彼に阿飡の官等を与えたという。しかし、崔致遠の建議は実行に移されていなかったようである。彼は時務策を上奏して数年後、政界から離れた。そしてこの世を去るまで海印寺に隠居した。現実において改革に失敗した後、崔致遠も王巨人と同じ道を辿った。崔致遠とともに「羅末三崔」と呼ばれ、名を馳せた人物がいる。崔承祐は科挙に及第し、唐において節度使の下で官職についていたと見える。帰国してからは後百済の甄萱王に従った。崔彦撝は帰国して一時期、新羅の文翰に就いた。しかし、結局彼も高麗に帰付した。

新羅末期には地方出身の知識人が頭角を現した。黄州・土山(土山郡)出身の崔凝は経典と文章に長けていた。弓裔王の下で翰林郎を歴任し、高麗では元鳳省の長官に務めるなど文翰を担当した。朴儒は光海州(春川)出身で経典や歴史書に詳しかった。泰封の時、東宮記室を歴任したが、弓裔王の暴政から逃れるため、隠居した。高麗の太祖・王建は彼を高く評価した。朴儒を得たことを周の文王が姜太公を得たことに喩えたことからそのことを窺うことができる。霊岩出身で経史や天文、卜筮などに長けた崔知夢も高麗において高位に就いた。高麗初め、清州には学校が設置されていた。新羅末、五小京や九州の治所のような地方の主要都市には、学校のような教育機関が設置されていた可能性がある。都落ちした知識人も儒学者を養成するのに一定の役割を担ったはずである。地方の儒学者は各地の豪族や新しい国のために奉仕した。

禪宗と風水説

新羅の華嚴を開創したといわれる義湘の華嚴思想は一心により森羅万象を融合させようとする円融思想ともいわれる。これは王権を中心とする中央集権の

統治体制を支えるのに適した思想である。中代の王室は華嚴宗を大いに歓迎した。下代にも事情は同様だったはずである。

海印寺は「華嚴十刹」または義湘教学の隆盛だった10カ所(十山)の一つに数えられるほど、華嚴宗において重要な寺院である。海印寺は802年(哀莊王3)、王室の全面的な後援で創建された。その後も王室の後援は続けられた。法宝殿の毘盧遮那仏から883年(憲康王9)に大角干と王妃のために仏像に金の鍍金をしたと記された墨書銘が発見されている。また、海印寺は「北宮海印藪」と呼ばれたという。真聖女王は即位の前、北宮に居住し、北宮長公主と呼ばれたので、海印寺が早くから真聖女王と密接な関係にあったことがわかる。888年(真聖女王2)、金魏弘が死すると、真聖女王は彼を恵成大王に追封した。海印寺は金魏弘の冥福を祈る寺院でもあった(恵成大王願堂)。このように海印寺は憲康王と真聖女王からの後援を受けた。

新羅末期、海印寺には観恵と希郎という華嚴宗における二人の宗匠がいた。観恵は後百済の甄萱王を、希郎は高麗の太祖・王建を支持した。彼らは政治的立場だけでなく、思想上でもお互い異なった。そしてその弟子たちに至っては、水と油のように対立するようになったという。観恵の門派は南岳、希郎の門派は北岳と呼ばれていたため、この対立を南北岳の対立ともいう。王室からの格別な後援を受けていた海印寺の二人の高僧がそれぞれ甄萱王と高麗の太祖・王建を支持していたことは、新羅の没落を象徴的に示している。

一方、下代には禅宗が流行した。道義は821年(憲徳王13)、南宗禅を紹介した。しかし、それほど歓迎されず、彼は雪岳山に隠居した。その後、洪陟と慧昭が道義の後を継いだ。845年(文聖王7)から始まった、いわゆる「会昌廃仏」を前後し、多くの禅師が唐から帰った。王室は禅師を招聘し、国師とするなど、積極的に支援した。禅師も禅宗の弘布のためにそれに応えた。

830年頃、実相山門の洪陟は興徳王と宣康太子から呼ばれ、王室を訪れた。その後、様々な禅師が国王に謁見した。洪陟の弟子である秀澈は景文王に、「禅教同異」について語り、その後、憲康王にも会っている。景文王と憲康王は禅宗や禅師について多くの関心を寄せた。そしてそれに応え、王室と密接な関係を結んだ禅師は、聖住山門の朗慧を挙げることができる。

文聖王は朗慧が住職を務めていた寺院の名称を聖住と改称し、大興輪寺に



写真6 保寧聖住寺址朗慧和尚塔碑

編入させた。憲安王は即位の前、朗慧に弟子としての礼を尽くした。即位後は政治的な助言を求めた。朗慧は国王が礼儀・忠臣・誠実を備えれば、百姓は信頼し従うと言った魯の周豊の言葉を肝に銘ずるように、と話した。871年(景文王11)には景文王の招聘で王と仏教に関する問答を行った。憲康王は即位後、朗慧に政治的な助言を求めた。彼はそれに対し「官吏を上手く登用するように」(能官人)と答えた。後に憲康王が国政に役立つことについて質問をした。その時、朗慧は南朝・宋の宰相、何尚之が文帝に諫言した内容に喩え、王に仏法に帰依し、戒律を守るように勧めた。朗慧は禅師としてはじめて国師に任命された。

禅師は当時を代表する知識人であった。国王は禅師に政治の要諦を質問し、あ

るいは時務と関係する方策を求めた。一方、禪師は国王の顧問の役割を果たし、時務を解決するのに役立とうとした。さらに、それにより禪風を広めることができると期待していた。従って、その後の国王も禪師を取り込むのに努力を傾けた。

孝恭王は906年(孝恭王10)、崛山門の行寂を国師とした。行寂は915年(神徳王4)、神徳王に呼ばれて再び王京を訪れた。王は彼を南山の實際寺に住まわせた。この寺院は神徳王が即位する前に居住した場所である。神徳王も行寂を国師とし、大いに優遇した。景明王は918年(景明王2)に鳳林山門の審希を招聘した。この時、審希は王に国事を導き、百姓を楽にさせる方法を提示した。景明王は審希が入滅すると、自らその碑文を制作し、碑を建てさせた。

しかし、真聖女王の時から禪師は王室より豪族と結託する傾向を示した。景明王が優遇した審希は金海の豪族である金律熙(蘇律熙ともいう)と金仁匡の後援を受けた。景明王が彼を王京に招いて師匠としたこともあったが、結局鳳林寺に帰ってしまった。崛山門の開清は溟州の豪族である金順式などの後援を受けた。景哀王が使節を送り、国師への礼を示したが、王の招聘に応じなかった。禪宗の個人主義的傾向は各地において中央政府に対し、独立した態勢を持っていた豪族に相応しい面があった。さらに、地方に根拠を持つ禪師という立場からも、地方の実力者として台頭してきた豪族の後援が必要であった。

ひいては後百済の甄萱王や高麗の太祖・王建と深い縁で結ばれた僧侶が増えた。片雲は実相山門の開山の祖である洪陟の弟子で、安峰寺(星州)を創建した。彼の僧塔は南原・実相寺・曹溪庵の跡に残っている。その銘文によると、僧塔は「正開10年庚午」に建てられたという。「正開」は後百済の年号であり、その10年の「庚午」は910年だ。これを見ると、実相山門も甄萱王と関連があったと考えられる。桐裏山門の道誥の弟子である慶甫は、中国留学の後、921年(景明王5)に帰国したが、甄萱王からの援助を受けた。彼は甄萱王の提供した全州・南福禪院に滞在し、同王の配慮で道誥が住職を務めていた玉龍寺(光陽)に移住した。慶甫は道誥の弟子であった。甄萱は道誥の風水説を用いて後百済の存在を正当化しようという意図をもって慶甫を重視したものと見える。

太祖・王建が様々な禪門の禪師を積極的に取り込もうとしたことは広く知られている。利厳、麗厳、慶猷、迥微は「四無畏士」と呼ばれた。太祖・王建は慶猷に百姓を治めるための教えを求め、王師として待遇した。923年(景明王7)には利厳を開京

に滞在させ、その説法に耳を傾けた。利厳は王に百姓を憐憫に思い、罪のない者を殺してはならず、罪のある者は罰しなければならないと話した。彼は932年(敬順王6)には太祖・王建の命により海州の広照寺に住み、須弥山門を開創した。麗厳は国を豊かにし、百姓を安らかにする方途として堯王の仁と舜王の徳を提示した。四無畏士の政治的意見は、儒教の政治理念を取り入れたものである。一方、彼らの禪思想は義湘の思想を受け入れる「禪教」融合の傾向を示したという。そして太祖・王建の連立した統一への思想を裏付けるものだったという。

玄暉が924年(景哀王元年)に帰国すると、太祖・王建は彼を国師とし、忠州・淨土寺に滞在させた。玄暉も禪教融合の傾向を持っていたが、禪宗の立場で義湘の思想と法相宗の思想を融合させた「性相融会思想」に調和させようとしたという。他にも、多くの禪僧が太祖・王建との縁を深めていた。

下代には風水説も流行した。元聖王(785-799)の時にすでに風水説の経典が輸入され、流通した。しかし、本格的に風水説を受け入れ、流布させた人物は桐裏山門の道誥である。彼は仏教の善根功德思想と陰陽五行説などを合わせて独自の理論に発展させた。また、実際に全国を回って地勢の吉凶を占ったという。

906年(孝恭王10)頃、弓裔王は尚州一帯を掌握した。これにより彼は王京を圧迫する拠点を築いた。この時、弓裔王はその強さに基づき、新羅を吸収する志を持ったといわれている。彼は自国の人々に新羅を「滅都」と呼ばせた。「滅都」とは新羅の首都・金城を意味する。弓裔王は風水説を用いて金城とそこに住む国王をはじめとし、新羅の支配階級がまもなく滅亡すると予言した。金城中心の価値観はもう成り立たなくなった。

太祖・王建は道誥が松岳を、後三国を統一する人物が出現する吉相の地だと話した宣伝した。その反面、「十訓要」では車嶺以南、公州江の外側の地域における山の形や地形が「背逆」に該当するので、人々の心もそうであるはずだとし、その出身者を官吏として使ってはならないと警告している。これは後百済の出身者を警戒せよという意味である。各地の豪族と建国者は風水説を用いて自らの根拠地を吉相の地とすることで、その存在を正当化しようとした。一方、競争者や敵の根拠地は、「背逆処」と規定した。

末世意識と弥勒下生信仰

中代末期、弥勒信仰の伝道師として名を馳せた真表は、当時を末世と把握していた。そして弥勒仏が下生するまで末世の衆生を救うという地藏菩薩と、末世の衆生を懺悔させるための占察法会を重視した。真表の末世意識と弥勒信仰は、その弟子によって全国へと広まった。

禅宗でも下代を末世と考えていた。迦智山門の第二祖だった廉居は844年(文聖王6)に入滅した。彼の塔志には「釈迦牟尼仏が涅槃に入った時から1804年が過ぎた」と記されている。釈迦が涅槃に入った後、正法500年、像法1,000年が過ぎると、末法の時代、つまり末世が到来したと信じられた。釈迦の涅槃から何年が過ぎたかを数える「仏滅紀元」は、自分たちが末世を生きているという認識に始ま



写真7 原州興法寺址廉居和尚塔誌

っている。このような例は迦智山門の中心となる寺院だった宝林寺の鉄造毘盧舎那仏像の銘文からも窺い知ることができる。禅宗の寺院ではないが鉄円の到彼岸寺における鉄造毘盧舎那仏像に刻まれた銘文にも、仏滅紀元が刻まれている。仏像が作られたのは865年(景文王5)で、それを仏滅後1,806年と記し、末世意識を露わにしている。

下代には、教宗と禅宗の対立に加わり、王位争い、凶作による流民や盗賊の発生など、社会的に混乱を極めた。新羅人は当時を仏法が衰退し、飢饉・疾病・戦争などにより世が乱れる末世と考えた。ところが、自分たちが末世を生きていると認識し、毘盧遮那仏を制作した者は、その信仰により末世から逃れたいと考えたはずである。一方、真表の弥勒信仰では、末世を救う弥勒の下生を願ったはずである。

経典によると、弥勒は遠い未来、この世に現れて龍華樹の下で成仏し、衆生を救済するとなっている。ところが、弥勒仏は未来に現れる唯一の仏である。この点で、弥勒の下生だけが末世の苦しみに喘ぐ衆生を救うことができると信じられた。真表の弥勒信仰は主に地方の農民から歓迎された。彼らの中には末世の衆生を救う弥勒の下生を切に願った者がいたと考えられる。弥勒が下生すると、地上には浄土が実現するといわれている。この点で弥勒下生信仰は、現実の改革という性格を持つ。したがって、農民蜂起を導いた宗教的背景として、弥勒信仰に注目すべきである。

第3章

新羅の滅亡

跛行的な王位継承
農民蜂起と豪族の抬頭
後三国の鼎立と新羅の滅亡
新羅から高麗へ

1

跛行的な
王位継承

女王の即位

886年(憲康王12)7月5日、憲康王が亡くなった。憲康王と王妃の懿明夫人との間では息子がおらず、娘だけがいた。憲康王が狩りの時に会った女性との間で金嶠という息子が生まれたが、一時期、その存在は知られていなかった。このような状況で憲康王の弟・金晃が即位した。定康王である。定康王は兄の死後ちょうど1年になる887年7月5日に亡くなった。そして兄の安置された菩提寺の南東に埋められた。定康王は死ぬ前、侍中・俊興に「不幸にして跡継ぎの息子がいないが妹の曼は生まれながら明敏で骨格が男性のようである。善徳・真徳の故事にならって彼女に王位を継がせよ」という遺詔を残した。この言葉に従い、金曼が即位した。つまり、真聖女王である。

憲康王、定康王、真聖女王の3兄妹が皆王位を継いだことは、新羅史において類例のないことであった。善徳女王、真徳女王に次いで太宗武烈王が王位を継いだ後は、真骨の男性が即位した。したがって、女王の即位は破格のことだったのである。憲安王は861年(憲安王5)、婿の金膺廉が王位を継ぐように遺言を残した時、善徳と真徳の二人の女王がいるが、そのような前例は倣ってはならないことだ

と話している。このようなことを考えると、真聖女王の登場は景文王の子孫が王権を独占しようとしたことによることが分かる。彼らの兄妹相続、特に女王の即位の背景には金魏弘という存在があった。彼は景文王の弟で、兄の政治的助力者であった。憲康王、定康王、真聖女王の叔父として、甥と姪の政治的後見人でもあった。特に真聖女王とは非常に近かったが、二人は夫婦だったのではないかわれるほどである。

金魏弘は真聖女王が即位して8月目の888年2月に亡くなった。女王は彼を恵成大王と追封し、海印寺に祀って三年葬儀を行うなど、手厚く葬った。政治的後見人をなくした女王は、若い二、三人の美男に要職を与え、国の政事を任せた。彼らは金魏弘を補佐し、女王の即位から初期の頃、政局運営に関与したものと見える。花郎か、あるいは花郎出身者だったであろう。ところが、彼らの失政により政治が乱れたという批判が起きた。真聖女王の無理な王位継承、正常でない政局運営について、誰かが批判の文章を作成し、官庁の町に貼りだした。他の記録では、陀羅尼の隠語を作って文を書き、道端に投げておいたともなっているが、その内容は女王と魏弘など一部の寵臣たちが国を乱しているという内容であった。

一方この頃、地方では重大な事態が発生した。889年(真聖女王3)、中央政府による納税の督促に抵抗し、全国で農民が蜂起し、その事態は続いた。税金を納めていた主要階級である農民が、各地で蜂起を続けたので、新羅の経済的基盤が崩れてしまった。一方、豪族は蜂起を起こした農民の攻撃に備え、城を頑丈に築き、私兵を増やした。農民蜂起は中央政府に対する豪族の独立性を強化するきっかけにもなったのである。

真聖女王はこの危機を打開するため、金孝宗を重用したものと見える。金孝宗は第46代文聖王の後裔で、祖父は憲康王の時、侍中を務めた金敏恭である。父は真聖女王の時、第3宰相の金仁慶である。金孝宗は花郎であったが、彼に従う郎徒の数が数千に上ったと伝わっている。当時、韓歧部の民である知恩は、貧しさのあまり、体を売って奴婢になり母親を養った。彼らの事情を伝え聞いた金孝宗は、多くの物を送って彼女を救い、郎徒たちも団結し、孝行娘の知恩を助けたという。金孝宗と彼に従った郎徒らが見せた結束力は、花郎・金孝宗の勢力を誇示するためのものである。

真聖女王は知恩の事があってまもなく「年が若いにもかかわらず、老成さが感じられる」と話し、金孝宗を憲康王の娘と結婚させた。これは憲安王が花郎・金膺廉に王位を受け継がせる遺詔において、年は若いが老成の徳を備えていると評した言葉と同様である。金孝宗は憲康王の娘と結婚し、王位継承権者として浮かび上がった。真聖女王は金孝宗家の政治力と彼に従う郎徒を利用し、直面した危機的状況を克服しようとした。

父謙も重用した。彼は憲康王の即位の時、侍中に任命され、881年(憲康王6)2月まで在職した。上大等に任命された金魏弘とともに、憲康王の前半期の国政を導いた人物である。真聖女王の時、父謙の義子である朴景暉(または朴景徽、後の神徳王)と憲康王の別な娘が結婚した。朴景暉も金孝宗に続き、王位継承権を持つようになった。父謙の政治的影響力は少なくなかったであろう。

真聖女王の前半期には金孝宗が政局の運営を主導し、後半期には父謙がそうであったろう。真聖女王は金孝宗と父謙の対立構図をつくり、それを操っていたものと考えられる。金孝宗の先代と父謙は、憲康王と深い縁で結ばれていた。真聖女王は憲康王の時の旧臣勢力を利用し、難関を突破しようとした。しかし、農民蜂起と豪族の台頭に対する根本的な解決なしでは、不可能なことであった。

894年(真聖女王8)2月、崔致遠は「時務十余条」を真聖女王に上奏した。女王はそれを快く受け入れ、崔致遠に阿浪などの地位を与えた。この「時務十余条」は伝わっていないが、懸案に対する改革案であったはずだという推定に異論はない。ところが、崔致遠は時務策を提出して数年後に、政界を離れている。真聖女王が時務策を受け入れたというが、それがまともに実現するような状態ではなかったはずである。たとえそれが受け入れられたとしても、次の王である孝恭王の無理な王位継承、農民蜂起、豪族の台頭が続く中で時務策は大きな効果を上げることは難しかったであろう。新羅は破滅に向かっていたのである。

真骨出身でない王の出現

真聖女王は在位10年目の897年6月、憲康王の庶子である甥の金曉に王位を譲り、政治から退いた。女王は寵臣の失政と地方社会の離反に対する責任を取っ

て自ら退位するという形を取った。

金嶠は民間で育てられ、真聖女王は895年(真聖女王9)頃、その事実を知った。女王は彼を呼び、背中をさすりながら「私の兄弟姉妹の骨法は他の人とは異なる。この子の背中には二本の骨が聳えている。この子こそ憲康王の子である」とし、憲康王の子として認めた。さらに10月には彼を太子とした。そして897年(真聖女王11)6月、禪位の形で王位を譲った。

金嶠は憲康王の庶子で、身分は真骨でなかったと見える。真聖女王の「骨法」云々はその弱点を覆い隠すためのものだったであろう。禪位の形で王位を継承させたのも同様の理由からである。金孝宗や朴景暉のような王位継承の適格者がいたにもかかわらず、金嶠を即位させたのは、景文王系の王室が王位を独占しようとする無理な試みである。

孝恭王は898年(孝恭王2)正月、俊興を上大等に、継康を侍中にした。俊興は906年(孝恭王10)正月までその地位を守った。彼は定康王の時の侍中であり、定康王の遺詔を受け、真聖女王の即位に貢献した人物である。真聖女王の時も侍中を歴任した。彼が侍中や上大等として務めた期間は886年から906年まで、計20年間である。彼は景文王系の王を積極的に支持する立場にあった。孝恭王は899年(孝恭王3)3月、伊滄父謙の娘を王妃として迎えた。父謙も憲康王の時に侍中を務めた人物である。真聖女王の時も政治的影響力があつた。

902年(孝恭王6)、孝恭王は金孝宗を侍中として任命した。彼は憲康王の婿で、王の義弟、つまり妹の夫であつた。後百済は901年(孝恭王5)8月、大耶城(陝川)を攻撃した。大耶城は王京へと向かう重要な軍事的要地であつた。大耶城を守備していた新羅の将軍、金億廉だったが、戦闘で勝った。彼は金孝宗の兄であり、敬順王の伯父で後に高麗の太祖・王建の舅となった人物である。この戦闘の勝利も、金孝宗が侍中となるのに一役買ったはずである。孝恭王も先王以来、景文王系の王室を支持していた旧臣勢力を重用し、政局を保とうとした。

一方、孝恭王の時、地方の統治体制が知州諸軍事 - 城主中心に変わったという説がある。これによると、改編の案は894年(真聖女王8)、崔致遠の「時務十余条」において提示され、孝恭王の時に定着したという。都督に代わり、州治を掌握した地方の有力者に、彼らの独立性と地元民に対する支配権を一部認め、知州諸軍事の官職を与える代わり、王室に対する忠誠と王室の保護を約束させる形

だったのである。新羅末期、農民蜂起と豪族の台頭に対応するため、中央政府が太守と県令など地方官の名称を軍政の性格を強く表す城主に変えたという。

ところが、自らの権威を高めるため、知州諸軍事を自称したケースがあつた。例えば、甄萱は自らの勢力を結集して武珍州を占領した後、「全武公等州軍事」を自称した。このことから、豪族が自称していた知州諸軍事という称号を中央政府が黙認したか、後に公式的に認めたケースもあつたであろう。また、889年(真聖女王3)、農民蜂起が起きた頃はすでに城主、将軍を称する豪族が台頭したと考えられる。したがって、知州諸軍事 - 城主制度の施行についてはそのまま受け入れがたい部分がある。また、それが施行されたとしても、大きな効果を上げたとは考えにくい。900年(孝恭王4)、甄萱が後百済を、901年には弓裔が後高句麗を建国した。これにより後三国時代が幕を開けた。

905年(孝恭王9)8月、弓裔王の軍隊が新羅の辺境の郡県を略奪し、竹嶺の北東地域にまで達した。しかし、新羅の王はそれを防ぐ力がなかった。そして多くの城主に戦争に向かわず、城門を固く締め、城を守るよう命じた。906年(孝恭王10)頃は弓裔王の軍隊と甄萱王の軍隊が尚州において衝突し、弓裔王は尚州一帯を掌握した。907年(孝恭王11)には甄萱王が一善郡(善山)以南の約10の城を占領した。しかし、新羅は何も打つ手が無かつた。

孝恭王の末年、それまで王を支持して政局を導いていた俊興、父謙、金孝宗などは政界を退き、または死亡した。王の周りには政治的に支えてくれる人物が残っていなかった。孝恭王は後百済と摩震(後高句麗)の攻撃に適切に対応できなかった。新羅の領域は慶尚道一円に縮小した。危機を克服することができないという無力感から、孝恭王は現実逃避をはかったものと見える。孝恭王は賤妾に溺れ、政治を疎かにした。911年(孝恭王15)にはそれについて、大臣の殷影が諫言したが、王がそれを受け入れなかったので殷影は賤妾を殺した。

朴氏王室の登場

孝恭王が跡継ぎのない状態で亡くなると、貴族たちは朴景暉を王に推戴した。それが神徳王である。彼は上代朴氏王室の最後の王であつた阿達羅尼師今

(154~184)の後裔だったといわれている。第17代奈勿麻立干以降、王位は金氏が受け継いでいた。ところが新羅末期になると、朴氏が王位を継ぐという変化が起きている。

中代以降、朴氏の真骨貴族に関する記録はほとんどない。朴氏王の唐突の出現と関連し、その実在について疑問の声も存在する。神徳王が本来は金氏だったが、唐の同姓不婚制度を意識し、新しい出発を宣言する意味で朴氏に変えたのではないかという解釈である。朝鮮時代、高麗の禡王と昌王を王氏の子孫ではなく辛旽の子孫だったと主張されたように、高麗の時に新しい王朝が作られた正統性を主張するために金氏を朴氏に変えたのではないかという見解もある。しかし、記録上明白な朴氏王の出現を、否定することはないであろう。

孝恭王の死後、王位継承権を持っていた者は金孝宗と朴景暉である。二人はともに憲康王の娘と結婚していた。金孝宗は真聖女王の時に花郎として名を馳せ、政局の運営にも深く関わっていたものと見える。孝恭王の時は侍中を務めた。反面、朴景暉の経歴は知られていない。祖父は文官・海干であり、父は文元・伊干で、外祖父は順弘・角干だという記録がある。しかし、彼らの活動についても知られていない。但し、義父の父謙は孝恭王の義父として政治的影響力を行使することができたであろう。つまり、彼のバックアップによって朴景暉が即位したと考えられるのである。

ところが、なぜ朴氏の景暉が王に推戴されたかという点も、注目に値する。定康王、真聖女王、孝恭王へと続く景文王の子孫の無理な王位継承は、支配階級の反発をもたらした。農民蜂起、豪族の台頭、後百済や後高句麗の成立など、新羅の存亡をかけた重大事項に、真聖女王と孝恭王はまともに対処できなかった。朴氏王室の成立の背景には金氏王室に対する支配階級の不満や不信が根付いていたと考えられる。朴景暉が有力な王位継承権者である金孝宗を抑え、即位できた背景をここに求めることができる。

神徳王は912年5月、即位と同時に父を大王に追封し、義父の父謙と外祖父まで大王に追封した。これは、神徳王の支持基盤を築き、王権を強化するための試みであった。また、子の朴昇英を太子とし、朴氏がその後、王位を継承するということを世に知らしめた。しかし、現実では、神徳王は金氏の真骨貴族たちと妥協し、政局を運営するしかなかったと見える。

神徳王の死後、太子の朴昇英が即位した。景明王である(917年~924)。彼は弟の朴魏膺を上大等に任命した。近親王族を要職につかせ、王権の安定を図ったのである。侍中としては金裕廉を任命した。金裕廉は金孝宗の甥である。当時、金孝宗は政治の一線から退いたと考えられる。彼の勢力は子である金傳(後の敬順王)に受け継がれたであろう。景明王は金裕廉を侍中に任命することにより、金傳を中心とした勢力の一部を取り込む効果を狙ったはずである。

2

農民蜂起と
豪族の抬頭

農民蜂起の背景と経過

背景

三国統一の後、真骨貴族を中心とした新羅の支配階級は、広くなった領土と増えた人民に基づき、豊かな時代を謳歌した。彼らが集まって住んだ王京、つまり金城(慶州)は9世紀後半に全盛期を迎えた。憲康王の時、王京は数十万の人の住む巨大都市となった。金、銀、または鍍金によって装飾の施された豪華絢爛な邸宅を意味する金入宅が、随所に建てられた。

一方、王京の繁栄を支えた地方農民の境遇は貧しさを極めた。凶作の年は随所で盗賊が活動し、流民が発生した。815年(憲徳王7)8月、西の辺境の地域(州郡)が甚だしい凶作となり、盗賊が起きて、新羅は軍隊を動員し、討伐に取り組まなければならなくなった。819年(憲徳王11)3月には「草賊」が各地で起き、朝廷は地方官に鎮圧を命令した。820年(憲徳王12)、春と夏の日照りにより冬には飢饉が発生した。翌年の春には飢饉に耐え切れず、子供を売って延命する人が出現するほどであった。816年(憲徳王8)、飢饉が発生すると、食べ物求めて唐の浙東地域にまで渡った人が170人にも上ったという。さらに、811年(憲徳王3)8月から824

年(憲徳王16)5月までの13回にわたり計826人の新羅人が日本列島に漂着し、そのうち相当数は流民だったのだ。

寧越地域の、世達寺所属の農場の責任者(知莊)だった調信の夢の話からは、新羅下代における地方の農民の悲惨な暮らしを窺い知ることができる。調信は慕っていた金昕の娘と結婚してから40年間、五人の子供に恵まれたが、家は四面の壁があるのみで、野菜のおかゆも満足に食べられないほど貧しかったという。そして10年間は子供たちを連れて転々としたが、服は破れ、体を隠すこともできないほどであった。一番上の子は飢え死にし、仕方なく夫婦は二人ずつ子供を連れて別れようとした時に夢から覚めたという。王京の繁栄の裏に、貧困と飢えに苦しんだ地方農民が少なくなかったことを示唆している。

828年(興徳王3)には漢山州・瓢川県(坡州?)において「妖人」が速く富を積む術(速富之術)があると宣伝し、それに騙される人が多かった。王は「邪道をもって群衆を誘惑する者を罰することは先王の法」であるとし、その人を遠くの島へ送る配流の刑に処した。「速富之術」は農民の貧困を背景に現れたものである。一方、凶作と飢饉に苦しんだ農民たちは、当時を末世と考えた。中には末世に生きる自分たちを救う弥勒の下生(げしょう)を願う人も現れたと見える。弥勒仏はこの世に現れ、理想の世界を実現するといわれる仏である。従って、弥勒下生信仰は、現実の改革と関連する余地がある。地方の農民の間で不穏な雰囲気を広まっていたのである。

889年(真聖女王3)、全国で農民が蜂起した。次のように事情が伝わっている。「国の中の様々な地方(州郡)が税金(貢賦)を献上しなかったため、ソウルの倉庫(府庫)は空になり、国の財政(国用)が窮乏を極めた。したがって、王が使節を送り、税金を納めるよう促すと、盗賊が蜂起した。」農民は国王の税金の督促に抵抗し、反発した。農民の中でも税金を納めた人々は、自らの農土を耕作し、なんとか生計を立てることのできる自作農であった。新羅の経済の土台だったこのような自作農が反乱の列に加わったことを見ても、889年の農民蜂起は深刻なものであった。

真骨貴族は農場の確保に明け暮れた。寺院も農土の寄贈を受けたり買いあさったりした。これらのうち、相当数は合法または違法で課税の対象から除外され、その負担は農民に転嫁された。農土を捨てて流民となった人々の税金も、地元に残った農民の負担となったと見える。要するに重い税金が、889年の農民蜂起の

原因だったものと考えられる。これの関連し、禄邑制や村落の共同体を基本単位とする「烟受有田沓制」の構造的問題が注目された。

757年(景德王16)、禄邑が復活した後、村落社会は禄邑を媒介にした貴族官吏の私的支配や地方官の公的支配下に置かれた。ところが、中央の力が弱まり、私的支配が強くなるにつれ、恣意的かつ厳しい搾取が横行した。このような事情により、禄邑民の経済的境遇が劣悪になり、流民が増加すると、禄邑民は減少した。その結果、農村に残った禄邑民はより多くの経済的負担を強いられた。一方、一般の農民が負担した「田租」、つまり土地に対する税金は、各村が実際耕作した烟受有田沓の面積と関係なく、村落の文書により把握された面積を基準にして定額が賦課された。その納付は村落に住む農民の共同責任となった。このような状況の下、農民の階層の分化も進み、村落から離れる百姓が増えたことで農村に残った百姓が負担しなければならない税額は増える一方であった。そのため、農民の一部が流民となる悪循環が繰り返され、結局地元に残った農民は重い税金に喘ぐしかなかったのである。

経過

889年、すなわち真聖女王3年、元宗、哀奴などは沙伐州(尚州)で蜂起した。女王は奈麻令奇に蜂起を鎮圧するよう命令した。しかし、令奇は敵の陣地を眺めて、進撃できずにいた。一方、村主の祐連が先鋒に立って攻撃した。真聖女王は令奇の首を斬り、戦死した祐連に代わり、約10歳の彼の子を村主とした。紆余曲折の末、元宗・哀奴などの率いる農民蜂起が鎮圧された。ただこの時、官軍は力を発揮することができなかった反面、土着勢力の村主が私兵を率いて先鋒に立った。随所で起こった農民蜂起軍を撃退するには、官軍だけでは力不足だったのである。中央政府の無能ぶりが白日の下にさらけ出され、朝廷の権威は大いに失墜した。

海印寺のある僧侶は、当時の状況を以下のように記した(五台山寺・吉祥塔詞)。「己酉年から乙卯年までの7年間、世は乱れ、野原は戦場と化した。人々は方向を失い、その行動は猛獣と変わらず、国が滅亡の一途を辿るようで、災害は寺院にまで及んだ。」己酉年は889年(真聖女王3)であり、乙卯年は895年(真聖女王



写真1 陝川海印寺吉祥塔

た。彼らは赤い袴を着て自らを他と区分したので、赤袴賊と名付けられた。赤袴賊は様々な地方を略奪し、東へ進み、王京の牟梁里(慶州市・乾川邑)に現れ、財貨を奪って消えた。興徳王の時、牟梁里の人の孫順が自宅を寄贈し、弘孝寺という寺院とし、地面から掘り出した石鐘をその寺院に置いた。その時の鐘は消失したが、寺院は残ったという。赤袴賊は遠い距離を移動して略奪を繰り返し、王京の近くの村まで襲撃した。その勢いが非常に盛んだったことが分かる。

ところが、赤袴賊を「百済の横暴な盗賊」と表現した記録も残っている。新羅の南西地方は旧百済地域である。つまり、昔の百済地域において起きた横暴な盗賊という風に解釈することができる。一方、赤袴賊が百済の後裔であることを自任したのではないかという推測も可能である。そうすると、彼らは政治色を色濃く帯びていたとも言える。甄萱より先の時代に百済の継承を掲げていたかも知れないという点も注目に値する。

897年(真聖女王11)6月、真聖女王は甥の金嶠への譲位を決心し、その事実を唐に知らせる外交文書では、当時の状況について「盗賊(緑林)が群をなして狂気すら感じさせ、統治する全ての場所(九州百郡)が盗賊の起こした火災により焼け野原と化しました。さらに、草(麻)を切るように躊躇なく人間を殺すので白骨が山のように積り(中略)、仁の国が変わり果て、病の国となりました」と絶望的に描写している。また、孝恭王は自分が王位を継承したことを唐に知らせる外交文書において「(上略)今はすべての郡県が盗賊の巢窟となり、国土がことごとく戦場と化している。どうして天災がすべて我が国(海東)にのみ流れこむのか」と嘆いている。

889年、つまり真聖女王3年に全国で始まった農民蜂起は、沈静化するどころか、激しさが増す一方であった。そして結局、女王は退位を余儀なくされた。新羅は敬順王が935年に高麗へ歸付したことにより幕を閉じるが、その実、889年の農民蜂起から新羅の終焉は始まったといえる。

豪族の出身と独立性

出身

新羅は三国統一の後、地方を統治するため、九州と五小京を設置した。そし

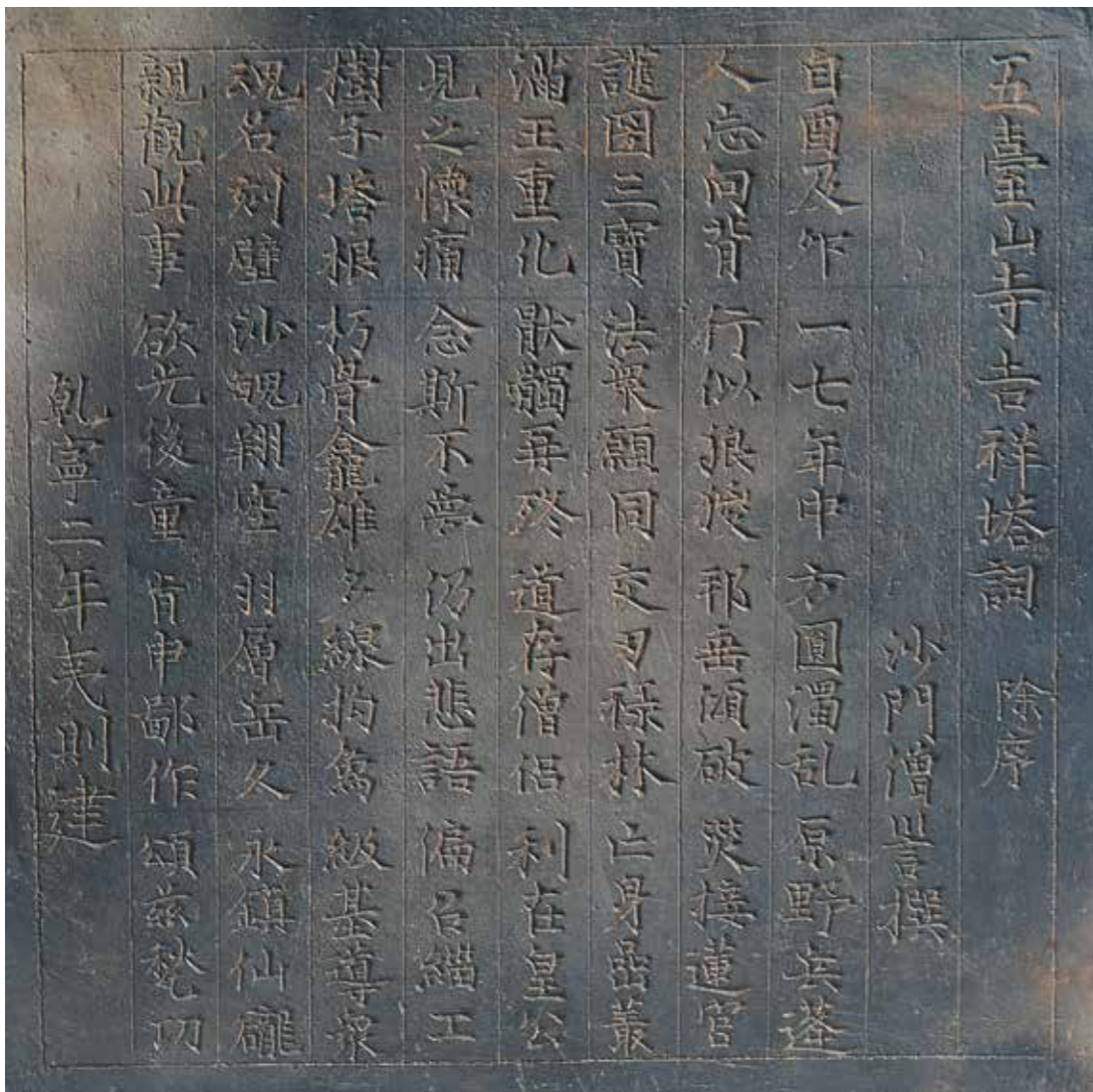


写真2 陝川五台山寺吉祥塔詞

9)である。889年に始まった農民蜂起は895年まで続いたのである。海印寺も農民蜂起軍に襲撃され被害を蒙り、多くの僧侶が戦死した。海印寺には彼らに対抗して寺院を守るべき僧軍が組織され、その一部が戦死した。崔致遠の言葉のように「悪い者の中でも特に悪い者が至るところにあり、飢え死にし、戦って死んだ屍が野原に星のごとく散らばっていた。」(海印寺 妙吉祥塔記)。

896年(真聖王10)には「赤袴賊」という盗賊が国の西南地方において蜂起し

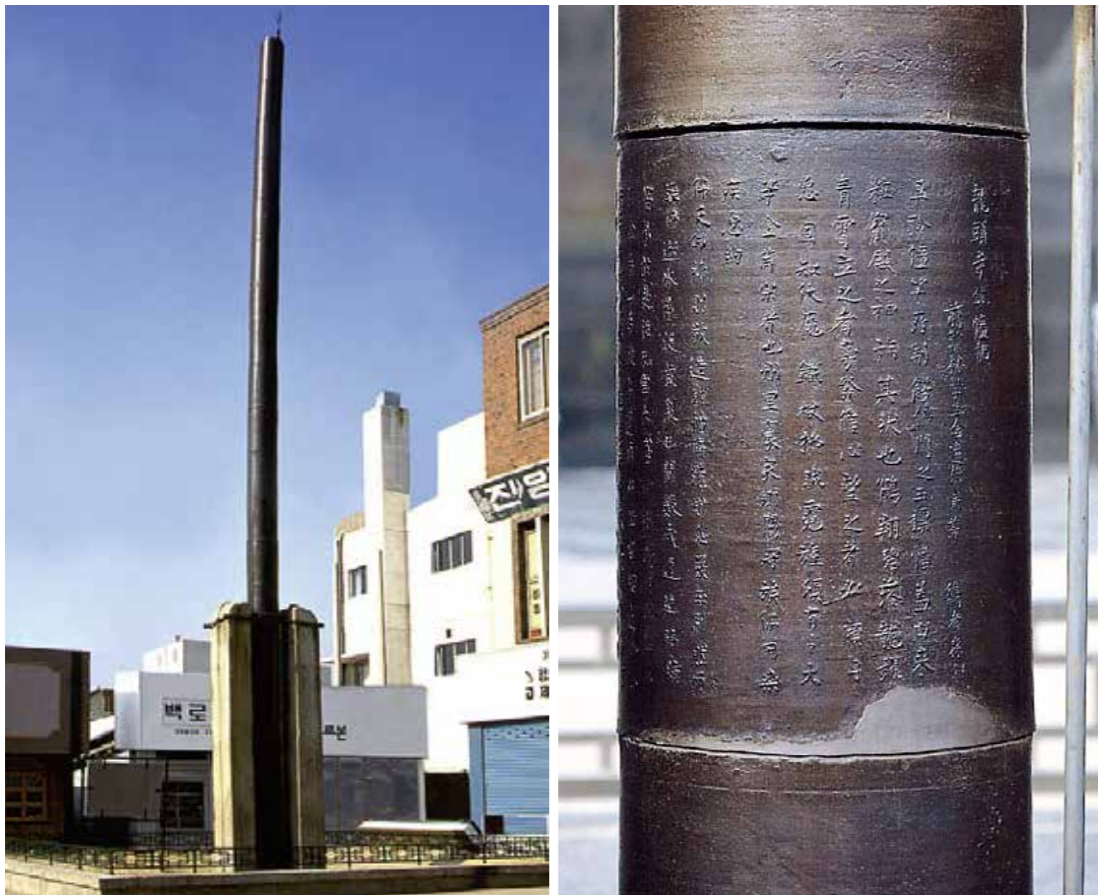


写真3 清州龍頭寺址鐵幢竿(左)、幢竿銘文

て、全国の郡県に地方官を派遣した。これにより中央政府の支配力が地方の随所にまで及ぶようになった。しかし、中代末期から真骨貴族の政治争いが頻繁に起きた。また、王位をめぐる闘争が激しさを増した。これにより、中央政府の地方への支配力は弱化した。その隙を狙って、地方の有力者が頭角を現すようになった。彼らを豪族と呼ぶ。

清海鎮の張保皐は「海商王」という名で広く知られているが、彼は豪族の先駆的存在ともいえる。張保皐以降、随所で豪族が台頭した。甄萱王の父阿慈介は農業を営んでいたが(自活)、「光啓年間(885～887)に沙弗城、つまり現在の尚州に勢力を張り、將軍を自称した。」新羅末期、豪族は自らを城主や將軍などを称した。887年、真聖女王元年頃、阿慈介は尚州・沙弗城の豪族として振る舞った。

寿昌郡(大邱)・護国義營都將の重閼祭・異才は国のために908年(孝恭王12)に八角登樓を建てた。彼は高い場所に城を築き、10年間その地を治めた。異才は寿昌郡を支配する豪族であった。889年(真聖女王3)、全国にわたり、農民が蜂起した際、城主として領民の百姓を保護することで勢力を育てていったであろう。碧珍郡(星州)の李愬言は盜賊が四方に溢れると、城壁を頑丈にし、領民を守った。李愬言は碧珍郡の城主として農民蜂起軍の襲撃を防いだのである。

889年から全国では農民が蜂起したが、中央政府はそれにまともに対処できなかった。豪族は城を築き、私兵を動員して自らの領民を保護した。豪族の中央政府に対する独立性はより一層強くなった。

豪族の中には中央貴族出身者で都落ちした者もいた。寿昌郡の豪族・異才は重閼祭、つまり中阿漚であった。中阿漚は大阿漚へ昇進できなかった六頭品の位階に与えられた重位の官等である。異才は本来六頭品出身であった。彼は身分の限界を感じて都落ちしたであろう。溟州將軍・金順式(後に太祖王建から王氏の下賜を受け、王順式と改名)の後を受け継ぎ、溟州の支配者となった金父(王氏の下賜を受け、王父と改名)は金敬信(元聖王)との王位争いに負け、溟州へと退去した金周元の子孫である。

新羅は小京など地方の主要地域に王京の貴族を移住させた。その一部も新羅末期に豪族となった。10世紀中頃、清州では「州里の大きな家柄(州里豪家)であり、郷里における屈指の家(郷閭冠族)」の出身である堂大等・金芮宗という者が幢竿を建てることを発願した。彼が亡くなると、従兄の堂大等・金希一と大等・金守△、金釈希、金寛謙などがそれに必要な財源を集め、監督した。清州は統一新羅時代、西原京であった。983年(成宗2)、堂大等、大等はそれぞれ戸長、副戸長という名称に変わった。幢竿の建設を主導した金氏は、中央政府が政策的に西原京へ移住させた(徙民)真骨貴族の後裔で、清州の大豪族であった。

中央政府は辺境と海岸地域の防備のため、軍鎮を設置し、軍隊を駐屯させた。軍鎮の軍事力を背景にした豪族も現れた。礼成江以北・大同江以南地域を治めるため、782年(宣徳王3)、黄海道・平山に湍江鎮が設置された。平山・朴氏の始祖・朴直胤は朴赫居世の後裔であるが、平山の地方官になってそこに定着した。彼は太毛達を自称した。太毛達とは、高句麗の大模達を指すもので、中国の將軍に比肩する武官の官職である。朴直胤は湍江鎮の指揮官から平山の豪族となった

のである。彼が新羅の将軍ではなく高句麗の大模達を称したのは、高句麗の継承を標榜し、その地域の住民を支配していたことを物語っている。沮江鎮の他にも、陸軍が駐屯した三陟の北鎮、海軍が駐屯した江華の穴口鎮、華城の唐城鎮などがあつた。また、西海岸と南海岸にわたって名称の伝わっていない軍鎮がさらにあつた。このような軍鎮の指揮官の中でも豪族となった者がいたはずである。

清海鎮は解体したが、その後、西海岸と南海岸の幾つかの場所で海上の有力者が登場した。太祖王建の祖父、作帝建は商船に乗って西海を航海していた時、西海の竜王の娘と結婚し、7宝を得て帰ってきたといわれている。そして彼が帰ってくると、礼成江と漢江河口一帯の4州3県の人々が彼のために永安城を築き、宮室を作つたという。この説話は作帝建が海上貿易に従事してかなりの財産を蓄積し、それに基づいて松岳(開城)一帯において政治的影響力をつけていったであろうことを示唆している。作帝建の子息である王隆は、896年(真聖女王10)に松岳郡の沙祭で「郡ごと弓裔に帰付」した。王隆は松岳の豪族またはそれに比肩する存在であつた。

王逢規は924年(景明王8)に泉州節度使として後唐へ使節を送り、朝貢を行った。927年(景哀王4)3月には後唐の明宗が権知康州事・王逢規を懷化大將軍とした。同年4月には知康州事・王逢規が林彦を送って朝貢を行ったが、明宗が彼を中興殿に呼び、物を下賜した。泉州は慶南・宜寧であり、節度使は地方の軍事的行政を担当していた唐の官職である。康州は現在の晋州であり、知事は唐の知州諸軍事の略語と考えられる。王逢規は節度使や知事を自称した豪族であつた。彼は後唐との貿易を通じて得た経済的利益に基づき、勢力を拡大したのであろう。

農民蜂起軍の指導者が豪族となったケースもある。905年(孝恭王9)、平壤の城主、将軍・黔用と平壤付近の甑城(甑山郡)の赤衣・黄衣賊、明貴などが弓裔王に帰付した。黔用は城主・将軍であつたが、明貴などは盗賊出身だったという記録がある。明貴などが赤い服や黄色い服を着用して他と区別したという点で、赤い袴を着用した赤袴賊と相通ずるところがある。赤袴賊や赤衣・黄衣賊すべて蜂起した農民出身だったはずである。但し、前者は一定の根拠地を確保できず、転々として略奪を繰り返すうちに消滅してしまった。その反面、後者は甑城に定着し、豪族化したものと見える。

圧海県(新安・押海島)における盗賊の首領(賊帥)、能昌は逃亡者を呼び集め、

勢力を形成した。909年(孝恭王13)、彼は周辺の島々の他の盗賊たち(小賊)と連合し、王建の軍隊を攻撃したが、むしろ捕まり、弓裔王に押送された。王は「海賊によって首領に推戴されたのに、今となっては捕虜の身だ」とし、彼をあざ笑つたという。この事実を見ると、能昌は新安一帯の島々を中心に勢力を形成し、名を馳せたようである。能昌は盗賊または流民となった農民や漁民を呼び集め、圧海県を支配する豪族となったものと見える。

村主は地方の土着勢力で中央から派遣された地方官を補佐し、村の行政の実務を担当した。地方の官府において些末な行政業務を行った「吏」も村主と同様、土着勢力であつた。彼らは中央政府の地方への統制力が弱まった隙を狙って社会的・政治的地位を築いた。村主・祐連は、元宗と哀奴などが率いた尚州の農民蜂起軍に対抗して戦い、戦死した。祐連は農民蜂起軍から自らの地域における基盤を守るため、先鋒に立つたのであろう。国王は祐連の幼き子に村主の地位を受け継がせた。889年の農民蜂起は、村主と「吏」のような土着勢力が豪族になり、または豪族としての独立性を強化するきっかけとなった。

独立性

豪族は中央政府を模倣し、独自の官府と官職を設置した。925年(景哀王2)、高鬱府(永川)の将軍・能文が士卒を従えて高麗に帰付した。この時、侍郎と大監の地位にあつた人々が彼に仕えた。侍郎は執事省の次官、大監は兵部、侍衛府などの次官に該当する官職であつた。溟州の金义は940年(太祖23)、溟州の都令として佐丞の官階を持っていた。彼は執事郎中、員外郎、色執事などの官職の人を従えていた。清州の大豪族が称した堂大等や大等は、和白(貴族の会議体)の上大等や大等に因んだ官職である。彼らは一種の会議体を構成し、清州地方の重要な業務を行ったはずである。その下には兵部、学院などの官府があり、侍郎、兵部卿、学院卿、学院郎中、司倉などの官職が設けられた。

豪族の地位や支配権は世襲された。そうでない場合でも、同じ血縁集団の中でその地位を受け継ぐケースが多かつた。あるいは、他の族団においてその地位を占めた場合でも、それは互いに妥協した結果または実力の対決の結果だったはずである。また、地方官は中央政府が任命するものである。彼らは一定の時間が過ぎると、他の人と交替するのが原則であつた。特定の地域に長く在任した結

果、土着勢力と癒着関係を結ぶということを恐れたための措置であった。中央政府が外司正を派遣し、地方官を監視したのも、同様の理由からだと解釈できる。この点が豪族と地方官の大きな違いといえよう。

豪族は百姓から税金を集め、または労働力を徴発したが、これらは豪族の勢力基盤の維持・拡大に役立つものだった。豪族は奴婢を武装させ、または流民を集めて私兵を養成した。有事の時は百姓を動員することもあった。一方、地方官は百姓から税金を集め、中央政府に持っていか、中央政府の命令により彼らを力役に動員した。地方に配置された軍団や地方軍を動員し、その地域の治安を担当した。この点も、豪族と地方官との違いといえる。豪族は政治だけでなく、経済や軍事においても中央政府から独立して存在したのである。

豪族の中には新羅に忠誠心を持つ豪族も存在した。たとえば寿昌郡の護国義宮都將の異才がそうであった。しかし、多くの豪族が新羅を裏切り、または独立の姿勢を取った。後百済や高麗に帰付した豪族も少なくない。昧谷県(報恩郡・懷北面)の將軍・龔直は後百済の甄萱王に仕えた。その後、彼は太祖・王建に帰付した。豪族は利害関係により新羅、後百済、高麗の中から従うべき国を選んだのである。新羅の運命は、豪族がどちらにつくかによって決まったのである。

3

後三国の鼎立と
新羅の滅亡

後百済と後高句麗の建国

甄萱は867年(景文王7)、沙弗城の將軍、阿慈介の子として生まれた。彼は20歳頃従軍し、王京に入った。その後、西南海岸を守る部隊に配され、裨將にまで上り詰めた。889年(真聖女王3)には全国で農民が蜂起すると、その隙を狙って新羅に反旗を翻した。甄萱は892年(真聖女王6)、武州(光州)を占領し、王のように行動した。しかし、公然と王を自任したのではなく、「新羅西面都統」などの官職を自称した。つまり、建前上では新羅の西部地域を治める地方官を自任したのである。新羅に対する義理立てをするのが有利だと判断したのであろう。

900年(孝恭王4)、甄萱は百済の復讐という大義を掲げ、建国した。完山州(全州)を訪れた甄萱は、「新羅の金庾信が馬で駆けて、黄山を経て泗泚に達し、唐の軍隊と連合し、百済を滅亡させた。今、敢えて私が完山に都を定め、義慈王の古い鬱憤を洗い流すのは当然である」と宣言した。彼はこの地域住民の持っていた旧百済に関する記憶を利用し、百済を建国したのである。これを三国時代の百済と区別し、後百済と呼ぶ。

甄萱王は建国の後、すぐ呉越に使節を送り、朝貢を行った。これについて呉越

力な真骨貴族の後裔で、政権の争いの犠牲となり、幼くして地方へ行かされたと見る見解もある。弓裔王の反新羅の言行は新羅王室と支配階級への根強い恨みによるものと考えられる。

弓裔王は新羅を併合する意を公然としたが、その後、新羅を攻撃したという記録は出てこない。彼は904年(孝恭王8)、国号を摩震とし、年号を武泰とすることで、国家としての面貌を整えようとした。つまり、広評省をはじめとする多くの官府と官職を整備し、官等体系も整えた。905年(孝恭王9)には松岳から鉄円へと遷都した。弓裔王は 対内的には体制を整備することが重要だと判断したようである。また、909年(孝恭王13)からは羅州一帯を巡って後百済と数回にわたって戦った。このような事情があったため、弓裔王はそれ以上新羅を攻撃しなかったように見える。後百済も羅州一帯の戦闘のため、新羅への攻撃を本格化する状況ではなかった。新羅としては幸いなことだったといえよう。

弓裔王は自らを下生した弥勒仏だと自称した。彼は国王としての政治的権威だけでなく、宗教的な権威も占めようとした。「弥勒観心法」を通じて人の心が読めるとし、謀反の疑いで自分に反対する政治勢力を粛清した。彼は「神政的専制主義」を求めたが、これは広く反発をもたらした。918年6月、王建をはじめとする政変により泰封が滅亡し、高麗が建国された。王建が即位し、高麗の太祖となった。

親高麗政策と後百済の金城への侵略

新羅は920年(景明王4)正月、高麗と使節を交換し、友好関係を結んだ。同年10月、甄萱王が歩兵と騎兵1万人を率いて大耶城を陥落した後、進礼(金海)方面へ進軍した。新羅としては大きな危機であった。これを受け、景明王は阿湊・金律を送り、高麗の太祖・王建に救援を要請した。王建が救援軍を派遣すると、甄萱王は軍隊を引き上げた。景明王と王建は軍事同盟を含む外交関係を結んだのである。921年(景明王5)2月に靺鞨の別部・達姑人171人が新羅の北側の辺境、登州(安辺)を侵略した。この時、朔州(春川)を守っていた高麗の将軍、堅権が騎兵を率いて攻撃し、大破した。これに対し、景明王は使節と手紙を送り、王建に御礼の言葉を伝えたという。新羅と高麗が軍事同盟国であったことが確認できる。

王は御礼の意味で使節を送り、さらに検校太保の官職を与え、他は以前と同様だったという。使節の交換の時期については疑問の余地があるが、とにかく甄萱王は国際的には呉越から認められ、国内における自らの政治的地位を高めようとした。後百済王の甄萱は、地方豪族の子で、また防戍軍の指揮官出身であった。だからこそ、新羅の権威に楯突くためには、中国からの認定が切実な問題であった。

901年(孝恭王5)8月、甄萱王は大耶城(陝川)を攻撃した。大耶城は三国時代にも百済と新羅が争っていた要地であった。金春秋の婿に当たる金品積がここを守ろうとして百済軍の攻撃で戦死したこともある。新羅の立場としては後百済の攻撃を防ぐ第一線の基地が大耶城だったのである。新羅は大耶城の戦いで勝利を収めたことにより、後百済軍の東進を一旦阻止した。

寧越・世達寺の僧侶であった弓裔は891年(真聖女王5)、竹州(安城・竹山面)の勢力が箕萱の部下となった。しばらくして北原(原州)の梁吉の麾下において活躍した。894年(真聖女王8)、独自の勢力を形成し、896年(真聖女王10)頃、鉄円(鉄原)を中心に中北部地方を占めた。899年(孝恭王3)には昔の主君だった梁吉の軍隊を撃破し、901年(孝恭王5)に建国した。弓裔は「昔、新羅が唐の軍隊を借りて高句麗を破った。そのため、平壤の昔の都は雑草で茂ってしまった。私がそのその敵を必ず討つ」とし、高句麗の復讐という意味で高麗(後高句麗)を建国した。その後、904年(孝恭王8)に国名を摩震に改称し、911年(孝恭王15)には再び泰封に変えた。

弓裔王は906年(孝恭王10)頃、尚州一帯を支配した。この時、風水説を利用して金城がまもなく没落するという予言を広めた。また、新羅から降伏してきた者は残らず殺したという。新羅の王族など支配階級を容認しないという意志を強く現したことがこのように伝わったのであろう。弓裔王は御幸中、浮石寺に寄った。その時、壁に描かれた新羅王の肖像画を見て刀で切った。その傷跡が高麗の時代まで残ったという。浮石寺事件は金城の支配階級を容認しないという意味表明と相通ずる。尚州に進出した後、弓裔王は新羅に対し、敵対の立場と政策を公に宣布した。

弓裔は本来、王子出身で生後まもなく父王から殺される危機に瀕したが、何とか命拾いしたと伝わっている。しかし、『三国史記』の編纂の時まで、彼の父王が誰だったか明らかになっていない点で、王子説は疑問の余地がある。弓裔が有

太祖・王建は920年(景明王4)10月、救援軍を要請するために高麗に渡った金律に新羅のいわゆる護国三宝、つまり皇龍寺丈六尊像と九重塔、そして真平王に天が与えたといわれる「天賜玉帶」について聞いたという。この三宝が新羅の権威を宗教的に裏付けるものだという点で、新羅の権威に対する王建の関心を読み解くことができる。政変で権力を握った王建は、内では弓裔王の残存勢力または自分の即位に反対する勢力の反発を收拾しなければならなかった。外では各地の豪族に使節を送り、様々な物を贈おくり物ものにすると同時に謙遜な言葉をもって彼らの離脱を防がなければならなかった。このような努力の末、最大の敵国といえる後百済とも、一時的ではあるが友好関係を結ぶことができた。以上のような状況下で松岳の豪族出身で、弓裔王の下で将軍や宰相を務めた王建は、何より国王としての権威を必要としたはずである。それこそ、高麗が新羅との関係改善に取り組んだ真の背景だったはずである。

一方、景明王も新生国家の高麗の太祖・王建と友好関係を結ぶ必要があると判断した。新羅としては最大の脅威だった弓裔王の没落は、歓迎すべきことであった。また、新羅の権威を必要とした王建は、新羅王室の権威を尊重する態度を取ったであろう。また、新羅は高麗と後百済の友好関係を防がなければならなかった。甄萱王は918年8月、一吉絜・閔邵を送り、王建の即位を祝った。王建は閔邵を、礼を尽くして手厚く歓迎した。即位まもなく、王建は甄萱の使節の派遣を歓迎せずにはいられなかった。しかし、新羅としては両国の親善関係を怖れていた。新羅が高麗との通交を進めた背景は、以上のように推論できる。

ところが新羅が高麗と友好関係を結んだことにより、高麗はもう反乱勢力による国家ではなく、新羅から認められた正式な国家となった。新羅の地位は地に落ちたが、高麗の地位は高まった。両国が友好関係を結んだ直後の920年(景明王4)2月、康州(晋州)将軍の閔雄が高麗に帰付して以来、慶尚道一帯の豪族の、高麗への帰付が相次いだ。つまり、922年(景明王6)正月に下枝城(安東・豊山)将軍の元逢と溟州(江陵)将軍の順式が太祖・王建に帰付した(元逢の帰付は6月だったという説もある)。真宝城(義城)の将軍・洪述(または洪術)もこの時帰付した。彼は922年11月に高麗へ使節を送り降伏の意を伝え、翌年11月には子の王立を送り、甲冑30着を高麗へ献上したともいわれている。923年(景明王7)7月(または8月)には京山府(星州)の将軍、良文などが高麗に帰付した。こうなっては新羅はますます

高麗に頼るしかなくなっていた。

景明王は924年(景文王8)8月に亡くなった。太祖・王建は使節を送って弔慰を伝えた。景明王に次いで即位した景哀王は9月、王建に使節を派遣した。弔問への感謝の意を表し、これからの友意を願ったはずである。925年(景哀王2)10月、高鬱府(永川)の将軍・能文が王建に帰付した。王建はその麾下の侍郎・孟近と大監・明才、相述、弓式などは手元に置き、能文は帰るように話し合ったという。その理由は、高鬱府が新羅の王都から近いためだという表向きの説明では新羅王室への配慮のように見えるが、その実、高麗が新羅の王京を監視し、その事情を知ることができる前進基地を確保するためだと見る方がより妥当であろう。

925年(景哀王2)10月、高麗と後百済は人質を交換し、休戦した。その年の11月、景哀王は太祖・王建に使節を送り、和親してはならない意を伝えた。ところが、この時の休戦は高麗が軍事的に劣勢にあったため、先に提案したのである。したがって休戦状態は一時期保たれた。926年(景哀王3)4月、後百済の人質が急死した。甄萱王は高麗が故意に人質を殺したと判断し、軍隊を熊津(公州)にまで送った。王建は多くの城に命じ、城壁を頑丈にし、出て戦うことを禁じた。この時も景哀王は使節を派遣し、王建に後百済を攻撃するよう促した。これに対し、王建は時を待っているだけだと答えを留保した。まだ後百済軍の攻撃に打ち勝つのは難しいと判断したからであろう。景哀王は高麗を利用し、後百済を負かそうと企てたが、高麗の軍事的劣勢により実現できなかった。

927年(景哀王4)正月、太祖・王建は軍隊を率いて後百済の占めていた龍州(醴泉・龍宮)を攻撃した。この時、景哀王は軍隊を派遣し、彼の手助けをした。新羅が果たしてどの程度の兵力を派遣したかは知られていないが、高麗と新羅軍の連合作戦という象徴的意味は少なくなかったであろう。これにより景哀王の後百済に対する一連の敵対政策は最高潮に達した。これは甄萱王にとって大きな圧迫として働いたようである。甄萱王が金城を攻撃した背景には、ひとつはこれがあったであろう。

927年(景哀王4)9月、甄萱王が高鬱府を襲撃し、王京に近づいた。景哀王は連式を太祖・王建に送り、救援を要請した。王建は侍中・公萱などに精銳の兵士1万を率いて救援するように命じた。ところが、甄萱王は救援兵が到着する前の隙を狙って11月、王京を急に攻撃し占領した。王妃と後宮たち、宗戚とともに鮑石



写真4 慶州鮑石亭

亭に行幸した景哀王は、急いで身を隠したが、結局、後百済軍に逮捕された。甄萱王は景哀王を自害させ金傅を敬順王とした。そして高位貴族を人質にし、様々な宝物を略奪し、帰った。王建は使節を派遣し、景哀王の死を哀悼した。また、自ら精鋭の騎兵5千人を率いて八公山・桐華寺の近くで後百済軍と戦ったが、大敗した。王建は麾下の將軍を失ったが、命だけ助かった。これにより新羅は王京すら守る力を持っていないことを、天下に知らしめてしまった。

甄萱王は金城を襲撃して帰ってまもない12月、太祖・王建に手紙を送り自分が「尊王」の義理を重視し、宗廟と社稷を守るため王京に入ったが「奸臣は逃れ、王が亡くなる政変」に遭ったと、金城侵略について弁解している。これについて王建も自分が「朝廷を救い、国家の危機を救おうとしている」とし、新羅に対し「尊王」の義理を前面に押し出した。たとえ、これが外交文書における儀礼的で形式的な常套

句であっても、新羅に対する弓裔王の敵対的な態度とは相反する。当時、新羅の軍事的地位はかなり低かったが、象徴的地位は高かったので、甄萱王と王建が宗主国として待遇したのである。一方、これと関連し、朴氏王室に対して不満を抱いた金氏王族が、高麗と同盟を結んで後百済を敵対視した朴氏王室に対する不満を持つ甄萱王を引き寄せ、景哀王を除去したであろうという説も存在する。つまり、甄萱王は金氏の真骨勢力の黙認ないし内応により金城を襲撃することができ、金傅を王に擁立したのは、彼らの希望ないし要求に応えたものと見るのである。

敬順王の高麗への帰付

敬順王は927年(敬順王元年)11月、景哀王の葬儀を行い、太祖・王建は使節を送って弔慰を伝えた。その後も後百済と高麗の激突は続いたが、後百済が機先を制した。

927年12月、甄萱王は大木郡(漆谷郡・若木面)に侵入し、積んであった穀物に火を放った。928年(敬順王2)正月には高麗の將帥・金相が草八城(陝川郡・草溪面)において後百済の將帥・興宗と戦い、戦死した。5月には康州の將軍、有文が甄萱王に帰付した。8月には甄萱王が將軍の官听に命じ、陽山(忠清北道・永同)に築城したが、太祖・王建の命を受けたが、命旨城(抱川)の將軍、王忠の攻撃で退却を余儀なくされた。すると、甄萱王は大耶城に一旦退き、軍隊を送って大木郡の兵糧を奪った。10月には後百済軍が武谷城(位置は未詳)を攻撃し、陥落した。11月には甄萱王が正兵を選抜し、烏於谷城(位置は未詳)を攻撃し、陥落した。これにより新羅の領土は次第に減った。929年(敬順王3)にも後百済の攻勢は続いた。7月に甄萱王が義城府城(義城郡)を攻撃すると、將軍の洪述が戦い、戦死した。続いて順州(安東市・豊山面)の將軍、元逢まで甄萱王に降伏した。10月には甄萱王が加恩県(聞慶市・加恩面)を攻撃したが、陥落には至らなかった。

守勢に回っていた高麗は930年(敬順王4)正月、太祖・王建が古昌郡(安東)瓶山において甄萱王を大いに打ち負かし、勝機を得た。2月、王建が勝利を知らせると、敬順王は使節を送って会ってくれるよう乞うた。すでに安東と青松一帯の数十の郡県が王建に帰付するなど、形勢が高麗に有利に展開していたのである。溟州から興



写真5 連川敬順王陵

礼府(蔚山)に至るまで110余の城が王建に帰付したのもこの年のことである。

931年(敬順王5)2月に太祖・王建は約50人の騎兵を率いて京畿を訪れ、敬順王との謁見を要請した。従えた兵力を最小限に抑え、入京を許可を乞うなどそれなりに礼を示したが、両者の優劣関係は明らかであった。敬順王は百官を率いて郊外で王建を出迎えた。王建は王京で2ヶ月以上滞在した。この時、敬順王と王建は新羅の運命について様々な交渉をしたであろう。開京に帰った王建は931年(敬順王5)8月、敬順王に彩色の錦や鞍の付いた馬を送り、多くの臣下や将士に麻や錦を下賜できるよう配慮した。また人民には茶や幘頭を、僧尼には茶や香を送った。王建は王京の民心が自分に有利に動くよう、雰囲気盛り上げた。

一方、太祖・王建は王京の動態に関する軍事的監視や圧迫もおろそかにしなかった。彼は昵於鎮を王京から近い浦項・神光面に設置し、すでに930年2月に御幸した。王京を訪れた後も大匡・能丈などに軍隊を率いて慶州の近くに駐屯させた。一方、933年(敬順王7)、後百済の軍隊が樁山城(慶州付近?)と阿弗鎮(慶州付

近)などで活動すると、大匡・庾黔弼を送って彼らが王京を侵略することを事前に防ぐように試みた。庾黔弼は槎灘(慶山・河陽)から後百済の統軍・神劍が率いる軍隊を退け、入京した。この時、金城の人民が城の外へ出て「大匡がこなかったら我々は魚肉のように無残に殺されたはずです」と話し、泣いたという。後百済が再び王京を侵略するかもしれないという不安が大きかったようである。庾黔弼は7日間金城に滞在した。彼は帰り際、神劍の軍隊と戦って大勝利を収め、これにより緊迫した状況は回避できた。

934年(敬順王8)9月、高麗は運州(洪城)の戦いで勝利を収めたことで後百済に対し、確実に優位を確保することができた。甄萱王が甲士5千人を率いて自ら出征したが、庾黔弼が先鋒に立ち、3千人以上の後百済の兵士を殺し、または捕虜にした。熊津以北の30の城はこの噂を聴いて高麗に帰付した。

一方、後百済の内部では王位継承を巡って大きな変動が発生した。甄萱王は妻が多く子息が10人余りいたが、そのうち四男の金剛を特別寵愛し、彼に王位を譲ろうとした。このことに長男の神劍と、良劍、龍劍などが反発した。935年(敬順王9)3月、神劍などは政変を起こし、甄萱王を金山寺(金堤)に幽閉した。しかし、甄萱王はその年の6月、一行を率いて羅州を経て高麗に亡命した。戦況は完全に高麗の方に傾き、甄萱王も高麗に頼る状況であった。

敬順王は9年(935)10月、多くの臣下とともに高麗への降伏を議論した。臣下の議論は賛否両論に分かれたが王は侍郎・金封休に降伏の旨を書き記した手紙を太祖・王建に伝えさせた。降伏に反対した王子は王に別れを告げ、そのまま皆骨山(金剛山)に入り、岩を家とし、麻の服を身にまとい草を食べながら一生を終えたという。これは、かの有名な麻衣太子のことである。11月、敬順王は百官を従えて王京を出発し、その御幸は30余里にわたって並んだという。王建は郊外において敬順王を迎え、彼を慰労して良い家を見て、長女の楽浪公主を嫁がせた。12月には金傳を正承公(あるいは政丞公)とし、封禄1千石を与えた。金城を慶州と呼び、金傳の食邑とした。これにより千年の新羅は幕を閉じてしまった。

4

新羅から高麗へ

衰亡の様々な原因

新羅の滅亡と高麗の成立を古代から中世への転換と見る見解が最も有力である。この転換期は、ローマ帝国の滅亡と中世の開始という西洋史の展開と類似しているところがある。これに着目し、ローマ帝国の衰亡の原因に関する諸々の見解を参考に、千年王国・新羅の衰亡の原因に関する様々な説を総合的に検討したい。新羅の衰亡の原因を政治的・経済的・社会的・思想的・国際的側面でまとめると次の通りである。

国の重大事項を決定した和白会議は三国統一以降も存続した。ところが、中代において和白は国家の政策を決定する機関としての重要性を失った。それに比べ、国王の直属機関として出発し、国王と諸官府を結ぶ役割を果たした執事部が重視された。その長官の侍中は王権の安全弁の役割を果たした。王権が強化され、権力は武烈王系の近親王族が独占した。ここから疎外された真骨貴族の反発は、ある意味当然のものであった。

下代が始まり、元聖王系の近親王族が権力を独占した。これに対し、真骨貴族の分裂と権力闘争は避けられなかった。憲徳王の代は武烈王系の金憲昌が元

聖王系の独走に不満を抱き、反乱を起こした。彼は新羅を否定し、新しい国家の建設を標榜した。乱は全国に広まった。興徳王の死後約2年余間、熾烈な王位争奪戦が繰り広げられた。この時、有力な王位継承者である金均貞と僖康王、閔哀王が犠牲となった。彼らはすべて元聖王の子孫であった。細分化した王室の各家系の長が王権を巡って争ったのである。

このように真骨貴族が王位を巡って争っていた間、中央政府の地方に対する支配力は弱体化した。日照りのような自然災害が頻繁に起き、これにより凶作が繰り返された。中央政府はそれに効果的に対応する能力を失っていった。飢饉になると、大規模な流民が発生した。農民は時には盗賊となって秩序を乱した。一方、豪族と呼ばれる地方の有力者が姿を現した。三国統一期、新羅は地方を九州五小京に編制し、郡県を設けて地方に対する支配を強化した。新羅村落文書からも分かるように、中央政府は各村の状況をかなり詳しく把握していた。しかし、次第に地方に対する支配権は豪族の手に渡った。滅亡の直接的なきっかけとなった農民蜂起と豪族の台頭は真骨貴族の分裂や権力闘争によって始まった部分が大きい。

景德王の時に復活した禄邑は、真骨貴族の重要な経済的な基盤となった。彼らはさらに先祖代々受け継がれた私有地を持っており、場合によっては牧場をも所有していた。真骨貴族はこれらに基づき、売買・併合などの方法により、大規模な土地の所有者となった。一方、寺院も王室や真骨貴族から寄進を受けた土地や買い入れ、併合を通じて土地を増やしていった。彼らの農場は合法的に、あるいは非合法的に免税の恩恵を受けたものと見える。一方、土地を失った農民は没落の一途を辿った。真骨貴族や寺院が負担すべき税金や流亡した農民の税金は地元に残った農民に転嫁されていった。

新羅の農民は三国の戦争などを通じて少なくない犠牲を強いられてきた。また、凶作や飢饉も彼らの暮らしを脅かした。統一新羅期の地方農民の状況を詳しく記した村落文書については作成の時期、当該村落の性格などについて研究者の間で合意に達していないものが多い。但し、これらの村落が零落していったとする点については、大方の意見は一致している。村落の家戸は上上から下下に至るまで、九等級に分かれた。最高等級の家戸は仲下烟で、その数も少ない。これに反して、最下層の下下烟の数が最も多い。さらに、逃亡したり流民が存在したた

め、人口は減少の傾向を見せている。丁の数が丁女の数よりはるかに少ないが、これは役を避けて流亡した傾向と軌を一にしているように見える。このような劣悪な状況が結局889年、つまり真聖女王3年に農民が全国で蜂起を起こした根本的な背景と見ることができる。

834年(興徳王9)、朝廷は貴族の間で蔓延した豪奢な風潮を抑えるため、教書を頒布した。それを見ると、タシュケントとアラル海地方原産の宝石である瑟瑟、羊毛を主成分としたペルシア産の高級毛織物、カンボジア産の翡翠毛、ボルネオ島やジャワ島産の玳瑁、ジャワ島・スマトラ島産の香りのある紫檀など、外国からの豪奢な品物の名称が多数並んでいる。下代の真骨貴族の豪奢な暮らしを象徴しているものは、いわゆる金入宅である。例えば、日本の歴史において驚くべき贅沢を尽くしたために滅亡したとされる室町幕府の建物はこぢんまりとした楼閣に金箔または銀箔を塗っている。それに比べ、金入宅は昌慶宮・演慶堂ほどの大きな建物に金箔で装飾を施したものであった。このような金入宅が王京の中に39棟以上存在した。

9世紀、王京の貴族の豪奢な風潮、退廃的風潮について「病のような都市文化」と規定し、「健やかな農村」により滅亡するのは必然であったという見解が注目に値する。王京の繁栄は地方農民の犠牲に基づいたものであった。したがって、889年の農民蜂起はこれに対する地方農民の怒りが噴出したものであり、それを打倒するためのものだったと解釈する余地がある。

骨品制は基本的に王京に住む人々の特権を維持するために考案された装置であった。中央政府は州や小京に、真骨貴族を始めとし、王京の支配階級を政策的に移住させた。しかし、彼らは政治的出世の面では、一定に、限界を受け入れなければならなかったはずである。統一新羅の五小京のうち、金官小京を除いてはまるで王京を守るように、原新羅地域の外郭に位置していたことも想起する必要がある。一方、地方の有力者は王京の貴族に与えられる京位とは別の、外位が与えられた。三国統一戦争を経て、彼らにも京位が与えられるようになったが、だからといって彼らが骨品貴族になったわけではない。したがって彼らは中央政府の官吏となって出世するという方途はありえなかった。村主は四、五頭品に準ずる待遇を受けたのである。

新羅末期、全国各地では地方勢力が台頭した。豪族と呼ばれる彼らは中央政

府からは独立した態勢を取った。900年、甄萱は百済の復興を掲げ、建国した。901年に弓裔は高句麗の復興を掲げ、建国した。王建が918年に政変で政権を握った後、泰封の国号を高麗に変えたのも、高句麗の継承を標榜したものである。彼らは百済や高句麗の流民からの支持を予想し、建国した。豪族の中には新羅を裏切り、後百済や高麗に帰付する事例が多く見られた。こうした地方の割拠主義を克服できなかった背景には、王京中心の閉鎖性にあった。

中代に下層民の間では厭世的で、現実逃避の傾向の強い阿弥陀浄土信仰が大いに流行した。現実逃避は現実に対する批判から始まるものであるが、現実を改革しようとするものではなかった。この点において、阿弥陀浄土信仰は、むしろ中代の新羅の支配システムを保つのにある程度寄与したものと考えられる。それに比べ、新羅下代では、当時を末世と見る考え方が広まっており、百姓は弥勒仏の下生を待望したようである。弓裔王が弥勒仏を自称したのも、このような状況下でのことであった。ところで、弥勒仏とはこの世に現れ、理想の世界を実現する仏である。従って、自然と弥勒下生信仰は、現実の改革と結びつく可能性が高い。したがって、末世意識の深化と弥勒仏の下生への期待、希望が新羅末期にける農民蜂起を導いた背景のひとつだったと考えられる。

一方、中代以降、王室と真骨貴族は華嚴宗を多く尊崇した。下代に入っては禅宗が受容され、次第に影響力を強めた。禅師は、初期には王室からの後援を受けるなど、王室と密接な関係を結んだ。ところが、次第に王室よりは地方の豪族と密接な関係を結ぶ傾向が強くなった。禅宗の個人主義的傾向は中央政府に対し、独立的な態度を取り、割拠していた豪族の好みに合致するものであった。反乱国家の高麗や後百済の王室の後援を受ける例も増えた。禅師により大いに流行した風水説も、豪族から歓迎された。豪族たちは風水説を利用し、自らの存在を正当化しようとした。このような状況では、王京中心の国土観は廢れる運命にあったといえる。

新羅の興亡は東アジア世界の変動とは無関係ではなかった。中国を統一した隋唐は、中国中心の世界秩序を目指した。それが三国間の戦争とあいまって、結局、統一新羅と渤海の設立へと落ち着いた。その頃、日本では大化の改新と大宝律令が象徴する古代天皇制国家が成立した。

新羅の滅亡は唐や渤海の滅亡、日本における天皇の親政の終焉と藤原氏に

よる摂関政治の台頭など、東アジア王朝の変動と時期的に重なっていた。韓国における王朝の存続に関わる一つの要因として、中国への朝貢制度を挙げる見解が有力になっている。唐の衰亡は、必然的に唐から冊封を受けていた新羅の国王の地位を弱体化させる働きをした。

755年から安史の乱が起き、約9年間唐の社会を揺るがした。辺境にのみ設置されていた節度使制度が全国に広まり、彼らが次第に自立して中央権力へ挑戦するようになった。875年には黄巢の乱が起き、884年まで続いた。黄巢の乱は唐の滅亡の直接的なきっかけとなった。どちらが先かという問題はあるが、このような現象は新羅末期の農民蜂起と豪族の台頭とも相通ずるところがある。新羅が唐の情勢の変化に同調あるいは連動する現象が見られるのである。

一方、新羅末高麗初めは中国の唐末、五代の混乱、宋の統一の時期に該当する。少し時期はずれるが、日本では鎌倉幕府が登場し、中世がはじまった。東アジアという広い視野で見ると、韓・中・日の三国の事情を比較してみると、新羅の衰亡と高麗の成立の持つ東アジア史における意義を探するのに端緒が見つかるかも知れない。

高麗統一の意義

1960年代以降の殆どの概説書では、新羅末期までを古代、高麗時代を中世と把握している。このような区分は、何か理論的背景を持っているわけではない。これは時間の遠近と王朝の交替を考慮に入れた区分に過ぎない。ところが、三国統一以降、王朝の交替は新羅から高麗へ、高麗から朝鮮へと、二回しか行われていない。王朝の寿命が長かったので、一旦王朝が変わると、自然と政治・社会・経済文化など、ほとんど全ての点において変化がもたらされた。したがって、上記の時代区分も、それなりの意味がある。

新羅末高麗初めの全体的な社会変動を重視し、この時期を古代と中世の分岐点とみる見解もある。この説を要約すると、次のとおりである。この時期を経て親族集団の規模が大いに縮小し、支配勢力を編成する上で中枢の役割を果たしていた血縁の関係ネットワークが崩れた。下代の真骨貴族の権力闘争の隙を狙

い、豪族が成長し、彼らの基盤となった農民は古代の隷民的性格から脱皮するようになった。また、六頭品をはじめとする中間勢力が儒教の政治理念を掲げ、教宗に対する中世の知性をもって禅宗を創始した。骨品制度を主軸とする支配態勢とは、組織の原理上、根本的に異なる科挙が施行され、唐・宋の制度を模倣した中央集権的政治体制が成立するに至った。

社会経済史の観点で、新羅末高麗初めを古代と中世の分岐点と見る見解もある。まず、農民に対する収取基準の変化に注目する。これによると、統一新羅の収取は「人丁」と「家戸」を中心とする、人身支配的収取方法といえる。それに比べ、高麗時代は「田結」を単位とした収租権的支配が行われ、これにより土地を基準とする収取方法へと転換したというのである。親族集団の変化に着目した意見もある。新羅末高麗初めへと時代が変わり、先祖を基準とする集団の親族関係が瓦解し、弱体化・消滅した。一方、個人を基準とした親族関係(親属)が拡大発達し、血縁でない要素の重要度が大きくなる傾向を示している。社会構成員を統合・維持する共同体の秩序を、中世社会の普遍的特性とみなし、豪族とその後身である郷吏が主導した香徒共同体に注目する意見もある。

世界史の観点から、新羅末高麗初めを古代と中世の分岐点と把握するケースもある。高度に組織化した政治体制が没落または弱体化し、それを蘇らせようとした政治現象が封建制度だとする理論に基づいている。これによると、高麗が全国の豪族勢力を網羅し、新羅末期以降、混乱を極めた社会秩序を正したことは、大帝国の崩壊後、その周辺で起きた政治的回復運動が封建制度の発生だとするRushton Coulbonの仮説と一致する面があるという。

以上とは違い、社会的支配勢力(あるいは主導勢力)の変化を基準に、新羅末高麗初めの時代の性格を規定する見解もある。つまり、この時代を豪族の時代と見て、前の新羅中代の専制王権の時代、後の高麗前期の門閥貴族社会とは区別しているのである。これについては、区別された時代のきっかけになる理論的裏付けがないという弱点が指摘されている。しかし、このような時代区分は社会勢力という人間集団を中心に据え、特定の時代の社会構成や政治機構、経済組織の運営の実際、思想の推移などを総合的に把握できるという点で意味がある。

新羅社会を規定する原理は骨品制であった。骨品により政治的・社会的に享受できる特権は異なった。政治的に出世できる官等の上限は、身分によって決ま

った。官等によって務めることのできる官職が決まったので、結局、官府の長官(令)や、将軍のような軍隊の高位の指揮官は真骨出身のみ務めることができた。下代になってこれを批判し、改革案を提示した六頭品出身の儒学者がいた。しかし、滅亡の時まで骨品制を堅持した新羅において、彼らの主張は受け入れられなかった。ところが、骨品制のより根本的な問題は、王京人を対象にしていたという点である。地方の有力者には骨品がなく、したがって政治的出世が許されなかったのである。

下代になって豪族と呼ばれる地方の有力者が台頭した。豪族は形勢によっては新羅に忠誠を誓い、または後百済や高麗に属することもあった。そのうち、一部は新しい統一王朝である高麗の支配勢力として開京に居住し、王京人となった。高麗前期の支配勢力は、いわゆる門閥貴族といわれ、彼らは本来、豪族出身であった。たとえ、新羅の王族や貴族出身であっても、高麗では一地方人となった。門閥貴族は出身地を本貫として名乗り、自らの家を表すとともに、他の家とは区別した。彼らは様々な地方出身の異なる姓を名乗る、いわゆる異姓貴族によって構成された。この点、王京出身の王族を中心とした真骨貴族だけが支配権を享受した新羅とは大きく異なる。

高麗政府は中央集権化を目指すとともに、豪族の勢力を弱化させようとした。983年(成宗2)12牧に地方官を派遣し、郷職を改編したのが、その始まりである。その後、豪族は地方官を補佐し、地方行政の末端を担当する郷吏となった。しかし、彼らの地位は新羅における村主のそれとは異なった。高麗時代、すべての行政単位の地方に地方官を派遣したわけではない。『高麗史』『地理志』を見ると、地方官が派遣されたのが146カ所である反面、そうでないのが374カ所に達する。新羅に比べると、高麗時代の中央集権化の程度は、非常に弱かった。地方官が派遣されていない属郡県では、郷吏が事実上、首領の役割を果たした。彼らは豪族の後身で、地方の支配者としての面貌をかなり保っていたのである。

高麗社会も新羅社会と同様、身分制社会であった。したがって、身分と職役も世襲が原則であった。ところが、郷吏は地方での地位に基づき、科挙を通じて中央の貴族になることも可能であった。中央政府がそれを積極的に誘導することもあった。また、選軍を通じて軍人となり武官として出世することもあり、軍事における功労が認められ、出世することもあった。このように、地方の有力者が中央

貴族として進出する方途が開かれていたことは、両者ともに豪族出身だったという共通性に因るものだが、この点も新羅とは大きく異なる点である。

新羅下代、地方において台頭した豪族勢力は、骨品制とその頂点で最大の特権を享受していた王京の真骨貴族勢力を瓦解した。その一部は新しい王朝である高麗の新しい支配勢力となった。彼らと同様、豪族の後身といえる郷吏は、地方の支配者となり、また、様々な方法により支配勢力に組み込まれた。特に、高麗後期に登場した郷吏出身の士大夫は、朝鮮王朝の建国において重要な役割を担った。要するに支配勢力の拡大という側面において、新羅末期の豪族の台頭が持つ意味は大きかったといえる。

執筆者 朱甫暉 慶北大
(執筆部分) はじめに
第1篇

尹善泰 東国大
第2篇 第1章

趙仁成 慶熙大
第2篇 第2章, 第3章

翻訳 PanTransNet

監修 小宮 秀陵 啓明大



編著者 《新羅、その千年の歴史と文化》編纂委員会
発行者 慶尚北道知事
36759 慶尚北道 安東市 豊川面 道庁大路455
T. 054-880-3176 F. 054-880-4229

発行元 慶尚北道文化財研究院
38874 慶尚北道 永川市 琴湖邑 元提2ギル38
T. 070-7113-9011 F. 054-336-8323

デザイン 任昭羅, 金多英
写真 吳世允
制作 デザイン工房
04554 ソウル特別市 中区 忠武路 13 エルクルメトロシティ616号
T. 02-2285-4132 F. 02-2266-9821
<http://www.designgb.co.kr>

印刷 (株)テウンC&P
印刷日 2016. 12. 1.
発行日 2016. 12. 30.
ISBN 978-89-6176-246-5 98910
978-89-6176-245-8 98910(セット)

本書の著作権は慶尚北道に帰属します。
無断で転載、複製、改編などを行うことは禁じられています。
copyright©2016 by Gyeongsangbuk-do